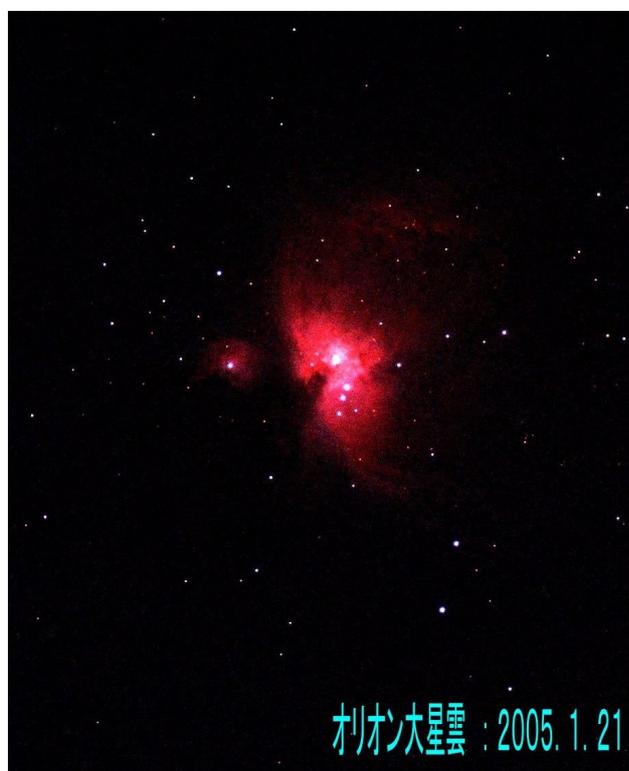


都立第弐中学校・立川高等学校

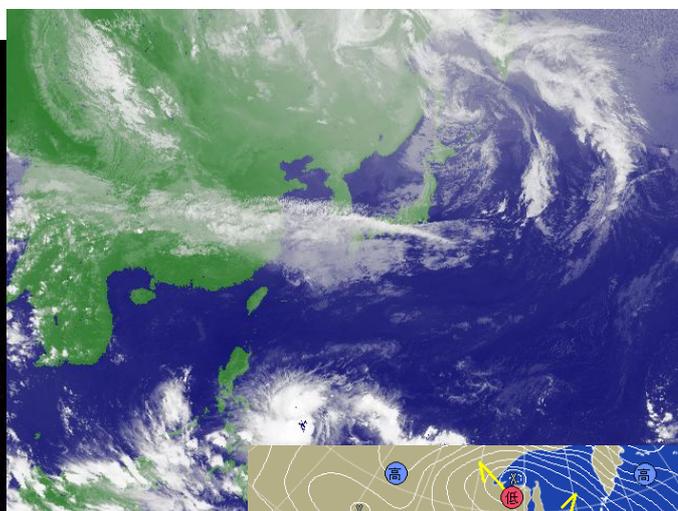
天文気象部の歩み

ロマンと青雲を見つめて

60有余年



オリオン大星雲 : 2005. 1. 21 立川高校 新天体望遠鏡



平成 17 年 12 月

都立弐中・立川高校

天文気象部同窓会



立川高校 天体ドームと百葉箱

天文気象部の歩み 目次

はじめに

天文気象部記念誌の発行について	記念誌編集委員長(高2)	大野 伊左男	7
第一回天文気象部全期同窓会	高10	徳田 精久	8
新15センチ屈折赤道儀の寄贈と公開	高12	内田 誠	14
新天体望遠鏡を寄贈されて	天文気象部代表(2年)	寺崎 周子	19

特別寄稿

木製三脚の赤道儀の思い出	天文気象部元顧問	大金 要次郎	21
絶滅寸前から天文気象部を救った人たち	天文気象部顧問	渡辺 拓美	23
生徒の夢を大切に	天文気象部顧問	野原 良夫	25

第1章 “つなぐ源” <天文気象部の創始>

戦後の天文気象部の発足の頃の記憶をたどって	中44	三宅 浩之	27
太陽黒点観測事始め	中45	里野 泰昭	30
戦争直後の部活動について	中45	鈴木 栄祐	32
都立式中から都立立高への時代の天文気象部	高2	大野 伊左男	34
気象観測データの保存について		同上	37
五十数年前の観望会	高3	西部 訓弘	39
立高天文班のこと	高3	木下 和久	41
気象班と私(気象班の創始期より天文気象部)	高4	辻井 壮一	43
太陽黒点観測の思い出	高4	保坂 一夫	45
昭和25年の落穂拾い	高4	塩野 栄治	47
『セント・エルモの火』を見た!	高5	田中 孝彦	50
天文気象部との関わり		同上	52
天文気象部で想うこと	高5	池田 隆彦	54
雑文抄	高5	星野 清光	55
田代實先生の恩を顧みる	高6	田中 一行	57
天文気象部月報の発行	高6	能登 正之	59
天文気象部の思い出	高6	中村 馨	61
台風観測と気象班	高6	大塚 昶之助	64
天から降った男の人生の節目	高7	府川 宗雄	65
立川高校天文気象部卒業	高8	安藤 恵尉	70
天気部の思い出	高8	松繁 克道	73
天文気象部での交流録とSM暦	高9	増田 伸爾	74

第2章 “有形の教” <学校賞第一位受賞>

日本学生科学賞学校賞第一位受賞

	谷津 潔(高10)、益田 博勝(高11)、内田 誠(高12)	77
我が人生 天気部と神様とー	高10 谷津 潔	82
思い出することなど	高11 小島 新一	83
蘇える天文気象の楽しみ	高11 佐藤 健	84
象牙の針と皮袋	高11 黒川 武	86
天文と気象に関わる最近の小さな経験	高11 益田 博勝	87
青いレモン酒とオリオンの三ツ星	高12 長島 泰雄	89
雑 感	高12 小島 雅子	92
私の体験した気象観測	高13 吉川 謙造	94
自然に興味を持ち観察することの大切さを学んだクラブ	高13 宮武 隆二郎	97
天文気象部の思い出	高14 石館 弘國	99
立川高校天文気象部と私	高16 笹原 眞文	101
1963年(昭和38年)網走皆既日食紀行	高17 志茂 和男	103
日の出山の流星観測など	高18 片岡 弘	106
初めて見た彗星 - 池谷・関彗星(1965f)	高19 立川 守	108

第3章 “さとしぞ永き” <自主・自立の活動>

田代 實先生の思い出	高21 立花 知彦	110
天文気象部のこと	高22 伊藤 来太郎	111
富士山に沈む太陽	高23 榊原 幸雄	113
清里天体観測所20周年	同上	115
天気部の思い出つれづれ	高24 鈴木 正平	116
観測所にて	同上	118
ジャコビニ流星の飛ばなかった夜	高25 新堂 泰伸	120
富士見天体観測所	同上	121
薄明に達成した流れ星1000	高26 西村 朗夫	122
ペルセウス座流星群観測の思い出	高28 中込 貴彦	123
美ヶ原合宿開始(1975年)のころ	高29 大和 壮一	125
私の体験した天文気象部	高30 平 政之	127
気象観測のことなど	高31 川幡 和利	128
天気部と室内楽の思い出	高31 水嶋 春朔	129
かけがえのない仲間	高32 大蔵 誠	131
天気部のこと	高33 久保 紀重	132
天文気象部の思い出とその後	高34 一瀬 倫見	133
部室のこと	高35 只野 雅人	135
天文気象部に関する回想	高36 鳥越 祐司	136

渡辺淳也さんを悼む	高 37	坪井 由紀子	138
私たちのころ...	高 38	小澤 進	139
文化祭の思い出	高 39	豊田 哲郎	141
天気部の思い出	高 40	高山 晴代	143

第4章 “教えぞ高き” <復活に向けて>

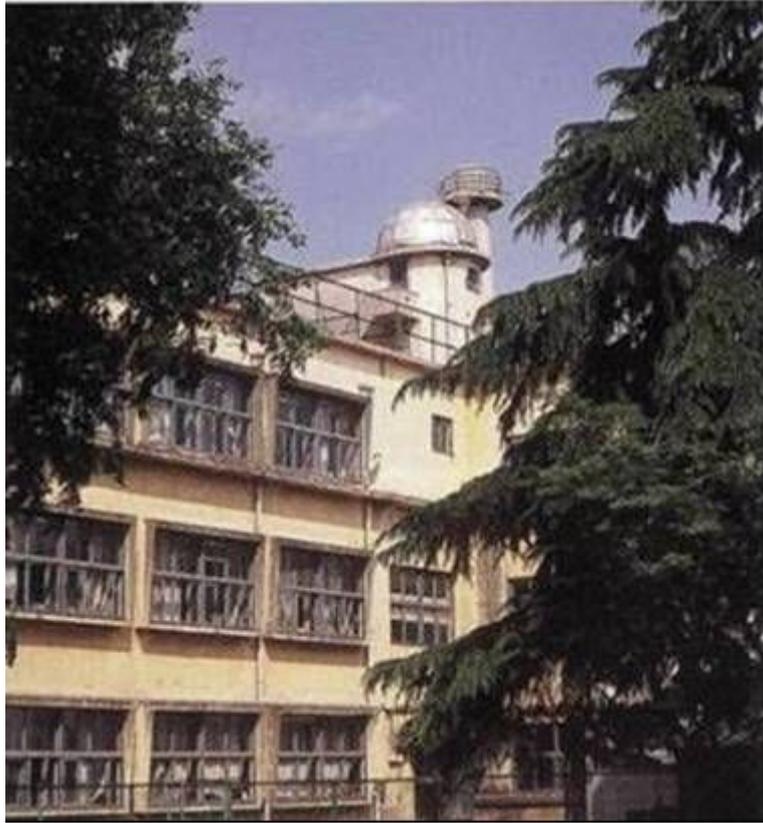
星を結ぶ	高 41	齋藤 千晶	144
文気象部のこと	高 42	吉岡 克治	145
合宿の思い出	高 43	佐藤 浩吉	146
校舎改築と部室の引越し	高 44	野島 和哉	148
天文気象部の思い出	高 45	舘野 こずえ	150
気象観測の思い出	高 46	鈴木 裕子	151
天文気象部「年末 OB 会」について	高 49	星野 一人	152
山行と合宿について	高 50	市村 豊	153
星々の縮図 天文気象部プラネタリウムの思い出	高 51	佐々木 博	154
2001年～2003年の天文気象部	高 56	横手 紗織	155

おわりに

記念誌編集後記	記念誌編集委員(高6)	小川 修夫	156
記念誌発行 趣意書			
記念誌編集委員 名簿			
都立立川高校 校歌			
天体望遠鏡寄贈 趣意書			
寄贈天体望遠鏡について			
望遠鏡寄贈基金寄付者 ご芳名録			

附録

附録 1	学校の変革と天文気象部の歴史	165
附録 2	天文気象部在籍者 名簿	170
附録 3	天体望遠鏡寄贈関連の新聞記事等	173
附録 4	天文気象部からの立高同窓会報「紫芳」への寄稿	177
附録 5	天文気象部の歩み カラー写真集	181



立川高校旧校舎 天体ドーム



旧校舎 気象観測塔

<はじめに>

天文気象部記念誌の発行について

記念誌編集委員長（高2） 大野 伊左男

現在立川高校の部活動には学芸系 19、運動系 18 ある。新入生に対する紹介によると、学芸系のなかで天文気象部は 50 年に渡り継続的な活動がなされ、最も伝統のある部と紹介されている。当高に望遠鏡が設置されたのが 1939 年、田代實先生が物理担当として着任され、蜘蛛の巣をはらってドームに入られたのが 1943 年であり、それ以来ということであれば活動は 50 年を超え、60 有余年ということになる。1943 年は太平洋戦争の最中である。それから終戦、旧制中学から新制高校への変遷を含め、大きな社会の変化のなかで天文気象部は歩みを続けてきた。この間の歩みの記録として天文関係については、田代先生の天体望遠鏡物語に詳しいのであるが、それ以降の話、及びこれまで公式の記録が残されていなかった気象関係についても、ぜひ当時の歴史を知る人々が元気なうちに記録に残しておきたいと、この度記念誌を計画したところ、多くの関係者から原稿・資料が寄せられ、本書の発行に辿り着くことが出来ました。原稿を寄せて下さった皆様、特にご多用の中原稿をお寄せいただきました大金・渡邊・野原先生に厚くお礼申し上げます。

本記念誌出版は昨年 9 月これまであまり例をみない 50 年代以上にわたる一つの部卒業生が一堂に集う全期同窓会が契機となったとあってよいと思う。あの会合で、母校に望遠鏡を贈ろうという決議がされましたが、それにもまして参加者全員が司会者の声も耳にはいらず、互いの話合いに熱中しているその姿に、たくさんの方が天文気象部を愛し、思い出を残していることを感じました。幸い望遠鏡寄贈の件は多くの皆さんから熱意溢れる募金をいただき、無事今年 2005 年 1 月 15 日終了致しました。校長先生も驚く快挙でした。

贈呈を終わり、若干のお金が残りました。このお金だけでは十分ではありませんが、これを基にして贈呈を中心になって推進してくれた人々に記念誌の出版を提案したところ、皆快く賛同いただき、早速末尾に記載の方に編集委員をお願いし進めて参りました。編集委員の方々の提供いただいた労力に差がありますが、何回かの会議を含み編集に骨折ってくれた皆様有難うございました。

本記念誌を読み、皆それぞれに青春の一時代を振り返り、深い感慨をもたれることと思います。共通して言えることは、どんなに時代が変化しても、教育の基本は変わらず、人は優れた師に育てられ、世に出て活躍し、その活躍を通して師の恩を返し、また師・先輩よき指導者を中心に培われた伝統はまた次の人を育ててゆくということを感じられると思います。

今回章のタイトルを校歌からとりました。『第 1 章 つなぐ源』、『第 2 章 有形の教え』、『第 3 章 さとしぞ永き』、『第 4 章 教えぞ高き』。校歌の称えるものもまさに本記念誌を流れるバックボーンであると感じました。

第一回天文気象部全期同窓会 -よくぞここまで どうぞここから-

高校10期 徳田 精久

平成17年8月10,11日、中学生とその保護者45名を数える参加者を得て、新しい天体望遠鏡の公開観望会が立川高校で開催されました。

生憎の曇り空でしたが、行事は予め用意されたプログラムで進行し、無地終了しました。

「とても楽しかった。」「天体について、知らなかったことや忘れていたことなど教わった。」「参加して良かった。また来たいです。」等々の感想が聞かれました。

この望遠鏡は、記念写真の撮影から始まった第1回の「天文気象部全期同窓会」が上のような“同窓会次第”で進行し、プログラムの「八」で、「母校に天体望遠鏡を贈ろう!」という提案が出され可決されて集まった募金によって購入され、贈呈されたものです。

一	開会
二	記念写真撮影
三	開会挨拶
四	ご祝辞
五	乾杯
六	部活動のよもやま話(普通)
七	部の生い立ちの頃
八	部の地盤の頃
九	日本学生科学賞受賞の頃
十	部活動のよもやま話(近年編)
十一	引き継がれる探求への夢

1. 「準備同窓会」の開催

高校10期の同期会等で谷津氏や森山氏に会うと、「田代先生を囲む会を開きたいね」と話すのですが、なかなか行動に移れず時間が過ぎてしまいました。平成13年1月30日に田代實先生が亡くなられ、2月2日が告別式でした。翌年の年賀状で、数人の方に「そろそろ天気部の同窓会が開けないものでしょうか」と呼びかけたところ、平成15年の7月になって高校12期の内田氏から電話がありました。「実は8月16日に天気部12期の同窓会を予定していますが、連絡のつく先輩の方々にも声を掛けてみてはいかがでしょうか」との相談でした。早速、年賀状等で交流のある方々を中心に連絡を取ったところ、思わぬ広がりとなりました。

日時と会場の制約があったので、このときは、本格的な同窓会の為の「準備会」ということにして、予定していた会場の定員ぎりぎりの範囲で開催することにしました。

第1部は15時から母校で、現役部員との交流会として開催されました。夏休み期間中にも拘わらず、顧問の野原先生にもご出席頂けました。部室に集合し、保存されていた現役当時の観察ノートなどに目を通し、部室の上にあるドームに案内された後、紫芳会室に移動しました。内田氏の司会で、開催経緯の説明の後、全員の簡単な自己紹介があり、野原先生と横手前部長から現況の説明がありました。飛び入り参加の高校49期星野氏からは、年末に開催される「OB会」のことが話され、全期同窓会へ向けての名簿作成にご協力頂けるとのことでした。

第2部は立川駅北口のあらい鮎総本店で、私の司会で進められました。こぼれ話を交えた自己紹介や思い出話に時を忘れ、予定時間を一時間も超過しました。全期同窓会を平成

16年の6～7月に開催することとし、幹事を選任し、名簿の充実から始めることにしました。

最後に、田代先生を初め既に鬼籍に入られた同窓生の冥福を祈って、1分間の黙祷を捧げ、20時過ぎに閉会しました。

この時の模様は、紫芳第42号に掲載されました。(附録 - 4 参照)

2. 第一回天文気象部全期同窓会の開催

名簿の充実をめざして、「各卒業年度に漏れがないようにしたい」との内田氏の精力的な活動は、この年の立高文化祭からスタートしました。紹介のあった年末の「OB会」には、高校5期の田中孝彦氏とともに参加させて頂き、参加した皆様にもご協力をお願いしました。

どのような規模で開催できるのか、まったくわかりませんでしたので、案内状の準備、会場との交渉、当日の進行と役割分担、記念品の準備、「母校に天体望遠鏡を贈ろう！」の提案の為の様々な根回し等々課題は山積していました。しかし、準備会するとき選出された幹事の皆様と、その後加わって頂いた幹事の方々の中で、役割に適した方々が、積極的に行動してくださいました。

名簿は平成16年3月末には420名程判明しました。第1回の準備会を5月9日(日)に開催し、日時を9月11日(土)18時～20時に決定し、会場の仮予約を済ませました。その後数回の準備会を開催し、課題をつぶして行きました。

記念品は、内田氏がスクラップしてあった、母校の「図書文化月報」の第71号から13回にわたって連載された、田代實先生の「立川高校の天体望遠鏡物語」を一冊の冊子にまとめ、記念誌とさせて頂くことにしました。

会費はなるべく参加しやすい金額で抑えたいとの思いと、中身を充実したいとの願いは相反するもので、苦慮しました。しかし掛けるべきところには予算を回したいと考えました。例えば記念写真は、参加人数が多いのでプロにお願いしたい、との意見に従い、文末の写真とおりの仕上がりとなりました。記念誌は、私がスキャナーで電子化し、印刷製本のみをプロにお願いしました。校正漏れも目立ちましたが、比較的安価に準備できました。開催案内は、往復はがきとe-メールを活用して自分たちで実施しました。

当日のプログラムも工夫しました。120名を超す参加者があり、創部当時の方々と現役に近い方々とは60歳程の年齢差があります。どのように会をまとめるか、悩むところでした。

「**第一回全期同窓会**」は、高校5期の田中氏の司会で始まりました。

通常は会の中盤以降にある記念写真の撮影を、開会宣言直後に終了し、一段落したところで、高校4期の辻井氏の**開会挨拶**に移りました。挨拶の中で終戦直後の天気部の様子が話され、幹事の労がねぎらわれました。

続いて**祝辞**に移り、顧問の渡辺先生から、「こんなにすごい会だとは想像しておりませんでした。現在の天文気象部からは考えられないことです。チョッと前から現在の状況をご紹介します。挨拶に代えます。」と話され、顧問に就任した経緯と当時の状況を説明し、

「天文気象部というよりは、天文気象部保存会と言った方が良いような状況でした。」と続け、現在活動が復活し始めたご苦労や、最近の天気部の状況が話されました。

中学44期の三宅氏の音頭での乾杯後、「**六 .部活動のよもやま話(昔備)**」に移りました。

まず、三宅氏と辻井氏との掛け合いで、思い出話が始まりました。三宅氏は、終戦直後の様子を「立川高校の天体望遠鏡物語」を手がかりに思い出されたことなどを、そして辻井氏は、戦後の特別な時期に6年間在学された体験や興味深いエピソードを含め、「**イ .部の生い立ちの頃**」のお話をされました。「先輩・後輩の親しい繋がり基礎が出来たように思う。」「当時は、屋上にひっくり返って寝ていると、星がきれいに見えた。」「望遠鏡で、火星や土星を見た感激は忘れられない。」そして、「後で、後輩に望遠鏡を贈ろうという話が出るそうですが、望遠鏡が設置されたら、我々にも、是非一度見せてください。」と話されました。

このようなチャンスにしか聞けないようなお話でしたが、久し振りに再会した旧友同士の会話が弾み、お二人の話が聞き取りにくい状況でした。司会の田中氏のご自身の体験話をつなぎとして、なんとか注意を惹きつけようと努力されていましたが、予定を変更して、しばらく歓談の時間を設けざるを得ない状況となりました。

しばらくの後、よもやま話の続きに移り「**ロ .部の地固めの頃**」の順番となりました。登場した高校5期の池田氏は、「このようなパーティーではみんな仲良くやってゆくわけですから、どうぞ、どんどんしゃべっててください。私は私でかってに話しますから。」と、理解を示し、「我々は校名が立川高校に決まったときに入学しました。1年先輩は、3年間下級生がいなかったのですが、我々は小学校を卒業していません。国民学校に入学し、国民学校を卒業した学年です。」そして、田代先生におそばをご馳走になったことや、天気部では先輩方に可愛がられ、教科書では習わないような、人生にとって必要なことが得られました、と話され、人生は長い、年を取ると付き合う人の年齢差も広がり、楽しい事が多い、と昔を思い出しながら現在を語られました。

続いて、今回一番遠くから参加された高校9期中村氏からは「立高に入学したのはちょうど50年前です。もう時効だから言いますが、私は飯能からの越境入学でした。今回、同期の男性は全員参加しました。皆で悪いことばかりしていました。私は気象班でしたのでドームにはめったに行かなかったのですが、たまたま黒点観測を見に行った後、望遠鏡で地上を観測して、飛行機が見えると思ったら、立川基地でした。こらっ！お前ら何しとる！基地から抗議の電話が入ったぞ！と叱られ、コツに知られたら大変だと心配したが、私に関してはお咎めはなかったが、誰か代わりに叱られた人がいたらごめんなさい！」と、懐かしそうでした。

次に「**ハ .日本学生科学賞受賞の頃**」の話を、高校10期の谷津氏、高校11期の益田氏、高校12期の内田氏にさせていただきました。望遠鏡の盗難事件があり、黒点観測が出来ない期間があったので、創部以来の記録を整理して、蝶形緯度分布図が作成できたことなどが話されました。このことの詳細は本誌第2章に掲載されています。

ここで司会が高校12期の内田氏に交代。冒頭、「皆様のご協力で、今回424名の名簿が完成しました。ありがとうございました。」と感謝の挨拶があり、次のプログラムに移りました。

「七．部活動のよもやま話（近年編）」は、先ず「イ．引き継がれる探求への夢」と言うことで

高校23期の榊原氏の進行で高校24期の鈴木氏、高校25期の新堂氏の鼎談になりました。

榊原氏は、「実は、この盛大な全期同窓会の前に、我々中間の世代でやりたいな〜という話がありました。ちょうど良かった言うことで、喜んでいるところです。大先輩たちの世代と、我々中間世代と次に話される吉岡氏達の世代の、三つの世代が繋がって活動できるといいなあと思っています。今日お手元に、「50年間の天文と気象の記録」という資料をお配りしました。我々は田代先生のご指導を受けた最後の学年で、富士山の観測を毎日していました。私立武蔵高校が我々のライバルでした。」と、同窓生が保管していた貴重な記録の資料をかざして話され、鈴木氏は、「私たちは気象観測も続けていました。正月も休みなしでした。当時は温暖化ではなく、寒冷化といわれていました。冬場など観測を終わって帰る頃には路上が凍っていることもありました。」と、続いて新堂氏は、「天気部在籍中の3年生のときジャコビニ流星雨騒ぎと言うのがありました。」などと、思い出話が尽きませんでした。この三人は、それぞれに仲間と共に観測所をお持ちで、天文観測に関しては現役だそうです。ご希望があれば、現役部員の皆様にも観測の機会をつくりたいと思います、と話されました。

次に、ここ数年、**年末の「OB会」**の幹事役をしてこられた、高校42期の吉岡氏が盛大な拍手で迎えられ、「**ロ．現役からの報告**」になりました。

そこで先ず、この年末の「OB会」のスタートの頃のメンバーの一人で高校25期の宮崎氏から「何年前かはわかりませんが、もう30年近くになると思います。天気部の後輩のために、飲み会の残った金をプールして小さな望遠鏡でも買ってやりたいな、あるいは、合宿の費用の足しにしてやりたいな、と言うことで、年末に飲み会をやっていました。私は毎年と言うわけには参りませんが、若い人たちとの接触の機会をつくって来ました。」と報告されました。

次に、吉岡氏の質問に答える形で、共に現役2年生（高58期）の菊池部長、太田部代表から現状の報告がなされました。

部員は？：現在2年生12名（男4、女8）、1年生7名（男3、女4）の計19名。

気象観測は？：朝8時10分と5時間目終了後の3時30分の計2回

記録の整理と月報は？：観測データは月毎に整理して、立川市の公式データとして毎年立川市に提出している。月報は部員が激減した頃から途切れているが、部員の数も戻ってきたので、1年生とも協議して、承認されれば再開したいと考えている。

黒点観測は？：残念ながら現在行われていない。器具がなく、やれる人もいない。

流星観測は？：毎年8月中旬、合宿を実施している。

ドームの活用は？：黒点観測の代わりに、4月の新入生勧誘の為、そして秋の文化祭に行うプラネタリウムの練習をしている。

盛り上がってきたところで「**八．提案事項**」に移りました。立川高校改革支援委員会委員長でもある、高校2期の大野氏から提案説明がありました。事前に学校を通じ、都の教育委員会の了解を取って予定額を設定し、機種を選択等を進めて来たことなどが話されました。

賛同の拍手で、「母校に天体望遠鏡を贈ろう！」の提案が可決され、続いて、予定している望遠鏡の説明が、高校23期の榊原氏からなされました。この後、元顧問の大金先生から、「天体望遠鏡物語」の主演である10cmの赤道儀が五藤光学に引き取られたときの経緯が話されました。詳細は特別寄稿をお読み下さい。

中締め「**校歌斉唱**」は、高校7期以前の方々が前に出られて始まりました。10月2日の東京校歌祭でも指揮を執られる予定の、高校6期の清水氏の指揮で、一番と二番が声高らかに歌われました。

最後の「**閉会挨拶**」は私がさせて頂きました。「願いを持つことが大事です。そしてそれを伝えることが出来れば、力が集まり企画が立てられます。そして、多くの方々にご参加頂くことで、願いが成就すると思います。」という趣旨のお話をさせて頂き、「第一回ができたということは、第二回、第三回があるということです。今回は望遠鏡を贈ろうという提案でしたが、気象観測の機器や施設のことも考えなければなりません。」とつなげました。

田代先生の告別式でお会いした方々との、「なんとか同窓会を開催したい」という願いが“よくぞここまで”出来たものだという思いが胸を突き上げました。皆様方の挨拶の中で、在学中を懐かしむ話題と共に、後輩を慈しむ心が吐露されていました。

「第一回全期同窓会」の企画中に「母校に天体望遠鏡を贈ろう！」という話につながり、「望遠鏡贈呈式」から始まって、「在校生の観測指導」そして「新しい天体望遠鏡の公開観望会」と続きました。一連の行事の準備打合せ中に、「記念誌発行企画」と進みました。

そして、記念誌の発行にこぎつけることが出来ました。“どうぞここから”、在学中の良い思い出を持つより多くの同窓生のご参加を頂き、それぞれが所有する貴重な体験と資料を持ち寄り、先輩と現役部員が共に喜べる様々な企画が生まれ、有意義な行事が続きますようにとの願いを新たにします。



立川高校 天文気象部 全期同窓会 於立川グランドホテル 芙蓉の間 2004年9月11日

天文気象部全期同窓会 2004年9月11日



中学44期 三宅先輩の乾杯挨拶

新 15 センチ屈折赤道儀の寄贈と公開

高校 12 期 内田 誠

1. 新しい出会いを求めて

新望遠鏡の寄贈は、各年代毎の天文気象部の小さな輪が大きな輪になり、大きな成果が実現された物語と言えるのではないのでしょうか。21 世紀が始まったばかりの 2001 年 1 月 30 日に田代実先生が亡くなられ、2 月 2 日に告別式が行なわれました。告別式には多くの同窓生が参加され、久しぶりに顔を合わせました。2002 年の正月に徳田精久（高 10）さんから・・・田代先生との悲しい別れから月日が経ちますが、そろそろ天気部の同窓会は開けないものでしょうか・・・云々の年賀状を頂きました。2003 年 6 月 17 日に小島雅子（高 12）さんから・・・天気部の 12 期同窓生の野崎恒夫さんが体調を崩して、皆様に会いたがっておられるので 7 月 20 日、21 日あたりで、お見舞いに行きたいと存じますが如何でしょうか・・・云々のお葉書を頂きました。同年 7 月 19 日（土）に、小島さんと私が立川で久しぶりに再会しました。

この時、8 月 16 日（土）に、12 期で一回会いましょうという事になり、早速会場を探し、立川駅北口にある「あらい鮎」に決めました。帰途、徳田さんから頂いた年賀状のことを思い出し、小島さんと連絡を取った上で電話をしました。そこで 12 期の同窓会の件を話し、思いきって先輩の方々にお声をかけ、天文気象部の同窓会を開催したらと提案しましたら、“それは良いですね”という事になり、同窓会の話が具体的に一気に進む事になりました。大野伊左男先輩（高 2）にもこの旨をご連絡し、ご賛同を得て同窓会に向け動き出しました。なにしろ 8 月 16 日までに、僅か 20 日位しかなかったので、急遽、先輩の方々へのご連絡は徳田先輩にお願いし、学校との打ち合せは私が担当しました。天文気象部の囑託で顧問の野原良夫先生にお願いして、天体ド - ムの見学と現役生との交流会を実現させて頂きました。

8 月 16 日（土）の同窓会の詳細は当文集の P・・・をご覧ください。この日の天体ド - ムの見学で、私達は、ミニ望遠鏡との運命的な出会いをしてしまいました。同窓生の方々の驚きと落胆は激しく、お互い顔を見合わせ「なんとかできないか」と皆さん感じられたようでした。現役生の方々からも、大きな望遠鏡が欲しいという強い要望がありました。現役生との交流会で全期同窓会の話も出て、連絡用の住所録作りに取りかかることになりました。同窓会の第 2 部は立川駅北口の「あらい鮎」で行なわれ、新たな望遠鏡の件も話題になりました。

2004 年 3 月末、420 名にも及ぶ天文気象部・同窓生の住所録がほぼ完成しました。全期同窓会の第 1 回準備会は、5 月 9 日（日）に行なわれ、開催場所はグランドホテル、会場の確保の関係で、日時は 9 月 11 日（土）に決定しました。検討内容はたくさんありましたが、新望遠鏡寄贈の具体的な話が初めて検討課題となりました。第 2 回準備会は 6 月 12 日（土）に、母校天体ド - ムで行なわれ、どの位の望遠鏡が設置可能かどうかの検討を行ないました。その結果、15 センチクラスの望遠鏡は、十分設置可能という結論にな

りました。その後は場所を移して、他の件の検討を行ないました。第3回準備会は7月17日(土)に行なわれ、望遠鏡関係では、学校側との話し合いを近々行なう事が決まりました。7月21日(水)に、代表幹事の田中孝彦さん(高5)と私が立川高校を訪れ、望遠鏡の寄贈についてのご理解と、都の承認が得られるかどうか調査して頂く事を、大澤充二学校長にお願いしました。間もなく、望遠鏡寄贈の件、都が認可するとのご連絡を学校側から頂きました。第4回直前準備会は8月28日(土)に行なわれ、「新しい望遠鏡を母校に贈ろう」の提案趣意書を私が執筆することになり、直ちに準備にかかりました。新望遠鏡は15センチ屈折赤道儀とほぼ決まり、機種を選定の準備を、榊原幸雄(高23)さん、鈴木正平(高24)さん、新堂泰伸(高25)さんをお願いしました。

9月11日(土)第1回全期同窓会がグランドホテルで開催され120人超の天文気象部同窓生が参加されました。ここで「新しい望遠鏡を母校に贈ろう」の提案が大野先輩によって行なわれ、皆さんのご賛同を得て、募金目標として2百万円(12月末迄)が承認されました。募金は9月12日に開始されました。11月23日(火)田中さん・榊原さん・鈴木正平さんと私の4名が、埼玉県昭和三機械製作所を訪問し、15センチ屈折赤道儀の説明を受けました。11月28日(日)秋葉原の高橋製作所のショールーム、スタベス・東京を訪問し、高橋製の15センチ屈折赤道儀の説明を受けました(内田)。12月11日(土)望遠鏡を贈る会の幹事会で新望遠鏡の機種等が決定しました。それは、高橋製15センチ屈折赤道儀・ピラ式・付属品一式で、総額約2百万円という内容でした。12月14日(火)立川高校にて、学校長・副校長に、顧問の先生方・大野先輩と私でお会いし、正式に望遠鏡寄贈の申し出をし、受け入れて頂きました。早速新望遠鏡の納期日程等を、高橋製作所と電話で協議し、2005年の初荷として1月7日に納入する事が決定しました。望遠鏡脚部の固定用アンカ・ボルトの取り付けを含めて、高橋製作所に依頼しました。12月18日(土)私の自宅近くの共立女子大学の付属高校に、ニコン製の15センチ屈折赤道儀があると聞いておりましたので、寄贈望遠鏡の脚部(ピラ)の高さがどうしても気になり、望遠鏡の見学をさせて頂きました。

2. 念願の15センチ屈折赤道儀がドームに

2005年1月7日(金)は幸いにも好天に恵まれ、無事高橋製15センチ屈折赤道儀の据え付けを完了し、極軸の微調整は夕方行い、早速2、3の天体の観測を行いました。この1月7日は、太陽が丁度富士山頂から、西側斜面をころがるように落ちてゆくシンを屋上から観測することが出来て、田代先生の論文を思い出し皆感激しました。1月11日(火)昼すぎ、読売新聞の取材が天体ドームと会議室にて行なわれました。夜になって新望遠鏡で、オリオン大星雲とマック・ホルツ彗星の撮影に成功、新望遠鏡の性能の良さに驚嘆しました。1月13日(木)現役生が月面の素晴らしい写真を撮りました。1月14日(金)読売新聞の多摩版に“ロマンが見える大型望遠鏡・立川高校・天文気象部、OBら母校に贈る”の記事が掲載されました。

1月15日(土)立川高校にて新望遠鏡の寄贈式が行なわれ、大澤学校長以下、学校関係者・現役生・天文気象部同窓生、総勢50名が参加されました。尚当日朝、田中孝彦さん(高5)と私(手伝い)で、寄贈プレートを望遠鏡の脚部に取り付けました。

1月26日(水) 新望遠鏡に20センチ投影板を取り付けて観測しましたが、15センチ投影のほうが色々な面で好都合ということで15センチ投影に決定しました。1月30日(日)に、新望遠鏡のご報告を兼ねて多摩霊園に墓参しました。大野さん、西部さん、保坂さん、辻井さん、田中孝彦さん、小島雅子さん、榊原さんと私の8名が参加しました。好天でしたが凍えるような一日でした。この日はたまたま田代先生のご命日にあたっておりました。先の富士山頂への太陽の落日といい、今回の墓参といい田代先生と我々の強い絆をあらためて感じました。2月1日(火) D4フィルタ-による黒点の撮影テストを行ないました(内田)。黒点の撮影は出来ましたがシャ-プさに欠けていました。2月1日より黒点観測の指導を行い、2月より正式に観測を開始しました。新部長の根本進太郎君が中心になって観測を開始し、資料の整理などはその都度行なう事になりました。この後数回黒点観測の指導に当り、黒点の緯度・経度の測定と整理の説明、黒点のグル-プ分けやタイプの分類の説明等を行いました。現役生は皆大変優秀で、たちまちのうちに、自分達で十分黒点観測がやっていける技量を身につけられました。黒点の緯度・経度の測定や整理、経度の時間補正等もあつという間にマスタ-されました。黒点観測の指導は部長の根本君、蝶形緯度分布図の作製は、根本君と現役1年の遠藤悠さんが担当しています。

4月4日(月) 黒点観測も軌道にのり望遠鏡の扱いにも慣れたということで、現役生と天文気象部OBとの合同観測会が行なわれました。木星及び土星のまずまずの写真が撮れました。また当日、アストロ・ソ-ラ-フィルタ-による黒点の撮影テストを行いました。残念ながら満足いくものは撮れませんでした。黒点の蝶形緯度分布図の作製の説明を行い、早速作り始めました。この時点で黒点のグル-プ分けやタイプの分類、スケッチの精密さも殆ど問題ありませんでした。観測会の後の会合で、小川修夫(高6)さんと鈴木正平(高24)さんより、Webカメラで惑星の素晴らしい写真が撮れる筈なので、テストしてみたらとのご提案を受けましたので、これを実行することになりました。Webカメラのテストは、その後、5月23日、6月1日、6月28日と立て続けに悪天候ため中止となりました。7月24日、読売新聞・朝刊の多摩版に立川高校の8月10日~11日の観望会の記事が掲載され、参加希望者が40名を越えました。7月27日(水) Webカメラのテスト撮影を行いました。Webカメラとノートパソコンは、小川(高6)さんにお借りし、鈴木(高24)さんと小川(高6)さんがテスト撮影を行ないました。雲の合間の撮影でしたが、Webカメラをノートパソコンに連動させ、何とか小さいながらも木星の直焦点の動画が得られ、RegiStaxの画像処理ソフトにより2本の縞等も写りました。8月5日(金) 月刊天文ガイドに「立川高校天文気象部OBが天体望遠鏡をプレゼント」の記事が写真入りで掲載されました。8月8日(月) 観望会の準備会が会議室及びド-ム・部室で行なわれました。高50期の市村豊さんより、デスク・トップ型パソコンが寄贈され、ド-ムに設置されました。これにより、Webカメラ、デジタルカメラ、ビデオカメラ等をパソコンと連動させ、色々な天体の写真撮影が可能になりました。

3. 新天体望遠鏡と天体ド-ムの公開

8月10日(水) 天体望遠鏡公開(第一日目)が行なわれました。参加者は応募された

方々26名、現役生13名、学校関係者5名、同窓生15名の計59名でした。午後6時に現役2年の西野優子さんの司会で始まり、副校長の岩瀬明美先生のご挨拶に続き、第1部・講義と第2部・観望が行なわれました。講義の内容は、太陽黒点観測（現部長・根本進太郎君）、流星観測の説明（現役2年・寺崎周子さん）、月面クレタの説明（立川高校教諭・渡辺拓美先生）、今日見る惑星の説明（高23 榊原幸雄さん）でした。第2部の観望は、A班とB班に別れてドム（A班）と屋上（B班）に向いました。あいにく曇天で金星、木星、月はいずれも見えず、ドムでは根本君と服部君が望遠鏡の操作の説明をしました。そのうち天頂付近に雲の切れ間が出現し、何とかこと座のベガを見ることができました。市村豊さんから寄贈されたパソコンで、1月11日に新天体望遠鏡で撮影されたオリオン星雲やマック・ホルツ彗星等をお見せしました。読売新聞・立川支局の記者の方が参加者から感想を聞いたり、写真撮影をされました。

25分程でA班は屋上に、代わりにB班がドムに入りました。望遠鏡の操作の説明は、服部仁貴（現役2年）君と根本進太郎君が担当し、屋上での25cmドブリアン反射望遠鏡の観望と操作の説明は、野原良夫先生（顧問）が担当されました。午後8時30分閉会となりました。10名程のOBは、立川駅近くの店で二次会を開き、8月末締切の文集の原稿の集まり具合等の意見交換を行いました。その後、午後10時頃に散会しました。

8月11日（木）に、読売新聞の朝刊・多摩版に「新天体望遠鏡公開」の記事が掲載されました。今回の写真はカラ写真で、中学生が望遠鏡を覗いているスナップでした。

8月11日（木）天体望遠鏡公開（第2日目）が昨日に引き続き行なわれました。参加者は応募された方々19名、現役生13名、学校関係者5名、同窓生13名の計50名でした。午後6時に昨日同様西野さんの司会で始まり、副校長の岩瀬明美先生のご挨拶がありその後講義が行なわれました。講義の中の、今日見る惑星の説明は高24期の鈴木正平さんが行い、他の内容は昨日と同じでした。5分間の休憩後、A班とB班に別れて屋上とドムに向いました。今日は昨日より少し雲が薄く、望遠鏡の説明をしているうちに、月がやっとのことで顔を出しました。皆歓声をあげて望遠鏡を覗き込みました。倍率を上げると大きなクレタが見え、皆大喜びをしました。屋上の方もクレタが見えたとのこと。25分程でA班とB班は交替しました。天頂付近は少し晴れ間が見えて、こと座のベガが明るく輝いていました。間もなく雲が出て星も見えなくなりましたが、屋上からみる立川の夜景は素晴らしいものでした。その後講義室に戻り野原先生からインタネット利用の天文関係のお話があり、部長の根本進太郎君から天文気象部の現状報告や立高祭の説明があり、できたら立高へ入学をして欲しいとの希望が述べられました。最後に同窓生代表として大野伊左男先輩から天文気象部の歴史や、参加された中学生への抱負や期待が述べられました。こうして2日目の天体望遠鏡公開は、午後8時30分に無事終了しました。その後OB6名は、立川駅近くの店で二次会を開き、天体望遠鏡公開の反省と記念文集の打ち合せを行い、文集会議を9月10日（土）に開催することを決め散会しました。

8月11日現在の部員は、3年生・10名、2年生・9名、1年生・5名で、気象観測は当然ですが、新天体望遠鏡を使って、黒点観測や天体写真撮影等の活発な部活動が行なわれているとの事です。

最後になりますが、新望遠鏡の寄贈や全期同窓会の開催のきっかけになられた高 12 期の野崎恒夫さんは、2005 年 1 月 30 日、それも奇しくも恩師田代實先生のご命日に急逝されました。今年の年賀状には「春になったら・・・皆でお会いしませんか」とありました。私達も 1、2 月は新望遠鏡の雑事もあり、中々会う機会がなくお会い出来ずじまいになってしまいました。4 月 5 日に野崎さんが亡くなられた由のご連絡を受け、八王子の法蓮寺に埋葬されておられるとの事でしたので、4 月 6 日に墓参し（内田）新望遠鏡の寄贈や全期同窓会の事などについてご報告を致しました。野崎さんのお見舞いは 2 度ほど、高 12 期の小島雅子さんと伺いました。本当に残念でなりません。野崎恒夫さんが最後の 2 年をかけて、私達に大きな贈り物をされたのではないかとさえ思われます。ご冥福をお祈り致します。



天文気象部 高校 12 期以前同窓生と現役部員

2003 年 8 月 16 日

新天体望遠鏡を寄贈されて

天文気象部 2年 寺崎 周子 (部代表)

2005年1月7日(金) この日ついに大型天体望遠鏡の設置が開始されました。寂しかった天体ドームがようやく天体ドームらしく見え、これからの活動が楽しみになりました。設置は午後1時から開始され、夕方には無事終了し、早速2~3の天体観測が行われました。

1月13日(木) 1年先輩の菊地・太田・大森さん、新部長の根本君に服部君・西野さん・村上さん等は、野原先生のご指導のもと、三日月のクレーターの撮影を行い、素晴らしい写真を撮ることができました。

1月15日 土、天体望遠鏡の寄贈式が行われました。会ではOBの方々から色々なお話を伺うことができ、私達も大変参考になりました。またOBの方々との交流が深められ、大変有意義な時間が過ごせました。

2月4日(月) 寄贈された望遠鏡で初めての観望会が開かれました。望遠鏡の扱いに慣れるために、参加した部員全員が月にピントを合わせる練習をしました。新しい望遠鏡はピントがあわせやすく感じました。

3月14日 月、観望会を行いました。曇っていてあまり星空は見えませんでした。慣れてきた人は星にピントを合わせていく練習をしました。新望遠鏡のおかげで、皆の天文に対する興味や関心が高まったように感じられました。

4月15日 金、OBの方々も参加の観望会を行いました。そこで、その日に見える星のことなど、天体について色々教えていただきました。また、土星も観測され、環の部分まで見えたことに皆感激していました。

5月27日(金) 観望会で木星を観測しました。周りの衛星もいくつか見え、望遠鏡の性能に本当に驚かされました。

8月10日(水)~11日(木) この日は新天体望遠鏡を多摩地区の中学生に公開し、観望会と天体の説明会が行われました。残念ながら天候があまり優れませんでした。参加者の皆さんは望遠鏡を体験できたことに満足そうでした。先生やOBの方々の説明などもあり、私たちにとっても勉強になる会になりました。

これからも新望遠鏡を大いに活用し、黒点観測や他の天体観測の夢を追いつつ、天文気象部のさらなる発展に努力したいと思います。



寄贈された新天体望遠鏡と現役部員

2005年10月7日

< 特別寄稿 >

木製三脚の赤道儀の思い出

天文気象部元顧問 大金 要次郎

古いことなので記録は見つからず記憶も定かでないのが残念ですが、思い出すままに書いてみることにしました。

立川高校の屋上には天体観測用のドームがあるということが、着任前の私にとっては何よりの魅力でした。天文気象部の生徒の案内でドームへ入ってみると、固定式のしっかりとした木製三脚に取り付けられた口径10cmの赤道儀であったのには大感激でした。何しろ、この五藤光学製の赤道儀は私が中学生の頃に見た雑誌の広告に載っていた憧れの天体望遠鏡だったからです。このような立派な望遠鏡で黒点の継続観測や観望を行える天文気象部の生徒諸君が、大変羨ましく思われたものです。

ところが、1・2年経過してから、赤道儀の動きが悪く黒点観測が大変やりにくいということが耳に入りました。重錐式でガバナー制禦の赤道儀は、すでに歯車部分の摩耗が激しく、満足に天体が追尾できない状況にありました。事務関係との折衝の末、五藤光学へ全面的な修理をお願いすることが決まりました。

五藤光学から来校した技師によって、1週間以上もかけて丹念に分解修理が行われ、望遠鏡は見事によみがえりました。後日、当の技師の話しによりますと会社から日数の掛けすぎだとおしかりを受けたということです。この技師が満足いくまで修理していただけたことに昔の職人氣質というものを感じていました。

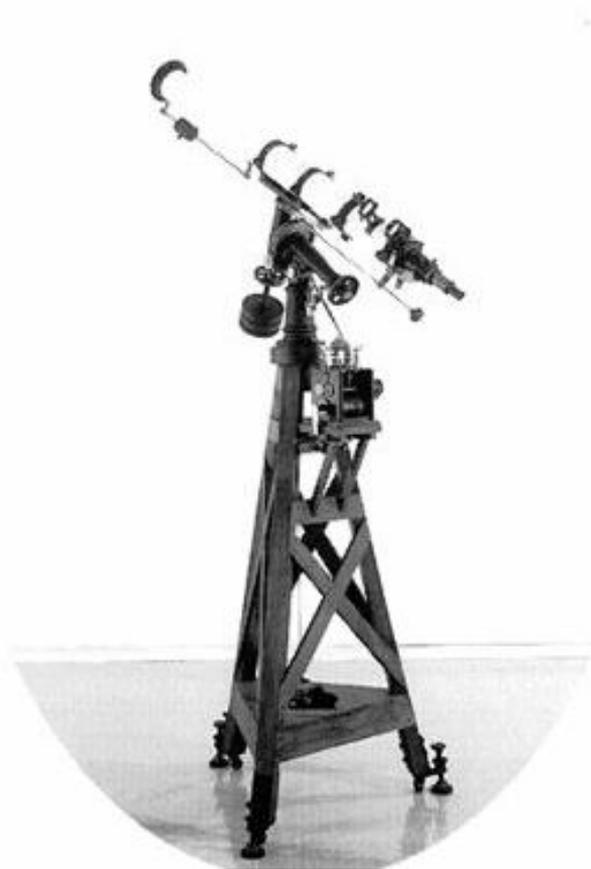
しかし、折角の大修理にも関わらずその後数年で、この古い赤道儀も遂に寿命が尽きたのか、再び追尾が思うようになくなりました。再修理という考えもあったのですが、ここで思い切って東京都へ特別予算の申請をして新品の赤道儀の購入へ踏み切りました。申請にあたって大きなよりどころになったのが、1958年の日本学生科学賞での学校賞第一位受賞をはじめとする太陽黒点の長年にわたる継続観測でした。加えて同様に長年の気象観測の記録が立川市役所によって有効に利用されていたことも大きな材料になりました。どうなることかと心配していた東京都教育委員会の特別予算が了承されて、新しく口径10cm赤道儀が購入の運びとなりました。旧10cm赤道儀の改修で大変ご厄介になったこともあったので、五藤光学の鉄製ピラー・電動追尾式の赤道儀を選択しました。

ここにきて、1939年以来天文気象部の諸君に親しまれてきた木製三脚の赤道儀を廃棄しないと新しい天体望遠鏡を購入することができないと分かり、愛着のある赤道儀を何とか保存したいと努力をしてみました。はじめ、国立科学博物館の村山定男氏と相談の結果、同博物館への寄贈の方向で運動をはじめましたが、事務方から都の備品を国へ移管することが不可能と伝えられ、これは不発に終わりました。そこで製造元の五藤光学で保存してもらうことを考えたのですが、ここにも問題があって都が認可した廃棄業者へ一旦買い取ってもらい、それを五藤光学へ移管するのがルールでありました。一旦、廃棄業者の手にゆだねられれば、それがどのように処理されようとも口を挟むことはできません。ここで

ルール違反を承知の上、明るみに出れば教委から叱責をうけることも覚悟して、裏取引を行ったわけです。五藤光学から廃棄するような10 c m級の部品をいくつか譲り受け、これを事務室から廃棄品として業者へ払い下げてもらい、大切な旧10 c m赤道儀は無事五藤光学へ引き取られていきました。

当時、府中市にあった五藤光学本社内でこの赤道儀を大切に展示していましたが、残念ながらこの赤道儀にはファインダーが存在しておりません。このファインダーは、第二次大戦の敗戦直後に米軍に校舎が接收された際に紛失し、その後1955年に米軍のペニントン大尉が自費で弁償したという歴史のある貴重な口径4 c mのファインダーでした。二度目のファインダーの紛失の原因は全く不明なのですが、屋上のドームへ不審者の侵入が心配されたため、ファインダーを使用する必要がある観測を行うとき以外はこれを取り外して部室のロッカーへ格納していたのが裏目にて、引き継ぎ不十分による管理不足で行方不明となったようです。

こうした苦勞の結果に設置された新10 c m赤道儀が、新校舎の建設時に真新しいドームへ設置されることもなく放置されて、その存在も不明になっていたことには、全く驚きをおぼせません。ともあれ、今回OB諸君のお陰で、口径15 c mの高性能赤道儀が設置されたことには心から嬉しく思っております。



旧 10 センチ屈折赤道儀式天体望遠鏡

絶滅寸前から天文気象部を救った人たち

天文気象部顧問 渡辺 拓美

進学校にはずっと縁がないと思っていたし、別に行きたくもなかった。それがまさか転勤先が立川高校だとは。4月早々、正直乗り気でないところへ2年生の女生徒4人が地学準備室を尋ねてきて、「天文気象部」の顧問をやってくれと言う。地学の教師としては逃げようがないが、即答を避けて無駄なあがきをしてはみた。地質畑出身の私は、気象ならまだしも天文にはまったく興味がない。いくら高性能の望遠鏡で見たところで光の点にしかならない星を見て何がおもしろいのか。おまけに昔から夜がめっぽう弱い。寝酒のあとにぐうぐう寝るのが楽しみなのに、夜行性の人たちとのお付き合いなんぞ、ぞっとする。

これが、赴任当時の率直な気持ちです。今では「かわいげ」がないだろうと決めつけていた立高生がそうではなかったことを知り、少なくとも嫌々、天文気象部の顧問をしているわけではありません。なかなか晴れない空をながめ、願いをこめてひたすら待ち続ける経験も、突然現れる流星をしっかりと追跡できたときの喜びも味わうことができました。ただ、天文学に疎く頼りない顧問で申し訳ないという気持ちはあります。ですから、野原先生のような専門家がそばに居てくださるのは本当にありがたいし、心強いです。この場を借りて、感謝したいと思います。

さて、私のようなぐうたら顧問を「更生」させてくれたのは、やはり先述の4人の女生徒たちでしょう。当時、純然たる部員は彼女たちしか居ませんでした。実態はOB、OGの援助を受けながら、やっと活動を継続させるのが精一杯。すぐ上の「先輩」たちは、まともな活動もせず、部室を「治外法権化」していたそうです。そうした墮落分子を彼女たちは徹底的に追い出し、天文気象部を再建しようとしていたところでした。少ない人数で毎日の気象観測を続け、重い望遠鏡を屋上ばかりか、野外まで出かけて設置し観測し、文化祭には展示はもちろん、望遠鏡のないドームに手作りのプラネタリウムを設置して星空解説までしていたのですから、よくやったものです。それに引き換え、新顧問の私はまったく勝手がわからず、名前ばかりの顧問で役立たずもいいところでしたが、それでも私を顧問として大事に扱ってくれました。

危機がやってきました。彼女たちが3年生になったときが、存続できるかどうかの瀬戸際でした。残念なことに1人が退部して、3人になってしまい、2年生が1人もいない状況で、新入生が入ってくれなければ自然消滅するしかありません。他のクラブの2年生に混じって、必死に入部の勧誘をしていました。その努力が報われたのでしょうか、予想以上の人数の部員が入部してくれて天文気象部、ほっとしたものです。それから大変だったと思います。自分たちが先輩たちから受け継いだことを全部、入学したばかりの後輩たちに伝えなければなりません。新2年生がいらないというということで、どれだけ自分たちを犠牲にしたことでしょうか。本当によく頑張ってくれたと思います。他のクラブなら2年生に任せて、自分たちは悠々と受験に専念できたのでしょうか。おかげで天文気象部は、絶滅危惧種から自然増殖できるようなたくましい部に成長することができました。ここで彼女たちの名前を紹介しましょう。

神原さん、土屋さん、横手さん、ご苦労様でした。

彼女たちが卒業したばかりの2004年度に、OB,OGの皆さんから素晴らしい天体望遠鏡が贈られました。その前年度には母校にろくな天体望遠鏡がないことを知った大先輩たちが下見にたびたび来られました。そのときに中心になって対応したのも彼女たちです。彼女たちの熱心さが大先輩たちに伝わり、その後の望遠鏡の寄贈につながったと思います。現在は後輩たちが育ち、2005年度には中学生を対象に新望遠鏡を使っての公開講座ができるまでになりました。太陽の黒点観測も再開されました。いよいよこれから自分たちなりの活動スタイルをつくりあげていく段階になったと思います。これから入部してくる生徒たちは今の恵まれた状況しか見えないでしょうが、その陰には必死に立高天気部の伝統を守り続けた先輩たちの努力があったことをここに記録しておきます。



絶滅寸前から天文気象部を救った人たち

生徒の夢を大切に

天文気象部顧問 野原 良夫

天文気象部同窓会の皆さま、創部 60 有余年の記念誌発刊、おめでとうございます。また、素晴らしい天体望遠鏡を寄贈していただき、本当にありがとうございました。生徒たちが、この望遠鏡によって科学への夢を膨らませ、チャレンジしてくれるよう、できるだけ応援をしたいと思います。今回、天体望遠鏡の設置に私が関係したことについてまとめて見ました。

定年退職を半年後に迎えた平成 13 年秋、私はそろそろ次の職場を考え始めました。30 数年の教員生活ですから、どこかの学校で、と考えたとき、立川高校の天体ドームが目につかんできました。前日、多摩モノレールから見た立高の天体ドームは、秋の夕日をあびて赤く輝き、多摩の山並みに相対して崇高な姿で、聳えていました。

ふり返って、長かった教員生活を考えたとき、教員を志した頃の“生徒達と天体観測などをやろう”という思いは、あまり機会がなかった、という寂しさがありました。大島高校を振り出しに、福生高校、府中高校、八王子高陵高校、荻窪高校、東村山高校と勤務したのですが、天体ドームがあったのは府中高校の6年間だけでした。八王子高陵高校では開設要員で、校舎も山奥でしたので、ぜひ天体ドームの設置を・・・と望んだのですが、出来ませんでした。もちろん、天体ドームが無くても、屋上で観望会や公開講座などを実施し、気持ちを紛らわせてきたのですが・・・。

私は、早速、立川高校に電話し、囑託員としての売込みをしました。ちょうど、その年度末にお辞めになる方がおられるとかで、運良く、採用していただけることになりました。

平成 14 年 4 月 1 日、立川高校へ初出勤。さっそく屋上の天体ドームへ行って驚きました。ドームの中には天体望遠鏡が設置されておらず、望遠鏡が乗るべきコンクリート台の上には、生徒用の勉強机がひとつ乗っており、その上には簡易プラネタリウムが置いてあって、なんと、ドームはその球形の内側がプラネタリウムの投影面に使われていたのです。

ドーム内には申し訳程度に、7cm 赤道義がありました。生徒に聞いてみると、このドームに相応しい望遠鏡はない、とのことでした。その後、色々聞くと、立川高校が改築されたときに、何らかの理由で望遠鏡が設置されず 10 年が過ぎたようでした。かつて日本一の天文気象部であったことを知らなかったのでしょうか。

私は、何かだまされた感じがしました。大きな望遠鏡が無くても出来ることはありますが・・・でも、私がそうであったように、入学式の日を心躍らせてドームに来る生徒もいるのではないか。その生徒は、立川高校の3年間をどんな気持ちで過ごすだろう、と考えたとき、どうにかしたい、と思いました。

1 年目は学校の様子も良く分からず、2 年目となり、八王子高陵高校初代校長の荻野治雄先生が紫芳会の副会長となられ、立高のことを色々教えていただき、すこしづつ取り

掛かりが分かってきました。そのころ、天文気象部 0B の方々とお会いし、天体ドームの現状を話したところ、ぜひ何人かで見に行きたいとのことになりました。

それからのことは、内田誠氏の記事に詳しいと思いますので、省略しますが、もう一つ気がかりだったのは、学校が受け取れるか、都の教育庁が寄贈に OK を出すか、ということでした。私は以前に、同窓会からピアノの寄贈を受け、始末書を出さされたことがあったからです。自分はこのような始末書など平気でしたが・・・他の方には押し付けられません。

ただ状況は好転し、都の財政状況がますます厳しくなり、それまでより寄贈の受け取りが容易になったという感じはつかんでいましたので、あまり具体的に進まないうちに、副校長を通じて校長の意向を確かめ、ほぼ OK のサインを得ておきました。ちょうど、野球部も日比谷高校との創部 100 年対抗戦とかで 0B がピッチングマシンを寄贈するという話があり、事務室としては、それと同じ手続きで、問題ないとのことになりました。

平成 17 年 1 月 7 日、いよいよ新しい望遠鏡が設置され、11 日には読売新聞が取材に訪れ、生徒たちも気持ちを高ぶらせて対応していました。夕方 17 時ころから、ファーストライトの写真撮影をしました。次の日、現像から返った写真を見てその素晴らしさにほんとは息を呑みました。街明りのびどい立川でよくこれほどの写真がと思いました。生徒たちも、これを見て大いに意欲を掻き立てられたようでした。

1 月 15 日に正式な寄贈式が行われ、さっそく生徒たちは観測を始めました。特に、内田誠氏の熱心な指導で、現部長の根本くん達が黒点のルーチン観測を続け始め、夏の望遠鏡公開では、蝶形緯度分布図の一部となるデータを出すまでになりました。天体写真も自分たちで撮影できるようになりました。最近のデジタル写真映像は、街明かりの影響を少なくできるので、立川のような所でも良い映像が撮れそうです。けっして立派すぎた望遠鏡とならないようにしたいと思います。

気が付いてみれば、立川高校の勤務も、あと 1 年少々を残すのみとなりました。このすばらしい望遠鏡が生徒たちにとって科学への夢のステップとなってくれるよう、できるだけのことをして去りたいと思っています。また気になっているのは、気象関係です。最近、全国的に気象の観測や研究に興味を示す生徒が増えてきていますので立高にも、きっと関心のある生徒がいると思います。百葉箱の整備や簡易気象観測装置を使っただけの観測・研究ができるようにしてあげたいものです。

立川高校天文気象部のますますの発展を目指します。

天文気象部同窓会の皆さま、ありがとうございました。今後とも、よろしく願いいたします。

第1章 “つなぐ源” <天文気象部の創始>

戦後の天文気象部の発足の頃の記憶をたどって

中学44期 三宅 浩之

1. まえがき：

もう若い現役の立高生の諸君には生まれる前、昔々のお話になってしまいましたが、以来60年経って今年復活した新赤道儀をきっかけに、私たちのような還暦はとっくに過ぎそろそろ喜寿という後期高齢者に入ったOBも含めて天文気象部のOB会が改めて発足したようです。この機会に記念誌を発行するということでその頃の状況を記録に留めたいとの編集委員お勧めで古い話を思い出しながら書くことにしましょう。

2. 終戦の頃：

3年生の昭和19年11月から翌20年8月まで1年弱の勤労働員が昭和20年8月15日の終戦で終わって、9月には学校に戻り授業が始まりました。はじめのうちは米軍キャンプへの勤労働員もあり、慣れない英語の会話に面食らいながら、将校とは筆談も出来たのですが、下士官以下の多くの兵隊たちは話すことは出来ても書いた字が読めないということも驚きの新発見でした。

3. 物象班の成立と定時気象観測の開始：

きっかけは定かではないのですが、10月の終り頃には物理教室の教員室に自由に入出入りするようになり、田代先生ともお話ししながら色々ご指導を受けるようになっていました。物理の準備室には色々な実験器具や、終戦時に解散した陸軍の研究所から田代先生がもらってこられたたくさんの測定機材、アネロイド気温計、気圧計、自記記録計、カメラなどなど数多くの機器類がおいてありました。これらの機器を一つ一つ動かしてみるのはとても面白いことでした。物理の助手の五十嵐さんとも気が合って機器の機能を教えてもらったりしているうちに百葉箱を毎日覗くようになり、気温、湿度の記録、雨量計のチェック、自記温度計や湿度計、気圧計の記録紙交換も手伝うようになりました。物理の準備室には水銀気圧計が2台ありこの整備もするようになりました。そのうちに段々と生徒が集まってくるようになり、毎日の気象観測をするようになったのはいつの頃だったでしょうか、定かな記憶はありません。(理学部)物象班という組織が出来、毎日定時に2~3回の気象記録をみんなで協力して観測ノートを作るようになりました。6階の塔の一番上の部屋には風向計と風速計があり、毎回1階の物理教員室から上まで鍵を持って細い階段を駆け上がった覚えがあります。

4. 天文台の整備から天体観測のスタートまで：

11月頃になって田代先生の指導で西の角にあった6階の塔の反対の東の角にあった天

文台に入って赤道儀の整備をするようになりました。土埃だらけの部屋の掃除から始めて、その頃は電気掃除機はまだありませんでしたから、もっぱらバケツに入れた水を替えながら雑巾がけで綺麗にしていきました。田代先生が熱心に赤道儀の動きのチェックをして回転振り子時計と重錘で出来た自動追尾装置の点検や整備をしておられました。

それから1~2週間ほど経った頃、やっと天文台の整備が終わって、先生が天文観測開始の提案をされて、はじめは、半月を見た覚えがあります。夜の星の観測を始めたのは12月も末の頃だったでしょうか。田代先生の指導で、5年生の石川さんがトップで、4年生の私以下3~1年生の10人ほどが参加して夜遅くまで星を探して綺麗な七色の星を交互に眺めては喜んでいました。そのうちに色々な星の光の違いや、連星、星群、なども教えていただきました。天体観測をするようになって、理科年表で星の位置(赤経・赤緯)や明るさ(光度等級)を調べることや、物理教員室の大きな振り子時計の時刻整備(秒単位での調整)などが昼間の仕事になりました。

5. その後:

天体観測の夜には、時に流星観測もやりました。校舎の屋上にシートやベンチを置いてその上に横になり空を見つめて、星座の間を流れる星の軌跡と時刻を記録するのですが、これはなかなか難しい。今なら全天カメラで記録することはできるのですが、流れた時刻までは記録できません。

また、富士山頂に沈む夕日の写真撮影、太陽の直径と富士山頂の見かけの幅が立高校舎の上から見るとほぼ同じなのです。その前には富士山の斜面を滑るように沈む夕日もあります。これなどは今でも見る事が出来るでしょうね。

後に長期の継続観測で表彰された太陽黒点の観測をするようになったのは、その後に投影装置を作って取り付けられるようになってからだと思います。私が式中(後の立高)にいる間には定期的な観測はまだ始まっておらず、投影装置を取り付けて試験的に記録を作る観測をしていたことが記憶にあるだけです。石川さんは理科大学、私は水戸高等学校理科に進学して、次のクラスの伊佐君、大野君たちが最高学年になってから定期的な観測が始まったと思います。

6. 忘れられない星との再会:

水戸高等学校では理化学部に所属して物理、化学、数学を趣味としての寮生活が始まり、その後東京大学教養学部、医学部を経て、臨床の外科医から脳神経外科医となって忙しい毎日を過ごすようになり、気象や星のことはすっかりご無沙汰してしまいました。しかし立高時代の物理準備室の生活で身につけた機器の整備などのおかげで、脳波計や超音波機器、顕微鏡手術機器、各種内視鏡、コンピュータ断層機器などの医用電子機器の開発や整備などに関心があり、医用電子生体工学と病院のコンピュータ環境整備などがその後の研究のメインテーマとなりました。

昭和47年夏のオーストラリア、メルボルンの国際ME学会の折、フィリップ・アイランドのペンギン・パレード見物のレンタカーでのドライブの帰り、ちょうど新月の夜、車を止めた真っ暗闇でライトを消して車外へ出て、空いっぱいの天の川、見慣れない星座、南

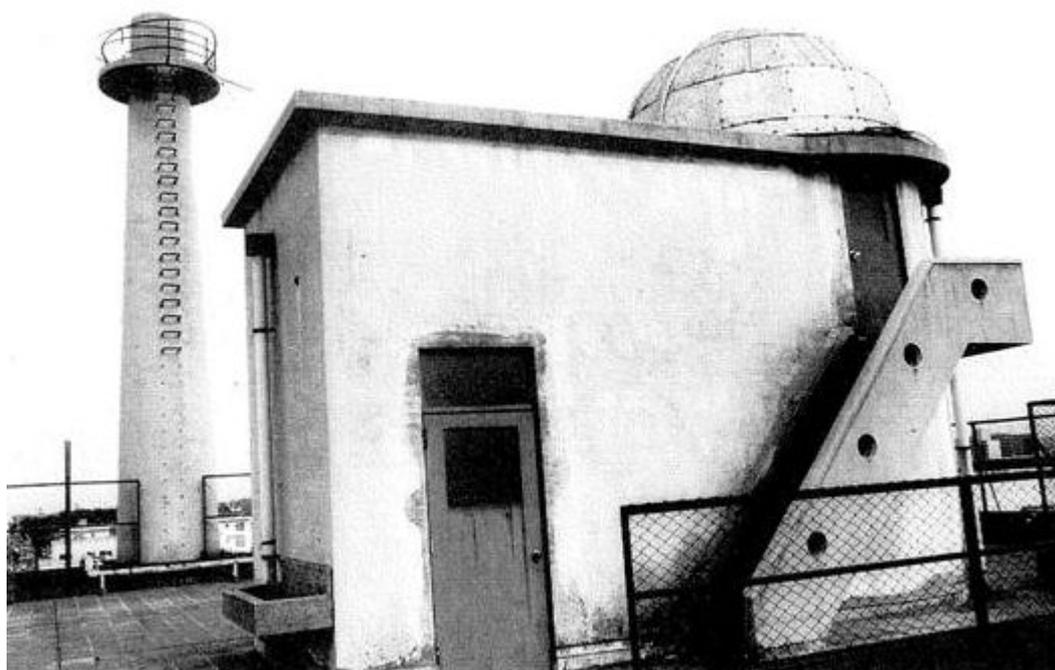
十字星などなどのきらめく星々****。同行の3人のドクターと共に声もなく30分は眺めていたでしょうか。このときの感激は忘れられない思い出として残っています。

7. おわりに：

人生80年時代となっても、中学・高校時代に経験したことは一生の記憶として残っています。それは長い時間によって霧の彼方になってしまうのかもしれませんが、その人の人生の流れを決定付ける経験の時期かとも思います。

60年前の物象班から天文気象部へと引き継がれた、自然への憧憬と畏怖を求める心は、これからも永く多くの人々に引き継がれていくことでしょう。

将来君たちがどんな専門に従事してもこの心は大切に保ち続けたいものです。



旧天体ドーム

太陽黒点観測事始め

中学 45 期 里野 泰昭

私は履歴書を書くときにいつも戸惑ってしまうのですが、年次の記録が曖昧なのです。戦争が終わった時、私は確か旧制中学の3年生でした。現在は都立立川高校ですが、当時は都立第弐中学校でした。戦争中は勤労働員で、中神の陸軍航空工場に行っていました、工場が青梅に疎開して、そちらに通っていました。

戦争が終わって、学校に戻ってきて一番嬉しかったことは、徹夜の夜間天体観測に参加して望遠鏡をいじることができたことでした。田代實先生のご指導のもとに、物象部は天文班、気象班をはじめ多くの班に分かれて活発な活動をしていました。物象部に多くの生徒が集まってきたのは、勿論、田代先生のお人柄によるところが大きいのと思いますが、隠れた魅力は蒸かし芋にあったと思います。先生は何時もさつま芋を沢山準備していて、3時頃になると芋を蒸かして皆に振舞ってくれました。食糧難の当時、これは非常に魅力的なものでありました。

田代先生は、三鷹の天文台に勤めておられました、そこで同僚と喧嘩して、天文台を飛び出して二中に来られたということでした。さもありません という感じです。しかし、天文台とは良い関係にあり、何度か天文台に連れて行って頂きました。また、研究を天文台の学術誌に発表しておられました。二中の田代先生のお部屋の直ぐ向い廊下からは、富士山が非常に良く見えました。そこからは12月の末の頃、太陽が丁度富士山の山頂に沈むのが観測できます。落日の瞬間の時間を観測し、二中の緯度、経度と富士山の緯度、経度から計算された理論的な落日の瞬間の時間との誤差を測定することにより、大気中を通ってくる光の屈折率を計算することができます。私はこの研究のために先生のお手伝いをさせて頂きました。クロノメーターの秒針を私が読み、先生が落日の瞬間の時間を1/10秒の単位で測定するのです。丁度冬休みに当てていましたが、私は毎日学校に通い、先生の助手を務めました。勿論、喜んでやったのですが、12月31日に祖母が危篤になり、夜遅くなってから帰宅した時には、祖母は虫の息でした。その晩遅く亡くなりましたが、親父にこっぴどく叱られたことが記憶に残っています。

4年生になって天文班の班長を仰せつかりました。徹夜天体観測は楽しいイベントでしたが、年2回ぐらいでもっと他にやることのないものかと考えました。立派な天体望遠鏡があるのに、年2回しか使わないのは勿体ない、これをもっと利用する方法はないものかと考えました。たまたま雑誌で太陽黒点のことを読み、黒点観測をすれば太陽の活動の状態について知ることができる他にも、太陽の自転の速度を計算したり、太陽上の緯度、経度を想定し、黒点が発生する位置と位置毎のその発生頻度を太陽地図上にスポットできるのではないかなどと考え、おそろおそろ田代先生に申し上げたところ、意外にもすんなりと認めてもらえました。

それからは、晴れて太陽が出ていれば、毎日天文台に登り、ドームの天窓を開けて観測しました。他の皆が昼休みを運動場で駆け回っているとき、屋上の天文台に登り、ドアの鍵を開け、ドームを開けて太陽の方向に回転させる時、何か誇らしい感じを持ったこと

を憶えています。私の思い付きで始めたこの太陽観測を後輩の方々が引き継いで下さり、立派な継続的な観測結果を出して下さいましたことを嬉しく思い、感謝致しております。

こうして記憶を辿ってみると黒点観測を始めたのは昭和 21 年ということになりますが、田代先生の書かれたものによると、黒点観測は昭和 22 年に始まったことになっています。黒点観測を始めた動機も、先生ご自身がどのようにしたら天体望遠鏡を効率的に利用できるかと考えて、先生の考えで始められたように書かれています。敢えて、田代先生に異を唱える訳ではありませんが、やはりこれは私が始めたと申し上げても良いのではないかと思います。正直なところ、余計なことを言われないかと、黒点観測のための経費についても、いつもビクビクしていたことを思い出します。

【注記】

太陽黒点観測の始りが、昭和 21 年（1946）か 22 年（1947）かについて、里野さんから疑問が提起された。現在ドーム下部室の書類棚に黒点観測の昔からの記録が残っている。早速調査を試みたところ、観測記録として残っている最初は昭和 22 年 1 月 3 日であった。従って田代先生の言われるように 22 年が正しいということになるが、学年度でいえば里野さんの記憶にあるように、21 年度ということになって両者間違いではないこと判明した。

当時の記録をみて気付くことは、1 月に始まり 7 月までの間、5 回ばかり観測協力者に小町とある。多分現紫芳会理事長の小町俊彦さんと思われる。あとは全て里野さん単独で行われているが、8 月にはいり水村、大野、三田、久保、鈴木、清水など何人かの共同観測者が現れる。実に観測開始から半年以上にわたり里野さん単独の努力により継続された。8 月にはいり大勢協力者が現れたのは、多分田代先生の指導と紫芳会創立 100 周年記念誌『玲瓏』に小生が思い出を書いたように里野さんの説得によるもので、漸く天文気象部の正規行事として定着したのではないかと推測される。いずれにしても、本文にあるように黒点観測事始は里野さんによるとあってよいと思う。当時の観測用紙をみると、全て他に利用した紙の裏が使われている。中には進駐軍が使用したと思われる都内交通機関の英語の地図の裏が使われており、戦後の物資不足のなかで活動が行われたことを示す貴重な資料である。

（高 2 大野記）

戦争直後の部活動について

中学 45 期 鈴木 栄祐

1. 序に代えて

私は、昭和 18 年 4 月に田代實先生と同時期に、東京都立第弐中学校に北側正門から登校を始めました。そして、同校（旧制中学校）最終回近い第 45 回卒業生として卒業しました。在学中「気象班」に属していたため、今回「天文気象部 60 年の歩み」に投稿するようにご連絡を頂いたことに対応し、当時の様子を思い出しながら書きました。

2. 昭和 20 年 8 月乃至昭和 21 年 3 月のこと

中学校第二年生の第 2 学期、即ち昭和 19 年 12 月 8 日から学徒勤労動員のため、現在の東京都稲城市に在った陸軍火工廠に勤務させられました。そして、中学校第三年生の昭和 20 年 8 月 15 日に敗戦のため復学しました。当時の様子は、田代先生がお書きになった [立川高校の天体望遠鏡物語] 第 1 頁乃至 2 頁を参照下さい。なお、同書第 14 頁に記述の二年生は、私の 1 年下級生が我々と共に同廠に動員させられていて、田代先生がその二年生を監督する立場にあったことをお書きになっています。

同書第 18 頁乃至第 20 頁において、昭和 20 年 11 月と 12 月に天体観測会を行ったということは、何故か私の記憶にはなく、出席もしていません。

3. 昭和 21 年 4 月乃至昭和 22 年 3 月のこと

昭和 21 年 4 月、私はいよいよ四年生に進級し、当時の五年生三宅浩之先輩は上級学校入学試験準備のため、[部活動の長] のポストを四年生に任せることになった筈です。田代先生からのご指示があったと思いますが、四年生の伊佐喬三君を始め、四年生が 10 人近く集まり、物象部とその下部組織を作りました。即ち、物理班、電気班、化学班、天文班、気象班です。

その時のメンバーは、下記のように記憶しています。

物象部長 伊佐喬三

物理班長 星野昭雄、 電気班長 会田二郎、 化学班長 ?、

天文班長 里野泰昭、 気象班長 鈴木栄祐

なお、副班長 高田（三年生）、小西孝道（二年生）、班員は、全て一年生の辻井壮一、三田重男、蓼沼輝夫、中川幸成、久保喜久雄、中村智美のメンバーでした。

そして、日曜日、夏季休暇、冬季休暇を含み、定時観測を行いました。確か毎日、朝 8 時半と午後 3 時でした。

昭和 21 年頃、気象班は天文班と全く別組織でした。勿論、気象班員が天文班や物理班など他の班の会合に出席することは、観測当番でない限り、自由です。そして私は 1 年間に亘り活動した筈という記憶しかありません。それは昭和 22 年 1 月末から 2 月初めの「不発事件」があったため、上記のような表現をしました。即ち、「ゼネスト中止事件」で、私はそれに対する対応策を下記のように練り上げた積もりでした。

その事件は、30 組合、600 万人近くの労働者が、賃上げ、最低賃金制の確立などを要求し「ゼネラルストライキ」を行なうという計画でした。国鉄・私鉄・各バス会社が全てストップすること、電気の発送電もストップすることなどでした。

気象班は定時の観測を継続するため、2月1日、2日は立川在住の三田君、蓼沼君をお願いすること。2月3日は私がその時住んでいた小金井町から自転車で登校し観測すること。2月4日、5日は三田君、蓼沼君。6日は鈴木。以後は3日毎のサイクルを繰り返すことでした。雪が降るような悪い天気であっても、欠測は許されません。この計画を田代先生に説明し、正門の監視員に届け出ることにより了承していただきました。(監視員には百葉箱の鍵を預けることであった筈です)

気象班長から逃げ出すことが出来ない訳ですから、1月31日夜、当時の占領軍最高司令官マッカーサー元帥の命令で、ゼネスト中止と決まった時は、正直言って「ホッ」としました。その時ラジオは「一步前進、二歩後退」という総評議長の言葉を放送していました。気象観測の定時続行になったことは言うまでもありません。このことは三田君、蓼沼君、また辻井君は覚えているのでしょうか？58年前のことですが、現在の「アメダス」自動観測と比較すると、今昔の感に耐えません。

4. 昭和22年4月以降のこと

五年生になった以降のことは、物象部・気象班のことが記憶になく、所謂「部活」からは離れたと思います。

5. 終わりに

58年も前のことは、事件・事故が在ったときに覚えている程度であって、正常状態であったことは忘れていきます。

記憶違いもあるかと思いますが、一応書いてみました。

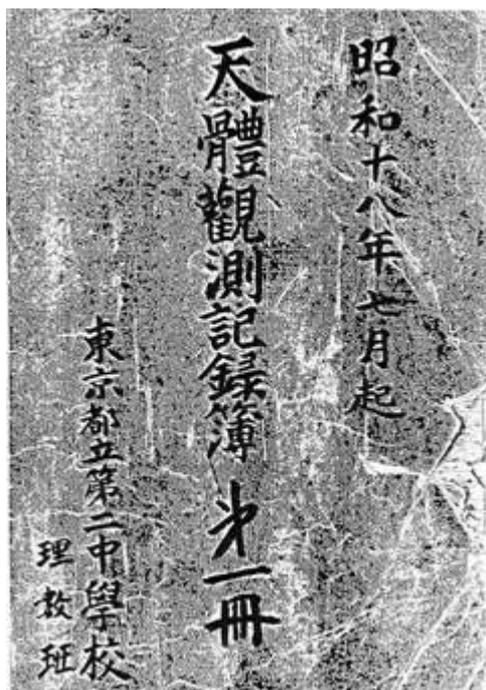


旧校舎 6階気象観測室

都立武中から都立立高への時代の天文気象部

高校2期 大野 伊左男

1、 天体観測の始まり



手許に古びた記録簿のコピーがある。
表紙(左写真参照)には田代先生の肉筆による
『昭和十八年七月起 天体観測記録簿第一冊
東京都立第二中学校 理数班』とある。

当時、天体観測に参加された者には懐かしい記録簿であろう。昭和44年3月定年を迎え退職された先生を自宅に訪問した折、天文気象部の活動に関わる記録は全て長く学校に保存されるよう残してきたが、この1冊は自宅に持ってきたと言われ見せてもらった。自分だけでなく多くの友人の懐かしい署名をみつけ数日お借りして、コピーをしたものである。なにぶん18年から44年までの長い期間の記録であり全てをコピーせず、自分に関係ある部分のみとしたことが今になって残念なことになってしまった。

ご存知のように、その後田代先生のご自宅が火災(昭和61年8月)に遭われ原本が焼失、この不完全なコピーしか現存しないことになってしまった。

この記録と望遠鏡物語によって当時の活動を辿ると、天体観測が初めて行われたのは昭和18年7月21日から晴夜7日間である。然し戦争の激化と勤労作業増加によって第2回観測会は翌19年9月2日(土)である。この年入学してきたのが、高2期生の我々である。16年12月8日に始った戦争はこの頃から敗色を深めていった。6月になると4トンの爆弾を積み、5,600キロの長距離を飛ぶ爆撃機 B29 を完成させたアメリカは空母15隻を中心とする大機動艦隊を編成し、この夏天皇・皇后両陛下が追悼に訪れたサイパン島に攻撃を行い、全員が玉砕・陥落した。その結果日本本土全体が空襲可能となった。そんな敗戦色が深まってゆくなかでの観測会に1,2年生を中心に40名参加し月面観測が行われた。

然し戦争はますます厳しくなり、20年3月には東京は大空襲により、焼け野原となり、近くは三鷹・田無市一帯に広がる中島航空機・エンジン工場(日本最大の航空エンジン工場)が爆撃され壊滅的な打撃を受けた。6月には中学2年生であった我々にも勤労働員令が発令され、学業を中止して毎日多摩火薬廠で砲弾作りに励むことになった。遂に8月広島・長崎に原子力爆弾が投下され、8月15日終戦となり、漸く学業に復帰することになった。学業に復帰といっても住宅・食糧・衣料あらゆるものが不足し日本全体が困難な生活を強いられ教科書も不具合な分は塗り潰しての使用であった。そんななかで、11月17日(土)、19日(月)両日観測会が開催され、それぞれ53名、54名と沢山の生徒が参加し、更に12月20日(木)冬休み第1日には徹夜観測が行われた。この時の参加者は第1回観測会に最

後の夜まで残った石川孝夫さんをリーダーとして4年4名、3年1名、2年12名、1年1名、卒業生1名 計20名である。この戦時、戦後の厳しい環境のなかで観測会に多くの参加者があったことについて先生は望遠鏡物語で『2年生の賢明と自覚の結果』と述べられている。実際の当事者であった自分達はをどうという考えで参加したのであろうか。人それぞれに考えが違っても知れないが、情報溢れる今の人には全く想像出来ないが、知識・情報に対する飢餓感が根底にあったように思う。戦時中は全ての物資が戦争に狩り出され、戦後は物資が欠乏し、当然出版物も少なく知識情報の少ない時代であった。そのなかで天体観測は宇宙というロマンとともに中学校に入学したばかりの我々に新しい知識獲得の機会を与えてくれた。また参加者に同期の高2期生が多いのは田代先生が我々のクラス(2年4組)を担当され、2年生全体の物理を担当され、厳しいなかに生徒に親身を感じさせる人柄に天文に惹かれた生徒が多かったことも一因と考える。

2、 黒点観測の始まり

黒点観測は昭和22年初めから始まり、翌23年1月1日から本格的に観測がなされるようになった。天体観測のみでは、望遠鏡の稼働率があまりにも低い。太陽黒点観測を行い飛躍的に稼働率が向上させ生徒の天文に親しむ時間を増やすという先生の意図に対し、私自身は、創立100周年記念誌『玲瓏』の『天文気象部 日本学生科学賞受賞』に書いたように、始められた5年生里野泰昭さんの熱意にほだされて4年生の私は引き継いだ次第で後年日本学生科学賞学校賞第一位に輝くような意義を見つけての継承ではなかった。科学賞の講評で先輩から後輩へと涙ぐましい努力が引き継がれてきたとある。外からみると、こういった表現になるが、実際の当事者としては、こんな悲壮感はなく先輩・後輩の義理で受け継いできたように思う。この世の事象というものは、なべてこんなものなのであろう。

望遠鏡物語で22年は予備観測として、観測したスケッチを毎月整理し東京天文台へゆき黒点観測の係官から指導を受け観測水準を上げ、23年1月1日から本格的にスタートと先生が述べておられる。最近ドーム下・部室の書類棚を整理し、これを裏付ける記録が見つかった。最初の幼稚な記録から、本格的なものになってゆく推移を示す記録が見つかった。

今になり思うのは、黒点観測が天文気象部の伝統を作り、これが他部にみられない60年以上に及ぶ全期同窓会の発足、望遠鏡寄贈という快挙の大きな力になったということであり、それは先生の考えた以上のものを今日もたらしたのではないかと考えている。

3、 田代 實 先生

多くの人と同じように、小生も先生に生涯にわたり教えを受けた。卒業後も時にふれ励ましの言葉をいただいたが、特に学位取得を早くから強く勧められた。現役時代は経営の第一線にあり落ち着いて論文を書ける環境になかった。漸く平成11年古希を前にして第一線を退くにあたり長年の体験を整理し『造船工場生産管理システム化への考察』というタイトルにて学位論文にまとめ、母校東京大学に提出したところ12年2月承認を受けた。早速西多摩にあるシルバー施設におられた先生に報告し、大変喜んでいただいたのを昨日のように思い起こすことができる。

晩年お訪ねした時に、いろいろ昔の話を聞かせていただいた。沢山の話のなかで、皆の知

らないと思われることを一つ報告します。

なぜ先生は天文台へ勤務され天文に関わりをもつようになったかである。それは先生の母方の叔父に秋吉利雄さんがおられたということであった。秋吉さんは海上保安庁水路部の前身・海軍水路部の歴史を作った一人という先生の説明に水路部に問合せしたところ、海洋調査課長佐々木稔様より、日本水路史のコピーが送られてきた。それによると秋吉さんは、海軍兵学校を卒業後、大正15年4月東京大学天文学選科を卒業され、水路部に勤務となられ終戦当時は少将にまで昇進された。なぜ兵学校を卒業された方が天文学を学んだかという航海に必要な恒星視位表、潮汐表が日英同盟破棄の結果、一切はいらなくなった。これまでこれらの数値はイギリスに頼っていたので、急に日本独自で計算しなければならなくなったからである。暦推算体制の独立を、ほぼ10年という短期間で達成という大変な偉業に対し時の海軍大臣から賞賛の言葉を受けた。その他に秋吉さんの水路部における業績として、興味を引くのは当時太陽位置決定に日食観測が最も直接的有効手段であった。昭和9年2月15日皆既日食がロソップ島であった際、秋吉少佐(当時)は軍艦春日に乗り、観測を指揮され、次いで18年2月5日北海道で皆既日食が見られた際も、秋吉少将が指揮された。

そんな秋吉さんを叔父にもち、秋吉さんの東大時代の先輩・友人が大勢東京天文台におられ、その縁で先生は天文台にはいられたということであった。

最後に、戦中・戦後の日本大変革期によき師(田代先生以外にも多くの先生を思い起こす)の指導を受け、特に田代先生から学んだことは、常に現場に足を運び、自分の目で事実を確認するということであり、生涯にわたり自分の信条としてこれたことは大変幸福であった。あらためて、学校・先生方・友人達に感謝申し上げ終わります。



日本学生科学賞学校賞受賞を祝う会 1958年11月

気象観測データの保存について

高校2期 大野 伊左男

本記念誌編集に携わり、長い年月継続して行われてきた気象観測データがどのように保存されてきたか気になっていた。そんな懸念をもっていた時、高46期鈴木（旧姓堀内）祐子さんの『91年に30年間の気象データをまとめ、文化祭に発表した』という記事が目にとまった。早速鈴木さんに小島さんから連絡をとり当時の様子を確認したところ、データをフロッピーに納めたことが分った。立高が改築した後の事とのことであり、部室のどこかにあるのではと野原顧問先生に探索を依頼した。先生はお忙しいなかを探して下さい、見事データの復元をしていただきました。

その経緯を先生からのメールにより復元し、後世への記録とします。

● 2005/10/3

今日、天体ドームの下の観測準備室（今、部室として使っている）を探しました。たぶん、このことであろうと思われる”フロッピー”を見つけました。観測準備室の入口の正面奥、ドームに登る階段の前に置いてある古いパソコン（PC9801）の下の机の引き出しにありました。ただし、初期の5インチフロッピーで、数年分が1枚のフロッピーに入れてあるようで10枚近くあります。表記に 年と書いてあるので、そうであろうと思われるのですが、中（データ）が読めません。なんのソフトを使っていたのかが分かりません。3.5インチのものも何枚かあります。いくつかのフロッピーに『WEATHER STATION』の文字があるのですが・・・？

91年というと、BASIC大流行のころで、そのデータは、そのプログラム作成者がデータ形式と保存形式を決めて、そのフォーマットでフロッピーに書き込んでいた時代だと思います。残念なことに、机の上にあるパソコンの5インチフロッピードライブは壊れているようで、現在5インチフロッピーを読み込んでくれません。そのパソコンのメモリの中に、『WEATHER STATION』のプログラムがありました。BASICのプログラムで、LISTを見てみると、個人が作成したプログラムのものでした。“RUN”で走らせて見ると、年月日時刻を入力して気象データを取り出すためのようでした。色々やってみましたが、データを読むまで進めず、途中で止まってしまいました。メモリのなかに、1997年12月1日に、井上喜文さんが『このパソコンの使い方』を書いた文章が残っており、それによると、すでに5インチフロッピードライブは壊れていたようで、3.5インチにソフトを移したと書いてあります。データを写したかどうかについては分かりません。パソコンには3.5インチのフロッピードライブも後付けで付いています。井上喜文さんは、その時、3年生のようで、何かあれば連絡下さい、と書き、住所：南平5-3-23 電話：042-592-1278 と書いてありました。

私は、井上さんへ連絡をし、状況を教えて戴くのが良いのではないかと思います。なお、フロッピーの入った引き出しには、『このフロッピーは、大切なデータです。整理を計画していますので、手を触れないで下さい。2005年10月3日 野原良夫』と書いたものを入れておきました。私も、若いころ観測に熱中したひとりです。データの貴重さ

は、よく認識しているつもりです。このデータ、どうにか生き返らせたいと思います。

気象データのフロッピーですが、たぶん最後に作成(データ転写)したと思われる、「KKK」と表記してある3.5インチのフロッピーからデータを取り出すことが出来ました。1953年～1995年の気温8時、気温14時、最高温度、最低温度、のデータが入っています。全体で2.3M bほどあります。安全のため、HDにコピーしました。そのことも記した手紙を、井上さんへ6日に出しました。

● **2005/10/8**

本日、井上さんから丁寧なメールが届きました。やはり、井上さんが、故障気味の5インチDISKを危やうんで、3.5インチに移してくれたようです。今となると、その判断に感謝するばかりです。一緒にデータを処理した友人の太田裕志さんと連絡を取ってくれるそうで、学校へも来ていただけるかもしれません。さしあたっては、さっそく、データの一部を添付送付して、データの項目はこれだけなのか、確認したいと思います。

データは、部のものですから、部の同窓会が使うのに何の問題もないと思います。気になっているのは、これで全部なのか、ということです。このメールにも、一部(2年分)を添付いたします。1年間の数値データと1年間のグラフを同一ファイルの別シートに収めてあります。『LOTUS123』ファイルのようです。Excelで開いて下さい。ただし、Excelにそのまま保存は出来ません。再処理の方針が決まるまで、このままで置いておくのが良いと思い、そのままにしてあります。データ全体では、2.3Mバイトあります。

● **2005/10/17**

気象データを1年分だけ、数値データとグラフに分け、ExcelとWordにして見ました。このようなデータが40年分あります。40年分の気象データの取り扱いですが、添付データのように、データを縦表にしてみました。40年分をこのようにすると、Excelで簡単に、いろんなことが出来ると思います。例えば、1月の平均温度の40年変化グラフとか、7月8月の最高温度の40年変化など、いろいろ出来そうです。もちろん、元のデータはそのままにしておきます。

その後1990年ころからの、自動観測(ウェザーステーション)のデータが読み出せないということで、調査の結果プログラムは当時の顧問茂木先生が作製したこと判明した。

野原先生が大変な苦勞をされてデータの復元保存をされたこと有難く卒業生一堂深い感謝申上げる次第です。CDにデータが保存され、本記念誌の出版に新たな意義を加えることが出来たと考える。

参考までに1963年の8時、15時気温及び最高・最低気温の旬間平均値の推移をグラフにして、「附録 5 天文気象部の歩み カラー写真集」に示す。

五十数年前の観望会

高校3期 西部 訓弘

丁度60年前の昭和20年4月、大東亜戦争末期の日々空襲に襲われた混乱の時期の入学であった。着るものもなく父親の洋服を仕立て直して通学、勿論学生帽などなく紙製の戦闘帽で徽章も瀬戸物製のものであった。食べるものも極端になく、今では想像もできないような社会状況……」終戦までは度々勤労働員として立川飛行機会社？に行き、機材を松林に運ぶ作業を体験した。戦時下の授業は落ち着いた雰囲気はなく、空襲警報が出ると立川段丘に造られた防空壕に避難し、授業は中断の有様。終戦直後は米軍の進駐で式中校舎が使われ慌てたこともあった。

昭和23年の学制改革により、新制高校制度となり、校名も式中から式高、現在の立高となり、旧制中学から新制高校へと引き継がれ、6年間お世話になった。

何事にも好奇心旺盛な年頃、天文気象班探検隊？で、校舎一階床下にある暖房用のダクトを東側煙突下から西側校舎下まで潜ったことなど他愛ない思い出がある。質実剛健を旨とした校風、猛者も多く、しかも6年間[今話題の中高一貫教育]勉学を共にした仲間だったので、戦後は思う存分楽しい学生生活を過ごすことができた。

私が理化学部天文気象班に入部したのは中3の時と思いますが、毎日午前、午後の気象観測[物理教官室前の百葉箱、6階の観測室、6階屋上]と昼休みの時間に物理教官室に行き田代先生と昼食を一緒にとり、暫しの時間、分秒時報を親時計の前でラジオの時報に合わせる指導を受けた。その後、天気の日には校舎東側屋上天体観測室での太陽黒点観測、日曜日、夏休みなどは当番制で継続してきた。観測データの整理は校舎二階西側部室なのですが、多用途部室[各種ゲーム？の遊技場]となり、データ整理はそこそこに済ませたように思います。

気象観測、太陽黒点観測はとても地味な作業の積み重ねですが、毎日毎日「コツコツ」と続けてきた経験が社会人になってからの仕事に何分かの好影響があったのではないかなと思っている。

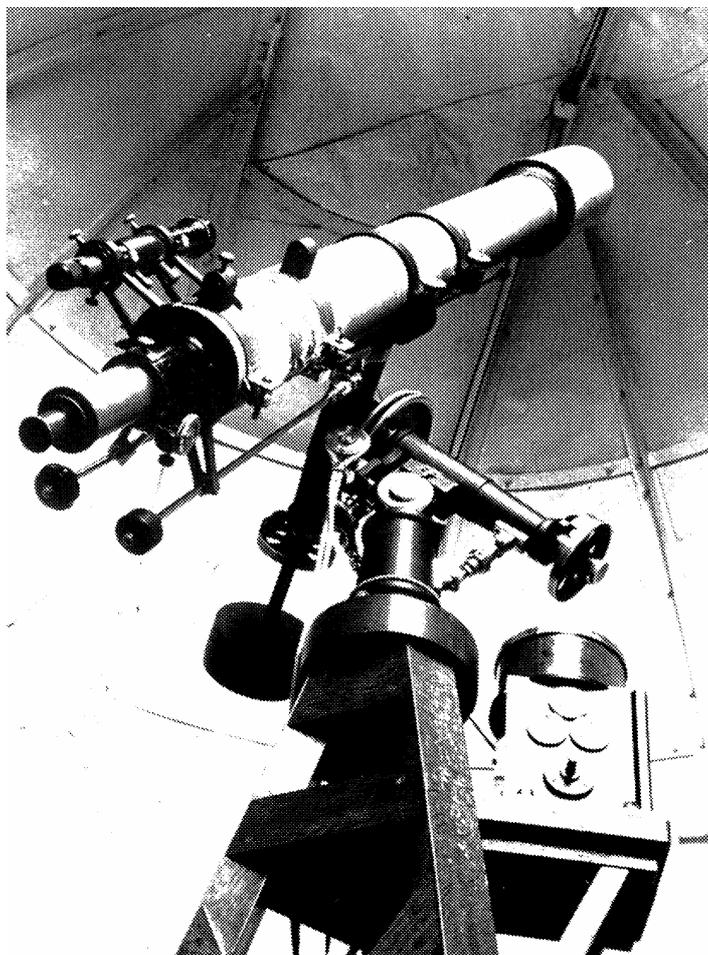
昭和24年の文化祭に日野市立第一小学校の児童十数名が先生の引率で、天文班の展示室に参観に見え、天体観測に大変興味を持たれ、「是非、月や星を観たい」とのことで、私は「何時でもどうぞ」と安請け合い、顧問の田代先生に相談もせず、夜間観測を実行してしまった。当時は、空気が澄んでいて、月、惑星、二重星、星雲それはそれは児童たちの感動は大変なものでした。当然のことながら、田代先生の知るところとなり、大目玉を食らった苦い経験がある。

そんなご縁で、児童、先生との文通やら、小学校の展覧会にご招待いただき、訪問したりもした。その後、小学校の先生も何度か学校に来られて田代先生にお会いになり、ご指導を受けていた。翌年春、田代先生の発案で、小学校の先生(2人とともに女性)と先輩(三宅、大野、?)を誘い、秋川上流にハイキングに出かけた。2人の先生の手作りの弁当で和気あいあい、叱られた話は無罪放免となった。数年前に夜間観測に参加した児童の一人が立高同窓生になっていたことを知った。話を聞くと小学校の時に訪問した立高に憧れて、

入学したとのことであった。

今回、天体望遠鏡の寄贈後の事業として、多摩地域の中学生を対象に、天体望遠鏡公開講座が持たれ、多くの夢多き中学生の参加を得て、所期の目的は達成できたものと思う。

歴史と伝統のある天文気象部、天体望遠鏡を思う存分活用し、その活動を楽しみ、ロマンを追及し、若いエネルギーを燃焼させ、後輩に引き継いで欲しい。



旧10cm 赤道儀天体望遠鏡

立高天文班のこと

高校3期 木下 和久

私は昭和24年高校2年の夏、埼玉県浦和高校から立高に転校してきた。天体望遠鏡に興味があり、自作などしていたので、早速天文班に入ったが、そのときの同級生は西部君1人のみ。ある時先輩の大野さんがみえて、それ以前の天文班、気象班の話をしてくれたような記憶がある。3年生になった時、新しく1年生が何人か入り、その中に少数の女子生徒がいたが、残念ながらその子たちと親しく話をする機会もなく、あっという間に貴重な青春時代は過ぎ去った。

ブリキの筒で作った自作の望遠鏡は、形は赤道儀を真似たが、レンズは高級な色消しレンズは使えず、最高倍率は40倍で、見えるのはせいぜい月のあばた。せっかくの学校の天文台の望遠鏡も、土星の輪や木星の縞模様を観測することを期待したが、夜間観測はほとんどなく、太陽黒点観察のみが比較的まじめに継続された。

指導教官の田代先生は、基礎的な物理測定を学ばせようとされたようで、物理教室の大時計を、短波ラジオの標準時報を基準にして誤差測定することを部員の日課に課した。おかげでそれ以後かなり正確に頭の中で1秒を刻むことができるようになった。

昭和20年代の立川・国立付近の空は非常にきれいに澄み渡り余分な明かりがないために、肉眼で眺める星はすばらしいものであった。冬の晴天時自宅前で見上げた星空が、あまりにも多くの星々が見えるため、かえって星座が分かりにくくなるほどであったことを懐かしく思い出す。

ハレー彗星が近づいた時は、会社の休暇を取ってオーストラリアでの観測会に参加した。現地での歓迎ぶりは大したもの、こちらが驚く有様。しかし、高原で眺めたハレー彗星の尾は期待したほどははっきり長くは見え、少々がっかりした。その場所は都市からかなり離れていたにも拘わらず、遠くの都市の光は空をかなり明るく照らして、星の光を遮ってしまった。

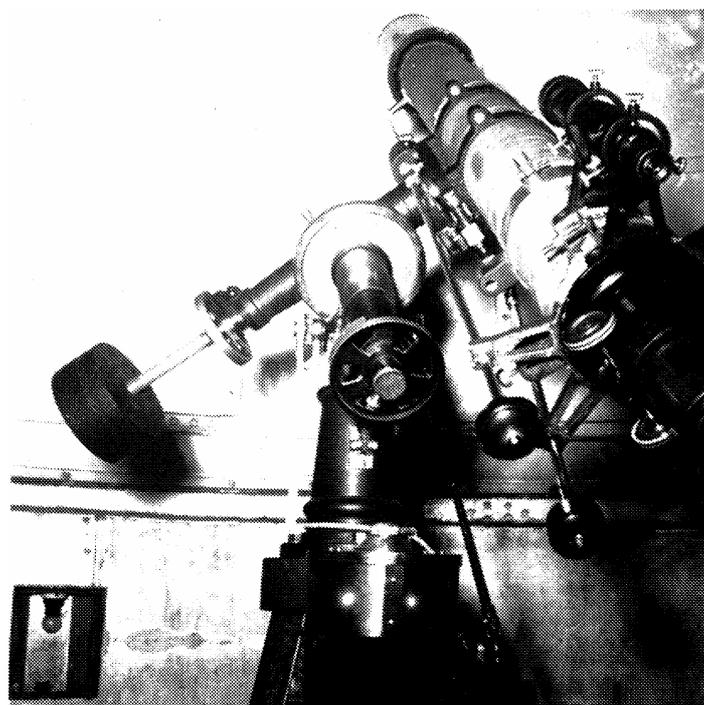
最近の宇宙探査の成果には全く驚嘆の他ない。人類が月に降り立ち、その岩石を持ち帰った。火星には無人探査機が直接降り立ち、見たままの景色を送ってくれる。土星の輪のすぐそばに探査機が寄りついて、輪を構成している小さな氷の粒を見せてくれる。木星に大彗星が分解衝突していくつもの衝突の光を発したことを見せてくれた。こうなると、いくら150mmの屈折望遠鏡が頑張ったって、火星も土星も木星も、ぼんやりした姿以上のものは見せてくれない。もはや素人の天体観測は無力的なのだろうか？

この間、ひよんなことから天体写真を趣味としている人と知り合いになり、彼の藤沢の家を訪ねた。その庭には200mmのシュミット型反射望遠鏡が備え付けてあり、勿論赤道儀の上で正確に狙った星を長時間誘導できるようにしてあった。その焦点面には電子冷却装置で冷却できるCCD感光体が設置されていて(温度が低い方が雑音が少なくなる)撮影された画像データを直接パソコンに送り、余分な雑音を除去して鮮明な星雲などの写真が撮れるようになっていた。これだけの設備を揃えとなると、大変な費用がかかるのではないかと心配になるが、普通のサラリーマンが、ちょっと頑張れば趣味に費やす費用とし

て支出できる程度のものだという。ここにも最近のコンピューター関連技術の飛躍的な進歩の成果が及んでいることが感じられる。

しかし、見えない宇宙の果てへの夢を育む最初は、ぼんやりではあっても直接自分の目で惑星の姿を眺めて、あれこれ想像をたくましくすることであろう。その手がかりとなる立川高校天文台の威力は絶大なものではないかと思う。他から与えられた、加工された情報だけに頼るのではなく、自分自身の「この目で見る」、「この手で作る」ことが、大切なことではないかと思う。

私の今の夢は、昔国立の我が家で眺めたような、漆黒の満天の空に輝く無数の星を思う存分眺めることである。そして、本物のオーロラも存分に眺めてみたい。



旧10cm 赤道儀天体望遠鏡

気象班と私

(気象班の創始期より天文気象部)

高校4期 辻井 壮一

戦争末期の昭和20年4月、都立第二中学校に入学したが、5月25日の空襲により家を焼失し、茨城県土浦一中に疎開転校したが、疲労等で休学の止むなきに至り、昭和21年4月には、軍国主義から民主主義への波乱万丈の社会情勢の翻弄された中に復学ということで、再び都立二中での中学生生活が始まった。

混沌とした時に出席簿順に10名前後ずつ半強制的に気象観測をやらされたのである。

指導教官は田代實先生で、観測指導は三宅浩之先輩(中44)であった。この事が私と気象班との出会いで、やがて数名が同調し気象班としての日常観測が始まったのである。

観測機器も当時としては充実していたと思う。フォルタン型水銀気圧計、アネロイド気圧計、毛髪湿度計、最高最低温度計、乾湿温度計、各自記計、風速計(ロビンソン型)、風向計、雨量計、日照計などが機器として設備されていた。その他に天気、雲量、透明度、備考と観測項目は多岐に亘っていた。

フォルタン型水銀気圧計は田代先生が終戦後、立川飛行隊基地より3本入手したと三宅先輩より聞いた。

当時は物象部の中に同好の志の集まりであったが、理化学部となり気象班と天文班が出来て、部室は教官室中にあり、授業時間以外はすべて教官室が集まり場所となり観測時以外は殆ど屯ろして、準備室は格好の遊び場でよく田代先生に叱られたものであった。

やがて組織拡大と共に天文気象部となり、気象班と天文班が共有する研究室と称する自由な部屋が校舍西側角に近い2階に確保できた。そこでは観測データの整理、統計、定期的に行われる研究会の資料作成、学校祭の展示物の作成等多忙であった。

だがそれ以外は遊びの場としての顔を持っていた。トランプ、マーじゃん(O君作成)等各種の遊びの発見開発、長時間全く退屈な時間を感じた事は一度もなかった。ある時は体力限界への挑戦などやり、体調を崩して病院に行った者もいた。この楽しさに誘われて入部した者も何人か存在した。

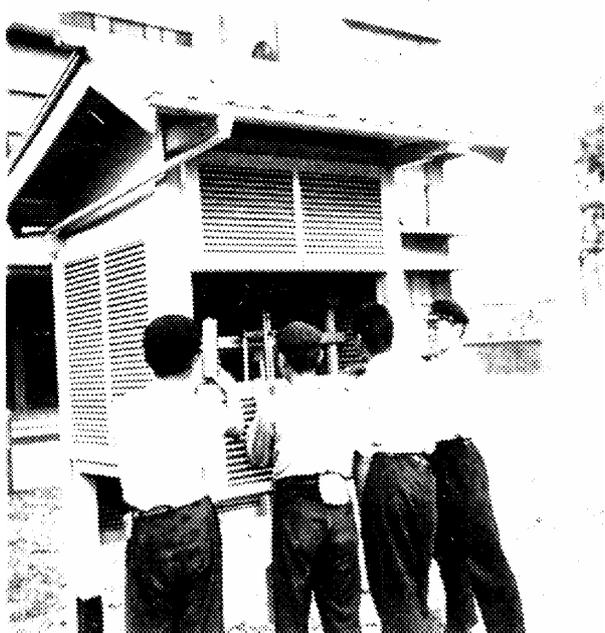
夜は各自NHKの気象通報を聞き、天気図を作成し、ある時は台風襲来を予想し、校長先生に田代先生を通じて進言し、午後の授業を中止、全員帰宅を申し入れて実現した。台風は大月方面に外れて大禍なかったため、翌日級友たちがまた台風を呼んでくれと大笑いした。

とにかくエピソードに事欠かない毎日が続いた中でも思い出に残ることは、田代先生より中央線の鉄橋から日野橋の間の多摩川の流域調査をしてみないかと言われ、同級生の三田重男君と二人で日野橋から鉄橋まで歩いて目視で流域のスケッチをした。鉄橋の長さを巻尺で尺取虫的に測定中巻尺の先端が風で飛ばされたところに電車が来て急停車、運転手より大目玉をくらった。中央線の先頭車両は進駐軍専用車「クハ65型」で、半分白帯が施されていたのを記憶している。勿論、途中で測定を中止して帰途に着いた。学校までの

小雪の降る中を、どこからともなく「鐘の鳴る丘」のテーマソングが流れてくる。また、「福は内、鬼は外」の声が聞こえてくる夕方であった。勿論、田代先生に報告したが、冷や汗ものの一日であった。

保谷の洞窟探検、ダム見学、相模湖透明度調査、富士登山での山岳気象観測、72 時間連続観測、清明寮の海浜気象観測など、枚挙に暇がない。

好奇心は視野を拡大し、相互の関連性を追及するという姿勢は今でも変わっていない。叱られても叱られても公私に亘りあらゆる面からご指導下さった田代先生に感謝申し上げますと共に、この環境を共有した友人達にも感謝したいと思う。



百葉箱での定時気象観測

太陽黒点観測の思い出

高校4期 保坂 一夫

「何のために、太陽黒点の観測をやっているんだい？」

昭和24[1949]年のある日、通学途中に南武線の電車内で同期生のH君からそんな議論を吹かけられました。勿論、太陽は地球上の全ての生命体を育てている、謂わば、我々人類にとって根源的な存在であり、その太陽を観察することに意味がないとは謂わない。しかし、君等の観測は単なる課外活動の一つに過ぎないのではないかと？ 何時まで続けられるのか、本物の観測は専門の研究者がやっているのだから君等の観測が何の役に立つのか、という訳です。

そのとき、どんな返答をしたのか記憶は定かではありませんが、今振り返ってみると、日々変化してゆく太陽黒点の位置とその形態の移り変わりの面白さに強く惹きつけられていたのだ、と思い当たります。観察し記録しておくという行為は収集癖と同じように人の習性のひとつであり、文明の原初の姿もそうだったのではないのでしょうか。加えて、日常生活では殆どの人が気付かないで過ごしている現象を、独り占めで観察しているのだという一種のプライドもインセンティブになっていたと思います。

さらに、当時は立入り禁止であった屋上に、堂々と昇れることも楽しみの一つでした。教室でガヤガヤと駄弁っているよりは、すっきりと見晴らしの良い屋上に出て先輩や後輩、気の合った仲間達と1時間を過ごす方が、筆者にとって遥かに快適であったことも事実です。毎日、昼休みになると天文台に集まり、弁当もそこそこに黒点をトレースし、夏休み・冬休みも当番で観測を続けられたのもこういったことが励みになっていたのだと思います。時には雲が懸っていたので観測をサボったところ昼過ぎに雲が取れ、西部先輩から「駄目じゃないか。俺がやっといたぞ。」と叱られたことも、今となっては懐かしい思い出です。雨が降ったら降ったで、天文台下の部室での学年を超えた仲間同士の、教えられることの多い語らいも楽しいものでした。

当時も太陽黒点の11年周期や蝶形図のことは知識としては知っていましたが、自分達の行った観測では期間が短く、また、卒業後に黒点観測がどうなるのか全く予想が付きませんでした。従って、単に太陽黒点をスケッチするだけで、データとして整理をするという点では無知・無自覚であり、全く不十分であったと深く反省しております。図らずも、後輩の方々が引き続き黒点観測を継続してくださり、その上、高10期・高11期・高12期の皆さんがデータを纏めて素晴らしい論文を完成して下さったことは、本当に感謝の念に絶えません。心から敬意を表したいと思います。色々のご苦労があったことと思いますが、こうして論文に纏められ、しかも、大変立派な賞を授与されたことを大いに賞賛し、また、誇りに思っています。

その頃(昭和22[1947]年～昭和24[1949]年頃)、正確な年月日の記憶が定かではないのですが、天体望遠鏡に一寸したトラブルがありました。いつも観測終了時には天体望遠鏡を天頂に向けて固定する習慣でしたが、或る日、ドームのスリット部分から雨水が漏れ落ちて天体望遠鏡にかかり、主鏡が曇ってしまったのです。田代先生のご指示を得て、神

田駿河台下にあった科学機器商に持ち込み、再研磨を依頼しました。事前に、下見をして再研磨可能との回答を得ていたのですが、実物を持ち込んだところ、「こんなに大きいのか？」と眼を丸くされたのを覚えています。再研磨完了後、ネジは正しい位置で主鏡を鏡筒に取り付けたのですが、太陽に向けても画像が現れない。どうしたことだと騒いでいたら、大野先輩から「光軸を合わせなければ駄目だ。」と叱られ、早速先輩の指導の下に、主鏡固定ネジを緩めて太陽像が観測板の中央に収まるように調整し固定し直しました。恥ずかしいことに、レンズの光軸という言葉始めて知り、主鏡を取り外す前に再固定用の位置をマークしておくべきであったと、後になって知りました。以降、観測終了時には天体望遠鏡を水平位置で固定するように変更されましたが、こういった体験は後に社会人となってから、物の見方、着手前の計画作成等々、生きてゆくためのタクティクスのひとつとして大変役に立ちました。

高4期時代でも、天文グループと気象グループが天文気象班として一所帯で活動しており、ミーティング等も共同で行っていましたが、百葉箱での気象データ記録作業と太陽黒点観測を含む天体観測とはそれぞれのグループが主に担当しており、観測自体の相互乗り入れはあまり行なっていなかったように記憶しております。少なくとも筆者自身は百葉箱での観測に参加したことはありましたが、継続的なデータ記録を行ったことはありません。気象グループは多士済々、人数も人材も揃っていて、観測作業でも遊びでよく纏まっていました。天文グループには、塩野君、松浦君、戸張君、野呂瀬君、小塩君（故人）等と筆者が属していました。

観測作業等は各グループで担当していたものの、空を眺めて観察するという共通の一つの所帯。このたびの「母校に天体望遠鏡を贈る会」の活動についても、主として気象グループの活動をなさっておられた方々から絶大なご尽力を頂いたことに深く感謝すると共に、「一つの所帯」という感を、益々、強くした次第です。

昭和 25 年の落穂拾い

高校 4 期 塩野 栄治

【1】 昭和 25 年 7 月 1 日、天文班の部内誌「天狼」が発刊された。部員が増えて天文台を軸として活動も充実してきたことから、情報連絡及び部員各員の天文に寄せる思い・考え等の発露の場という役割を持っていた。

その創刊号を西部訓弘氏(高3)が所持されており、この度そのコピーを送って下さった。55 年ぶりの対面で実に懐かしく拝見した。その体裁は、B5 版 8 頁、これは B4 版ワラ半紙に謄写版印刷して、二つ折りにし 4 枚綴ったものである。寄せられた稿は、それぞれ博識と意気込みが伺われ、レベルも高い。

折角なので、内容の表題と執筆者を紹介する。(目次順)

- ◆序(西部訓弘) ◆「天狼」の発行について(塩野栄治) ◆これこそ原子爆弾 太陽に於ける元素の転換(木下和久) ◆太陽黒点観測雑感(保坂一夫) ◆円周を有せざる円 ◆不思議な法則(西部訓弘) ◆月の山(中原卓士) ◆何時でもできるコロナ観測(戸田好昭) ◆天体随想(野呂瀬貞雄) ◆<諸記録> ◆七月の天象(編集部)
 - ◆「天狼」裏話(小塩丘平)
- <創刊号編集; 野呂瀬貞雄、山本 節、戸田好昭>

「天狼」は長続きしなかったが、謄写版印刷なので原紙切り・印刷などのかかる担当者の手間や負担が大変なもの、しかもその割にはうまく仕上がらない。長く続ける意味が“？”などの故か。

【2】 「天狼」の創刊号の記録欄に、「天文懇話会」の開催記録が記載されている。これは観測以外の活動の軸ともいえる大切な行事であった。部員の研究発表等が中心だったと思う。昭和 24 年 12 月～昭和 25 年 6 月(創刊号発行日まで)の 7 ヶ月間に 20 回開かれている。

次は、その一覧表である。(は回数、以下 開催日・発表の表題・発表者)

- [昭和 24 年 12 月] シリウス伴星(戸張襄志) 流星(野呂瀬貞雄)、太陽の熱源(保坂一夫) 太陽系の構造(大野伊左男)[昭和 25 年 1 月以降] 1/14 恒星の南中時刻の計算(田代先生) 1/30 変光星について(西部訓弘) 1/31 時計の修正値の求め方と歩度(田代先生) 2/4 地球(塩野栄治) 2/12 月の掩蔽について(田代先



生) 2/18 隕石について(松浦辰寿) 3/14 第10回記念、気象班招待十五の扉(司会 西部訓弘) 4/21 新入部員に対する講義(西部訓弘) 4/28 太陽の熱及び光(戸張襄志) 5/6 惑星(塩野栄治) 5/12 星座の知識(小塩丘平) 5/18 連絡会
5/27 惑星(塩野栄治) 星雲について(野呂瀬貞雄) 6/3 連星(木下和久)
6/13 銀河系(保坂一夫) <連絡会> 7/1(予定)

創刊号記録欄から

- ◆ 夜間観測; 深夜(泊まる,10名以内) 夜間(帰る) . . . どちらでも
- ◆ 購読雑誌; 「天文と気象」「天界」、毎月5円負担

【3】 「天文懇話会」が発足した昭和24年12月に、兄貴分の「理化学懇話会」が第50回をもって幕を閉じている。両者の かりは先輩に聞かないと分からないが、田代先生を始め、数名の超古参氏が橋渡しをされている。

「理化学懇話会」は、昭和18年9月10日に第1回が開かれ、62名が参加との記録が残っている。当時は物象部だったので、「物象懇話会」といった。

第1回は、(1)関東地方の気象について(5A 阿部正敏)(2)高射砲の話(田代先生)という内容。以降毎回2~4の講義が並び、内容も物質・物理・化学・電気・鉱石・航空機・機関車・天文気象 . . . と多彩、なかなか活気があったようである。終戦時も戦後もペースが変わることなく継続、昭和23年新制高校に切り替わって部も理化学部となり、同年6月19日の第40回から「理化学懇話会」と称している。翌年12月に第50回を迎えた。

後になる程、私達の見知ったお名前が増えてくるのは当然としても、出色は第28回・昭和21年11月に、中学1年生の辻井壮一氏が「乾球湿球の測定報告」と題して発表している。

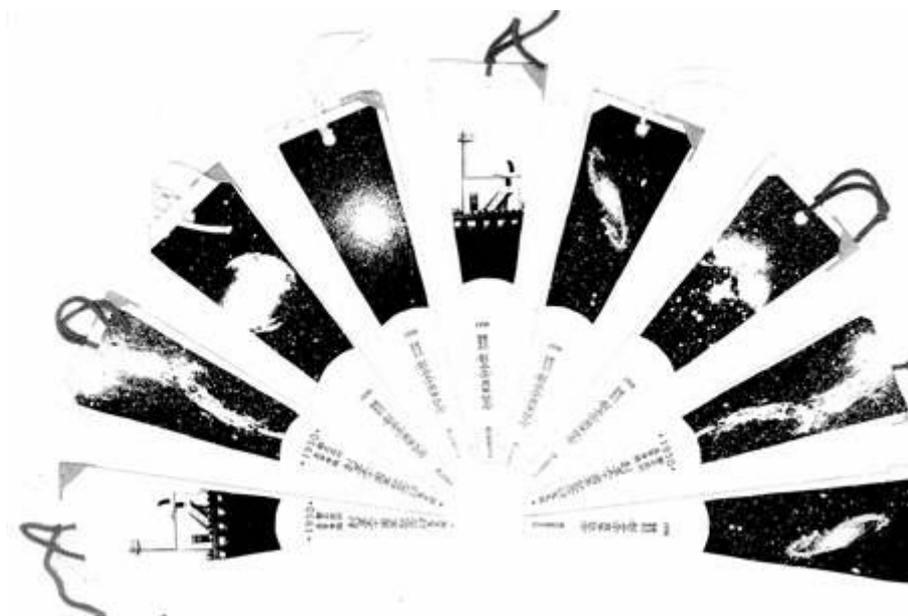
【4】 昭和25年に母校は創立50周年を迎えた。10月21日式典、22日~24日文化祭、どの部も何か記念になるものをと考えていたが、天文班は皆で知恵を絞った結果、天体写真の葉を作ることになった。

自分たちで文字を書き、教官室の暗室で写真のコピー、葉の形に文字と共にそれを焼き付け、色とりどりのリボンを結んだ。そして、5枚一組として展示場の一隅で実費販売したところ、独創性が受けたようでたちまち売り切れ、自分らの分が確保できなかった程だった。当時のスタッフの間で今も語り草となっている。

気象班は、記念スタンプを用意したが、やはり好評だった。



立川高校創立50周年記念 理化学部天文班記念しおり



『セント・エルモの火』を見た！

高校5期 田中 孝彦

今から半世紀も前の話しになる。その頃の立高は、1935年前後に設計、建築、完工された鉄筋コンクリート造の当時としては画期的な設備を持った、理科教育重点校に相応しい威容を誇り、広く都内、当時の府内から、貳中を目指す中学生を集め、6・3制に改革後は、立川高校とその名を変え、三多摩からの大学への進学校として、周辺の人気を集めていた。その校舎の外観は、東から西へ、西の角から南へとL字型の平面を持ち、東西の棟は3階建て、南北の棟は3階建てでありながら、4階建ての高さを持つ建物だった。この南北の棟には実は仕掛けがあり、往時の中学校としては東京でたったの2校しかない、理科教育に理想的な環境をもたらす、階段教室が造り込まれて居たために1階層分高くなっていた。東の端には、その屋上にドーム状の天蓋を持つ天文観測室が載り、北西の角には屋上を含めて気象観測場と観測機器室に供された6階の塔状の建物が載っていた。

さて、話を本筋に戻すと、この物語は6階の屋上部、気象観測場がその舞台である。記録に依れば、それは1953年9月27日となっている。

その日の夕方、日中の強い日差しを受けて気温が上がり、北の空には高く聳えた積雲が見られた。2階の天文気象部の部室には数人の部員が談笑をしていた。そこへ一人の部員が駆け込んだ。『乳房雲が見える！』好奇心の固まりの如き部員達数名（記憶によれば中村馨、能登正之、鹿島田由行、横山健治、それに筆者の田中）が、すかさず6階の屋上目指して駆け上った。頭上には、折からの西日を受けて聳え立つ積乱雲、その底面には鍾乳洞の天井で見られるような、丸いふくらみを数多く見せた乳房雲が鮮やかに見えた。そこにいた者達は、生き物の如く蠢きながら刻々と形を変えるその乳房雲に、暫し見とれていた。雲はより頭上にのし掛かり、辺りはその明るさを失っていった。風も無く湿度の高い空気が辺りを包む。

誰かが叫んだ。『お前の髪の毛は何だ！』各自が自分の髪の毛が天に向かって総毛立っていることに気が付く迄に、そんなに時間は掛からなかった。そして更に驚いたことに、「ジー」と言う音が辺り全体から発しているのではないか。更に誰かが叫んだ『指先から青い火が見える！』誰とも無く、指を広げながら手を差上げた。各々の指先は青白い炎のような光に包まれており、加えて、周囲を支配していた「ジー」という音源が、周りの至る所の表面から立ち上っている青白い炎にあることに気が付くことに余り時間が掛からなかった。特に風向計の高い部分、旗の掲揚棒、避雷針などの先端からは、際だった火炎状の光が発せられていた。これぞ、今まで書物でしか知ることが出来なかった《セント・エルモの火》だと確信した。長い時間ではなかった。見る間に空は更に暗さを増し、俄に風が吹き始めた。セント・エルモの火が空中放電現象の一つだという認識と重なったのはこの時だったのだろう。誰ともなく『逃げろ！』の声もろとも、階段に殺到し下の部屋へと逃げた。大粒の雨が降り始め、頭上が真っ白に光り、それと共に轟音が耳をつんざいたのは、皆が少なくとも階段を下り始めていた。この為か、幸い全員無傷で観測機器室に逃げ果せた。

ここで、百科事典などに現れるセント・エルモの火についての解説を一つ紹介して置く。講談社編：カラー版【日本語大辞典】(第8刷)に依れば、船乗りの守護聖人、聖エルモの名に由来するとのこと。昔、地中海の船乗りがマストや船首の先端などから青白い火が見える現象に名付けたもの。(Saint Elmo's fire) 雷雲のような電気を帯びた雲の影響で起こる。となっており、特に日本では海上若しくは低地よりも高山地帯、特に常設の観測地点となっていた富士山、乗鞍岳などでの僅かな観測事例が報告されている程度らしい。更に云えば、コロナ放電現象に属する自然現象であり、大きくは気体放電に属する現象で、電極間で電場の強さが不均一になった場合に起こる微弱な発光現象とされている。

我々のこの観測事例も当時の中央气象台に報告したが、最初は一笑に付され、「起きるわけがない」とまで云われた。が当時の気温、風向、風速その他の気象観測データを添えて、やっと納得してもらったとは聞いていたが、定かではない。

髪の毛の異変に気が付き、火炎状の光を見、セント・エルモの火と確信し、全員逃げ出すまでの時間は2分にも満たない短かい時間であったろうが、この経験は生涯忘れ得ぬ事であろう。それは又、日本では高山ですら至極まれに起こる現象に、低地で出会えた貴重な体験でもあろう。

悲しいお知らせです

高校5期の鈴木正昭氏が突然亡くなられた。

2004年9月の全期同窓会はおろか、年明け早々に行われた望遠鏡の寄贈式にも出席され、元気な姿はそれらの記念写真にも残されている。しかも、春になってからも、2度3度と彼からの元気な声を、電話を通じて聞いている。それがなんと4月に至り、本誌編纂の案内を各同窓の面々に送付を始めた処、程なく、奥様からのご連絡で、彼の訃報がもたらされた。突然の知らせに絶句した。電話で本誌への投稿が約束されていただけに、その遺稿すら届かず、残念でならない。ご冥福を祈る。

天文気象部との関わり

高校5期 田中 孝彦

私が立高に入学したのは1950年、折しも、学内は創立50周年の行事をその秋に控えて、部活動は活況がありそうで、我々新生に入部の勧誘を盛んに行っていた。当時、天文気象部は確か理化学部の内、2つの班として活動していた。

入学して間もないある日、校庭の一角にあった百葉箱で観測をしていた先輩、三田重男さんの姿が目についた。という私は地元、立川一中の出身で、2年生まで立高、当時の都立2高に間借りをさせていただき、凡そ1年半を既に立高の校門をくぐり、天文班を中心に理化学部の方々とは接触させて頂いていたし、夜間観測を含め、卒業生までも参加されていた理化学部による勉強会にまでも、出席させてもらっていた。結果、立高には階段教室があり、理科系、各階の準備室には実験用教材がこれでもかというほどに詰まっていたことを知る。そんな経験から高校に進学するなら第一希望にと頑張ってきた。つもり。さて、顔見知りの三田さんにいきなり入部の申し入れをし、観測終了後、部室に案内され、在室の皆さんに紹介をしていただいた。取り敢えず、気象班と天文班に手続きをしたが、ひよんな事から部活はおざなり。

三田さん、あるいは先輩・故小西孝道さんに連れられ、弘心館への日参がはじまった。そこには大きな“電蓄”が据えられ、脇には78回転用(当時は当たり前)のレコード、それもクラシックがずらりと入った棚があった。私にとっては新天地、よく通わせてもらった。弘心館がどこにあったかですと!。お答えしましょう。校庭の東側に当時の講堂があり、その南にテニスコートがあったでしょう。その南にこんもりとした大木の植え込み、更にはプールへと並んでいたでしょう。その植え込みの陰に修養道場として建てられた弘心館はあったのです。ここでクラシックに出会った経験が将来、私を秋葉原に通わせ、更にはハイファイに目覚めさせたことになる。

そうとも云っておれず、天文班では西部訓弘先輩、戸張襄志先輩、気象班では小西、三田両先輩、辻立郎さん、辻井壮一さん、久保喜久雄さんなど、多くの諸先輩の熱心且つ、丁寧な指導を受け、観測要員として独り立ちさせられた。更にはタイミング上、50周年を祝う文化祭に立ち会わされた私、先輩達の云われるがまま、がむしゃらに説明などのポスターを書き、それを貼る木枠作り、飾り付けなど、夜を日に継ぐ大忙し。どうにか部員全員の努力で初日の朝を迎えたときのうれしさ、昨日のように覚えている。

さて、いつの時期かは覚えていないが、1年生の時だった。当時の青春映画のスター、若尾文子の主演する映画のロケ地に我らの立高が選ばれ、ロケが始まった。若尾がテニスのユニホーム姿で撮影場所のテニスコートに立った。その眩しかったこと。お判りでしょう。だが次に閃いた。私が見物していた位置が良かった。彼女の後ろに我が天文台が視野にあった。すぐに部室経由で鍵を取り、そこに向かって走り始めた。ドームを開き、望遠鏡をテニスコートに向けた。レンズを通して若尾さんを見たかどうかまでは記憶にない。この先の話がある。この映画のタイトルは『乙女の性典』であり、立川の映画館でも上映され、もちろん一部の部員と見に行った。あのテニスコートのシーンで背景のドームが廻り、鏡筒がこちらに向くところで画面が別のシーンに変わった。やった!。

在校時代の気象現象で忘れられないのは1951年2月14日の東京地方の大雪だろう。立川でも35センチ近い大雪で、交通機関は全面停止、学校も休校を余儀なくされた。雪は前日の夕方から降り始め、且つ、その場で積もり始めた。その頃、気象通報を受信しながら天気図が書けるようになっていた私は天気図を書いて、その時の気圧配置に驚いた。関東地方に大雪を降らせる気圧配置のモデルそのものだったからだ。一晩中、徹夜に近い状態で、1時間毎の積雪と雪の結晶形を、家にあった顕微鏡で観察し、そのスケッチをした記憶があるがその記録は今は無い。翌朝、市内で学校から1.5km程の処に住まいする私は、いつもより早めに家を出て学校に行ったが校舎の鍵が開いておらず、守衛に開けてもらってどうにか定時の気象観測は出来た。更に、折から晴れてきたのでドームの雪を苦労して払いのけ、黒点観測も終わらせた。

2年になってからの部での生活は観測と下級生の指導もさることながら、遊びの部分が增大した。トランプ、麻雀、囲碁、将棋、研伝、云々。遊びは多岐に亘った。研伝とは誰が名付けたか知らないが、チームを幾つか作り、部室から6階の観測室までの往復を駅伝の要領によりリレーでタイムを競うという他愛のないもの。でもこれは足腰の鍛錬にはなった。かな。麻雀も単なる遊び、賭け事は厳格に排除されていた。でも相当に高じたのは否めない。それには忘れ得ないお二人の存在がある。先輩・故大内徳治さんと故仙波義信さんだ。前者は先輩手作りの牌を提供され、後者はその大きなご自宅を一泊二食付きの遊び場所として幾度も、家族総出の歓待付きで提供されたことだ。

この年、長年に亘る先輩達の努力の結果、生徒の自治が大幅に認められ、生徒の自治運営による「生徒会」が発足した。一方、部活動も生徒会の自治の一環として存在するものと認知され、活動計画、予算、活動報告も年間単位で生徒会の承認を受けることになった。既に存在した部も含めて、改めて部としての存続を論議され、結果、理化学部は物理部、化学部と天文気象部に分割することで承認された。

部室にはモンローの手回しの計算機があり、本来は観測データの集計計算用にと準備されたものだろう。これも我々の手では遊び道具となったが、操作方法による計算結果との因果関係を知ることは、10進法の世界をより深く知り得たと思っている。

遊びばかりでは無かった。河口湖に遠征しての湖水観測は画期的なものと自負し得る。これには能登正之さんの存在は大きかった。計画の立案、公的機関との機材の借用への交渉など、この年から数年に亘り、湖水の透明度、要求酸素濃度などの分布図を描こうという壮大な計画を、夏休みの現地合宿で、多くの部員の参加を得て、成し遂げた。

一方、天文班での活動も、安定した人材をバックに、黒点観測は日照がある限り実施され、且つ、精度も高く維持されて、そのデータは国際的な評価を受け、三鷹の東京天文台のバックアップ拠点にまで成り得たことは、皆と共に誇りとしたい。

3年生になった時、我々部員達は歓迎、但し、田代先生の心を痛める事象が起こった。それは女性部員の入部だった。けれど時代には逆らえないと先生も認識されており、先生は主だった部員を集めて、倫理的のご指導をくどいほどになされた。今にしてみれば先生のとられた行動も肯ける。これを機に女性部員が急増し、別にごく自然なものになった。

終わりに、部活動を通じて知り得た貴重な友人達の内、既にお亡くなりになっている方も少なくない、それらの方々に改めて、心からご冥福を祈らせて頂く。

天文気象部で想うこと

高校5期 池田 隆彦

私は敗戦5年目、学制改革がようやく一段落した1950年、立川高校に入学した。天文気象部に入った動機は1年に地学を選択したためと思う。

天文気象部に入ってみると、そこには私にとって新しい世界があった。つまり学級は同年齢の「水平」の集まりであるのに対し、天文気象部は3年間で上下5歳の幅がある「タテ」の社会である。毎日の気象観測や、ラジオの気象通報を基に天気図を作ることなど上級生の指導を受けたが、それ以上に上級生の語る人生論、音楽批評などに新鮮な刺激を受けた。国民学校時代に仕込まれた軍国主義に代わる価値観を求めて「自由と規律」、「学生に与う」などを読み、議論し、また軍歌に代わって「新世界」、「幻想交響曲」などクラシック音楽に初めて接し、心をふるわせたのである。

そのような動きを田代先生は肯定的に見ておられなかったようだが、高校時代に「気象」というテーマを軸として思想、精神を磨く機会を得たことは私にとって決して無益なことではなかったと思う。休日には多摩丘陵や奥多摩を皆で歩き、夏休みには富士山測候所を見学するなど楽しい思い出が多い。田代先生がよく長寿庵で「うどん」をご馳走してくださったこと、大学受験浪人中に先輩が親身になって指導、応援して下さったことなど、先輩、後輩から頂きたいいろいろな暖かい心くばりはその後の社会生活で大切な心構えとなっている。

私は文科系の道に進んだが、天文気象部で自然の偉大さを学んだことは、例えば絵画を鑑賞するとき、先ず描かれている「雲」を見、そこから作品の意図を感じ取ったり、夜、満天の星に囲まれると宇宙の大きさと人間の小ささをあらためて確認し、「生き方」を反省するきっかけともなっている。

次の詩も天文気象部時代に出会ったものである

おお見よ 白い雲はまた

長い旅路にあって

忘れられた美しい歌の

さすらいの悲しみと喜びを

かすかなメロディーのように

味わいつくしたものでなければ

青い空をかなたへと漂っていく

あの雲のころはわからない

(白い雲 ヘルマン・ヘッセ作 高橋健二訳)

雑文抄

高校5期 星野 清光

* 天体望遠鏡盗難事件に思う

田代実先生著『立川高校の天体望遠鏡物語』を読んで ー
ことがらゆえに、先生は、心のうちをそのまま文字にできないもどかしさを感じられたに違いない。

警察はなぜ徹底した捜査をしなかったか。学校は何をしたか。
事件をうやむやにした背景は何か。事実が知れると都合の悪いことがあったのか。そうでないなら、なぜ、田代先生が憤懣やるかたない思いをなせるような結果にしたか。

時効の事件をいまさら、とおっしゃる向きもあろう。しかし、このままでは、真実は永久に闇の中である。

当時在職された先生や在校生から、田代先生が心ならずもお書きになれなかった事をお聞かせいただけたら、と思う。

* 煙の風景

寒い季節の穏やかな夕暮れ、煙が地上数メートルの高さにたなびき、雲海のような中から家に二階や、高い木や、電柱などが突き出ている。

当時、家庭の熱源は薪炭である。炊飯は竈で薪を焚く。竈には煙突があって、煙を出す。それゆえの、今はむかしの現象である。

* 活断層から何メートル離れば安全ですか

こういう電話が地質調査業の会社にかかったそうだ。兵庫県南部地震のあと、問い合わせは不動産業者か住宅関係の業者らしい。

どう答えたかわからない。私ならなんと答えたろう。皆さんはどうなさいますか。
動かざること大地の如し、ではない。動くことは大地の如し、と言わなければならぬ。田代先生の言葉を思い出す。

* 0(零)がない

『歴史家は0を知らない。歴史の年代の計算は気を付け給えよ』予備校の数学の先生の言葉がなぜか身についている。

言われて初めて気が付いた。B.C.1年の翌年はA.D.1年、0年はない。温度計の目盛りや緯度・経度とは違う。建物は、1階の下は地下1階、0階はない。1950年頃まで、日本では年齢は数え歳だった。生まれると1歳、0歳ではない。誕生日に関係なく年が変わると1歳を加える。12月31日生まれは翌日2歳になった。

* わたくしごと

検査の結果はどこも悪くはないのに体調がすぐれない。現在では一般に知られているが、当時の医師にはわからなかったようだ。卒業が1年遅れた。

大学を退学した。強い外力があった。ここではこれだけ記す。復学可能だが他校への編入を選んだ。しかし、試験に受かる可能性はない。合法的に無試験で入学できるのは通信教育だが、当時は法文経学部だけ。ただ1枚、文学部地理学科これしかない。

入学しても学校の勉強は単位をとるだけ。石灰石鉱山の採掘・運鉱現場を見学したり、国鉄へ行って話を聞かせていただいたりして時間が過ぎた。お世話になった当時の国鉄のかたがたと年賀状のお付き合いが今も続く。立川高校の同期生に終始協力していただいた。ありがたく感謝している。

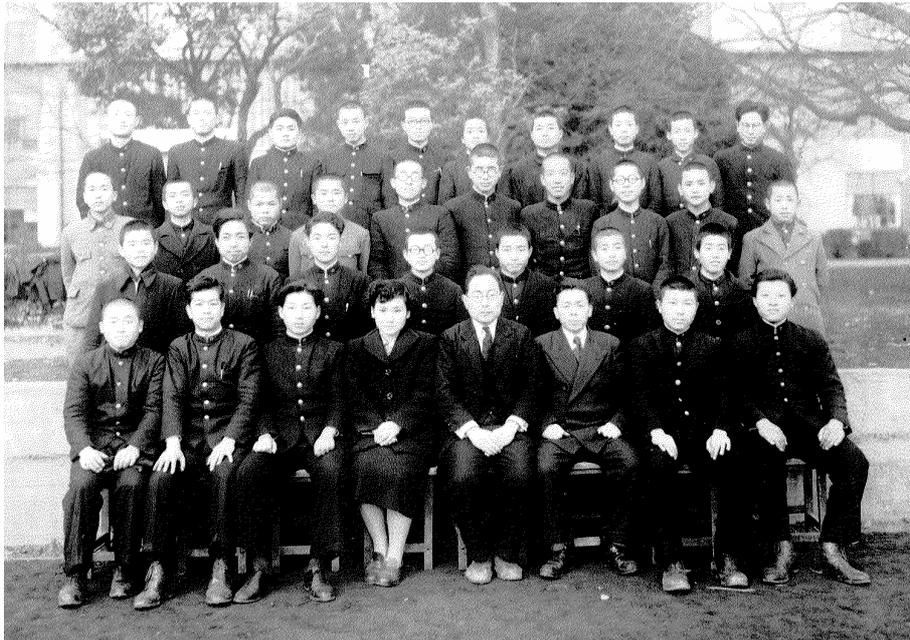
卒論は、追い詰められて10日間不眠不休の突貫作業でデッチあげた。「卒論を書くにあたってたいせつなことは何か」と問われ「体力です」答えたら先生は変な顔をされた。

小学校入学から大学卒業まで30年である。

職は、地質調査業が通算すると最も長い。転職してもなぜかまたここに帰ってしまう。

10歳代から、偉くなるより仕事ができる人でありたい、と思っていた。願いが叶い偉くなられなかった。仕事は不可ではなからうと自己採点するが、いかがなものか。

今は無職。収入は年金。功ならず、名を遂げず、位階勲等の類は無縁。肩書きはない。権威に服わず、時流に阿ず、自然の摂理に従順に生きたい。憎まれっこ世に憚って行きたい。



高校4期、5期、6期部員の面々(1951年)

田代 實先生の恩を顧みる

高校 6 期 田中 一行

昭和 23 年、立川市立一中に入学した私は、最初の 1 年間立川高校の正門をくぐって通学した。立川高校の校舎の東端、2 階が講堂だった一画が、「間借り」されて新制中学校の分校舎にあてられたからである。それは「本校」と呼ばれ、私はその本校に通った。急ごしらえの制度のもとで中学校に校舎はなく、三つの施設に分れての「間借り」だった。

思い出の天文台は、この建物の北側校舎の 3 階屋上にそびえており、そこで天体望遠鏡を覗くことが夢だった。現在の昭和記念公園は当時立川飛行場で、東西緊張の中、「探照灯」が一晩中空を照らしていた。それでも、立川高校から東へ 5 分の位置にあった我が家から、南天の星は肉眼でよく見えた。天の川も、オリオンやアンドロメダの大星雲も……。

しかし、天文気象部との縁は、やはり田代實先生の存在なしに考えることはできない。

昭和 22 (1947) 年、小学校の 6 年生だった夏休み、私は他校と合同で催された「理科教室」に、選ばれて出席することができた。田代先生は講師のお一人だったが、理科教室の計画そのものが、先生に発したものではなかつたらうか。

田代先生の講義は、一度だけではなかつたはずだが、記憶に残っているのは「日没の観測」をテーマとするものである。しかもそれは、私にとって一生の思い出となった。

自然探求の題材は、身近なところ、至るところに存在している。日々変化する日没の方位と時刻の観察はその一例である……といったお話から始まったと思う。方位の測定には磁石を使うとして、丹沢や奥多摩のデコボコした山稜に夕陽が沈む時刻をどのようにして計ったらよいか。これは問題である。先生の示唆は、太陽が富士山の高度に差し掛る瞬間をとらえる、というものだった。日没の定義でもあるこのアイデアは、私をとりこにした。

先生が授けて下さったヒントを手がかりに、磁石と分度器とから「怪しげな」観測器具を作り、秋分前後の一時期、「観測」を行った。観測の定点は、中央線下りの電車が多摩川の鉄橋に乗り移る、その手前の河岸段丘上である。

観測の結果を、ポスター用紙の何枚かにまとめて中学の文化祭に発表したところ、それを折から募集中の何かに提出すると告げられた。そしてその年度のうちに、賞を頂戴した。応募することを決められたのは物象の先生だったが、都心の授賞式に付き添って下さったのは学級担任の先生だった。往復した木造の電車の、ひどい混雑を覚えている。

立川高校在学時代の田代先生や天文気象部については、同期生が触れるはずなので、私はむしろ、卒業後の田代先生および天文気象部との関りについて述べたい。

昭和 36 (1961) 年に「天文気象月報」が 100 号を記録したとき、現役と卒業生の懇親会が、懐かしい物理実験室で催された。「月報」の創刊は、私が卒業する 1 年前のことで、田代先生の意を受けた部長、能登正之君の率先によるものだった。ガリ版切りと印刷製本は部員が分担し、私も卒業時までそれに携わった。

100 号記念の会は、卒業生が働き盛りだったためか、大々的な呼びかけがなかったためか、参加した卒業生は少数で、私が最年長だった。席上私は、月報の別冊記念号を出したいと提案した。田代先生は、一切を卒業生の手で行うことを条件に許して下さった。

当時大学院浪人で、多少の時間を工面できた私は、前後の世代と相談して募金を集め、B5、ガリ版刷りの「別冊記念号」刊行に漕ぎつけた。各世代から代表執筆者を選び、自然探求の情熱あふれる小冊子の編集を意図したつもりである。

天文気象部の「太陽黒点の観測」が日本学生科学賞に輝いたのは、その後のことである。月報「200号」の記念事業は実現しなかった。「月報」は、199号で絶えたからである。

そのころ、私は武蔵野市所在の大学に奉職しており、そこから先生のお宅へは直ぐだった。研究室には時に電話があり、ミリバールがヘクトパスカルになるとか、成田空港紛争の根因に、明治にさかのぼる入植の歴史があるとか、ラジオが逸早く報じたトピックを教えて下さった。成田問題については、お宅にお邪魔して万年筆の「レポート」を頂戴した。先生がラジオの報道をメモにとり、不自由な眼で私のために綴って下さったものである。

そのお宅が、昭和61年8月、焼失した。鈴木栄祐、辻井壮一、中川幸成の先輩三氏が仮宅にお見舞に上がられた。大内徳治さんから同氏経営の銀座「ダンヒル」に招集がかかり、確か6期生以上が集まってお見舞いの話がまとまった。私が事務局を預かり、醸金を呼びかけたところ、反響は大きかった。11月にお見舞金を持参し、大いに喜んで頂いたが、翌年4月の新築披露の食事会には、先の先輩三氏に加えて私も招いていただいた。

17期までの卒業生であれば記憶している人も多いと思う。50名を超える卒業生が田代先生を囲んだのは、その9月のある午後のこと、場所はお宅近くのコミュニティーセンターだった。奥様に伴われて足を運ばれた先生の眼は、出席者の姿を見届ける力を失っていたが、挨拶に立つ教え子の一人々々を先生は明らかに記憶しておられ、それが一同を感動させた。その夕刻、遙か立川駅北口の、今はなき「時代舎」で二次会が盛り上がったことも、記録しておくべきだろう。(田代先生宅の火災と、再建後の先生を囲む会に関しては、辻井壮一、内田誠両氏から提供された、笹原眞文氏保有の資料に助けられた。)

その後先生をお尋ねする機会が何回かあったが、それも奥様の健康が優れなくなっただけから絶えた。

長くなったが、一つだけ在学中の苦い思い出を付け加えたい。私の在学中、太陽面の活動は最低だった。とりわけ、私が3年生のときはそうだった。何週間もの間、黒点は現われなかった。目を凝らしてファインダーから投影される映像を覗く私には、期待と恐れとが交錯していた。一方には、太陽黒点第一号を見届けたいという願望があった。他方には、その第一号を見落したら、天文気象部に恥をかかせることになるという恐れがあった。

ある日、羊毛斑に隠れるようにして現われた小黒点を発見した(と思った)。もちろん、観測日誌にも記録した。しかし、東京天文台は当の黒点を観測していなかった。そして天文台には、世界のどこからも黒点発見の報は寄せられなかった。私は自信喪失した。自嘲気味にもなっていたであろう私を、周囲が慰めてくれた。4インチの屈折望遠鏡は、羊毛斑から黒点を識別するのが難しい機種なのだ……。

そのとき得た教訓は、重大な判断、決断を、一人で行ってはならないということだったはずである。協力者、助言者を求めよ、ということだったであろう。顧みてそれ以来50余年、私の人生においてこの教訓は生かされぬことが多かったと思う。

天文気象月報の発行

- 観測・活動を記録、保存するために -

高校6期 能登 正之

天文気象部との出会い

私と気象との最初の出会いは、昭和21年、小学校5年生のときです。そのころの私は空襲を避けて、福島県の田舎に縁故疎開をしていました。アルコール温度計一本と「僕らの気象観測」という小冊子を参考に、一日二回、朝6時と、学校から帰る午後3時を定時観測時刻として一人で気象観測をしていました。この観測は約1年ほど続けました。中学への進学のこともあって、青梅の実家に戻ったのは昭和23年の春です。中学ではラジオの漁業気象通報を聴いて天気図を描くことを覚えました。

私が立川高校に入学したのは昭和26年。この年に立川高等学校天文気象部が発足したということを知り、これも何かの縁だと思いました。どの部に入ろうかと考えたり、迷ったりした記憶はありません。気がついてみると、以前からずっとそこにいたかのように、天文気象部の部室に出入りしていました。

入部当初は、先輩方から、夜間の天体観測、昼の黒点観測、毎日の気象観測と一通りのことを教わりました。フォルトン型水銀気圧計による気圧の観測では、副尺を用いた精密な観測の仕方を指導されましたが、風が強いときには水銀柱が上下に揺れて、正確な気圧を測るのが大変だったことが印象に残っています。

気象観測班での定時観測は1日2回、1年365日、盆も正月も日曜祭日も休みなく、気象班に所属する部員が互いに協力しあって、交替で観測を続けました。毎日定時に行われる気象観測のほかに、夏休みなどを利用した24時間連続気象観測や、台風の接近から通過までの様子を詳しく観測する台風連続観測という特別観測も行われました。連続観測は気象の日変化を詳しく観察することがねらいでしたし、台風連続観測は台風の構造やメカニズムを詳しく観測することが目的でした。気象班員全員が、暑い日も寒い日も、雨の日も雪の日も、風の日も、労苦を厭わずに長年にわたって熱心に観測を続けられたのは、今考えると不思議に思えます。そうかといって、使命感といった気負いも一切ありませんでした。たださりげなく、当然のこととして観測を続けてきたと思います。それができたのは、一連の部活動を通して、仲間との連帯、友情、信頼、交流、そのほか通常の授業では得られない多くのことを学び、多くの価値を共有できることにみんなが喜びを感じていたからだと思います。また、「今」を観測し記録することに魅せられていたのかもしれない。

天文気象月報の刊行

立高の2年生のとき、私は天文気象部の部長に指名されました。3年生は受験勉強に忙しくなるので部長の役は2年生が担当するのが慣行だったようです。部長という職責上、この一年間、どのように部活動を進めていけばよいか、一応考えてみました。すぐにはアイ

デアが出てきませんでした。日々考えるうちに、それまで漠然と感じていたことが頭の中で次第に鮮明になっていきました。

それは、観測データの整理、保存についてです。当時、観測野帳はほとんど未整理のまま、部室の書棚に積み上げられ、放置されているだけでした。天文関係については、顧問の田代実先生がかつて東京天文台に勤務されたということもあって、太陽黒点観測の成果をとりまとめて東京天文台に報告されていたようです。このように、日頃から整理された太陽黒点観測の成果は、やがて太陽黒点緯度分布の長期変化に関する研究へと発展していくのですが、一方、気象観測の結果は観測野帳に記録されたままになっていて、このままでは将来、気象の調査研究に利用することも出来なくなると思われたのです。そうなってしまえば、何のためにみんなが一生懸命に気象観測を続けるのか全く意味がなくなってしまう。今のうちに早急にデータの整理を始めなければ、という気持ちが固まっていたのは、昭和27年も終わりの頃だったように思います。

天文気象月報発行の趣旨をみんなに説明し意見を聴いたところ、何の異論もなく賛同を得ることが出来ました。みんなも同じようなことを考えていたのでしょう。

まず、月刊にすることですが、データの整理が遅れると、改めてその整理を行うのは精神的にも労力的にも負担が増大します。そのため、観測結果や部活動の出来事を出来るだけ早くとりまとめ、翌月には月報として発行することを第一の方針にしました。月報の内容は、天文と気象の観測の成果を整理した観測表、観測成果を図表化したもの、また、その時々天文現象や気象に関するトピックスや解説、生徒の調査研究の結果、天文や気象の理論や技術に関すること、先生方による指導解説的記事なども掲載していくことにしました。しかし、内容を膨らましすぎると、製作の負担も大きくなり、計画を続けにくくなることに注意し、負担が課題にならないよう心がけることにしました。費用に関しても、部の予算は少ないので、資料の準備、原稿の作成、ガリ版切り、謄写印刷など、全ての作業をみんなで分担することにしました。OBや父兄など、関係企業や商店の広告掲載もお願いすることにしました。

こうして、天文気象月報第1号(昭和28年1月号)が刊行されたのは、昭和28年2月のことです。それから半世紀近く、天文気象月報が欠番なしに続いていれば、第630号ぐらいになっているはずですが、実際にはどうなっているのでしょうか。

平成17年7月某日、昔の天文気象月報を見せてもらいに立川高等学校天文気象部を訪れました。事前打ち合わせをしていなかったのも、顧問の先生や部員の皆さんにご迷惑をお掛けしたばかりでなく、詳しい状況も把握できませんでしたが、そのとき気になったことは、昔の月報の損傷が進んでいることでした。当時の資材は全てが粗悪で、紙は酸による腐食が進み、謄写印刷の文字はインクが滲んで見難くなっています。このままでは大切な月報はやがて確実に読めなくなってしまうでしょう。何とかしてデータの部分だけでもパソコンに収録しなおしたいと思いました。そのためには十分な計画と準備が必要です。月報全部では約630号分のデータです。気が遠くなりそうな作業量になります。可能か不可能か、どうすればこの問題をこなせるか、目下思案中というところです。

天文気象部の思い出

高校6期 中村 馨

* 天文気象部

私が入学したのは昭和26年だった。あこがれの立川高校は都下で唯一の鉄筋コンクリート造りの校舎だった。最初に入部したのは地歴部、しかし、その活動がどうもしっくりこない。そんなとき同クラスの市川康夫君の呼びかけがあり、理化学部に入部することにした。当時の理学部は天文班、気象班、物理班で構成されていて、部員は50名近く、すべて男子生徒だった。理化学部ではそれぞれの班が独自に活動していたが、部としてまとまった学習会も開かれていた。上級生が私たち下級生を指導してくれたもので、そのときの先輩の話が今でも頭の片隅に残っている。26年の生徒総会で物理班が部として分離独立をし、天文班と気象班とで天文気象部という名に変わった。そのとき私たちの同期の部員は21名で天文班員は5名のみだった。

* 太陽観測

入部してからすぐ、昼休みには天文台に行き、上級生達の黒点観測を見学するのが日課となった。何しろ望遠鏡を間近に見るのは初めてだったし、その操作の仕方も全く知らないのだから、上級生の作業を憧れの目で眺めていたものだ。天文班の班長の中原卓士さんからは特に丁寧に教えてもらった。ある日、中原さんから、「2年生はもうじき第一線から引くようになるから、君たちがやってみなさい」といわれ、恐る恐る望遠鏡を操作し、黒点観測をするようになった。これがきっかけで望遠鏡をいじり出し、部活動の楽しみが倍加していったものだ。当時は太陽活動が極小期に近づいているときで、太陽観測は比較的短時間で終了したものだ。そんなある日、戸田好昭先輩が日中に金星を入れてくれた。金星は地球から見ての単位面積での光量は月よりも大きいから、肉眼でも見えるはずという話は聞いていたが、実際に日中に観測するのは初めてだったから、その感激は大きかった。

* 気象観測

気象班では毎日午前8時と午後3時に定時観測をしていた。天文班の人たちは気象観測をする人は居なかったが、私は気象観測にも参加させてもらった。6階の屋上での雲の観測、6階での気圧、風向、風速、庭の百葉箱での気温や湿度、水の蒸発量、降水量などが主なもので、短時間で観測しなければならず、皆の協力が必要だった。それだけに班員同士の結束も強まったものだ。その外に、日照時間の観測もあり、毎日、日没後に用紙を取り替えなければならず、いつも誰かが遅くまで残っていた。

台風が来るぞ、という時は特別である。1時間毎に気温、湿度、気圧、風向、風速、雨量などを観測する。夜台風が近づくとといえば終夜観測だ。観測時間は短いからヒマな時間をどう過ごすかということになる。このあいた時間をトランプとかその他の遊びで仲間同士のつながりが強まったことも確かだった。

この台風観測で一つ大きく印象に残っていることがある。気象台では台風は東京に近づ

くと予報していたが、能登正之君が天気図だけでなく、ある時間内での気圧の変化量を天気図上に曲線で表し、台風進路として2つのコースが考えられると指摘したものだ。そうして実際に台風が進んだコースが気象台のいうコースとは別のもう一つのコースだったことだ。後に気象台長になった能登君、さすがだと思ったものだ。

* 小林敬一君

天文班に小林敬一という人物がいた。小柄でいつも明るい。天文観測にいつも積極的に参加し、ヒマな時には得意とするハーモニカで私たちを楽しませてくれていた。ある終夜観測のことである。天体観測でのあいた時間に、自分は満州から帰ってきたのだと話してくれた。終戦後、満州にソ連兵が侵攻して来たときの苦労話は大変につらいものだった。新京(?)だったと思うが、そこではピーナッツ売りをし、一家を支える役目もしたという。そのときの街の様子をいろいろ話をしていたとき、一緒にいた田中一行君が、そこはどこかと聞く。小林君が街の様子を詳しく述べたところ、自分もそこにいたというのだ。時期は少し違うが、天文班にいた二人が遠い満州の同じ場所にいたという偶然性に唖然としたものだ。そんな苦労をした様子は学校では少しも見せなかった彼には敬服したものだ。

* 月の写真

立高の古い4インチ望遠鏡にはいろいろな付属品があった。その中に天体写真を撮るものもあった。望遠鏡に取り付け、ガラス乾板上に写真を撮るといったものだ。中原先輩が、この装置で月の写真を撮り、文化祭のときに展示しようと提案した。私には無理だったが、先輩がうまく調節して撮影には成功したと見えた。ガラス乾板を写真屋に持って行き、現像してもらった。だが、中原先輩ががっかりした顔をしている。訳を聞くと写真屋は乾板を傷つけてしまったという。それを墨で修正し、黒く塗りつぶしてしまったのだ。月にはいろいろの模様?があり、それを写したはずが墨で黒くなってしまったのではただの白い円板になってしまう。文化祭の出品物はこうして1つつぶれてしまった。

* 流星観測

文化祭のときの展示の1つとして流星観測を出そうと田中一行君が提案した。田代先生の許可をもらい、一週間立高の屋上での観測をすることにした。当時はゼロックスなんていう気のきいたものはない。星図を写しとってガリ版印刷をする。これを手に手分けをして観察する区分をした。流星が多いのは明け方に近いときなので、夜半すぎから屋上に陣どった。初日は成果ゼロ。次の日はと期待したが、2時、3時となるにつれ空に雲がかかってくる。日中は晴天なのに明け方になると雲が増す。とうとう一週間成果ゼロに終わってしまった。こうして文化祭に出品しようとしたものがまた1つつぶれてしまった。

* 部室の鍵を取り上げられる

天文気象部の部室は校舎西側角に近い二階にあった。この部室では観測したものの整理をしたりする場所であり、観測するまでの待機場所であった。しかしまた、そこは若い男子生徒が大勢屯している場所だから、遊び場所になってしまう。水泳後の褌を窓から干す

者もいたり、騒ぎすぎたりで、しょっちゅう田代先生からお叱りを受ける。とうとう度が過ぎてしまい、部室の鍵を取り上げられてしまった。こうなると自由に出入りが出来ず、部活動に大変に支障が生じてしまった。皆を代表して先生に叱られ、部室に入る必要があるときは先生のところにいちいち鍵をかしてもらいに行かねばならないなど、ずいぶんいやな思いをしたものだ。もう騒ぎすぎたりしないと先生と約束して部屋の使用を許してもらったときはほっとしたものだ。

まだまだいろいろな思い出がありますが、このくらいにしておこう。



湖沼観測（河口湖） 1951年夏



台風観測と気象班

高校6期 大塚 昶之助

私は、昭和26年に立川高校に入学するや、天文気象部気象班に所属した。その理由は、近所に住み、子供の頃からともに遊んだ、故大内徳二先輩(高4)が所属されていたことと校舎の6階屋上に登ることができたからであった。何しろその頃、この塔屋より高い建物は立川になかったので、ここからの眺めはすばらしかった。

立川米軍基地は丸見えで、丹沢、富士山、奥多摩、奥武蔵などを、晴れた日には定時観測(屋上からは雲程の観測)の合間に飽かずに眺めていた。

私たちの3年生は、高校4期生で旧制中学の最後の人達だったから、6年間も一緒であるとともに下級生もいない時期もあったので、私たち下級生の面倒を良く見てくれた。

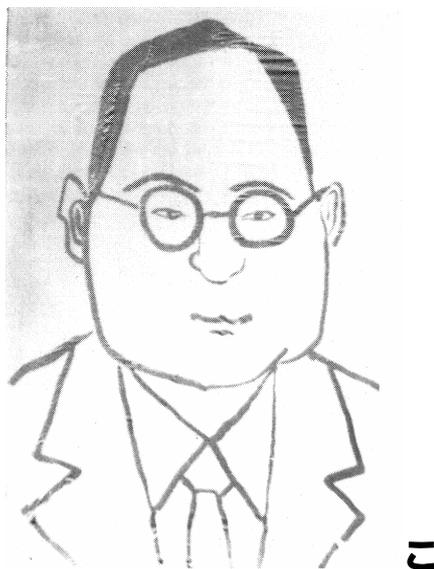
ラジオの気象情報を聞きながら、天気図を描く訓練をさせられた。その代わりに、遊びごととも盛んで、昼休みになると部室でトランプゲーム(主にナポレオン)に打ち興じた。

蓼沼先輩(高4)はグランドスラムのコールをするので、必ず負けてシッペをやられるので、皆、副官になるのを嫌がった。

夏休みになると、たいいてい台風が接近するので、泊り込みの観測となり、下級生は皆、堂々と校内に泊まれるのを楽しみにしていた。部室に毛布を強いてごろ寝をしたが、観測では気圧計がみるみる下がるのには驚いた。百葉箱は、校舎の北側にあって、風雨の中、一生懸命記録に残した。

その頃、気象の基礎知識もなかったが、気象班に入ったおかげで、山歩きをするとき、高層気象がどうなるかが、ある程度わかるので大変助かったことがあった。

しかし、私たちの同期からも、気象庁の専門家になった人もいるのだから、立高の天文気象部もたいしたものだったといえると思う。



天から降った男の人生の節目

高校7期 府川 宗雄

1. 自称「天から降った男」

はじめに、なぜ私が「天から降った男」なのか説明しておく必要があるかと思えます。

入学時の私に「天文気象部」への入部を決意させたものは、屋上の東端にでんと控えたドームであったことはいうまでもありません。私自身天体観測にあこがれて入部したわけです。

ところが、在学中の3年間、「天気には休みはない」とばかり休日はもとより、休業期間もほとんど休むことなく登校、というより部室に通い、気象観測に参加しつづけました。その後進んだ大学では地質学を学び、地質屋であるとともに都立高校の地学教師を生業としてきた、という経歴の持ち主だからです。

このような経歴をもつに至った節目には、在校(在部?)中に接した先輩方はもとより、田代先生との出会いが大きかったと思えます。

2. 天から降った第一の節目(宇宙空間から地球大気圏へ)

屋上のドーム付天文台にはじめて出会ったのは、入校時前のオリエンテーションで招集されたときでした。

私たち7期生は、2・26事件後の1年間に誕生し、東京が府から都に変わった年に小学校(当時は国民学校)に入学、少年団に入団させられた3年生の年に終戦を迎え、進学適性検査(いわゆる進適)が廃止された年に高校を卒業といった具合に、偶然とはいえ、世の中の節目節目に学校を通過してきた学年だったように思われます。

高校を受験した年も、8科目総合といって、中学校で学ぶ8教科目が、各時間ともランダムに配置された4時間(もちろん1日限り)の受験(採点やその後の選考は高校側に委ねられたらしい)で合否が決まった学年だったため、入校時前教育のための招集が、進学校に赴いた最初の機会だったわけです。

それに加えて、私自身の人生における幾つかの節目が立高三年間の天文気象部生活の中にあっただといえるのです。

同じ中学から共に立高に進み、卒業までの3年間を共に気象班で過ごした宿谷繁三君に、ドームを指さしながら「あれだね。あの部に入ろう」と誘い、彼も同意した(中学時代も、同じ理科クラブに所属していました)ので、入学直後(入校時教育・クラブ紹介の翌日あたりだったでしょうか?)の「入部希望者集まれ」の呼びかけに応じ、二階西角に張り出した部室を訪ね、迷わず入部の登録をしました。

その翌日か翌々日の午後、たまたまのブランクに、同じ理科+芸術選択のため同クラスになった宿谷君と構内散策をしていたときのこと、4階の音楽室前で、14時の気象観測のため測風塔の屋上に向かって駆け上がってきた田中孝彦さん(5期生、当時3年生)とばったり会ってしまいました。この出会いがその後の3年間を決める転機になるうとは、まだこのときは気づいていませんでした。

「おまえたち確か天気部に入ったんだよな。どこに行くつもりだったんだ?」「(当てもなかったんですが)校内を歩いてみてたんです」「これから観測だ。オレの後に付いてこい!」屋上に駆け上っていく田中さんお後を反射的に追って、私たちも駆け上りました。

屋上に着いた田中さんは、野帳を広げ、何かを書き込みながら「おまえたちどういうつもりでこの部に入ったんだ?」と聴かれました。私は屋上の対面を指さして「あの天文台で観測ができるのを楽しみに入りました」と答えました。ところが田中さんは、「あのなア、いつでも学校に泊まり込めるなんて思ったら大間違いだゾ。いまあそこで観測しているのはなんだと思う? 昼間観測できることと云ったら、せいぜいお天道様のほくろを数えることぐらいだ。そこへいくと、気象の方は時々刻々千変万化、自然界広しといえどもこんなおもしろい現象はないぞ。オレがこれから手ほどきしてやるから、毎朝8時15分前にはここへ来い。第一、ここに上ってこられるのも俺たち気象班のメンバーにだけ許されていることだから。」との仰せ。私自身もちろん当時はまだ夜道も暗かった西多摩の寒村で育ったであったので、夜空の星を眺めたり、理科の先生が宿直の晩に学校に集まって、購入されたばかりの6cmの手動経緯台付屈折鏡を覗かせてもらったりして、宇宙への夢をふくらませていましたが、その一方で、物心ついた小学校5・6年生頃から、藤原咲平氏が子ども向けに書かれた本に刺激されて、空に現れる雲の種類を見分けたり、我が家から遙か西方に望まれる大嶽を目印にしながら天気予報を試してみたりと、気象に対する関心もあったので、田中さんの誘いはある意味渡りに船だったのかもしれませんが、それに、何よりも最後の一言に、重力にも匹敵するインパクトを感じました。

このとき、それまで宇宙空間をさまよっていた私の心が、地球の大気圏まで引き込まれたといえるでしょう。

3. 第二の節目(気圏から岩圏へ)

2学年もおわりに近づいたある日の午後、測風塔から部室に戻る階段の途中だったように記憶しているのですが、観測に同行して下さった星野清光さん(5期生、当時既に卒業されていた)から、「おまえこのまま気象をつづけるつもりか?」と聴かれました。進路を確定しなければならないこの時期として当然の問いかけではあったのですが、咄嗟のことで、答えを探していると、「気象をつづけるんなら東大の地球物理(学科)だな」といわれました。「東大か?何年浪人しなきゃならないのだろうか?」と、(いずれもここに記しているほど長い時間でなはなかったのですが)考えをめぐらせている私に、さらに「地学なら何でもいいというのなら、(東京)教育大の地質鉱物(学科)もあるんだよな」とつぶやくように言葉をつがれました。

この「最後の一言が私の進路を決定づけました。教育大か?(何とかなるかもしれない)考えてみます。」2浪を余儀なくされたものの(じつは、卒業まで仲良し部員であった7期生男子5名は、この間も行動を共にしてしまいました。ただ、この中で宮山利雄・島津恭夫の両君との音信が、いつの間にか途絶えてしまっていることが残念で仕方がないのですが...)三度目の正直で首尾よく念願の学部学科に入学することができた私は、やっと地に足がついたような気がします。

4. 5万分の1地形図との出会い

こうして地質屋としての道を歩み始めた私ですが、その伏線となる活動の期間が天文気象部在部3年間と、それにつづく浪人生活2年間にあったことも忘れてならないことだと思えます。

「地学」という科目や「地学部」という部の存在を知りましたし、地学部員とのつきあい(天気部の先輩たちの中には両部に籍をおく方々も複数名おられました)の中で、半日もあれば学校からゆっくり往復できる平山(現在日野市・定年直前の4年間この近くの南平高校に勤務しました)まで化石採集につき合ったりもしていましたし、毎夏休みの恒例行事であった「河口湖の透明度観測」(たしか1年生の時だったと思いますが、水色から水温・水質・溶存酸素量等の鉛直分布観測など、かなり本格的な湖沼調査も実施されました)なども、その後のフィールド・ワークに欠かせない素養を身につけることができた機会が多くもてたように思います。

そのような素養の1つとして、地理調査所(当時、現国土地理院)発行の5万分の1地形図との出会いほどインパクトの大きなものはなかったように思います。いわゆる「参謀本部」時代の地形図を目にしたのは小学校5・6年生の頃だったように思われるのですが、図面の広い空白域ばかりが目につく「変な地図」の印象しか残っておらず、とても身近なものには感じられませんでした。しかし、立川から離れた場所へ赴くときのみならず、「ちょっと向かいの多摩丘陵を歩いてこようか」というときまで、文字通り肌身離さず持ち歩く先輩方に見習い、さらに地域に応じた地形図の購入方法(書店を使い分けること)まで伝授されたおかげで、その後の巡検・調査活動はいうにおよばず、海外旅行に至るまで地図なしには安心できない人間になってしまいました。

いまでは国土地理院の地形図も種類が増えたうえ、それらの基礎となる地方の実測図や航空写真等の資料も充実してきたおかげで、地域や目的、さらには調査の精度などに応じて自由に使い分け・組み合わせができるようになったばかりか、携帯電話のGPS対応などにより、かなり正確な位置情報まで得られる世の中になってしまいました。しかし、私にとっては、高校入学後まもなくして出会った「世の中にこんなすばらしい地図があったんだ!」という強烈なインパクトが、その後40年におよぶ教員生活の中でも、「必ず教材として地形図を使う」原点になっていることはいうまでもありません。

余談ですが、つい最近(8/28)京都で開かれた日本地質学会第112年回関連行事として、「巨椋池干拓地～南山城の天井川」をめぐる巡検が行われ、地元の教員の方に案内していただきました。「同地域の5万地形図を持っていたはずだ」と本棚から引っ張り出してみたところ、なんと昭和26年修正の、タイトルが右横書きの図幅でした。

どうも修学旅行(29年3月)に携行したものらしく、あちこち赤鉛筆の書き込みがありましたが、この地形図は、28年9月の13号台風による宇治川の決壊で干拓地が冠水状態のままになっていた当時の大変貴重なものでした。

さらに、浪人中に地学部・天文気象部・定時制の理系クラブ等のOB・OGなどにより設立された「多摩地学会」に参加したことも、浪人中に何度か参加した巡検、大学進学後に加わった事務局の活動、そして「関東ローム団研」の一翼を担って会が参加していた「東京むかしむかし団研」など、すべてがその後の私の活動にとって得難い糧となりました。

なかでも、立高天気部時代に、「天文気象月報」(略称“月報”)の編集・発行を通じて培われ、多摩地学会の活動にも引き継がれたた編集・筆耕・印刷等のノウハウは、鉄筆がロトリング シャープペンシル キーボードと持ち換わりながら現在に至るまでの教員生活・学会活動を通じ、多くの活動場面で私を支えてくれました。

5 . 地学教師への道

地学専任の教師として都立町田高校に赴任したのは、1961(昭和 36)年4月のことです。この時期は、前年日本の全国民を巻き込んで闘われた「60 年安保闘争」後の傷跡を抱えながらも、池田首相(当時)が標榜した「所得倍増」に象徴される「高度経済成長」期に向かって国民の夢がふくらみ始めた時期にも当たっていたのです。

しかし、(これがまた1つの大きな節目になっているわけですが)前(1960)年大卒の先輩たちが多数国家公務員上級試験に合格し、1期後輩たちもそこそこ合格しているのに反し、この年の合格者は目立って少なく、(この理由もつい最近知り合った国家公務員のOBから聴かされ納得はしたのですが、「1期前後の連中が非常に優秀で、我々同期生は劣等生なんだろうかと真剣に思い悩んだ時期もありました。いずれにせよ、高度成長期対応のための、国としての調整時期に当たっていただけのことだったのです。)首都圏の爆発的な人口増直前期に当たっていたこの時期としては、まだ小・中学校の増設が漸く緒についたばかりで、やがて訪れる高校増設も、計画はあったにせよまだ実施には当たれない段階にあったとすれば当然だったのでしょうか、私自身も都の教員採用試験に合格しながら、卒業直後もまだ採用のめどすら立っていない状態でした。

したがって、年度が替わった4月はじめになってもまだ大学の先輩方やら、あらゆる伝手を頼りに日々就職活動をつづけながら、一方で目前に迫った地質学会のセッションにおける個人講演(内容は卒業論文の成果の発表で、指導教官のアドバイスを受けながら、すべて手書き)の準備を進めていました。

小・中学校の始業式・入学式も行われた4月5日の帰宅時、当時小学校の教員をしていた母経由で、都のさる指導主事(故人。後日地学教育学会や都の地学教育研究会でも、とくに小・中学校教育面で力を持っていた方だということを知ったのですが)「大事な話があるので、できる限り早く教育庁に来るように」という連絡を受けました。翌朝、とにかく「(学会の)講演取り消し」の連絡だけ(といっても、自宅に電話の引かれている家自体が少なく、公衆電話さえかけにくかった当時のことで、幸い私はまだ母親と共に村の分教場の一部が改装された教員住宅に住んでいたため、緊急時には職員室の電話を、ノートに通話記録の記して使わせてもらうことができました)入れ、当時有楽町にあった都庁内の木造別館2階の指導部室(すでにこのころ、音楽の大和先生や美術の長谷川先生もこの部屋におられました)に朝一で飛び込み、当の指導主事にお会いしたところ、「今度開校になる府中高校で、地学の教員を探しているので、すぐ行ってみなさい」と最寄り駅からの案内図を手渡されました。

取るものも取りあえず、地下鉄(丸ノ内線) - 京王線(府中) - バスを乗り継いで府中高校にたどり着きましたが、私立の学校が都に買収され、開校準備が急ピッチで進められていた当の新設校では、殺風景な鉄筋校舎が1棟建設中であるだけで、松林が切り開かれた校

地のあちこちに建ち残った木造家屋の1室に職員室が置かれ、上がりがまちに寝ていた老犬が物憂げに出迎えてくれるというのどかな状態でした。

私立時代からの先生お二人(このとき都の臨時採用試験に合格され、そのまま残ることができたのはこのお二人だけだった由)がにこやかに出迎えられ、新任の成田校長に取り次いで下さいました。校長曰く「ご足労かけて申し訳ないが、もううちではおいでいただく地学の先生が決まってしまうました。その先生は町田高校から見えるのだが、先方ではまだ後任が決まっていないはずなので、すぐいってご覧下さい。私から先方に電話しておくから。」ということで、その足で(どこを経由したのかいまだに思い出せないのですが)とにかく町田高校までたどり着きました。

ところが、こちらは校長が不在で、親切に対応して下さった事務室の方(採用されてから後、ずいぶんあちこちへスキーのお供をすることになるのですが)から、「校長が自宅で待っているの」と、校長宅(目蒲線洗足)までのかなり詳細な案内を手渡され、「(本校への任用が決まり)来ていただけるといいですね」と送り出されました。小田急線(卒論のフィールドへの往復にしばしば利用していながら、まさかその沿線に落ち着き先が決まるうなどは、思っても見ませんでした)山手線 目蒲線と乗り継いで都内にUターンし、田村校長(当時)の自宅を訪ね当て、面会しました。和服姿で玄関に現れた校長は、「私は“茗溪”しか採りません。あなたが教育大卒だということでここまで来ていただきました。ただし、うちを希望している方はあなただけではありません。考えさせていただき、追って結果をご連絡します。」ということで、とにかく「よろしく願います」とあまたを下げ、校長宅を辞しました。

既に夕刻も迫る中、「採ってもらえるだろうか？」という不安を抱えながらも家路につきましたが、校長宅から自宅まで、目蒲線 山手線 中央線 青梅線と乗り継ぎ、最後は自転車ですらなくとも3時間は要したでしょうか？

自宅につくとほとんど同時に分校職員室の電話がけたたましくなっていました。急いで暗い家の中に上がり、預かっていた職員室の鍵をもって入り口に走り、電話機に飛びつきました。携帯電話が主流となっているいまでは考えられないことですが、当時は「電話で知らせるのは“緊急性のあること”か“重大な”連絡」だったわけで、私にも「もしや!？」の思いがあつての行動だったように思われます。とにかく、電話のベルは私が受話器を取りあげるまで鳴り続けていてくれました。

電話の主は、紛れもなく先ほど面会を済ませたばかりの田村校長の声で、「あなたにうち(の学校)へ来ていただきたい。ついては、手続きや事前にお話ししておきたいこともあるので、明日午前9時までにご来校願いたい」ということでした。このときは「やった!!」という思いしかありませんでした。

おそらく何通かの履歴書を携えて歩いており、そのうちの1通を田村校長にも手渡して帰ったのだらうと思いますが、ほんの数分玄関先で顔を合わせただけで「何で私が採用されることになったのだらう? 他の候補者はどんな人物だったのだらう?」という疑問が(程なくその疑問は解消されることになるのですが)この間ずっと脳裏を離れませんでした。

後者の方は、私も顔見知りであった地理学科の修士を終えたばかりの女性で、当時既に

結婚を目前に控えており、その後旦那と共にドイツに渡ることも視野におかれていたとか。それよりも「私には“地学”しかできません」といいきった由。一方私は「地学だけでは持ち時間が足りません。他の科目ももっていただかなければなりません、よろしいですか？」と念を押された際に、物理でも化学でも何でも教えられます」と告げていたことが校長の心を動かしたことの1つであったようです。事実総合科目の色彩をもつ地学の教師には「理科万能」の人が多く、私自身高校在学中に社会科1科目を捨て、理科4科目すべてを選択履修しました。中山先生も、「こういう選択もあるんだよね」とおっしゃいました。お陰で最終学年は男女組に入れていただけ、楽しい高校生活が送れたように思います。

最後に、これが一番大切なことだと思いますが、上記疑問の前者については、翌日校長自身から証されました。

「昨日、あなたが帰られた後、あなたが卒業された高校に電話しました。日直の先生がお出になったのですが、あなたのことよく知っておられる方で、『府川君は、在学中の3年間部活動を通じてずっと接してきましたが、大変信頼の置ける人物です。そのことは私が保証します。』とおっしゃいました。それで、私はあなたに来ていただくことに決めました。」ということだったのです。何を隠そう、その日直の先生こそ田代先生だったのです。このことは、私の結婚披露の席上で、先生ご自身からもご披露いただいたのですが、3年間先生からしかられつづけたことが報われたのだということを実感したできごとです。先生のご冥福を改めてお祈りしつつ、この場をお借りしてご披露申し上げる次第です。

それにしても、都立高校の教師としてスタートをきったこの日は、新学期の始業式前日という慌ただしいものでした。

立川高校天文気象部卒業

高校 8 期 安藤 恵尉

昭和 28 年、立川高校に入学。この年は同じ中学からかなり沢山のひとが立川高校に入学した。そのうちのひとりである高村扶桑君から天文気象部に入ろうと、かなり強く誘われ、どんなところかよく分からないまま入ってしまったのが、正直言って「運の尽き」であった。入部以来 3 年間、授業以外は部室か天文台、あるいは観測中という生活が続くことになってしまった。同期の入部者は男子 9 名、女子 6 名の 15 名。女子部員の数がこの年急に増えて、多分部の雰囲気が変わったのではないかと考えている。外に目を向けると、戦争が終って 8 年とはいえ、朝鮮戦争が終った年であり、吉田茂首相による「バカヤロー解散」があったり、翌年にはビキニ環礁で第五福竜丸の被爆と言う惨事、森永ミルク中毒事件、かと思うと力道山の「空手チョップ」でプロレスブームが始まる、等等、世の中は激しく動いていた。そんな時代であったが、日本人にとっては立高入学の数年前には湯川秀樹博士が中間子理論で日本人初のノーベル賞を受賞するという明るいニュースを聞いた時代であった。そんな時代の、高校生活 3 年間を天文気象部という、ある意味では極めて地味な部活動を始めてしまったわけであるが、多分自分の性格との相性がよかったのと、居心地がすこぶるよかったのだろう、3 年間しっかり活動させてもらうことになってしまった。世情とは関係なく、いい高校生活が送れたのは天文気象部のお陰であつたのは間違いない。

入部のころは、先輩として 3 年生に鹿島田さんとか田中さん、能登さんなどがおられ、3 年生が先頭に立って活動されていたような気がしている。

私はどういうわけか主として気象を担当することになり、一日 2 回の定時観測と観測データの整理は日曜、祭日、年末年始の区別なく、飽きもせずよく続いたものと、我ながら感心している。元日に塀を乗り越えて校内に入った記憶がありますが、どうしてあんなことをしたのか、まったく思いだせない。台風襲来時には泊り込んでの特別観測も、多分何かやっているという気持ちと、ある時期からは、多分使命感みたいなものを知らぬ間に感じていたのだろうと思う。仲間との付き合いの楽しさもあったのかもかもしれない

気象担当とはいえ、天文台にも大分通った気がする。天文担当の毎日の業務は、ご存知、太陽黒点の観測、スケッチであったが、気象担当の私自身は黒点スケッチの記憶はなく、天文台を溜まり場の一つにしていたのかもしれない。冬の寒い時は電球に毛布を被せて炬燵がわりにしたり、考えて見ると危ないことをしていたものである。しかし、天文現象の観測は天文担当と一緒にやってやった。しかし、考えてみると 50 年も前のこと、細かいことになると、ほとんど何もおぼえていない。観測に不可避の目的の現象の発生時刻の計時には、個人差の事前の測定が必要なことなどを、この天文事象の観測との関係で先輩から教えられたりもした記憶がある。

ただ、生徒会に属する部の部長は生徒会の役員として、校長名の任命状により任命されていたことが、古い資料のなかから、当時の柴孝平校長名で出された任命状から判明した。生徒会役員としての部長人事は学期毎にあったようだ。

天文気象部に3年間いた者のひとりとしては、顧問であった田代先生についてふれな
いわけには行かない。先生は何回か写真をとってくれている。当時先生は二眼レフカメラ
をご愛用であったが、かなりの近眼で度の強い眼鏡をかけておられ、今度はよく撮れたか
ら、とって頂いた写真もかなりピントの甘い写真だったのを覚えている。

部室には誰がいつ持ち込んだものか私は知らないのであるが、木製の麻雀牌があり、
放課後あるいは休日等に部室の扉を椅子等でブロックして、部室内で遊んだ記憶がある。
これを田代先生に見つかりと牌を取り上げられるのであるが、当時、物理の教室に実験助手
として菱山さんという方がおられ、先生の居られないときに物理の教官室に行っては返し
てもらったりしていた。先生もおそらくご存知だったのではないかと思うのですが、後で
そのことを咎められた記憶はない。おそらく、先生と部員の間には無言の信頼関係があっ
たのだろうと思っている。

2年生が、部活動の中心になるわけで、3年生になると文化祭の準備活動などからは
引退してしまうのが普通であるが、われわれは途中で我慢できなくなって、1,2年生が
夜遅くまでやっている準備作業につき手伝ってしまったりしたものである。卒業するまで、
部との縁をきることができなかつたわけである。

そんなわけで、卒業してからは、進学者も東京を離れる者がいなかったのも、新宿に
集まったり、男子だけで、奥多摩の山を歩いたり、溪流で遊んだりして同期の仲間との交
流は続いた。社会人になり、任地が遠い者が出てきて交流が長い間途切れていたが、年賀
状だけでつながっていた友人関係をたよりに呼びかける仲間がいて、7,8年前の立高の
文化祭を契機に、懇親の会を持ち、交流が再開され、集まると直ぐ高校時代に戻った気分
で楽しい時をもてるこになり喜んでいる。

天気部の思い出

高校8期 松繁 克道

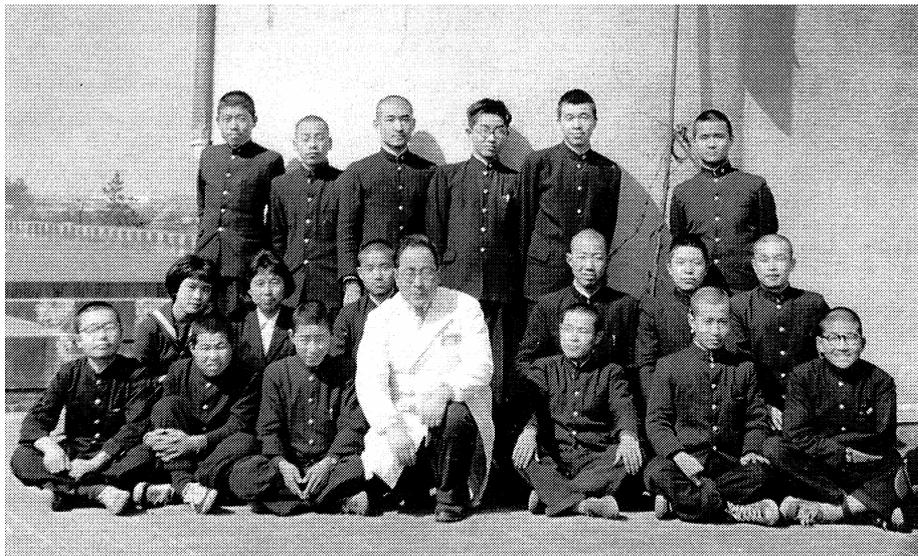
小学生の頃、親から危ないから、雨漏りするから止めなさいと言われながら、屋根に上って星を観る少年でした。

立川高校に入学し、屋上のドームを見て即、天気部に入部しました。先輩の指導で黒点観測、流星雨の観測、天気予報を体験しました。秋の学園祭では、火星人の模型を展示し、写真入りで新聞に載ったこともありました。

天文学者になるのが夢でしたが、天文学者では将来食っていけないという夢のない忠告を受けて、進路を変えてしまいました。

在学中の失敗談をひとつ。台風が東京を直撃と予報をたて、校長先生に生徒をすぐに下校させて下さいと進言したところ、すぐに実行に移されました。しかし、台風の進路は大きくはずれ、生徒が下校した頃には青空が出ていました。

楽しい思い出も沢山ありましたが、これは苦い思い出でした。



田代先生と高校8,9,10期部員

1957年2月

天文気象部での交流録とSM暦

高校9期 増田 伸爾

私は立高9期生で、昭和29年から32年まで天文気象部でお世話になった。これは田代実先生が「天体望遠鏡物語」を記述された時代であり、先生ご健在の頃である。

当時の天文気象部は田代先生のお陰で、2階の快適な場所に部室があり、この稿で書く諸氏との交流もこの部室が中心である。私は部活動そのものはあまり記憶していないので、部活動で出会った優れた諸氏のことを、独断と偏見で以下に書き連ねることにする。

9期の我々が入部したその当初からお世話になったのは、田中孝彦氏(5期)である。1階の階段教室で白衣を着て現れた田中先輩から、「空の状態」などを含む気象学と気象観測の基本から教えて頂いた。田中先輩にはその後、5月の連休合宿、夏の河口湖合宿、秋の台風観測等、度ごと懇切に粘り強く教えて頂いた。卒業後も先輩の立川のお宅で、普通の3倍もある特大麻雀パイで遊んで頂き、そのまま泊めて頂くなど、誠に真摯で暖かい先輩だった。

6期以前では、克明な太陽黒点スケッチを多く残した中村馨先輩、宇宙旅行協会を提唱した小森長生先輩、超美声の能登正之先輩、暮が好きでよくもんで頂いた鹿島田先輩が記憶にある。

我々の2年先輩には武田信夫さんがおられた。武田さんは私の知る限りで最も才気煥発な方で、理系の高校生が好みそうな事柄は勿論、あらゆる分野の知識に通じており、難解なクイズなどお手の物であった。彼は読書家でありしかも驚くべき速読家で、ご自宅に膨大な推理小説のコレクションを有しており、個々のトリックや筋立てなど、克明に論理的に把握しておられた。武田さんは4級職の国家公務員試験に全国1位!の成績を修め気象庁に入った。その後風聞では、ハワイ旅行が賞という当時破格で難問揃いのクイズ番組が設けられるや、早々に悠々突破し、合格者達とホノルルクラブを結成し活動したと伺っている。この期には、私と同期の府川朝次君の兄上(宗雄さん)もおられ、観測その他でお世話になった。中村充彦さんは私の属した天文班のリーダーだったが、雲のように包容力のある人で、黒点観測の実技指導をして頂いた。

我々の1年先輩達は、直接の兄貴分と言う感じで、ソフトボールや室内ゲームを始めよく遊んで頂いた。卒業後も一緒に山登りなどに行ったものである。大野岑夫さんや安藤恵尉さんはとくに優しい兄貴分であった。北島さんは数学や理科に優れ、彼のおかげで天文気象部の部室は常時数学教室と化した。黒板の一角にはいつも未解決の問題のメモがあり、昼休みなど黒板をにらんでの挑戦が続き、我々も大いに触発された。私の同期の河辺征次君も理数に優れ、東大の理論物理に進んだが、私は彼から集合論や行列解法などずいぶん教わったものだ。この期には、南雲さん、太田さん、福永さん、阿曾さん(故人)など多くの有難い先輩方がおられた。

同期の9期では、先の河辺君の他に、1年生の冬にすぐ部長に推された府川君がいる。彼はまじめな性格で、しかも仲間のみまとめ役であり、難しい問題ではいつも彼の正論が我々をリードした。府川君は一橋を出たあとNHKに入ったが、彼は理系どころか芸術系

のセンスに恵まれ、今でも「日曜美術館」などすばらしい番組の制作に取り組んでいる。

中村清昭君は武田先輩の後を慕って気象庁に入り、同時に理科大に学んで、卒業後旭化成に入った。中村君は誰からも好かれる明るい性格で、私の妻（立高同期）も大ファンである。旭化成では、宗兄弟他のマラソン部の方々と練習を重ね、念願のローザンヌも走破したが、少々体をそこない自粛中である。どうかご自愛を期待したい。彼は退職後延岡で地域のNPOの立ち上げに関わるなど、まさに人生の達人である。

柿沢光郎君は、温和な風貌と異なり、正義感の強い硬骨漢である。一橋から日本航空に入った後も、労組の中でも最も弱い立場にあった組合の側に立ち、その主軸となって活動しておられた。安藤茂君は大器にして晩成型の人である。都立大から都の下水道関係の研究職に奉じ、水質保全で数々の貢献をした。現在はその技術に絡む企業の社長として隆々活躍中である。

私の1年後輩には特に優れた人が多い。森山君は私などよりはるかに大人で、人の把握力があり、部のまとめ役としてたちまち頭角を現した。彼は父君が経営の輸入貿易商を継ぎ経営している。徳田精久君は大変な理論家・実務家で、「話し方教室」で有名だった江木武彦氏の元に参画した。この天文気象部のネットワーク活動では彼の貢献が大である。

中でも特筆されるのは、谷津潔君である。彼は極めて真面目なしかも粘り強い性格であり、我々先輩達の行った分を含め大量の黒点観測記録のデータ化をほぼ独力でやり遂げた。誠に頭の下がる思いである。この他にも、ガリ版やイラストが得意で文化祭他で大活躍の糸井君、生真面目すぎる松岡君・神尾君、アイドルで人気者の宮武孝子さんなどが記憶に残っている。

さて、私自身は東工大の化学工学科から日本石油に入ったが、5年で退職し、天文気象部で鍛えられた数学を唯一の頼りに、パークレーに留学してORを専攻した。4年後、東工大に戻り経営工学科に属した。そのまま東工大で定年を迎え、今は日本工業大学に在職している。現在、神田神保町に設けたキャンパスで、これまで企画を進めてきて今春開学した中小企業向けの技術経営の専門職大学院（修士）の充実に努めている。ここは平日夜間と土曜だけの1年制であり、実社会の経験が十分あれば学歴は不問という点が特徴で、これらは全国初の試みである。

おわりに、天文気象部の活動について殆ど書けなかったので、私の考えた新型の暦（以下SM暦と略称する）について書いてお茶を濁すことにする。

大方のご記憶にあるように、5年前の西暦2000年は400年の倍数であるため閏年となるなど、現行の暦はやや複雑である。さらに問題なのは、それでもまだ大きな誤差があり、1万年につき3日縮める必要があることである。これは事象の正確な記述を天文気象部の活動を通じて叩き込まれた者としては、到底容認しがたい。そこで正確かつ単純な暦として、次のSM暦を提案する。

4年の倍数年を閏年とする

前項にかかわらず128年の倍数年は閏年としない

前項にかかわらず8万年（128の倍数）の倍数年は閏年（特別閏年）とする。

このSM暦では、1年の平均値は365.2422日となり、1太陽年が365.2422太陽日であることと完全に一致する。しかも現行のグレゴリオ暦と比べてはるかに単純である。唯一の

問題点は128という数字が我々に馴染み深いかどうかだが、天文気象部以来麻雀に親しんできた我々にとっては128（イチニッパー）は誠に身近な数字である。

さて、8万年に1度巡って来る特別閏年だが、この記念すべき年に与えられた1日を、地球規模の祭日として盛大に祝うことにしたらどうだろうか。地球の公転と自転という壮大な現象を、暦という形で完璧に記述し得た太陽系第3惑星のスーパー・メモリアル・デー（略してSMデー）として、祝福される価値は十分あると思える。ただ非常に残念なのは、この記念すべき日に私はおそらく立ち会えそうもないことだ。

第2章 “有形の教” <学校賞第一位受賞>

日本学生科学賞学校賞第一位受賞

谷津 潔(10期) 益田 博勝(11期) 内田 誠(12期)

1. 私(谷津)は、小学生の時から理科が好きでした。中学生になった時には初めて天文年鑑を買い、天文に夢中でした。最初単レンズの屈折望遠鏡を自作しました。望遠鏡は口径が大きい程良いものと思い、12cmの望遠鏡を作りましたが、色収差のため土星などほとんど見えませんでした。ある時これに3cmくらいの絞りを入れたところ、土星の環がはっきりと見えて感激するとともに、単レンズでは大口径は意味が無いことを理解しました。その後15cmの反射望遠鏡を自作し、火星の観測や、月の写真撮影に熱中していました。

このような分けて、立川高校を受験した一つの動機は、新聞で立川高校の天文気象部の活動の記事を見たことでした。立川高校がどの程度難関であるかも知らずに受験したのですが、幸いにも合格することができました。入学して早速天文気象部に入部し、念願の太陽黒点の観測を始めました。立川高校の黒点のデータはチューリッヒに送られていたことがあると先輩から聞いていましたが、私が観測を始めた頃にはそれは無かったと思います。ただし、黒点のデータを東京天文台に2~3度持って行ったことは記憶しています。観測データは有る程度生かされていたのですが、データを有意義に生かすためには、データ整理をすることが重要なのではないかと、黒点の観測をしながらも考えていました。

データ整理としては、過去11年間のデータから黒点の緯度分布を作成する作業があり、これには熱心に当たりました。これは田代先生からの直接の指導であったのか、先輩からの引き継ぎであったのか、私の記憶は定かではありません。またいつ頃から始められたのかの記憶も定かではありませんが、2年生になる頃であったと思います。2年生になる少し前に、ドームのブリキを切り裂いて進入した盗賊に望遠鏡のレンズを盗まれるという事件があり、太陽観測ができなくなっていたので、2年生になってからは日々の作業はデータ整理でした。4月に新入生への説明は、太陽観測はできないので、観測帳を見せながら、黒点がどのように見えるかの説明と、データ整理の説明をしたのでした。データ整理は、一つ一つの黒点の発生から消滅するまでの緯度を追って、その変化を1本の棒線として模造紙に書き込むもので、天文班員全員の協力のもとに夏休み中も続けられて、夏休みの終わり頃には完了し、丁度蝶形分布図の1周期分が描かれたのでした。これはその年の立高祭に展示されました。

その後、田代先生から蝶形分布図を日本学生科学賞に出展したが、東京都の優秀賞であったことをお聞きしましたが、この出展への作業をお手伝いした記憶は、私には定かではありません。更に、翌年には蝶形分布図とともに11年間のデータも揃えて出展した結果、みごと都の最優秀賞に輝いたのですが、この作業のお手伝いは後輩達に移っており、私は何もしていませんでした。この辺の事情については、引き続き益田氏と内田氏にご報告いただきます(谷津 潔)

2. 私(益田)は、立川高校を卒業したあと、大学時代は引き続き東京にいましたが、社会人になると同時に北九州市に赴任して現在に至っています。その間約二年の東京勤務を除くと、約五年間の欧州勤務を含めて四十年近く東京から離れていますので、天文気象部の方々に限らず、同窓の方々との交流も殆どありませんでした。このような中での数年来の同窓会の開催や望遠鏡の寄贈等の動きを、私は格別な思いで受け止めて、改めて関係各位に感謝しております。

そのような流れの中、昨年の全期同窓会で「日本学生科学賞」受賞について谷津氏と内田氏と共に報告することになりましたが、前記の感動とは裏腹になかなか記憶が甦らずに困ってしまいました。然し、古い記録や当時の皆さんとの話を通じて、段々と記憶が戻ってきて、不十分ながら同窓会当日にお話をした次第であります。更に、今回記念誌にそれを文章化することとなり、今度こそ進退窮まってしまいました。苦肉の策として、先に完成された谷津氏と内田氏との文章を参考にさせて頂くことにしました。

「日本学生科学賞」受賞に関わる詳細につきましては、両氏の文章に十分に述べられていると思いますので、小生からの不正確な記述は避けることとし、思い出すままに以下のことを

記憶を辿っていくと、私は、幸運にも将に前記のお二人、即ち、学者肌の先輩谷津氏と、既に天文のプロと言ってもよい領域に達して居られた後輩内田氏に挟まれて、両氏の指導と協力のもとでやったということ思い出します。従って、いわば私のオリジナルでは無いため、私の記憶が不連続であるのも納得できます。

今回、四十数年ぶりに「蝶形分布図」を見て、あれを作った時のことが少しずつ思い返されてきて、黒点の太陽表面での位置を一点プロットするだけでも、かなりややこしい作業をしたという記憶が甦ってきました。たしか連日暗くなるまで作業を続けたことも思い出しました。「蝶形分布図」の完成の為に、太陽の黒点の周期から考えて、少なくとも十年以上の期間の観測データが必要ですから、この仕事は三年で入れ替わる個々の学生だけではできる筈が無く、それまでの部員全員で積み上げた観測データと田代先生の指導の賜に他なりません。私としては、「蝶形分布図」の作成を通じて、社会人になってからの仕事のやり方に対して大きな教訓を得ていた事も改めて感じました。

「日本学生科学賞」応募のための作業が遅くなった夕刻、私の記憶の中では田代先生の指導に重なって、学校の直ぐ西にある「蕎麦屋」から出前を取って下さったり、帰路に店でご馳走になったシーンがよく思い出されます。余談ですが、田代先生のお陰なのか、私にとっては、旨い蕎麦が食しにくい九州で、今でも蕎麦は米に代わる主食であります。

私は、奇しくも谷津氏と内田氏に似て、立川高校入学以前から天文に馴染んでいました。叔父が教師をしていた学校で叔父の宿直の折に、自分で学校の望遠鏡を自由に弄っていたからです。将来は、天文学者になろうと本気で思い、立川高校に入学して望遠鏡があったので、我が意を得たりというところでした。しかし、真面目に天文を考えるにつれて、宇宙の時間的・空間的な大きさを痛感するにつれて、本格的に取り組む前に降参してしまいました。

今後は、望遠鏡と田代先生が与えてくれた折角のチャンスを活かして、皆様方とのお付き合いも宜しくお願いしたいと思っております。(益田 博勝)

3. 私(内田)も谷津先輩同様小さい時から理科が好きで、特に天文が大好きで自作の反射望遠鏡で太陽や惑星を観測して楽しんでいました。将来天文台に入りたいと思っていたところ、天文台を退職されて、立川高校の物理の指導をしている田代先生が居られることを、当時の中学の教頭先生から伺い立川高校に入学しました。早速天文気象部に入部し、初めて太陽黒点観測をした時の、あのシャープな黒点像の印象は、今でも鮮明に覚えています。やはり10cm屈折赤道儀の威力は凄いなあと感心しました。当時は夜間観測も相当自由で、田代先生に申し出れば、殆どの夜間観測が可能でした。私が高1の時(昭和32年)益田さん達11期の先輩の方々が日本学生科学賞に「黒点観測の報告」を出品され、東京都審査で優秀賞を受賞されました。この辺の経緯については、田代先生が書かれた「立川高校の天体望遠鏡物語」に詳しく述べられていますのでご覧下さい。

私は、サッカーが大好きでサッカー部にも入部し、明るい内はサッカー部の練習で、暗くなると天文気象部の夜間観測をよくしていた記憶があります。高1の2月頃、サッカー部の練習のやり過ぎが原因かどうか分かりませんが、若年性の高血圧症とかで血圧が170を越え、睡眠中に鼻血が出る状態で、半年間運動の禁止の上、苦い血圧の薬を飲み続けました。その頃から耳鳴りというか脳鳴り「ジーン・ジーン・シャー・シャー」という音に悩まされ続け、苦しい思いをしました。この「脳鳴り」はその後も止む事なく、今も続いています。私は7人中4人の兄姉弟を早く亡くし、小さい時から死の恐怖が強く、いつも念頭からはなれず、この高血圧症で死ぬのではないかと取り越し苦労をしていました。高2の4月19日(昭和33年)の日食観測は好天に恵まれ、なかなか良い日食写真が撮れて、田代先生も喜んでおられた記憶があります。田中先輩(高5)も観測に駆けつけられました。

田代先生の天体望遠鏡物語にありますように、高2の6月頃、日本学生科学賞に再度「黒点観測の報告」を出品することになり、その準備に取りかかりました。学校賞が新しく制定された事は有りがたい事だと思いました。田代先生から太陽黒点に関する論文を書くように言われました。論文など書いたことは無かったので、色々注意されたり叱られたりしながらも何とか纏めることができました。何しろこの頃、高血圧症で薬を飲みつつの生活で、根を詰めると血圧が上がる様な状態であまり無理がききませんでした。近くの神社の涼しい場所に参考書を持って行って、そこで何時間も書き続けた記憶があります。論文のあちこちを赤字で直され、確かに紙面が赤くなる程の厳しいご指導を受けました。それでも何とか8月末までに完了し、提出物は全て揃いました。9月27日に、有楽町駅近くの泰明小学校の学生科学賞の提出物受付所に、11カ年黒点観測報告(主論文)や太陽黒点緯度分布図を含む136点の物品を提出しました。

10月11日、東京都審査で最優秀賞に選ばれ、10月26日、中央審査で日本学生科学賞の学校賞第一位に選ばれました。私達部員も、提出物の整理やなにやかやの苦労が報われて、皆大喜びをしました。田代先生のお喜びはいかばかりであったか、天体望遠鏡物語の随所に窺えます。11月3日(月)有楽町の讀賣ホールで日本学生科学賞の表彰式が行われました。11月4日(火)日本学生科学賞の入賞者全員、皇居を訪れ、宮中にて天皇・皇后両陛下にお目にかかりました。天皇陛下より「平素の勉強努力が実を結んで、このたび、科学賞を受けられた方々に会って非常に喜んでます。科学の振興は国力の充実と非常に関係があります。今後益々勉強に励まれるよう希望します」と、何時もながらのとても張りのある、澄み

きったお声で入賞者を元気づけられました。また皇后陛下より「体を大切に、なおよく勉強して下さい」と、にこやかな温かみのあるお言葉を頂きました。丁度私の真正面に皇后陛下が立っておられました。陛下は、当時 56 57 歳の頃だったと思います。その後陛下は昭和 64 年 1 月 7 日、87 歳で崩御され、皇后陛下は平成 12 年 6 月 16 日、97 歳で崩御されました。両陛下とも、八王子の武蔵野陵墓地に埋葬されました。

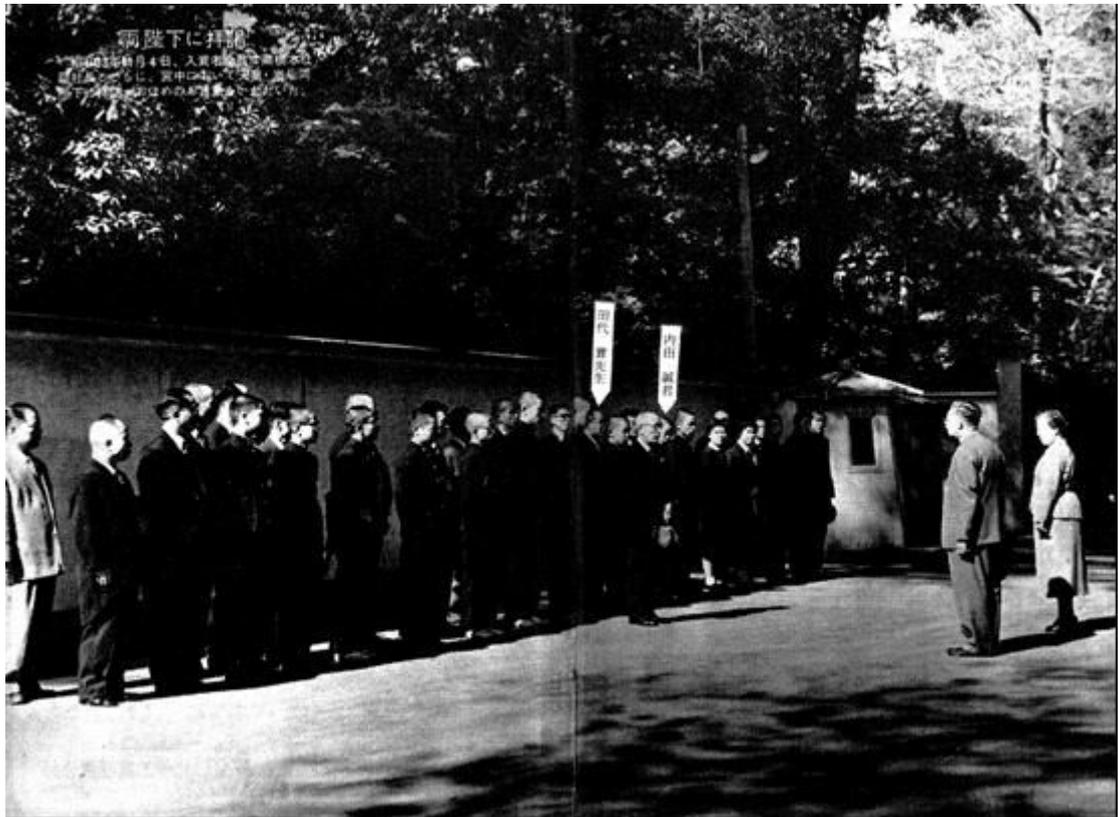
11 月 6 日(木)の朝礼の際、全校生徒への伝達式が行われ、豊島学校長から天文気象部員に、学校賞第一位の賞状と副賞が手渡されました。その後、正面玄関の前で、豊島学校長を中心として、メダルを胸に付けた天文気象部員との記念撮影が行われました。

学校賞第一位受賞の記事が新聞に掲載された後、4～5カ所から受賞内容の発表依頼がありました。11 月 16 日には東京理科大学で行われた”・・高等学校科学研究発表大会”に招待され、田代先生に私と、笠原君、小島(高 12)さんの 4 人が出席し、階段教室で、太陽黒点の緯度変化等に関する発表を行いました。年が明けた昭和 34 年 1 月 4 日に、立川高校で日本学生科学賞受賞のお祝いの会が開かれ、田代先生を始め、高 13 期以前の天文気象部関係者 34 名の方々が出席されました。翌日の 1 月 5 日に田代先生のお宅に招待され、高 11～13 期の天文気象部員 9 名が出席しました。田代先生のお喜びの笑顔がとても印象的でした。

私が天文気象部の代表として、田代先生と表彰式や皇居訪問をさせて頂きましたが、11 年の長きにわたる諸先輩方の、観測や資料整理に掛けられた弛まぬご努力に心から敬意を表します。新望遠鏡の寄贈により、長らく中断していた黒点観測も軌道に乗りつつあり、黒点緯度分布図も、その都度作成という形をとっていく体制ができたとの事です(内田 誠)。



日本学生科学賞学校賞第一位受賞 表彰状



天皇皇后兩陛下拝謁 1958年11月4日



日本学生科学賞学校賞第一位受賞

学校賞の伝達式の後、正面玄関前にて 1958年11月6日

我が人生 - 天気部と神様と -

高校 10 期 谷津 潔

私は東京教育大学と筑波大学で核融合を研究課題として 35 年間過ごし、2 年半前に筑波大学を定年退職した。退職前の 6 年間は、プラズマ研究センター長として自分の考え方で研究を進めることができ、必ずしも希望通りの結果は得られなかったが、満足して定年を迎えることができた。しかし、東京教育大学に就職する迄の私の人生は、試験に何回も落ち、進路を神様に何度も修正されたもので、このような人生も現役の学生さん達には参考になることもあるかと思ひ、ここに記すものである。

私が立高に入学したいきさつは、本誌の日本学生科学賞学校賞第一位受賞に書いたが、私の人生で自分の第一の選択通りに事が進んだのはこの時だけであった。大学は東京教育大学を受験したが失敗し、1 年間浪人をして再度受験したがまた落ちてしまった。2 期校の受験を考えていた時、たまたま天気部の部室にあった新聞で、電気通信大学に電子工学科が新設されたことを知り、これまでは考えてもいなかった電気通信大学を受験することに決めて受験し、幸い合格することができた。しかし 3 年生くらいになった頃から、学友達の多くが電気通信に進もうとしているのに対して、私の興味はもっぱらプラズマ物理学・核融合に向かっていた。これは、天気部で太陽のエネルギー源は核融合であることを勉強し、大学で何度かプラズマに関する講義を聴いていたためではないかと思う。

大学を卒業するに当たり、就職先としてプラズマを研究している人がいる会社を受験したが、これは簡単に落ちてしまった。しかし、この会社は 10 年ほど後にプラズマは全くやらなくなってしまったので、就職できなくて良かったと後から思ったものである。会社に落ちてしまったので、もう一つの進路として考えていた大学院受験で、東京教育大学を受験したが、これも落ちてしまった。大学院浪人を 1 年覚悟したが、その頃は東京教育大学の後に東大の試験があり、だめもとで受験したところ、思いがけずこれに合格してしまった。図らずもその頃日本で最強と考えられていた核融合実験装置で研究することができるようになり、本当に嬉しかったものである。

大学院修了に当たり、核融合研究をしていたある研究所に就職を希望したが、この研究所には採用してもらえなかった。次に希望した東京教育大学に採用され、受験に 3 度失敗した大学で働くことになり、その後の 35 年間は希望の分野で研究・教育生活を送ることができた。

東京教育大学に就職した後に分かったことは、東京教育大学の大学院に合格していたとしたら、おそらく私の希望通りに研究はできなかつたであろうことであつた。また、私が就職を希望した研究所は、その後核融合の研究からは撤退してしまつたのである。この様なわけで、私の希望は何度も修正されたのであるが、後から振り返ると私にとって最良の道を神様が選んでくれたような気がする。その後も何度も神様に助けられ、いつも神様に感謝しているのである。また私の進路を決める時、電気通信大学の受験を決めたことなど、何度も立高の天気部が大きく関わっていたことを思い、天気部にも常日頃感謝しているのである。

思い出すことなど

高校 11 期 小島 新一

おもいでというものは遠い過去のものとも感じられるし、つい昨日のことものようにも思われる不思議なものだ。はるか遠い日のことなのに、どんなきっかけで天文気象部に入ったのか、その時のことはよく覚えている。高校に入学した当初から天文気象部を目指していたわけではない。中学の同級生だった佐藤健君といろいろな部活を見て歩いているうちにけっこうおもしろそうだねということで入部したのである。あまり強い動機があったわけではないが、むろん無関心だったというのでもない。中学生のころ手作りの望遠鏡で夜空を眺めたりしていたのだから。(そういえば、そのころはまだ天の川が見えていたと思うのだが、こちらの記憶は少しあいまいになっている)

ともかく入部した。太陽の観測にはあまり魅力を感じず、気象班に属することになった。私はどうも、夜空の星の神秘(神話、伝説の世界から引き起こされた)に心引かれていたものようである。初めは気楽に考えていたのだが、毎日定時の観測を続ける(当番制であるといえ)ということは大変な仕事だということをやがて痛感することになる。気象について学ぶことはそう多くなかったが、この活動を通して学ぶことは多かった。継続は力なりということを実感し、またチームワークというものの大切さを体験することもできた。

ということで、私の興味は次第に人間の方へと傾斜して行く。部室に常備されていた観測活動にかかわる引き継ぎ、その他のメモを記入するノートに、哲学、歴史、文学などの生かじりの青くさい文章を書き連ねるようになった。目的を大きく逸脱した駄文だったろうが、よかれあしかれ、面白く読んでもらえたような気がする。そして自分自身は文系への道に進むことになるのだが、こんな異分子を受け入れてくれる心の広さが当時の天文気象部には確かにあったのだと、今更のように驚嘆もし、感謝の念もわいてくる。先生はある意味うるさかったけれど、熱心に指導されていたと思うし、先輩、同輩、後輩もいい人達ばかりだったと思う。

天文気象についてはしばらく離れた後、工業高専に長く勤めることになって、数学や物理への興味が再燃するに伴って(学生といろいろ一緒に勉強したためかも知れない)。宇宙に関する関心が一気に高まった。これも天文気象部でののびやかな生活があったからこそと言えるような気がする。

今後もこのような部活動が活発に継続されて、若い諸君が自分なりに何かを吸収し、成長して行かれることを期待している。

蘇える天文気象の楽しみ

高校 11 期 佐藤 健

2003 年に、12 期生以前の天文気象部の同窓会に誘われて出席して以来、45 年も前のことで長らく忘れていた天文、気象への興味が蘇り、ここ 1 年間でいろいろな事象に遭遇した。以下は拙い私の経験と所感である。

1. 木星、金星、月の接近

昨秋は当地の空気が澄んでいて、富士山や丹沢、高尾、奥多摩の山々が連日よく見えた。星空も良く見えるようになり、記憶を頼りに星座をたどったり、月齢を楽しんだり、惑星を見つけたりするようになった。ちょうどそんな時期の 2004 年 11 月 10 日の明け方に、月齢 27 の月を挟んで右上に木星、左下に金星が一直線に並ぶという珍しい現象が見られることを新聞記事で読んだ。これはぜひ見なくてはと 5 時に早起きをして家のベランダから観察した。なるほど明け方の空に 3 つの天体が斜めに一直線に並んでいる。こんな見事な眺めを何とか写真に残せないものかと、とっさにふだん使っているデジカメを使っただけの撮影を試みた。ブレないようにベランダの手摺りにカメラを置き、息を殺してシャッターを押す。ズームを使って倍率も何種類か撮影した。パソコンで拡大してみると結構よく写っている。意外なことに倍率を低くしたものが一番シャープに撮れており、倍率を上げたものはブレて出来が良くなかった。一番低い倍率のものをトリミングで拡大して、インクジェットプリンターで印刷するとあの感動的でミラクルな雰囲気再現できた。「霜降や惑星二つ月ならば」

2. 水星、金星の接近

水星の光度はマイナス 0.4 位に明るくなるが、太陽からの最大離角が小さいので、夕方でも明け方でも、ほの明るい中で見つけることはなかなか難しい。天文気象部時代に夕方のまだ明るい空に頼りなげに瞬いている白い星を二三度見つけたことがあり、とても嬉しかったことを覚えている。さて昨年暮れに、水星と金星が明けの空で接近中と聞き、私でも金星なら容易に見つけられるので、その周辺を探せば水星が見つかるかもしれない。そう思って 12 月 30 日の明け方に東の空を見た。5 時半にはまだ金星は上っていない。6 時過ぎになって、幸運にもベランダの東側にある 2 軒の隣家の隙間から金星が上がってきた。そして水星は金星に対し 11 時の方向にしっかりと白く光っていた。45 年ぶりに見る水星をわくわくして見つめた。これもデジカメでの撮影を試み、前と同じやり方で何枚かシャッターを切った。トリミングで拡大すると金星はもちろん水星もしっかり写っていた。この後、1 月 2 日、7 日、11 日、13 日、14 日と計 6 回も水星を見る機会に恵まれその都度デジカメで撮影した。はじめ金星に対し 11 時の位置にいた水星は、時計周りにまわりながら金星に接近して行き 14 日には 4 時半の方向になった。こんなに容易に水星と金星の動きが普通のデジカメで写真に残せるとは、皆さんにもぜひトライされることをお勧めしたい。(附録 5 カラー写真を参照ください)

3 . 真紅の夕焼けは地震雲？

2004年10月16日、17時15分頃首都高速道を西に向かって走行中、永福の手前あたりで西の空が真紅に染まって来た。こんなに雲が赤く濃く染まった夕焼けはかつて見たことがない。運良くデジカメを持っていたので夢中でシャッターを切った。高速走行中で後部座席から撮ったのでピンボケでアングルもいまいちではあるが、感じが良く出た写真が数枚撮れた。この夕焼けは尋常ではない、美しいというより不吉な感じがする、一体何なのだろうとずっと気になっていたところ、11月になって週刊誌の巻頭グラビアに「地震雲」の特集がありこの夕焼けを千葉方面で撮った写真が掲載された。コメントによるとこの夕焼雲は地震の予兆としてあらわれる「地震雲」であり、10月23日に発生した新潟中越地震の予兆であると紹介されていた。科学的な真偽のほどは分からないが、そう言われて納得したくなるような夕焼け雲だった。

(附録 5 カラー写真を参照ください)

4 . 中央高速の多雨地帯

通勤で中央高速を毎日通っているうちに、調布インターから三鷹料金所にかけての区間は雨が頻繁に降ることに気がついた。曇りの日に国立インターから新宿方面に向かうと、調布インターあたりから上空の雲が目立って厚くなり黒味を帯びてくる。そしてパラパラと雨粒が落ちてくる。雨の日はこのあたりは一段と強い降りになる。まさに中央道の多雨地帯であり不思議な現象である。このあたりの地形は、調布インターの先で野川が中央高速を横切っており、それに平行して背後には国分寺崖線があり、中央道は崖線の上の台地の切通しを通る。このあたりは緑が濃く、左手は水生植物園、深大寺、神代植物公園とつながり、右手には深大寺自然広場があり田圃が残っている。三鷹料金所で切通しを抜けると仙川が横切り中央道は住宅地を見下ろすように走る。ここから先は嘘のように天気は回復する。野川の湿気を含んだ大気が国分寺崖線で上昇気流となり雨雲になるのかなどと推測してみたが、きちんと調べたい誘惑に駆られている。気象班で調査してもらえませんか。

5 . 霞か霧かの6 - 7月

今年2005年の正月は大気が澄んでいて視界が開けていた。先に述べたように水星を6回も見ることができたし、我が家から毎日のように純白の富士山を望むことができた。ところが5月中旬以降は連日青空がなく、霞か霧かと言った天気が続き、富士山はおろか奥多摩の山々も定かに見えない。確か6 - 7月に富士山が見えたのは、台風一過の7月27日の一日だけ。しばらくぶりに見た富士山はすっかり雪が解け、真っ黒な夏の富士になっていた。真夏の風物詩である積乱雲も青空のない今年はさっぱり現れない。曇り空でも気温は33度に上がり、耐えがたいほどに蒸し暑い。昔の夏と何か違うように思うが、これも温暖化現象の一つであろうか。

象牙の針と皮袋（私の体験した天文気象部/1956～58年度）

高校 11 期

黒川 武

因果はめぐる、というほどのことではないが、自分が今こういう状態であるその元はど
こだったのかと、ふと思うことがある。

天文気象部へは、思いがけずに入ることになった。初めに入部した山岳部から、気象の
勉強をしてこいといわれたのである。山登りは、中二のときの御岳（みたけ）登山が気
に入り、その後も時々ハイキング山行を重ねていたところ、ちょうど立高に山岳部があつた
というものである。

しかし、天文の経験といえは、多聞に漏れず、ローソクの煤を付けたガラス片で日食を
見るとかがせいぜいであり、気象にいたってはなんの知識もなかった。それでも、部室で
ラジオの気象通報を聞いて天気図を描く練習をし、また百葉箱や、校舎塔屋最上階（5階）
の観測室での機器計測、あるいは塔屋上での観天望気などの指導を受けるうちに、なんと
か天文気象部員らしくなり、気象現象や観測自体に対する面白さも感じるようになってい
った。天文の方の知識はいっこうに増えるようすはなかったが、観測当番で太陽黒点のス
ケッチをやり、これはけっこう集中できた。

機器計測の中で、特に印象に残るのは、フォルトン水銀気圧計による観測である。この
測器の操作上の特長は、ガラス管中の水銀柱の高さを測る際に、水銀柱の下部に続く水銀
（溜め）槽の底を上下させて、水銀柱の高さの基準点と、槽中の水銀面とを合致させるこ
とにあると思われる。水銀槽の底とは、羊皮製の小袋であり、また水銀柱の高さ（読み取
り目盛）の基準点とは、水銀槽の天井から垂下した象牙の針、すなわち「象牙針（ぞうげ
しん）」の先である。槽中の水銀面を上下させるには、測器下部の調節ネジを手で回し、
皮袋を押し上げ、引き下げする（スクリュジャッキの要領）。水銀面を上げていくと、象
牙針に触れて鏡面状の水銀面にくぼみができる。そうしたら調節ネジをわずかに逆に戻し
て水銀面を下げ、くぼみが消えた直後が基準点との合致である。

私は、どういうわけか、この象牙の針と皮袋の操作にこだわっていた。毎回の観測ごと
に何回、基準点合わせをやったことか。理由は自分でも分らないし、そのときはそのこと
自体を意識したわけでもない。ずっと後になって、なにかの機器測定やデータ整理で似た
ようなこだわりがでることに気づき、昔、観測室でやっていたことがはっと思い出される
のである（じつはこの原稿の字数合わせにもこだわっている）。そんなときは、象牙の針
と皮袋へのこだわりは、自分の頭上数十キロメートルに及ぶ空気の柱の重さが、この一瞬
に、荘重なにぶい黄銅色を放つ気圧計の象牙針の尖端に凝縮し、鏡のような水銀面に見え
るか見えないかのくぼみとして現れる瞬間を見るがためのものではなかったか、と考える
ことにしている。

因果といえるかどうか知らないが、まぎれもなく、現在の自分のある部分は、1956～59
年の立高天文気象部の部室や観測場の体験により形成され、その先は、山岳部や中学時代
の登山にもつながるもののようなものである。

天文と気象に関わる最近の小さな経験

高校 11 期 益田 博勝

望遠鏡関連については、『日本学生科学賞学校賞第一位受賞』関連寄稿の中で書かせて頂きましたので、ここでは天文と気象の夫々に関係した最近の私の小さな経験についてご紹介致します。

・ 大火球！

高校卒業後は、望遠鏡を覗く機会も全くなく、天文とはあまり縁のない生活でした。20 年前位からは、体力増強（というよりは寧ろ劣化防止）のために、山登りやウォーキングを続けています。その過程で、早朝の出立や夜間の帰宅も多いため、星座や惑星や流星の動きについては、適宜フォローし、季節感と共に楽しんでおります。

数年前から、8月の夜に行われる大分県久重高原の夜間ウォーキングに参加しておりますが、この企画の中でもっとも長いコースがマラソンと同じく 42 km 余となっております。

一昨年のことですが、ゴール時刻が午前 3 時 30 分より前なら私自身の新記録になるので、その日は体調もよく足も軽かったため、記録更新を目指して終盤は意識してピッチを早めて歩いておりました。結局は、無理をしたため足に不具合が起こって、記録更新ができないことが決定的となりました。がっかりして午前 3 時 30 分を少し過ぎた頃、ゴールになっている体育館に入る直前、突然辺りが白昼の様に真っ白になりました。皆さん非常に驚いておりましたがこれが正しく『大火球』でした。明るい割りには大きな音はしませんでしたし、暗転した空には痕跡も見えませんでしたので、隕石自体の大きさはさほど大きくはなかったかもしれませんが、私にとっては一生に一度と言える貴重な経験となりました（右の図はイメージです：正しく描けば、昼間の景色になるだけです！）。将に『怪我の功名』更には『夜更かしは三文の得』という境地で、そのあと温泉に浸かってから仲間と飲んだビールの味はまた格別でした。



・ 南大東島地方気象台！

天文気象部に在籍した人なら必ず書いた『天気図』。私は、天気図を書きながら何時も『南大東島では・・・』というラジオの気象通報の音が印象に残り、常々行ってみたいと思っていました。私は大の旅好きのため、行きたいところは他にも多くあるのですが、調べてみると、この島は、『隆起珊瑚礁』且つ、『絶海の孤島』であることから、特に行く気をそそられました。

当然ながら、南という冠がついていることから、北側に『北大東島』が隣接していますが、その『自然景観や島全体の造形的な美しさ』から、『南大東島』の方がはるかに魅力

的で、私はこの二つの理由から先日行ってきました。行きたいと思い始めてから 40 年も経っていました。



南大東島地方気象台は、町の真中にあるのですぐ分かりました(左の写真)。しかし、我々が書いていた天気図の情報を発信していた気象台はこれではありません。その役割を全うした旧気象台は、近くに廃墟のようにひっそりと佇んでいました。新庁舎は、1995年に完成し、現在30人を超える職員がおられる由。紙面の制約から、残念ながら『南大東島』の素晴らしさについて、ここでは全く紹介できませんが、台風シー

ズンになると必ず耳にするこの島は素晴らしい所ですので、方々へ旅行をされて、もう行く所がないと嘆いておられる方は是非お出かけ下さい。



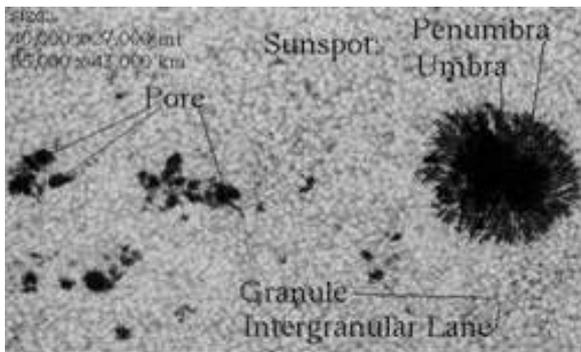
高校 11 期の天文気象部員

青いレモン酒とオリオンの三ツ星

高校 12 期 長島 泰雄

「波のしぶきに眠れぬ夜は語り明かそうよ、デッキの上で。星が瞬くあの星見れば、銜え煙草もほろ苦い」。近年、天文気象部に在りし日の青春時代を思うとき、妙にこの古い唄が浮かんでくる。友と語り明かしたこと、星を眺めたこと、明るく快い日々の中にあつたほろ苦さ、等々、いま振り返ると、青いレモンが発酵した、得も言われぬ高級酒の味がする。

昭和 30 年、半世紀も前、かの「長島茂雄」「王貞治」が黎明期にあつた頃、私は、無心な中学生であつた。隣家に、私より 5 歳ほど年上で、立川高校・天文気象部でご活躍の府川宗雄さんがお住みになっていた。「太陽はあと 5 2 億年後に寿命を終える」「いま、君が見ている星の光は 800 年ほど前、つまり平安時代に地球に向かって出発したものだ」というような宗雄さんの言葉に、その本質は理解できないながらも、見果てぬ天空への熱い思いがかきたてられたことを今でも鮮明に思い出す。また、当時宗雄さんに立川高校の天文台を見せて頂いた記憶もあり、これらのことが、立川高校入学後、私に躊躇なく天文気象部の扉をたたかせたのであつた。



入部後に、天体望遠鏡ではじめて見た、太陽の黒点、月の表面、木星や土星などの像は、少年の好奇心を十分に満たし、空へのロマンをさらに増幅させるものであつた。しかし一時期の興奮から覚めた後、私たち新入部員を待っていたのは、日常的に絶え間なく行う太陽黒点観測をはじめとした、忍耐と根気を要する様々な活動であつた。左図は、今公表されている黒点図であるが(アメリカ・キットピーク画像)、このような図の鉛筆によるスケッチに勤しんだものである。

なぜ、このような観測が必要なのか、当初は理解できなかったが、はるか古代に信仰の対象にさえなつたという美しい太陽にも黒点なるものがあり、それが時とともに変化し、地球の気象にも影響を及ぼすということをお教えされた時、何か心に響くものがあつたように記憶している。そのときは、この響きを言葉で説明することもできなかったが、後年になって振り返ると、私たちが観測・観察できる現象というものの背後には、必ずそれを支配する科学的法則が存在するというのを、漠として感じ取つたのではないかというような気がする。これまた、後年になつての思いではあるが、このような響きを漠然と感じ取るのか、あるいは明確に自己の感性のひとつに転化できるのかが、少年の科学技術に対する適性の良否なのだろうと。

ともあれ、この漠とした響きに後押しされるように、いろいろな惑星の観察や、流星の観察に情熱の一端を注いだのだろうと思う。同時に、真夜中に毛布にくるまり、高校の屋上から、流星の出現を待ちつつ、部の友と語り合ったことも脳裏にやきついている。何を語り合ったのか、その内容は覚えていないが、それを思い返すこと自体が青いレモンの発酵

した高級酒をしみじみと味わうような陶醉感をもたらす、といったら言いすぎだろうか。

空に輝く天体も、雲に覆われる日々が続くと、天空を対象にした活動も停止を余儀なくされる。しかし、同様に空に軌跡を描く雲を眺めていると、その背後にも何か人知の及ばぬ不可思議な手があるような気がして、気象関係の方にも興味が広がっていったように思う。この不可思議な手という表現も、後年の分析であり、その当時は、ただ単純に、太陽や星と同じ空に存在する雨雲や雷雲などに不思議な興味を持っただけ、という方が正しいのだろう。記憶に残る活動のひとつが天気図の作成であった。午後4時に、部室でラジオから放送される気象情報を聞きながら、天気図用紙にデータを書き込み、各自それぞれ天気図を作成してゆく。某先輩が、私たちの作成した天気図を見て、「これは観測数値を重視しすぎた硬直型」、「これは気象の不安定性をも考慮した柔軟型」というような批評を与えてくれたことを今でも思い出す。さらに、この天気図をもとに、また立川高校の日々の気象観測データをも勘案し、立川地区の天気予報に対する部員のコンペが行われた。その番付も部室に刻々と掲示されたが、結果はやはり、柔軟型部員の成績が圧倒的によく、硬直型の代表である私が臍をかむのはしばしばであった。誰がこのような企画をしたのか、思い出すことはできないが、気象の観測、学習に遊び心を取り入れた記憶に残る部活動ではあった。今の現役天文気象部員各位はいかに受け止めるだろうか。

さらに、もうひとつ忘れられない一齣がある。これまた、誰の発案であったか、覚えていないが、天文気象部員間のコミュニケーションを計ることを目的に、天文気象部覚書帳のようなノートが部室に備え付けられることとなった。各部員が、天文気象のことに限らず、自由に自己の体験や意見を書き込む、現代風にいえば、ネットを利用した掲示板あるいはチャットのようなものと言えよだろうか。

「他人の文章に濫りにアンダーラインを引かぬこと。徒にその箇所が強調され、執筆者の意図があらぬ方向に捻じ曲げられる」というようなシニカルな反駁文章があったのもまた懐かしい。このノートについては、主旨、内容もさることながら、このノートが「コスモス」と名づけられたことは、天文気象部員の知性とユーモアに溢れた秀逸なるセンスを物語るものとして、忘れることができない。コスモスとは、整然たる宇宙のことであり、天文気象部が志向するところであるが、一方、わが天文気象部の顧問である、田代先生の尊称が、コスモスと響きの似かよった「KOTSU先生」であった。名づけ親が誰か、もはや知る由もないが部員の圧倒的な支持を受けて、この名前が当選したと記憶している。

さて、高校生活の大きな核のひとつが、このような天文気象活動であったことから、将来は、空や星と接点のある方向に進みたいと思うのが自然の流れというものなのだろうが。

しかし、「もはや戦後ではない」といわれ明るい未来が見え隠れする昭和30年代ではあったものの、科学技術を志す少年にとって、その入口は必ずしも広いとは言えなかった。「これからの日本の産業は、[]と[]によって発展してゆく。空白は何か？」というような文が社会科の受験問題となる時代であった。(答えはオートメーションとマスプロダクション)

自分の進路に対し、夢との接点を求めるか、現実を見据えるか、情報の少ない環境の中にあって、少年の心は揺れ動いたが、結局のところ、オートメーションとマスプロダクションの先導する世界へと進んでしまったのであった。もし、夢に忠実に、しかるべき門を選ぶことができていたら、当時から半世紀近く経過した平成の私はどうなっていたらだろうか。当然ながら、そのような愚問に対する答えはない。

老齡を迎えた今、たまに独りで盃を傾ける時、ふっと出るため息は、曲がりなりにも長い期間にわたり社会の荒波を潜り抜けることができた安堵の思いなのか、美化され純化された過去の天文気象部時代への熱き思いなのか、少年時代の初志と歩んできた道との乖離を問い返す老残の常であるのか、いずれにしてその味はほろにがいという表現が合うようだ。しかし、同時に、ふと夜空を見上げ、中天に輝くオリオンの三ツ星を見つけたとき、一瞬崇高な感覚に支配され無心になれるような気がするの、遠い空に対する限りない愛着が、まだ私の魂のなかに強く宿っている証なのだろうか。



日食観測 校舎屋上にて 1958年4月19日

雑感

高校 12 期 小島 雅子(ただ子)

三年前物置を移動することから、中味の整理をはじめ、不用物をすべて廃棄しました。そのときに、天文気象部の資料、いただいた書物なども一緒に処分してしまいました。かろうじて残しておいたのは、天気図だけ。日本学生科学賞を頂いた年か定かではありませんが、東京理科大で発表会があり、同期の内田さん、笠原さんと三人で発表をしました。なにをどう話したかは全く記憶しておりませんが、そのときにいただいた資料も全て処分しました。

こんなわけで、当時の記憶はどんどん失いつつありました。そこへ同期の野崎さんの「みんなに会いたい」の一言から、12 期までの同窓会をする運びとなりました。翌年、全期同窓会をということになり、望遠鏡の寄贈、記念誌の発行と活動のお手伝いをしてまいりました。野崎さんはこのとき体調をくずしておられ、2 回の同窓会には出席できず、今年 1 月に亡くなりました。お姉様が望遠鏡寄贈の寄付に応じてくださいました。内田さんと何度かお見舞いに伺いましたが、本当に残念です。

なにがきっかけで天文気象部なのか、いまは何も記憶していません。でも、一緒に入った友達は定期的観測に音をあげて、すぐに退部してしまったので、責任を感じたのか、天文も気象も観測にだけは、真面目に通った記憶があります。

つい最近、内田さんから高校 2 年の 4 月 19 日の日食観測の当日の写真をを見せていただいて、そこに、自分が写っているのにはびっくりです。本当にまじめに活動していたんだと。この日食観測もあれば、川崎市細山の流星観測所に登ったこと、かなり強い狩野川台風の観測、などなど思い出してきました。あの頃の部室は、天気図を書くとき以外は、ラジオはクラシック音楽の放送にあわせてあったような気がします。ベートーベンの楽譜がああ石の出窓の上にあったような、なかったような……。あそこでクラシックを聴いたおかげで、ベートーベンやショパンが好きになったのかも。先輩たちに解けない数学や物理の問題を教えてもらったり、地形のことを教えてもらったこともあったけ、そんなことも少しづつ思い出してきました。天気予報をして当たりか外れかで一喜一憂したり、いつも泥んこのサッカーの体育着がその辺にあったり、相撲をとったり、何やら、めちゃくちゃな部室であったのを、この 3 年間で少しづつ思い出してきました。

毎日なにやかやと忙しく過ごしてきたこの何十年も、月や星座や惑星にいつも心を向けていたことは確かです。何にしてもあのハワイの「すばる望遠鏡」、様々な壁を乗り越え、長年大プロジェクトを進めた人々の力、世界最大の反射望遠鏡、いつかは行ってみたい、行けば見せてくれるのかしらなどと、実現することはないだろうが、いつも憧れだけは捨ててなかったと思います。これも、天文気象部に縁があったからでしょうか。

ですから、この 1 月に新しい望遠鏡で、太陽の黒点が写し出されたのをみて涙がにじんできると感動しました。

一昨年 12 期までの同窓会、昨年の全期同窓会を持つに当たって、お手伝いしたおかげで、大勢の立派で、知識、経験の豊富な先輩方、活気あふれる後輩方にめぐり合えてほ

んとうに嬉しく思います。力を合せるということがどれだけ大切かがよくわかりました。

望遠鏡を寄贈するときには、悩みました。が、56期の横手さん、現役の寺崎さんの文章を読んで、自分たちは良いことをやったのだと強く感じていますし、ほっとしています。

我が家の次女も長男も、天文気象部にまったく関心がなく3年間をすごしてきたので、「何、天文気象部なんて、どこに部室あったの」「同窓会なんて、偉いね」なんて、冷ややかにしています。しかし、これが私の心の財産のひとつであるということ、このところ感じています。同窓会、望遠鏡寄贈、記念誌作成と、大勢の先輩、後輩のお力をいただき、終わろうとする今、感謝の念でいっぱいです。

皆様ほんとうにありがとうございました。

11期の紫芳会の先輩たちとの俳句の会に参加して勉強しています。

拙いながら、いくつか書いてみます。

浮雲の翳流れ行く芒原

晨雲の流れの迅し葦の花

晨朝の野分の風や写経をす

秩父路をおおきくまたぐ雲の峰

城跡の榎大樹やいわし雲

母の歩に合わせてをりぬ桜東風

紅色にゆるりとのぼる梅雨の月

沈みゆく宵の明星蕎麦の花

天狼星頬骨高くありし母

極月の織月に顔洗ひけり

私の体験した気象観測

高校 13 期 吉川 謙造

私は昭和 33 年の入学と同時に天文気象部に入部した。

中学時代の同級 O 君が天文観測に強い興味を持っていて、私の方は無理やり誘われたのだが、O 君の方はいつの間にか来なくなってしまった。

先輩から手ほどきを受けて、太陽の黒点観測と、気象観測の要員に組み入れてもらい、間もなく朝 8 時（当時は 09 時の観測でなく、始業前の 08 時）の定時気象観測に間に合うように、家を出るようになった。

こんなわけで私は、気象観測のほかにも太陽の黒点、日食・月食、流星雨などの観測も体験したが、ここでは気象観測を中心に書いてみたい。

昭和 33～35 年の頃は、わが国の戦後という一時代が終りを告げ、日米安保条約改定反対の学生運動が大きく盛り上がった頃であったが、科学技術も急速な進歩をとげ、米ソ間では冷戦だけでなく、宇宙開発競争もたけなわであった。

ソ連（ロシア）が人類史上はじめての有人衛星ヴォストーク（ガガーリン）を地球周回軌道に乗せると、アメリカも無人の月ロケットを打ち上げ、はじめて月の裏側の写真を公表するなど、はげしい宇宙での科学競争が繰り広げられていた。

またこの頃は、大型の台風の上陸も多く、今も観測史上にその名を残す「伊勢湾台風」や「第 2 室戸台風」などが次々に上陸し、戦後最大級の被害が出た時代でもあった。

我々は、天文気象部の指導教官であった田代実先生が担当する物理の授業中、階段教室の机の下で早弁をやりながら、鉱石ラジオでこんなニュースを聞いたりしていた。

立川高校天文気象部の観測は正規の方法に従っており、観測値の信頼度も高かったの
で、観測結果は天文台や、気象庁などの公的機関にも報告されていた。

同級生などから観測の意義や方法を聞かれたりする時、こちらはもう大人の仲間入りをして社会の役に立っているような気がして、少々得意になったものだ。

そして、継続することの大切さを知り、観測員の責任感のようなものも芽生えた。

また、社会人になっても時間に遅れないことの大切さ、自分の役割に責任を持つことで社会は成り立っていることなどを、この部活で学んだような気がする。

気象観測は 2 人 × 2 班 = 4 人体制で行った。当時の観測機器は、校舎の北西隅にあった 6 階の塔とグラウンドの芝生（露場）の 2 ヶ所にあったからだ。

ラジオの短波放送の時報（秒読み）に時計を合わせて、08 時ちょうどに気圧と温度を読み取ることからスタートする。6 階にある水銀（柱）気圧計と、グラウンドの百葉箱内の温度計をまず記録する。これが一番に精度を要求されるからだ。数分の誤差などたいしたことないと思う人がいるかもしれないが、気温や気圧は瞬く間に変化することが多いので、時刻は正確を要する。

その他の計器類もあるが、これはその後順次読み取って野帳に記入して行く。2人のうち1人が読みとり、もう1人が記帳する。これが、なにかの理由で1人、2人が欠けたり、3人休んで1人になったりすると大変だ。欠測は許されないから、どうしても一方は遅測になってしまう。特に1人の時は大変で、先輩からその対応方法を伝授される。

最初に塔に上がり、6階にある気圧計の目盛りだけを、定時にセットして、すぐに階段を駆け下りて、百葉箱の温度計を読む。今度は上に登って、合わせておいた気圧計の目盛りを読む。そうすると、片方の遅れの時間差は1分以内に収まる。・・・等々。

私の当番の時にも、何度かこの1人観測をやった覚えがある。

また、当番ではなかったが、たまたま早く登校して部室に顔を出した時に、他班の応援をつとめたことなどもあったが、幸いにも在学中は欠測することはなかった。

記録した数値は高度と温度の補正を行い、海拔ゼロメートルの気圧に換算して、各地の値と比較・照合する。我々の観測時刻は08時と15時であったが、09時のデータで、世界や日本各地と比較をしないと、いろいろと悩みなどもした。(今は9時が実現)

台風が接近、上陸した日は、なぜか心が弾んだ。その日は観測の名目で学校に泊り込みが許されるからだ。女子の部員は宿泊が許可されていなかったの、せっかくの観測も途中で切り上げ、激しい風雨の中を夜遅くに自宅まで帰らなければならないのを、少々気の毒に思ったりしたものである。そして、みんなが寝静まったり、家の中で強い風雨におびえている時に、こっちは台風観測という尊い仕事をしているのだ、という一種の優越感を感じながら、1時間毎の観測に従事した。

台風一過の翌朝は晴れあがった空の下、6階の塔上に登り、少し強い風に当たりながら、秋空に中にくっきりと見える遠山を望む爽快感は、何物にも代えがたいものだった。

その頃の観測機器には古いものが多かった。当時の指導教官田代実先生の熱心な指導で、約11年間の太陽黒点観測結果をまとめた「蝶形緯度分布図」で、第2回日本学生科学賞で念願の「学校賞」を受賞した。その時に副賞としてもらった賞金で、新しい風向・風力計(風圧計)や、転盃式雨量計、また携帯式アネロイド高度計などを購入してもらい、その便利さや正確さに驚愕し、喜んだ、といった思い出も忘れられない。

田代先生は、博識かつ教育熱心な先生で、天文、気象観測の方法や機器の取扱い方は言うに及ばず、露場に設置した百葉箱の脚の腐食対策や、水平設置の工夫などを、得意げに、また楽しげにお話してくださった。

そして「学校賞」の受賞が決まったときは、わが事以上に喜んで下さった。

部室の中には「COSMOS(コスモス)」という雑記帳が置いてあった。

先輩諸氏が書かれた名文と、きれいな文字にふれ、自分も将来はこんな文章が書けるようになりたいと、真剣に思ったものである。

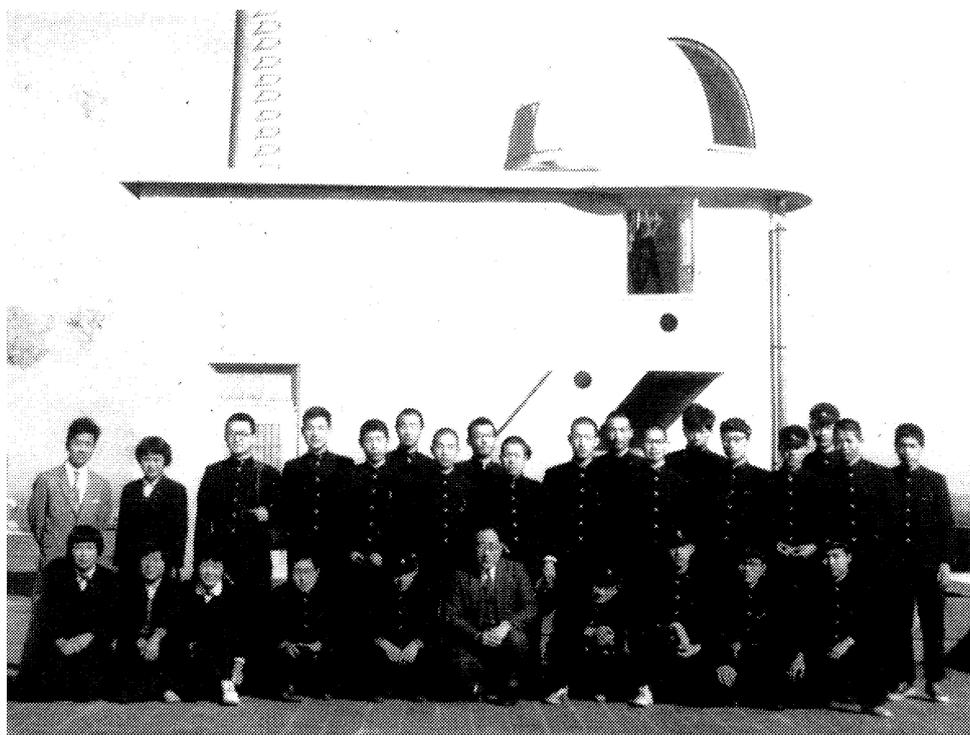
部員の中で天気予報のコンクールなどもやった。毎日の下校前に、各々が翌日の天気を予想して黒板に書いておく。1週間分を集計して優勝者を決めるのだが、的中したと喜んだ天気が外れるとがっかりし、また予報と観測結果の乖離で、大きく点数が変わるため、

雲の種類と雲量の解釈で観測者とモメたことなどもあった。

翌日の予報精度を上げようと、夕方の天気図作成を競争したので、今でも自分で書いた数ヶ月分の天気図が残っている。これらもすべて楽しい思い出である。

卒業してからは、すっかり気象観測から遠ざかってしまったが、山登りの時など、翌日の天気を予報するのに、ラジオを聴きながら天気図を書いたりすると、周囲の人から尊敬と羨望の視線を受けることもあったりして、少々得意になったものであった。

今では気象予報士のような公的資格が出来、AMEDAS、気象レーダー、気象衛星ひまわりの画像等、3種の神器と大型コンピューターの投入によって天気予報の精度も格段に上がってしまい、私などの出る幕がなくなったのがさびしい。



高校 11, 12, 13 期の天文気象部員

自然に興味を持ち観察することの大切さを学んだクラブだった

高校 13 期 宮武 隆二郎

私は大学卒業後、桐朋女子中学・高等学校の初めての地学の専任教師として就職し、60歳の定年まで38年間、その後常勤講師として3年間、合計41年間、勤めている。本校では、中学校でも物理・化学・生物・地学と分野別授業を行っているので、41年間、地学だけを教えている。「石の上にも3年」という諺があるが、これだけ長い年月、地学だけを教えていれば、文部省が何を言おうと関係なく宮武流の地学を組み立て自作の教科書を作成し授業を行っている。振り返ってみると、本当に長い間地学の教師を務めてきたものだと思う。

私は、立高時代は劣等生で決して楽しい思い出ばかりがなかったわけではない。しかし、クラブ活動だけは楽しんだ記憶がある。所属していたクラブは、天文気象部と地学部だった。地学部の活動はあまり熱心ではなかったように記憶しているが、天文気象部はそれなりに熱心に取り組み内容のある活動をしたように記憶している。特に気象観測に関しては、私の出身中学校が、当時の東京気象台の委託を受けた観測点となっていて、私も観測員の一人として、観測内容は気温や湿度など簡単なものだったが一生懸命取り組んだ記憶がある。今でこそ、アメダスが全国各地に配置され自動的に気象データを収集できるシステムが確立されているが、当時は、気象台が各地の中学などに気温や湿度など基本的な気象観測を依頼し、データを収集していたのである。従って、高校に入学したときも、迷うことなく天文気象部に入部して気象観測を続けたのである。こんなきっかけで入部した天文気象部であるが、私の長い地学の教師生活で、天文気象部に所属したことが大きな意味を持つことになった。地学という教科は、大げさに言えば、地球の中心から宇宙の果てまでを教えなければならないので、教える側としては負担の大きな教科なのである。大学時代の専門が岩石鉱物学であったために、天文や気象、地震などの分野に関しては、特に専門的に学んだわけではなく、教師になってから授業を行いつつ勉強していったというのが現実であった。そんなときに役に立ったのが、天文気象部で観測したという経験である。自然を観測し、そこからいろいろなことを学びとる事は自然科学を学ぶ基本で、特に中学生や高校生には多くの経験を重ねてもらいたいと思っている。現在の理科教育は受験に対応できればそれでよしという考えがあり、知識ばかりを頭に詰め込む傾向がある。頭の中に詰め込まれた知識は試験が終われば忘れられてしまうが、自然に接し観察したことによって得られた知識や経験は失われることなく身体の中に培われており、自然と人間生活の調和を考える上で重要な役割を果たすのである。

天文気象部で気象観測を経験した事は、授業を展開する上で大いに役にたった。例えば、前線通過に伴う気象変化であるが、ご存知のように、前線通過にともない雲は特徴的に変化する。教室の中で学ぶことと、実際に雲の変化を観察しそれが学んだことと一致することは、自然界の仕組みを体感させる上でも、生徒に興味を持たせる上でも最も大切なことなのである。この時に、天文気象部で毎日気象観測を行ってきたことが多いに支えになった。天気図を書かせることも多かったが、このときも天文気象部で毎日天気図を書いていたことが多いに役立った。

天文分野では、太陽の表面の状況を説明するときに、黒点観測の経験が多いに役立った。授業では黒点観測はさせなかったが、黒点観測の経験は太陽の表面が生き物のように絶えず変化していること教える上で役立った。また、直接授業とは関係はなかったが、「星を見る会」という天体観測をする会を高校生を対象に開催し天体に興味をもっている生徒に天体観測のチャンスを与えることもした。勤めたばかりころ、学校に8cmの望遠鏡があった。そこで、この望遠鏡を使って、夜間生徒に星を観察させたいと考えたのである。女子高なので、生徒を夜間残すことにはいろいろな問題があったが、夜9時まで高校生を対象ということで許可を得て実施可能となった。現在、学校のある調布市仙川付近の夜の空の状況は悪くなっているが、当時はそんな悪くなく星座を観察することができた。明るい星が多く見られる秋から冬にかけて、ゾーンを設けて希望者を募り「星をみる会」を実施したが希望者が多く盛会であった。しかし、ドームはなく、赤道儀のついていない望遠鏡であったために、満足な観測はなかなかできなかった。特に冬は寒風吹きすさぶ中、寒い思いをして観測をしていた。そんな状況を見ていた校長が、新校舎建築のときに観測ドームと、五藤光学の20cmの屈折望遠鏡（昭和50年代初めで300万円）、15cmのシュミット望遠鏡を設置してくれたのである。まさしく、努力の結果得たものであるが、これも、高校時代に天体観測をし、星を見ることの素晴らしさを知りその魅力を生徒に経験させたいという思いから始めたことの結果である。この「星を見る会」は、その後、新しく専任になった教師に受け継がれ現在も継続実施されている。

中学や高校のクラブの顧問は、専任教員が高校や大学でクラブやサークルで経験していたことを生かして顧問になるケースが多い。私の場合も同じで、当然のこととして天文部の顧問になった。女子高の天文部は、夜間の活動が制限されるために、十分な活動ができず窮屈であったが、通常の観測では黒点観測を中心に、春休みは、学校に泊り込み20cmの望遠鏡を使い惑星の撮影などを行った。また、夏休みは、八ヶ岳高原にある学校の寮で合宿をし、流星観測、星座観測、星夜写真などの観察をした。これらの指導も天文気象部時代の経験がその根底にあり、それらをもとに観測方法を工夫し指導を行ったのである。

いま、公害など自然環境問題が人類共通の課題となっているが、その課題にしっかりと眼を向け考えさせていかなければならない。地学は特に重要な役割を果たす教科と言える。しかし、残念なことに高校で地学の専任がいる学校は非常に少なく、地学の教科を置いている学校も少ない。受験に必要なという理由だけでこのような結果になってしまっているのである。地学を専門とする教師が、内容豊かに教えれば、興味を示す生徒は確実におり選択者も多くなる。将来、地球環境を悪化させないためにも、もう少し地学を大切にしたいと現状を憂えている教師の一人である。

人間は自然の中に存在する生物の一つで、自然と共存していかなければならない。共存するためには難しい学問を振り回す必要はない。自然に興味を持ち観察する心を持っていれば充分で、あとは自然に分かってくるはずである。しかし、人間の所業は自然に対して残酷なことが多すぎる。それは、現代の人間には自然に興味を示したり観察したりする精神的余裕がなさすぎる結果から出てきているのではないかと思う。

定年を迎え、地学の教師として人生を振り返ってみると、天文気象部に所属し活動していたことが、私に多くの事を学ばせる機会になったと考えている。

天文気象部の思い出

高校 14 期 石館 弘國

母の話だと私は長野県で過ごした幼少の頃から、風や雲、雨、雪に異常に興味を持っていたらしい。窓から木々が風に吹かれてざわめき、揺れる様をいつまでも飽きずに眺めていたと聞かされた。6歳で東京都の郊外の小金井に引っ越してきた。廃材で作った粗末な家で風通しが良すぎて冬は滅法寒かった。昭和20年代の小金井はまだ雑木林や田畑が多く湧き水も豊富であった。冬の冷え込みは厳しく、当時の記録を見ると東京都の都心でも最低気温が氷点下になる冬日の日数が年間50日から60日程度あり（今は2～3日）、八王子などは100日近くもあったようである。私は小学校高学年から気温の観測を始めた。私の記憶では小金井では氷点下10度以下になる日が年間数日はあり、氷点下13度まで下がったことがある。家の中の台所の窓が凍りつき、美しい氷の華が見られることも珍しくはなかった。立川高校の天文気象部に入部したのは、この様な気象への関心に導びかれたものであった。入部したのは1959年（昭和34年）、太陽黒点観測で日本学生科学賞学校賞を受賞した翌年のことであった。ドームと様々な観測機器、そして観測の内容は高校生のレベルを超えた本格的なもので驚かされた。気象庁の「地上気象観測法」に基づいた正しい観測法を身につけるにはしばらく時間がかかった。午後4時にはNHKのラジオで毎日天気図を書いた。すばらしく美しい天気図を書く先輩のレベルに追いつこうととにかく頑張った。おかげで放送終了後5分もあれば天気図を完成させられるようになった。等圧線の形と風向の関係、そして実際の天気との微妙な関係が面白くすっかり天気図のとりこになった。6階の気圧測定室の上の屋上からは、奥多摩、丹沢、奥秩父、筑波山などが見え、富士山に沈む夕陽を見るのも楽しみだった。

私は後年神奈川県立高校の教師になったのだが、その経験と比べてみて、いかに当時の立川高校が自由で自主自立の気風にあふれていたかがよくわかった。昭和34年の秋には、あの超大型の伊勢湾台風がやってきたのだが、校長の許可を得て学校での泊まりがけでの観測をした覚えがある。今なら考えられないことだ。朝と午後の定時の気象観測の他に、昼休みにはドームでの黒点スケッチをするのが日課だった。部員が少ないので地上の百葉箱で観測を終えて6階まで駆け上がり、気圧、風力、屋上での雲量、大気透明度の測定などを一人でこなさなければならないこともあった（今でも6階まで駆け上がる夢を見る事がある）。天文気象月報を毎月出したのも良い思い出だ。気象観測、黒点観測の記録が中心だが、編集当番が独自の企画で記事を書いてもよかった。特に一年先輩の吉川氏がすばらしい月報を作っていたのを思い出す。顧問の田代先生には時々山に連れて行っていただいた。高水三山や日の出山など。南武線の矢ノ口駅近傍の山中に流星観測に行った時は、曇天で晴れるのを待つ間蚊に刺れただけという辛い思い出もある。日の出山の流星観測は二年生の時だったような気がする。山頂で各自見る範囲を決めておき、部員一同仰向けに寝て空を眺め一夜を過ごした。15期生が少なく、田中、大貫、伊藤の各氏が一緒だったかどうかどうもはっきりしないが、全部で7～8人だったと思う。楽しい思い出だ。部室にはコスモスという部誌があり、部員が自由にものを書いた。安保問題にゆれた時代で、

天文気象関係だけではなく、政治、文化、社会、人生について色々生意気に論評していた気がする。あのノートはどこに行ってしまったのだろう。部室で暮を打っていて田代先生にこっぴどくしかられた事もあった（でも先生の目を盗んで打っていたけど）。天文気象部の生活は、私の青春そのものであった。

卒業後は気象関連の道を考えていたのだが、結果的には英語の教師というほとんど気象に関係ない職業につくことになった。しかし、山岳部の顧問をしながら好きな山登りを続けていく中で天気図や観天望気の知識が大いに役立った。また、長年の訓練のおかげで寒さには強い体になり、体感でぴたりと温度をあてられるのが私の特技となっている。定年退職し自由な時間が増えたので、これからも登山を続けていきたいと思っている。

立川高校天文気象部と私

高校 16 期 笹原 眞文

「天文気象部で学んだこと」

“自然現象は待ってくれない” 天文も気象も何時その事象が起きるのか、そのときに間に合わなければなんにもなりません。また、毎日続けることが大事だということをコツさん（田代先生）から学んだため、今でも約束の時刻に遅れることは非常に苦しい思いをします。観測は同じ場所で同じ時刻で長時間続けることがデータとしての価値が出てきます。

「思い出」

- 故市川トウル君（立高卒業後早大に行き早稲田祭の実行委員をしていたが、喘息の発作で 20 歳でなくなった。）が、ラジオを聴きながらペン先の太いペンでなめらかな線で美しい天気図を書いていたこと。
- 月と土星の重なり合う土星の掩蔽観測をしたこと。
- 水銀気圧計の水銀の面を象牙の針の先に合わせバーニアを読んだこと。
- 日の出山の山頂を丸く囲み寝転がって空を見上げ、流星がどの星座からどの星座にいつ流れたかを観測したこと。
- 日照計の記録用紙を換えたこと。
- 視程観測で赤城山、榛名山が見えたこと。
- 台風するとき、屋上で雨が下から吹き上がっていたこと。
- 気象班で気象協会の座談会に参加して、初代気象庁長官をされた和達清夫さんにお会いしたこと。
- 特に思い出として残っていることは、昭和 36 年 4 月 12 日旧ソ連のポストーク 1 号で世界最初に宇宙飛行に成功し「地球は青かった。」の言葉で有名なユーリー・A・ガガーリン少佐とお会いしたことです。

ガガーリン少佐夫妻が宇宙飛行の次の年、昭和 37 年 5 月 21 日から 28 日の間日本に滞在し、テレビ各局で特別番組が編成されました。そのころ、元 NHK アナウンサーで有名であった高橋圭三さんが TBS で「圭三ショー」の司会をしていました。立高 2 年であった 5 月 23 日、この「圭三ショー」に多くの学校のクラブが招かれました。その一校として立高天文気象部全員と物理部数名が参加しました。当時 1 年の笠井潔君が代表して質問をしました。私のすぐ脇をガガーリンさんが通られ感じたことはガッシリはしているが、意外と小柄な人だということでした。その時、その頃のテレビカメラの感度のためか照明が非常に明るく感じられました。コツさんがテレビ局の人に「眩しすぎるのでもっと暗くしてくれ。」と言った事が印象に残っています。

ガガーリンさんは、この 6 年後、昭和 43 年 3 月にジェット機の飛行訓練中に事故死されました。ちなみに私は NASA に入社したので、アメリカ人で最初に地球を周回した宇宙飛行士となり 2 回目の飛行では 77 歳の最高齢宇宙飛行士として向井千秋宇宙飛行士と飛行したジョン・H・グレンさん、人類初の宇宙遊泳をしたロシアのアレ

クセイ・レオーノフさんや毛利さんを始めとする日本の宇宙飛行士各氏とお会い出来たことは、良い思い出になっています。

- 同じ昭和 37 年 10 月、文化祭 2 日目に糸川英夫先生が来られ、「太陽風、宙俣、ロケット」について講演されました。糸川先生は日本の最初の実験用ロケットであるペンシルロケットを 1955 年（昭和 30 年）東京国分寺で水平発射したことで有名です。ペンシルロケットは、この時から 50 年かかってやっと、今年 7 月野口宇宙飛行士の手で宇宙にたどりつきました。

「役に立ったこと」

私が NASDA（宇宙開発事業団、今の JAXA 宇宙航空研究開発機構の前身、昭和 44 年 10 月～平成 15 年 9 月）に入ったのは前記のガガーリンさん、糸川先生のことがきっかけになったと思います。私とその NASDA で種子島からのロケット打ち上げの企画班長をしていた時のことです。ロケットの打ち上げは発射のカウントダウンに入る段階では、たいていの作業は計画通りに行われます。計画通りにいかないのがお天気です。そこで打ち上げの GO / NO GO の判断はお天気次第、主に風の強さと風向（ロケットが地上を離れる時まわりの構造物にぶつからないため、又指令破壊した場合落下した破片が被害を及ぼさないため、ロケットが飛行中壊れないため等。）それから雷雲（ロケットの燃焼ガスがプラズマ状態のため雷が落ちやすい電子機器は雷に弱い。）ということになります。専門の気象会社の気象予報士さんが説明しますが、打ち上げの決定をする主任や責任者が皆俄か予報士になり、ああだこうだと大会議が始まります。私も昔、立高で気象をやっていたおかげで役に立ったこともありました。

また、1990 年 2 月に打ち上げた海洋観測衛星「もも 1 号 b」の時、太陽の活動が活発でした。太陽フレアに起因する荷電粒子が飛んでくると、その頃のロケットの集積回路（IC）が今ほど放射線に強くなかったため、壊れる可能性がありました。そこで平磯にある現在の情報通信研究機構太陽観測センター（当時郵政省）から宇宙天気予報をリアルタイムで知らせてもらい、太陽からの荷電粒子が来ない時をねらって打ち上げました。なお、約 11 年ごとの太陽活動が盛んな時、この太陽フレアで作られた太陽風が地球にやって来ます。その時地球にかかる起電力が大きくなりジュール熱のために大気が膨張し、低い軌道の衛星や宇宙ごみは大気の抵抗により速度が落ちて大部分大気中で燃え尽きるため、宇宙の大掃除がなされます。

1963年（昭和38年）網走皆既日食紀行

（付：1999年ヨーロッパ皆既日食）

高校17期 志茂 和男

1963年7月に立高天文気象部有志7名(3年田中直嗣、名阪満津子、西山芳治、武蔵野実、2年笠井潔、塚田芳樹、志茂和男)ではるばる、北海道の網走まで汽車、連絡船等を含めて、20世紀日本で最後と言われた、皆既日食の観測に出かけました。最近その時の北海道旅行を記録したノートが出てきたので、その中から日食観測前後の部分を掲載します。グループノートに記した高校生の拙文であり、日食観測記というにはあまり科学的記述でないため日食紀行としました。文中に“きのう（注：コツ、田代先生のこと）が北海道の紀行を書けと言ったのでこのノートに書きます・・・との記述があり、田代先生の当時の教育方針が伺えます。

（旅程）7月18日 13:30 上野発ディーゼル特急「はつかり」で出発、23:55 青森着、連絡船「大雪丸」で19日 4:37 函館着、特急「おおぞら」で旭川着。その後急行「はまなす」で上川へ、層雲峡散策のあと、急行「オホーツク」で22:45 網走着。北見からは網走刑務所に護送される囚人の団体と同じ車両に乗り合わせた。20日は網走天都山の観測場所準備等

「7月21日：「起きなさいよ」とやさしい女の人（注：泊まった旅館「網走温泉」の女中さん）の声が出てパッと灯りがついたと思ったら、もう時計は2時を少々回っていました。何だか寝たような気がしません。「ソレツ」とばかり飛び起きてすぐに支度を始めました。ポロシャツの上にセーター、その上にジャンパーを着て、カメラと筆記具、双眼鏡など持って宿屋の前庭に出ました。もう大勢の人が起きていました。2時45分頃我々を乗せたマイクロバスは天都山に向けて出発しました。観光客の中にも行く事を希望する人が多くて、もう一度バスが迎えにもどるとの事。暗やみの中を進んで天都山に着くと展望台は人で一杯。すぐにテントの所に行って（注：田中、武蔵野、笠井3氏は前夜からテントに宿営）「日食は終わりました！」というと「何言うか、起きてらあ」だってさ。もうテントのそばには望遠鏡（注：笠井君手作りの反射望遠鏡）が日の出方向に向いて立っていました。何でも組立てに時間がかかり、寝たのは11時半だったそうです。しかし寒いねえ全く。セーター、ジャンパーでもまだ寒い。さすがは北海道だなー。東の方に向けてカメラを据付けて日の出を待てどもいまだ出ず。日の出時刻の3:58になっても霧らしきものにさえぎられてダメ。しかし皆既になりそうな所は幾分晴れているようなので幾分望みを持って必死で東の水平線上をながめていた。東から何度か南に回った所に黒い入道雲みたいなものが見えたと思ったら、それは羅臼岳でした。4時を数分まわった頃の事。出ましたね。遂にその霧のような物の上に真赤な角のような太陽がその姿を現したのです。何とも言えない日の出でした。こんな日の出はむろんこれからの一生涯見られないと思います。その三日月状の太陽はそろそろと上って行きます。一応霧こそ脱しましたが、水平線近くのこと故コロナがどんなに見えるかが最も関心あるところでした。写真はパチパチ1分おき位で撮りました（アサヒフレックス100mm望遠）。まだ太陽は赤い色こそ薄れたけれども良く輝いている

ので皆既までは時間があると思っていると、本当にあっという間に輝きが消えて、その輪郭がはっきりと現れました。そしてそのまわりに黄色くコロナが現れたのです。(コロナは赤かったそうですが正直のところ僕の目には黄色く映りました)その時まわりの人の中から拍手が起こり、どよめきも聞こえました。数秒肉眼で見たあとシャッターを切り、また巻いてもう一枚そしてもう一度撮ろうとした時、「アアー」というような声がしたと思ったら、いわゆるダイヤモンドリングといわれる一瞬、つまり皆既の終わりが訪れたのです。あまりにも短い30秒。これを見に来たにしてはあまりにもはかない気がしました。本当に夢のような気のする皆既の間でした。何が何だか実のところははっきり覚えていないような気がします。問題のコロナは内部コロナしか見えず予想では紡錘形のコロナにみえるはずでしたが、実際は写真(-1)のような形に見えました。ところで地上はそれこそ人で一杯でした。日曜ということも幸いしてか地元はもとより観光客も所狭しとならんでじっとこれを注目していました。もう相当太陽が輝きだした頃テントを片付けながらお互いに「よかった、よかった」の連発でした。幾ら短かったとはいえ、この瞬間を見るために金と、時間をはたいてやって来た七人には何よりの収穫が得られたからです。本当にあの時の感激というか夢のような光景はちょっと忘れられないと思います。いよいよ寒さも深まった5時頃再び旅館に車でもどり、ここで出発の支度をしました。7時過ぎ待ちどうしい朝飯をかき込んでバスで美幌に出発しました。……」

(その後の旅程)当日は美幌峠、屈斜路湖、川湯、摩周湖等を定期観光バスで回り、夕刻阿寒湖畔着、ここで幕営、22日はバスで釧路へ、夕刻鈍行で出発、車中泊、23日午前洞爺湖着、一同昭和神山登山を行い、洞爺湖畔に幕営、24日帰路に、連絡船「羊蹄丸」、急行「十和田」を乗り継ぎ、7月25日11:11に上野着、学校に寄ってから、帰宅とあります。

昨年9月の天文気象部同窓会のあと、上記メンバーの笠井潔君(現在スイス バーゼルで音楽家、フルーティスト)の消息が分かり、インターネットに1999年のヨーロッパでの皆既日食の写真(写真-2)を掲載していることが判明、以下39年振りの彼からの便りの抜粋です。

「天文の趣味は相変わらずで1999年のヨーロッパでの皆既日食には望遠鏡を車に乗せて出かけて見ました。これは実に高校2年の時に出かけていった網走日食の2回サロス周期を経たもので不思議な因縁に感激していました。(写真はその時のものです。10cmの反射直焦で撮りました。)当日の天気予報はドイツフランスはあまり芳しくなく、前の晩にバーゼルからカールスルーエに向かうときにはザーザー雨が降っている状態。明るる朝も霧雨が降ったりしてこれは駄目かもしれないと思いつつも、テントの中で望遠鏡を組み立て待っていると時には雲に切れ目が見え始め第一接触あたりを見ることも出来ました。その後も少しずつ雲が消えていったのですが、肝心の皆既になっても雲が太陽の前にあります。これはもう駄目かと思ったら急にその雲が消えて素晴らしい紅炎、彩層、コロナが見え歓声を上げました。当日、同じ南ドイツでもシュツットガルトはザーザー雨で駄目だったとか、ホンのわずかの距離で見られたり見られなかったりで、僕はとっても幸運だったと思います。」



網走皆既日食 (志茂 撮影)

1963 年7 月



1999 年 ヨーロッパ皆既日食 (高17 笠井 潔 撮影)



高校 17 期部員

日の出山の流星観測など

高校 18 期 片岡 弘

1. 日の出山の流星観測

手元に 1966 (昭 41) 年 10 月発行の「日の出山山頂における流星観測報告書」がある。田代實教諭編集責任の報告書で、「天体観測の中で最も労多くして業績の少ない」流星観測でも「一定の時期に沢山出現する(ペルセウス)流星群」を継続して「観測すれば無駄でもあるまい」と取り組んだ様子が分かる。

1953～1954 年：立川高校 付近が明るすぎて不可能

1955～1961 年：川崎市)箕輪氏宅の観測所(読売ランド南側) やはり不適當

1962～1966 年：日の出村)海拔 902m 日の出山山頂

箕輪氏とは 1953 年に川崎天文同好会を立ち上げた箕輪敏行氏。「1948 年川崎市細山にて東京天文台の黄道光試験観測と流星の写真観測が行われた際、箕輪敏行がこれに協力」とあるので、この時、田代教諭とつながりができたと思われる。

報告書は日の出山での観測方法と結果を詳述している。「山頂三角点を中心としてその周りに仰向けに並び、天頂を含む仰角 45 度以上と、地平線を含む仰角 45 度以下とに天空を大別し、それらを等分して受持ちを決めた」計測観測者が数名、時計係 1 名、記録係 2 名、写真係数名の大所帯である。参加者は現役と OB のみで毎年 14 名、14 名、16 名、8 名、14 名と多く、当時の大イベントであったことが分かる。新入生を 4 月に迎え 7 月末実施なので、都合がよかったのかもしれない。

観測結果を簡単に記すと 1962 年は 6 時間で 524 個、1963 年は曇天で観測不能。1964 年は 6 時間で 650 個、1965 年は 5 時間 40 分で 169 個(参加者が少ないせい)、1966 年は途中曇天 1 時間を含めて 6 時間で 455 個を観測。この時はペルセウス流星群が 344 個(76%)含まれ、火玉 2 個、爆発 1 個、経路屈曲 1 個も記録している。

私自身も 1964 年から 3 回参加している。御岳山のケーブルを降りると、ほぼ水平道を山頂直下にあるスイスの山小屋風の東雲(しののめ)山荘まで約 1 時間。360 度の景観に恵まれた最適の観測地。お昼ごろに到着し、背中に敷く草を集めたら昼寝開始。夕食後は山頂に陣取って暗くなるのを待つ。やはり東京方面は夜景がきれい。本番開始は 21 時から 22 時、終了は 3 時から 4 時。「北北西、立川、0.4 秒、火球あり」というような声が静寂の闇を貫く。「入」を逆にしたペルセウスが天頂近くに来ると東の空が白んで観測は終わる。大きな充実感に満たされて東雲山荘の朝寝に向かう。

2. 部活動を活性化する仕掛け

部活動の活性化は部長の大きな任務。春の新入生勧誘に始まり、各種イベントをいかに配置し盛り上げるかで部の盛衰は決まる。日本人の宇宙旅行で部員が増えかもしれないが、それは天の助け。それよりは顧問の熱意と、日常活動の充実が大切である。

天気予報大会は年に数回実施した記憶がある。大胆にも週末の土曜日に、翌一週間の天気予報をして優劣を競った。毎日のように結果が出るので、観測にも身がはいり、部室に来る回数も増えるという次第。観測だけだと受身だが、頭を使えるのがいい。

COSMOS(宇宙)という大学ノートが部室に置いてあった。これは何でも好きなことを書

ける交換日誌で、紙媒体ではあるが、その後のパソコン通信のフォーラムやインターネットのブログ人気につながる「仕組み」が、当時すでに存在したことに驚きを感じる。1963年の入部時には15冊目、卒業時には24冊目程だったか。冊数を増やすことに随分と貢献したことを覚えている。先日のぞいた部室には、100冊目の存在を示すスナップ写真が存在するが、現物はない。昭和30年代の参考図書がそのまま残っている部室から、100冊ものノートが消えてしまったのは不思議である。

3. 二十世紀最後の皆既日食

大きな天文現象があれば、部活動は一気に盛り上がる。入部早々の1963年7月21日には日本では二十世紀最後の皆既日食が北海道で見られ、2・3年生が網走までかけて立派な写真を撮ってきた。居残り組は、煤で黒くしたガラスの破片で太陽を見ただけ。この時参加した笠井潔さんは、現在フルート奏者としてスイスのバーゼルに居住し、いまでも現役で活躍中。このあたりの経緯は17期の志茂和男氏の投稿に詳しい。

4. 部活動への貢献と感謝

気象観測に欠測は許されない。一人の時は、最初に6階塔屋にある気圧計を測定し、脱兎のごとく階段を駆け下りて百葉箱に突進する。おかげ様で足腰が強くなった。ある時は、学校へ行く気がせず終点の高尾駅まで行き、高尾山中腹のパララーでグズグズと遊んだ(今で言えば不登校)あとも、午後3時の観測時刻にはきちんと登校して、そろそろと下校中の同級生に不思議がられたことも。我ながら律儀なこと。

1964年1月4日には、青梅線立川駅でガソリンを満載した貨物列車が暴走して駅に停まっていた電車に衝突、駅周辺の商店街を巻き込む大火災が発生し、中央線がストップ。冬休み中なので「残念ながら欠測か」と対応策を考えるうち、立高近くに住んでいた3年生の名阪満津子先輩を思い出し、事なきを得た。あらためて感謝。

天体の方も、先日の全期同窓会の時に「随分と太陽観測に熱中していたね」と佐川君には冷やかされたが、持参の弁当は3時限後に早弁し、昼休みの1時間はたっぷり観測に費やす毎日だった。文化祭では「流星を見よう機」の企画が途中挫折。夜光塗料の星座は良くても、流星を飛ばす仕組みがとうとう完成できず悔しい思いをした。

これらの部活動は、その後の人生に大きな影響を与えている。コツ!コツ!と努力する、データを集めて分析する、部員をまとめて目標を達成する。勉強とは別な世界で、これらを楽しみながら実践できたことは、その後の大学生から企業人としての生活に大きなプラス。後輩の皆さんも、ぜひ何かに没頭する時期を作って欲しい。

そうそう天気図を描けるのは特技である。山の仲間はずい分と重宝された。また月報作成ではガリ版切りに精を出したので、筆圧の一定した読みやすいマル文字に変わり、これは大学の立看板で役立った。流星の継続時間を0.1秒単位で数えるのに「だるまさんがころんだ」を繰り返し練習し、これも隠れた特技になった。

この場を借りてお詫びも一言。当時、部室の扉を開けると、上から水が落ちてくる仕掛けを作ったところ、なんと犠牲者は先輩。せっかく彼女を連れて部室を訪ねたのにずぶぬれ。でも怒らず、帰り際にキャンデー代までいただき恐縮・赤面の至り。

何せいたずら好きな部員だったので、田代教諭には沢山叱られ(背筋にどっと冷や汗)たまに褒められ、ずい分とお世話になった。謹んでご冥福を。

初めて見た彗星 - 池谷・関彗星 (1965f)

高校 19 期 立川 守

大学で化学を専攻して以来「趣味は天体観測」と言うのが恥ずかしい程の時折の楽しみになってしまいました。それでも新聞紙上を賑わす天体イベントなどがあると、家の近くの空き地へ 8 インチのセレストロンなどを持ち出して、自分で楽しんだり、家族を呼んで無理矢理覗かせてたりしています。単身赴任生活が始まって以来ここ数年、そんなことともご無沙汰していますが。

私が部員だった時代(1964-67)は高度経済成長期前でまだ日本の夜空が暗かったせいか(実際は、既に明るくて、日の出山の星空は多摩川を渡った向こう側の日野、私の出身地、でさえ全く望むべくもありませんでしたが)日本が彗星探しのメッカであった時代です。倉敷の本田実さんはまだ現役で、高知の関勉さんと浜松の池谷薫さんが活躍されていた、正にその頃です。お二人の活躍の象徴ともいえる池谷・関彗星(1965f = C/1965 S1)が発見されたのは私が高校 2 年の秋。10 月 21 日太陽に大接近し、その様子は乗鞍のコロナグラフで観測され(立高の 10 センチでは何も見えませんでした)、明るいほうき星の出現が期待されました。その後太陽の西側からこれぞ彗星と言えるような尾を引いて現れたのは 10 月末から 11 月の初めでした。10、11 月は晴れの多い季節ではありますが、本当に澄んだ空はなかなか来ず、未明に起き続けること 4 日目、11 月 1 日未明、東の空に長い尾を引いた彗星の姿を見つけた時の感動は今でもはっきりと思い出します。アストロ光学の 10 センチの反射赤道儀を家の北側に広がる多摩川の河川敷に運び出し、 $f=75\text{mm}$ 、 $F4.5$ のじゃばら式、白黒のブローニーフィルムという今では考えられないようなカメラを乗せた赤道儀の 10 分間追尾で写真をとったのを懐かしく思い出します。DPE 店から戻ったフィルムには、10 月 30 日未明に 12 分間露光したコマにも尾が写っており、注意すればもっと早くから観測できたのにと残念がったのを思い出します。11 月 1 日の写真を月刊誌「天文と気象」(現在の「月刊天文」)に送ったところ、その後の池谷・関彗星に関する同誌の記事の中に、写真は出なかったものの、「東京での近日点通過後の初めての観測」として小さく紹介してあり大喜びしました。その頃の日記帳とアルバムをみると、先輩の若月さんにお借りしたアサヒペンタックス SV で 11 月 3 日、4 日、6 日に彗星を撮影しており、その後 11 月 14 日までこのカメラでの星空の写真がありました。無理をいってお借りしたのではないかと思います。40 年遅れですが、お礼申し上げます。これが私の見た初めての彗星でした。

その後も明るい彗星が現れると双眼鏡や望遠鏡で眺め、あるいはカメラを持ち出して写真を撮って楽しんでいます。最近ではヘール・ボップ彗星(C/1995 o1)。記録的価値などとは全く無縁の写真を 97 年 1 月の寒い未明に何日間か撮影、そして 3 月、4 月には朝と夕方、何度となく、双眼鏡とカメラで楽しませてもらいました。1986 年のハレー彗星は知名度ゆえ何度も見ましたが、都会とはほど遠い神奈川県西の端に近いところからも残念ながら肉眼ではあるかないか程度、双眼鏡でやっと球状星団状の姿が見えたのみでした。それでも、やはり元天文ファンとしては、話の種だけにでも、と、晴れていれば、就業時

間後、勤務先の研究所の建物の屋上から観望し、会社の友人には、この有名な彗星を双眼鏡で見せて楽しみました。

しかしながら、明るい日本の空のもとでは、かのヘール・ボップ彗星でさえボヤーンと広がった光の雲程度にしか見えず、りっぱな尾をたなびかせた彗星は池谷・関彗星以来見たことがありません。ただ、一度だけ、これよりずっと明るい彗星を見る機会がありました。1968 - 1969 年頃の大学のストライキに嫌気がさし転校したカンサス州の小さな大学のある田舎町でみたベネット彗星 (C/1969Y1) は空の暗さとこの彗星の明るさゆえ、圧巻でした。中間試験の勉強で徹夜し、寮の外にでてみると、東の空に太く明るい光の帯のようなベネット彗星がありました。あまりにも立派なその姿に興奮して近所に住む天文ファンの大学教授に知らせようと友人と未明の道路を急いでいると、パトカーが来て、乗るように言われ、彗星のこと、その教授のことを説明して、教授の家の前まで乗せられて行ったのを懐かしく思い出します。

彗星探しをすることを夢見ていた高校生は望遠鏡に代えて試験管を手に、彗星の代わりに化合物や触媒を探す仕事に従事してしまいましたが、新しいものを探し当てる喜びには共通するものがあります。しかし、そんな仕事もあと、残すところ数年。彗星探しを始めることはとても無理そうなので、時たま現れる彗星を観望して楽しむことで満足することにしようと思います。

第3章 “ さとしぞ永き ” <自主・自立の活動>

田代 實先生の思い出

高校21期 立花 知彦

「田代先生は生きておられる」と物理の中山先生からお聞きしたのは平成12年のことでした。私は高校21期生ですから卒業してから30年を越えています。在校時もかなりのお歳でしたから漠然と「もう生きてはおられない」と思っていたものでした。

昭和41年、立川高校に入学すると「化石のような」と称されるものがいくつもありませんでした。理科室に並ぶ府立二中というラベルの標本、いつ床が落ちるかもしれないといわれた講堂などなど。

その講堂で入学式を終えるとすぐに天文気象部に向かいました。天文のことが大好きだったので。すると先輩諸氏がニヤニヤしながらここには「化石のような」先生がいる、というのです。「コツ」先生こと田代實先生。天体望遠鏡のボルトをプライヤで回した部員が破門になったという噂におどかされて会いに行くとやはり気むずかしそうな人でした。東京電力に持っていく気象観測データの読み合わせをしなかったとか、基本的な行儀についていろいろ叱られた思い出ばかりです。

田代先生にお会いしたい、というのは高校時代という人生の出発点にもう一度立ってみようかなと思いのかもしれない。

青梅の特別養護老人ホームに田代先生はおられました。年齢も90を越え、車椅子での対面でしたが、30年以上も前のことをはっきりと覚えておられました。あのときは東大の入試がなくなってたいへんだったとか、当時の学生が天文台でどうしているとか、私の母親が差し入れた饅頭の味まで語ってくれました。穏やかな笑顔で話しをする田代先生に本当はこういう人柄の方であったのでしょうか。ただいいかげんなことには厳しかったのです。

その後、数ヶ月で先生がお亡くなりになったことを人づてに聞きました。運命のようなものが私たちを最後に会わせてくれたのだと思います。「信義を重んじること」、田代先生の口癖のようになっていて「耳にタコ」のような教えでしたが、年が50を越えて振り返ってみればその言葉の重さがいま身に沁みます。

天文気象部のこと

高校 22 期 伊藤 来太郎

この度ご連絡を頂戴して、思わず余りの昔のことに、ふと瞑目してしまいました。

35 年前に卒業し、大学を出てから就職した先が銀行であったことから、初任地こそ三鷹であったものの、その後は関西、海外、日本橋を行ったり来たりの生活で、この 1 月に銀行を退職し、第 2 の職場に落ち着いて初めての「地元」での生活を再開することができました。そんな折にご連絡を戴き、高校の 2 年から 3 年にかけて天文気象部に席を置かせて頂いたことを少しずつ思い出している次第です。

はきはきした生徒でなかったせい、物理の授業では、田代先生からよく叱られたような気がします。一方で天文気象部では顧問の田代先生に直接ご指導いただいたような記憶が余りなく、部での活動はおぼろげではありますが、学生時代を通じて最も楽しく、思い出の多い高校生活の中の幾つかの風景として、浮かんで来るものがあります。

始めに部室でラジオ第二放送の気象通報を聞きながら、天気図を作成する訓練をし、自分で作成したもので、天気を予測したのは本当に楽しい時間でありました。これは、その後大学で山登りをし、合宿で縦走する際に実地で役に立ったものでした。今でも、偶々車のラジオから気象通報が流れたりしますと、ふつとその事を思い出したりします。最近、観測点が当時と少し違うようにも思いますが、気のせいでしょうか？

次に、短期合宿のような形で、学校に集まり、夜間の流星観測をしました。流星はそれまで本当にたまに見えるもので、見えるのが珍しいことと思いついておりましたが、先輩から「一晩に平均で 60 個見える」と教えられ、俄然天文に興味を深くした次第です。うろ覚えで間違えであれば、大変失礼なことになりますが、その先輩は山田さんというお名前であったと思います。それからの人生の中で折に触れては夜の空を眺めるようになったのも、その時の先輩のアドバイスが大きかったと感謝しております。最近もペルセウス座流星群を見た時には、翌日が仕事の日にも拘らず、単身赴任の社宅のベランダに夜中に寝転んで天体ショーを楽しみました。そんな喜びを与えて頂いたのもあの時の流星観測だったように思います。

当時の校舎の屋上で確か美術室の上に銀色に鈍く輝く天文台があり、校外からも良く見えていたような気がします。外から見るとあまり大きくは見えませんでした。中に入るとかなり大きなものだったように思います。卒業以来、立川駅に下りることもなく、ただ通過することが数度ということで、母校の門を潜ることもありませんでしたが、立川の街もご多分に漏れず随分と変わっていることでしょうし、校舎、講堂が新築されたということもいつか聞いたような気がします。機会を得て、是非訪ねてみたいと思います。

私の社会人生活は、オイルショック後の高度成長の名残の時代から、バブルと気づくことなく奔走した日々、そしてバブル崩壊から金融危機を経て金融再編と思えば、誰でも考えさせられる時代を 30 年かけて駆け抜けて来たように感じられる。経済も金融も会社も有為転変、一つとして恒久で変わらぬものはないとの実感を持ったとも言えます。

こうした経験を経て、いま高校時代を振り返ってみると、学んだこと、身につけた知識

で変わらないものとして思い返せるものは、このような時のものではないかなとの感想に至ります。

思い返すままに書き付けましたが、最後に、立川高校天文気象部が今までの永い輝いた歴史に加え、今後も益々発展されることをお祈りしまして筆を置きます。



田代先生退職記念の会 1969年3月 百草園にて

富士山に沈む太陽

高校 23 期 榊原 幸雄

天文気象部での観測

太陽は 11 年の周期で活動が変化しています。私が立高に在学していた 1968～1971 年頃は、ちょうど太陽活動が活発な時期で、天文気象部の仲間と黒点観測を熱心に行っていました。入学した 1968 年は、顧問の田代實先生の指導が厳しく、夜の観測は禁止され、太陽観測が天文活動の殆どを占めていました。晴れさえすれば、昼休みに屋上の天体ドームに上がり、競うように観測をしました。屋上への学生の立ち入りはできなかつたため、鍵をもっていた我々は、ちょっとした優越感をもってドームへと向かいました。ドームのなかには、木製三脚にのった重錘式運転時計付き 10cm 屈折式赤道儀が据え付けられていました。今では、10cm クラスの望遠鏡を個人所有できる時代になりましたが、当時は大型の望遠鏡に属していて、自由に利用できるのが本当に嬉しかったものです。

気象観測は、午前 8 時と午後 3 時の定時観測を行っていました。内容は、天候・風向・風力・気圧・気温（最高、最低、地表、地中）・湿度・蒸発量・降雨量・積雪量・日照時間・視程・雲量・雲形・気象現象などです。立高は、富士山の絶好の展望台となっていました。毎日の気象観測のときは、6 階の気象観測室屋上から、視程調査で富士山の見え方を観測していました。現在は、東京から富士山が年間どれ位見えるかが大気汚染の指標としてとして重要になっています。当時から随分と先見の明のある観測をしていました。

「富士山頂に沈む太陽」が「天文と気象」1970 年 4 月号の表紙を飾る

太陽黒点観測と立高天文台から見える富士山を結びつけたのが、富士山に沈む太陽の観測でした。これまで立高祭では発表していましたが、1970 年 1 月 6 日に撮影した 6 枚の連続写真が「天文と気象」1970 年 4 月号の表紙を飾ることになりました（「天文と気象」は、現在「月刊天文」となり、天文専門誌になっています）。表紙撮影の経緯が、エピソード欄に載っていますので再掲します。

富士山頂へ沈む太陽

私たち都立立川高校天文気象部は毎年冬至をはさんで 12 月 10 日前後と 1 月 5 日前後に起こる「富士山頂へ沈む太陽」の観測を続けてきました。観測地点は立川高校天文台（東経 9 h 17 m 39 s、北緯 35 度 41 分 43 秒）です。この観測に関する詳しいことは「天文と気象」1969 年 10 月号に掲載された田代實先生執筆の「富士山頂に出没する太陽」を参照してください。

今回の「富士山頂への日没」の日は、理科年表によって 1970 年 1 月 4 日と判断しました。そして、1 月 4 日から 3 日間の日没観測を予定し、日没位置がしだいにずれていくのを撮影する計画でした。しかし、4 日は曇ったため中止。5 日は快晴でしたが運悪くちょうど富士山頂付近に積雲が発生したために、またも観測を断念せざるを得ませんでした。最後の 6 日は幸いなことに雲ひとつない快晴に恵まれ、やっと富士山頂への日没の観測をすることができました。今月の表紙の写真はちょうど富士山頂に太陽が沈む 1 月 4 日から 2 日間たったため、正確には太陽は山頂には沈まず、山腹を滑り降りるように沈みました。富士山の輪郭がはっきりしませんが、これは黒点ができるように太陽に露出をあわせたため

です。写真には、レーダと山頂の風に舞い上がる雪けむりも写っています。

撮影データ

10 c m屈折式赤道儀 (5 c mに絞る) f = 150 c m直接焦点 アサヒペンタックス S P
ボディー フィルターND 8 フジカラー R100 露出 1/1000 秒

スライド (カラーリバーサル) フィルムでの撮影は当時としては貴重な体験でした。素晴らしい発色の写真が仕上がってきた時の喜びは今でもよく覚えています。改めて撮影時のデータを見て、高校時代にこんなに贅沢なシステムで撮影できたのだと驚いています。また、高価なフィルムだったため、クラブ活動の予算要求のときに、生徒会からはなぜ高いフィルムが必要なのかを問われ、スライドフィルムの利点を縷々説明したことも懐かしい思い出です。

「天文と気象」に掲載された田代先生の記事から

この原稿を書くために、東京都港区の虎ノ門天文会館で「天文と気象」のバックナンバーを探していて、田代先生が立川高校を退職後に執筆した2つの記事を見つけました。1969年7月号「学校教材として天体望遠鏡」と前掲の1969年10月号「富士山頂に出没する太陽」です。

「天文教材としての天体望遠鏡」では、“直径 10 c m位、焦点距離 100 c m赤道儀式屈折望遠鏡で時計仕掛があり写真撮影装置、太陽撮影装置の付属してあるものを是非おすすめしたい”とあります。反射望遠鏡はメンテナンスの費用と手数がかかるため購入すべきでないとしています。今回、OBが寄贈した天体望遠鏡は、口径は15 c mと大型になったものの、ほぼ先生の推奨する機能を満たしていることとなります。また、結びで“筆者は1947年1月1日から現在まで23年余り、連続して直径10 c m焦点距離100 c m (注 : 実際は150 c m) の赤道儀式屈折望遠鏡時計仕掛付の望遠鏡で、太陽黒点の観測を生徒に実施させてきたのである。今後もなお続けられことであろうことを宣伝させて頂き、日本全国の小・中・高校の天体望遠鏡が、何等かの観測のため、有効に活用されんことを希望して筆をおく”と述べています。立高のドームに新たに望遠鏡が設置され、太陽黒点観測が再開されたことを最も喜んでいるのは、田代先生かも知れません。

「富士山頂に出没する太陽」では、先生が富士山観望の統計方法を提案しています。在学中に直接指導していただければ、富士山の視程観測がより充実したと思うと残念です。また、観察の意義として、“一般に自然観察というものは、ある一つの主目的に向かって観察の努力を積んでいくうちに、それからいろいろな副産物的な体験が得られるものである”と述べています。例として、太陽の出、または入りの方向が毎日どれだけ変わって行くかはっきり体験できることなどを挙げています。実際に、私達は観測を通して、理科年表の見方やJ J Yの受信、一眼レフカメラの扱い方、そして望遠鏡の直接焦点撮影などを学び、日没位置の変化や太陽が富士山の斜面を滑るように斜めに沈んでいく様子をじっくりと体験できました。

2005年1月7日に新しい望遠鏡の設置作業が行われ、私も立ち会いました。設置が無事終了して屋上から外を眺めると、35年前と同じように太陽が富士山の斜面に沈もうとしていました。立川駅周辺の街並みは一変し、立高の校舎は新しくなりましたが、この光景だけは昔のままに残っていて胸が熱くなる思いがしました。

清里天体観測所20周年

高校 23 期 榊原 幸雄

天体観測所をつくりたい！

大学では天文研究部に所属し、社会人になっても天体写真を中心に星の趣味を続けていました。星空撮影のために、新月前後の週末に山梨方面まで出かけていましたが、車での移動はつらい思いでした。そんな時、1980年インド日食や1983年インドネシア日食などに参加した星仲間の集まりのなかで、一緒に観測所をつくろうという機運が高まりました。八ヶ岳周辺には、既に天体観測所を持っているグループができていました。八ヶ岳天体観測所や新堂君（高25）の富士見天体観測所は、実際に見せてもらい大いに刺激になり、設計・運営の参考になりました。

さて、実際の観測所をつくるとなると、当時は若かった30歳前後のメンバーにとって、金銭面を中心にいくつものハードルを越えなければなりません。新聞の別荘地広告を見てはため息をついている時期が続きました。天文ガイドに「星の村」の広告が載り、小淵沢町の予定地を一番で予約したものの、計画が中止になってしまったこともありました（後に、「星の村」は大泉町につくられました）。紆余曲折がありましたが、ついに、清里高原のペンションの敷地を借りることができ、1985年夏に建設が始まりました。清里は、立高時代に立川市の山荘を借りて夏合宿をした懐かしい場所です。

ハレー彗星の接近前に観測所が完成

観測所は1985年10月に完成しました。基本的な設計は、富士見天体観測所と同じです。8畳の居室と中二階の観測室で構成されています。観測室の下は準備室になっています。観測所は9畳分（4畳半×2）あり、コンクリートのピラーが2本設置されています。スライディンググループを開くと、眼下に広がるトウモロコシ畑の向こうに八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、飯盛山、金峰山などの山々を見ることができます。

主要な機材は、25センチ反射赤道儀（アスコSX-260M+25センチ反射）、16センチ多目的赤道儀（タカハシJP）、12センチ双眼望遠鏡（ニコン20×120）です。1986年3月のハレー彗星接近は、期待したほど明るくはなかったものの、暗い夜空と素晴らしい観測所に恵まれ、大いに堪能することができました。

今年は観測所20周年

建設からあっという間に20年経ったというのが実感です。この間、重かったスライディンググループの改良、機材のメンテナンス、ネズミ被害対策、外壁の塗り替え、雑草対策などを行いました。運営面では、メンバーの退会、新メンバーの入会など様々なことがありましたが、無事に観測所を維持することができました。そして、20周年を機会に、タカハシの新型赤道儀EM400の導入を予定しています。

清里の観測所建設がきっかけとなり、近くに観測所をつくったメンバーが私も含めて3名います。2人は本格的な観測所ですが、私の場合は小さなログキャビンと大型双眼望遠鏡（フジノン40×150）用の2畳観測小屋ですので、大型望遠鏡が使いたいときは、清里まで行っています。今後も、清里を中心に星仲間のネットワークが広がっていくのを期待しています。

天気部の思い出つれづれ

高校 24 期 鈴木 正平

部室

当時の部室は二階西側にありました。ノートや本がちらばった、穴だらけの大きな木の机。天文気象月報印刷用の、細字をクッキリ出すため、ほとんどインクをつけていない謄写版印刷機。なぜか、なんとゼンマイ式、竹針を削って聴くSPレコードプレーヤーが置いてあり、チゴインエルワイゼンを聴くことができました。のぞき込み式ファインダーの旭フレックス(ペンタックスの前身)やジャバラ式カメラなんて珍品もしまっており、伝統を感じたものです。(塔の観測室から「見える見える土星の輪が」の五藤光学1号機が見つかったときはさすがにびっくりしました。)

暖房が無いので、冬はかじかんで、指がうまく動かなくなりました。時間さえあれば、こんな部室に入りびたったものです。雑然とした部屋の中で「火星とその観測」(佐伯恒夫著)といった本を読みあさったのも忘れられません。

合宿

2年生の時の清里合宿。人気のないスケートリンクで体験した、自分の手のありかもわからない真の闇、間近に迫ってくるような星粒は衝撃的でした。私にとっては初めての、本格的な星空との出会い。これが、その後、野辺山へ、入笠山へと暗い星空を追い続けるようになる出発点となりました。(そういえば、あの暗さ、もはや本州中部では、どこへ行っても見ることはできないのは、本当に残念です。)

富士山頂への日没観察

きちんと調べずに計画をたてて、大失敗したことがあります。

2年生の時、12月の観察で、前回=1月の観察時刻にあわせて計画をたててしまいました。「太陽が同じ位置に沈むのだから、沈む時刻だって同じはずだ」。均時差があることをまったく忘れていたのです。まだ時間があるとのんびりしてしていたら、誰かがとんできました。「太陽がもう沈みそうだ!」。「うそだろう」とのぞいてみたら、ほんとに沈んでしまいそうで、おおあわて。何しろ、太陽の位置は同じでも、1時間も日没時刻が違うのですから。

以後、均時差については身にしみついて、忘れることはありません。

サンスポット

本当に針のようにとがらせた鉛筆で黒点を写し取るので、鉛筆の研ぎ方も一つの技術でした。芯を紙にこすりつけて研ぐ人。空中にうかべて研ぐ人など、いろいろな流儀がありました。

私たちの時代は、赤道儀の重垂式運転時計がうまく働かず、フリークランプで、望遠鏡を手でコントロールしながら観測をしていました。今考えると極軸がずれていたのかもしれません。

気象の定時観測。

塔の六階窓から顔を出し、百葉箱にむかって「時間」と叫ぶ時には、何ともいえない不思議な優越感がありました。そのあと、他には誰も入ることができない塔の屋上で雲量などを観測する時の、何ともいえない開放感も忘れられません。

そういえば、私が1年の時までは、まだ立川基地に米軍機が離発着していて、グローブマスターといった大型輸送機が目の下という感じで飛び立っていました。立川駅南口には立高の塔より高い建物はなく、立川基地まで見渡すことができ、塔の上の四角い囲いが第二次大戦の時の高射砲台の跡、ということも実感できたものでした。

1970年前後は、気候が「寒冷化」に向かっているのではないかと、といわれた時期で、冬ともなれば、5時頃校門を出る時には、水たまりにすでに氷が張っていたのも、今では考えられません。（平均気温は、どのくらい上がってきているのでしょうか？）

気象観測にまつわる出来事

当時は、気象観測を正月も含めて一日も欠かさず続けていましたから、その間にはいろいろなことがありました。

学園紛争と定時観測

私が1年の1969年秋、学園紛争がおこり、約一週間にわたって校舎の一部がバリケード封鎖されました。その間は、講堂や校外での生徒集会や学校集会などがつつぎましたが、観測は問題なく続けられました。問題はその後で、少しの間休校し、校舎はロックアウト（生徒立入禁止）とすることが決まってしまったのです。観測継続の危機です。

しかし、それまでの実績で「当局」の信頼があったためか、先輩の交渉がうまくいったのか、天気部の気象観測だけは、例外として立ち入りが許されることになり、私も観測を担当することになりました。このときほど気象観測で緊張したことは無いように思います。素性がすぐわかるように、学生服を着て学校に入りましたが、私が学生服を着て登校したのは、入学式・卒業式を除けばこの日だけだったと思います。

旧体育館放火事件

その日は日曜日で、私と、たしか稲葉正樹君が観測当番でした。朝の観測を終えて、私はいったん外出し、稲葉君が一人学校に残りました。私が少し早めに戻ってみると、正門のあたりが消防車やらなにやらで騒がしいのです。聞けば、旧体育館が放火で焼けたとのこと。ちょうど稲葉君がドームで観測中で、投影された太陽面に集中していると、いきなりサイレンが鳴り、煙が見えたと思った覚えがあります。私が屋上に上がってみると、校庭の光景が一変していました。旧体育館が焼けてなくなっていたのです。

この日登校していた生徒は私と稲葉君の二人だけ、当然この二人に疑いがかかることになりました。

翌日、授業中に、別々に体育教官室に呼び出され、警察官から、当日登校した理由や（そんなのはっきりしてるじゃないか）、当日の行動、お互いの人物像などを詳しく聞かれま

した。当日変な人を見なかったか、といったことはあまり聴かれた覚えがないので、おそらく二人（特に一人学校に残っていた稲葉君）が「重要参考人」とされてしまったのだと思います。細かいところは忘れてしまったのですが、最後に 10 本の指全部の指紋をとられたところははっきり覚えています。ゴムのスタンプ台に当ててから、紙の上で指をぐるぐる回すのです。私の指紋を警察にずっと保管されてしまうのはいやでしたが、とても拒否できる感じではありませんでした。

まもなく、放火は近所の子供がやったことと判明し、私たちは、その後、再び事情を聴かれることもありませんでしたが、あの指紋はきっと今も、警察のデータベースの中に残っているのでしょう。

観測所にて

高校 24 期 鈴木 正平

今、入笠山天体観測所でこれを書いています。

外は霧。晴れば小惑星観測を行なう予定です。

明日は、榊原さん、新堂さんなど、天気部時代の仲間達が遊びに来てくれることになっていて、楽しみです。

入笠山天体観測所は、長野県富士見町の南、入笠山の山頂近く、標高 1810 メートルの地点に、50 人ほどのアマチュアが共同で建てた観測所。私もそのメンバーの一人です。

まもなく開所 20 周年を迎えるこの観測所、50 センチ反射、30 センチシュミットカメラ、25 センチ反射 etc. と、機材はかなり充実しています。とはいえ大型機材はほとんどが自作、使いこなすのには結構努力が必要ですが、それがまたアマチュアの楽しいところでもあります。メンバーには、ただ星を見ていれば満足な人、星よりも機材の設計や自作が好きな人、ひたすら新技術を試しまくっている人、いっしょに酒を飲むのが楽しみな人(!) とさまざまな人がそろっていて、観測所の魅力の一つとなっています。

私は、この観測所で、平澤正則氏(学生時代の先輩)との共同観測で、「Tachikawa(立川)」などの新小惑星を発見してきました。

そして、天体をやる以上、「観測」をやりたい、という気持ちで、現在も天体観測を続けています。(附録 5 カラー写真集の観測所写真をご参照ください)

思えば、私が「観測」ということを教えられたのは立高天気部でした。

「観測」というのは厳密なものでないといけない、と頭では知ってるつもりで、その「観測」にあこがれて入った天気部でしたが、特に気象観測は、私の想像を絶していました。

毎日きちんと観測時刻をそろえ、最小目盛りの 5 分の 1 までを読み込む。そこまでは、

まあ予定の範囲内だったのですが、その観測の後には、めんどろな後処理がまっっていました。水銀気圧計などは、個々の個体差の補正に加え、温度補正、海面補正、さらにもう一つ何か補正があったと思います。水銀気圧計、アネロイド気圧計、温度計1と2、乾湿計、最高温度計、最低温度計のそれぞれについて、まだ電卓さえない当時、補正表を見ながら一つ一つ補正するのはたいへんな作業でした。これらをまとめて観測月報まで作らなければ観測したことにはならない！。特に後処理は私の苦手分野で、苦戦したことを覚えています。

天体観測についても、サンスポットまたしかり。流星の集団計数観測でも、雲量補正・視野補正はもとより、一人一人の係数補正も必要とあって(これは実際にはやりませんでした)、データを出すというのはなんと大変なことかと痛感させられたものです。

ですが、いや、それだからこそ、チャンスがあれば「観測」をやりたい、という思いは、卒業後も強く残りつづけました。

そんなわけですから、入笠山天体観測所が立ち上がり、機材が一通り使えるようになると、平澤氏と私は、「ただ写真を写すだけではなく、この機材を生かした観測をしたい」と考えるようになりました。はじめは回帰する周期彗星の検出を、ということから始めたのですが、観測所の仲間から様々な支援を受ける中、ついに新小惑星の搜索を行うようになったのです。

新天体の発見、それは、たとえ天文学的にはほとんど意味のない自己満足にすぎなくとも、世界中の観測者と競争しながら、世界で初めて自分がこの天体をとらえた、というのは大きなよろこびとなります。

ここ数年、プロの天文学者による、大型のプロ機材をつかった組織的な掃天が開始され、私たちのささやかな観測は、なすすべもなく閉店休業に追い込まれてしまいました。

このままでは悔しい。この一年半、私たちは、新しい観測機材を導入し、じゃじゃ馬で今まで観測には使いこなせなかった主砲 50 センチ反射を使う、あらたな観測を準備してきました。

そして、晴れれば今夜にでも、20 等級以下という、これまで手の出なかった世界の観測に踏み出そうとしています。海王星外天体(トランスネプチューンオブジェクト)という、高校時代には存在さえ知られていなかった種類の天体を観測しようとする、この新たな試みがうまく行くかどうか、それはまだわかりませんが、高校時代からの「観測」の夢を、さらに推し進めてみたいと思っています。

今、入笠山天体観測所。

外は霧。晴れれば小惑星観測を行なう予定です。

明日は、晴れるかなあ。

ジャコビニ流星の飛ばなかった夜

高校 25 期 新堂 泰伸

1. 天気部との出会い

私が立川高校に入学し、天文気象部と出会ったのは昭和 45 年（1970 年）のことでした。同じ中学から入学した友人が天文気象部に入るといので主体性のない私も一緒に入部した、というのが入部の理由です。友人は 1 学期が終わると顔を出さなくなり、それまではそれほど天文に興味のなかった私が惰性的に残留したのでした。

2. ポスト田代時代

入学の 1 年前の 1969 年春、長く立高の天文気象部を指導されてきた田代先生が退職されました。つまり私たちはポスト田代時代の第 2 期生ということになります。田代先生の威光はまだまだ強く残っており、先輩方の会話にもしばしば登場していました。立高祭に先生が見えたときには「コツが来た！」と逃げ惑う先輩もいた程で、何も知らない私たちにはただただ可笑しいばかりでした。

またこの年は学園紛争の直後であり、立高祭のときに鈴木正平さんから、「バリスト派が来るかもしれないから屋上で見張るように」と言われて緊張した覚えがあります。

当時夜間観測はできなかったため、通常の観測は黒点観測と気象観測に限られていました。夏の合宿（清里）でようやく夜間の観測を行うことができ、今はないスケート場で寒さに震えながら、初めてペルセウス座流星群の観測を行ったのでした。

1 年生の冬には 10cm の望遠鏡を購入し、同期の人々と月や火星のスケッチを競い合ったのも懐かしい思い出です。

3. ジャコビニ流星雨

天気部在籍中の 3 年間で最大の天文現象といえば、やはり 1972 年のジャコビニ流星雨騒ぎでしょう。残念なことにこの天文現象は、「世紀の空振りに終わった」とか「幻の」とかいう形容つきで記憶に残ることになりました。

私たちが 3 年生となった 1972 年になると、雑誌や新聞などでジャコビニ流星のことが頻繁に取り上げられるようになり、特集号なども発行されるようになりました。

ジャコビニ流星群は 13 年周期で活発な活動を示し、1933 年と 1946 年には流星雨が見られたことが知られていました。この年、日本時間の 10 月 9 日午前 1 時頃に地球が母彗星であるジャコビニ・チンナー彗星の軌道から 11 万 km の位置を通過するとされ、流星の大量出現は必至と予想されていたのでした。ただ、前回の 1959 年には活動が見られなかったこともあり、私は「今回は出現しないのではないか」というインチキな予想をコスモスに書いたことがあります。

天気部内でも観測に遠征しようという機運が高まってきました。2 年生が丹沢のはずれの高松山を観測地に決定し、準備が進められました。私も 4 連カメラを製作し、撮影の準備を整えました。

さて、10月8日は体育祭でした。私は騎馬戦で額にこぶをこしらえ、痛い思いをしながら夕刻観測地に出発したのです。タクシーが予定した地点まで入ってくれず、長い距離を歩くことになったため、高松山の山頂についたのはかなり遅くなってしまいました。すでに先発隊が体育祭を途中で抜け出して観測準備を行っていましたが、空は雲に覆われ、観測は絶望なのは明らかでした。やがて雨も降り出し、結局一つの流星も見ずに諦めてテントの中で眠ってしまいました。

明るくなってラジオのニュースが天候の比較的良かった北の方でも流星は殆ど見られなかったことを伝えていました。一同空しく帰途につき、いわば生涯最初の挫折感を味わったのであります。この日、日本中で多くの天文ファンが同じような思いをしたはずで

4. その後の日々

立高卒業後、私は大学でも天文気象部に所属し、大学卒業後も何度か日食ツアーに参加したり、友人たちと共同で長野県に観測所を作ったりと、天文との関わりを続けてきました。

ジャコビニ流星群はこの13年後の1985年にやや活発な活動を見せたのですが、1972年の反動か、あまり注目されていなかったためと出現時間が短かったため、目撃した人は少なかったようです。更に13年後の1998年と1999年にも活発な出現がありましたがいずれも見ることには出来ませんでした。

一度は流星雨を目にしたいという願いはずっと持ち続けてきましたが、ようやくそれが叶ったのは1972年の挫折から実に29年後の2001年のしし座流星群の極大でした。この年11月19日の3時ころにZHR3000を超える大出現となり、流星「雨」とまでは行きませんでしたでしたが十分に堪能しました。

富士見天体観測所

高校 25期 新堂 泰伸

立高卒業後、東京理科大学に入学した私はここでも天文研究部に入部し、いわば天文漬けの学生生活を過ごしました。卒業後同期の友人たちと共同で観測所を持とうという話がまとまり、1982年夏、長野県富士見町境葛窪に富士見天体観測所が完成しました。

ここは八ヶ岳の南斜面の標高1000mをやや越える高原にあり、北に八ヶ岳、南に南アルプスを望む見晴しの良い場所で、周囲には蕎麦畑が広がっています。東京から2時間程度の近さで、中央道の小淵沢インターから10分程で到着します。

観測設備としては20cmの反射望遠鏡と25cmのライトシュミットがスライディンググループにおさめられています。完成した23年前と比べると周囲に家も増え、空も格段に明るくなってしまいましたが、それでも東京に比べれば澄んだ星の光を見ることが出来ます。

現在では天体観測よりも農作業やただのんびりするためだけに行くことが多くなってしまい、時々ルーフを開けて観望を楽しんでいるという状況です。(附録 5 カラー写真集の観測所写真をご参照ください)

薄明に達成した流れ星 1000

高校 26 期 西村 朗夫

夏の夜は意外と短い。朝方 4 時を回った頃であろうか、遂に薄明が始まった。深夜は「番、2 等、群、痕なし」の声が重なるように相次ぎ、快調にカウントを重ねてきたペルセウス座流星群の観測も、薄明の訪れとともに急激に確認が少なくなる。目標の 1000 まであと十数個を残し、空を区分して観測をしていたメンバーばかりでなく、J J Y を聞きながら赤ゼロファンで覆った懐中電灯で照らしたノートを見つめる記録係も祈るような気持ちであったに違いない。

昭和 46 年、私が高校一年の合宿では清里で約 600 個の流れ星を観測した。当時清里の夜は天の川が雲と見間違える程の漆黒の闇であり、最高の観測場所であった。その翌年、天文班長として自分が場所選定等合宿の係をしていたにもかかわらずその経緯は忘れたが、近場の正丸峠にて観測することとなった。明らかに清里と比べれば環境は良くない。しかし我々は無謀にも過去なしえなかったであろう一晩で流れ星を 1000 個見る目標を持った。

天文気象部の活動は、毎日 2 回、土日も正月も只ひたすら継続することによって初めて価値の出る気象観測が示すように地味そのものである。また太陽黒点の観測もしかりである。そうした中で部員が寝食を共にする夏合宿は最大の盛り上がりを見せるイベントである。そこに更に皆で共有する具体的目標を持ったわけである。

ところで流れ星には今でも気になる 3 つの不思議がある。1 つ目が「停止流星」。残念ながら私は一度もお目にかかっていないが、先輩の方ではご覧になられた方がいる。ペルセウス座流星群のように大量に流れるときでも確率的には相当に低いと思われる。出会えれば正に奇跡に違いない。次が「人影の出来る流星」。これは事実正丸峠で出現したが、私の記憶では 1 回だけである。一体明るさはマイナス何等級であったのであろうか。そして最後が「音のする流星」。これも正丸峠での体験である。その時私の区域は南方の空であったが、流れる音で思わず振り向くとまだ流れた軌跡（痕）が残っていた。しかし、音速を考えると辻褄が合わないようでもあり、未だに謎である。

さて、話は正丸峠に戻るが、空はいよいよ明るさを増し、半ば諦めかけたころ、記憶では振り絞るように流れ星が何とか続き遂に 1000 個を達成した。肉眼が明るさと戦った最後の 20 分、そして 10 分であり、その間皆の心は天を向いて正に一つとなった。達成の瞬間、歓声が上がったのは言うまでもない。その後数個の流れ星を確認し、終了となった。今でも感慨深い、良く薄明の空で 1000 個に達したものである。もしかしたら、最後は心が一つとなり、明るい流れ星を出現させたのか、あるいは皆で幻を見たのかも知れない。

ペルセウス座流星群観測の思い出

高校 28 期 中込 貴芳

私たちの学年の部員は男子 3 名女子 1 名と少なく、それでもいろんなことを考えては企画・計画し、それなりに楽しく活動していた。5 階にある部室のドアを初めてノックし中に入ったとき、女性の先輩が妙に知的で大人びて素敵に見えた。1 年上の先輩たちは気象に興味を持っていた部員が多かった。そんな訳で最初に教わったのは、天気図を描き方だった。あの頃は毎日、地道に百葉箱で気象観測もやっていたはずだ。その活動が気象から天文のほうへ比重を移していったのが、私たちの学年ではなかったかと思う。

その頃の天文気象部の活動のハイライトは、夏のペルセウス座流星群観測の夏合宿だった。1 年生のときの場所は、八ヶ岳の清里だった。当時の清里駅は駅前に一軒の食料品店以外は何もなく、本当に殺風景な所だった。そこから宿まではかなり距離があり、みんな重い荷物を背負って砂埃の砂利道を三、四十分かけて歩いて行ったことを覚えている。宿は立川市の宿泊施設でその周りには東京の市の宿泊施設がいくつか集まり、当時はかなり安く借りることができた。観測場所は、周辺よりやや小高い丘のようになっている「美しの森」だった。この辺の記憶は、同じように夏に同じ場所で合宿していた体育祭実行委員会とだぶって、どれが部活動のものかはっきりしない。

合宿自体は大変楽しいものだったが、清里での流星観測にも問題点が一つあった。それは、天気が安定していればしているほど、夏は八ヶ岳東麓では夜の晴天率が低いということであった。日中晴天だと、八ヶ岳山麓は山に沿って上昇気流を生み出し、午後になると雨雲が山上に発達して東に流れて夜通し雨が降り、翌朝はからり晴れ上がっていると言うことがしばしばだった。そのため三年生の時、合宿場所を清里から美ヶ原に変えて実施した。場所は、美ヶ原の王ヶ鼻というところで、清里よりも標高が高い分、星空もきれいだった。ちょうどその年から、顧問の先生も天文が専門の大金先生に替わり、学芸大のOBの方と顧問の先生も一緒に合宿に参加されたことを覚えている。

ペルセウス座流星群の極大日を前後して行われる計数観測は、今思い出しても大変楽しいものだった。十人で全天をカバーして行われる観測は、眠さと戦いながら、夜が白んでくるまで長時間行われることによって、ある種の連帯感を生み出していく。天の川が大きく流れる満天の星空を見上げながら寝袋にくるまり、眠らないように声を掛け合って励まし合い、各パートの境界に飛んだ流星をどちらのパートのものか議論し合い、時には他のパートが見落とした流星を報告して視野の広さを自慢したりした。「三番、一等、群、痕なし！」などと言う報告の仕方を、今でもはっきり覚えている。大地の冷たさを感じ、豊かな星の光を浴びながら、自分たちは今同じ時を共有しているという連帯感と楽しさがそこにはあった。大げさに言えば、人はどこかで大地とつながり、天空とつながり、人とつながっていて広大な世界の中で孤独なものは何一つないと言うような感覚を覚えていた。

その他に私たちの代の活動として思い出すことをあげると、マザー牧場近くの鹿野山の国民宿舎での合宿、奥多摩の大岳山での合宿、多摩川河原での富士山への日没の観測やコホーテク彗星の観測などが思い出される。大岳山での合宿では、御岳山ケーブルカーの駅

から大岳山荘までの山道を、望遠鏡の入った段ボールを二人で抱えて苦労して運んだことなど、それぞれについてエピソードを伴って懐かしく思い出される。

あの頃は、何をやるにも先生や学校の許可を取ったりして活動していた記憶がない。合宿だって先生が同行したことが少なかった。だからといって無計画でやりたい放題というのではなく、それなりに責任を持ち事前によく計画して活動していたように思う。今の社会からはあまり想像できないことかもしれないが、このように自由に自主的に活動できたことは、自分の人生にとって貴重な体験であり、若いときには必要なことであると思う。特にいろいろな面で管理的な側面が強くなっている現在の状況では、そう思う。

美ヶ原合宿開始（1975年）のころ

高校 29 期 大和 壮一

私が入学したのは 1974 年であり、すでに部室は（旧校舎）北西部タワー部分の 5 階、音楽準備室（4 階）の上、気圧観測室（6 階）の下にあった（ここに移って 1 年以内だったらしい）。見晴らしが良いので私は大変気に入っていたし、景色を見たいから部室に行ってみたくて他のクラブ所属の人に言われたこともあった。また、雲量測定などに用いた屋上（7 階に相当）から見る景色は、さらに素晴らしかった。友人とともに屋上に上がり、景色を眺めながら「将来の夢は・・・」などと話したことがなつかしく思い出される。部室や屋上からは奥多摩の山々、立川駅付近のデパート群、市街地の住宅やボウリング場、新宿の高層ビル群、多摩丘陵、多摩川、そして冬には富士山が見えた。入学時から 3 年間この素晴らしい部室に、毎日の放課後を過ごす場をもてたことは幸いであった。

今から思えば、私の在学中に天文気象部に比較的大きな変化があったと言えるかもしれない。ひとつは、我々の 1 年生のときまで地学を教えておられ、天文気象部の顧問であった浅野先生が転出され、1975 年 4 月から大金先生が顧問になられたことである。そしてたしか 3 年生のときに、大金先生のご努力の結果、校舎東端にあった古い天体望遠鏡のオーバーホールが製作元の五藤光学の手でなされた。詳細な経緯は覚えていないが、オーバーホールの後に、レンズのクリーニングや外装塗装のリニューアルが施されて帰ってきた望遠鏡を見た覚えがある。ただ、残念だったのは、錘（おもり）と定速風車（風速計みたいなもの）で構成された純機械の自動駆動装置の、錘と吊り下げワイヤーの構成が（何らかの事情で）以前と異なる形に変えられていたことだった（そのため、ハンドルを回して錘を元の位置に巻き上げる頻度が 2 倍に増えてしまっていた）。

もうひとつの大きな変化は、我々の 2 年生（1975 年）のときに、夏の合宿地を美ヶ原に選定したことであろうか。それまで、夏の合宿地は定まった場所がなかったようである。ところが美ヶ原は、その後も継続して使われることになったようであり、そのような美ヶ原合宿をわれわれの世代で開始することができたということは、嬉しいことである。

美ヶ原選定の動機は、1 年生のときに合宿が行われた大岳山（奥多摩）が、重い望遠鏡やカメラなどを運ぶには不便な地であったことと、観測地が狭かったこと、空の暗さがそれほど良くなかったことなどである。

そこで、もう少し遠くの観測地まで可能性を探ることとして、軽登山のガイドブックをもとに同期 2 年生の今峰君、太田君、伊藤君、林君たちと話し合った。候補地にあがった「霧が峰」は“霧が多そうだ”という理由で却下され、「美ヶ原」は名前からして晴れる可能性が高そうなこと、比較的交通の便が良いこと、標高が 2000 メートル級であること、などから最有力候補となった。そして泊まるべき山荘として、他の山荘と王ヶ荘を比較検討したが、松本側から登ると王ヶ荘に近いことと、なんとなく高校生の合宿をするのに気兼ねなく宿泊できそうな雰囲気を感じ取れたこと、などから王ヶ荘に決定し、合宿の予約を入れるとともに下見に行くことにした。

下見には今峰君と私で行った。試験休みの期間に行ったような気もするが、定かでない。

列車として高尾発6時15分の普通列車を使った。この列車は、特急・急行に追い越されることなく約3時間で松本に到着する、効率の良い普通列車であった。その後の合宿でもこの列車が使われたと記憶している。

美ヶ原ではバスを降りた後、道をまちがえ王ヶ荘よりも標高の高い王ヶ頭に着いてしまった。王ヶ頭から見る美ヶ原は、これぞ高原という広々とした場所であった。王ヶ頭から西方に王ヶ荘のトタン屋根を発見し、すこし下って無事に到着した。王ヶ荘では、下見に来たという私たちを歓迎してくれた。夜の流星観測に出かけることや観測地についての相談にも乗ってもらえて、宿の雰囲気もわれわれにあっていいると思われた。その夜は、下見に来た2人を無料で宿泊させてくれるという申し出をいただいたが、私たちは当初の予定通り観測地の選定と星空の下見のため寝袋で野宿することとした。高原を歩き回って、観測地の候補として美ヶ原西端の王ヶ鼻に目をつけ、夕方までに移動して、今峰君と2人で野宿の準備をして日の暮れるのを待った。

素晴らしい星空であった。2000メートル級(たしか1998メートル)の標高の地で見ると夜空は、通常の山行で訪れる奥多摩の空とは違っていた。天の川がはっきりと明るく見えたのを覚えている。流星群のない日だったが、散在流星だけで一晩に10個から20個は見つかったように記憶している(もっと多かったかもしれない)。小さなカメラで固定撮影を行い流星も撮影できた。まだ美ヶ原という場所をよく知らなかったため、熊が出る可能性なども考え常に音を立てるために伝統歌を歌って翌朝まですごした。

星空も山荘もOKという下見の結果を受けて、美ヶ原合宿は予定通り行われた。王ヶ鼻は本番の合宿でも観測地となった。ペルセウス座流星群の計数観測を行うとともに、多くの流星写真を撮ることができ、文化祭に展示することができた。その後、OBとして数回参加した合宿でも、美ヶ原は霧が出ないかぎり「月夜でも天の川が見える」素晴らしい星空を提供してくれたことを記憶している。

流星観測以外の昼間の活動でも、美ヶ原は広々とした高原を散策することで心洗われる場所であり、何度でも訪れてみたい場所である。

(想えば30年前の出来事ですね。私にとっては鮮明な記憶ですが・・・。)

私の体験した天文気象部

高校 30 期 平 政之

私が天文気象部に入部したのは、高校一年の夏休み後半、昭和 50 年 8 月も半ば過ぎと
なってからであった。ペルセウス座流星群観測の合宿後で、部員としては完全に出遅れで
あった。

子供の頃から星座や天気のこと好きで、高校一年の理科の地学（当時の科目、全生
徒必修）の大金要次郎先生の授業も面白かったのだが、グズグズしているうちに時間が過
ぎていた。現在より一代前の校舎で、塔屋に部室があり、立川駅から登校する際によく見
えて、気になっていたのだが、ふとしたきっかけで同じクラスの天文気象部員に話をして
部室に連れて行ってもらい、入部し、卒業まで続けられたことは、仲間に恵まれ、居心地
が良かったからに他ならない。

もっとも、決して熱心な部員だったとはいえないなろう。特に天文分野では、ドームには
確か 2 回しか入っていないし、望遠鏡も自分では操作したことはなかった。あの望遠鏡の
由来を知らなかったとはいえ、今となっては惜しいことであった。新しい望遠鏡購入にわ
ずかながら寄付をさせていただいたのは、そのような思いもある。

それに比べれば、気象分野では多少は活動したように思う。とはいえ、周りから見れば
たいしたことはなかったであろう。ラジオの気象通報を聞きながら書く天気図が、一人遅
かったことからわかる。私の気象への興味の出発点は、「台湾坊主」（東京でも雪が降っ
て子供としてはうれしい。今はこの呼び方はしない。）と小学生の時に読んだ理科学習漫
画「よくわかる天気教室」（このような名前だったと思う。今は絶版）であるが、この本
に出てくる百葉箱や多種の観測機器の実物は、さすがに一般にはあまり目に触れるもの
ではないだろう。いずれも、30 年前の当時でもかなり古いものであった。校舎建替の際に、
旧望遠鏡は引退したとのことだが、気象の機器はどうなったのであろうか。

気象観測は同一条件での継続が重要なので、毎日 8 時と 15 時の観測を欠いてはなら
ないことになる。露場の百葉箱の中の乾球温度計の計測および塔屋の水銀気圧計の計測が基
準時であったので、観測者は 2 名必要となる。通常の日はもとより、学校が休みの日も交
替で観測のためだけに登校した。警備の守衛さんと日頃から仲良くしておくことは、後年、
職場での残業や休日出勤の際に役立った。観測項目は多いので、特に朝は授業前に終わら
せる必要から、手際良く済ませなければならない。当初は不慣れなせいもあり、失敗も少
なくなかった。観測の異常値となってしまう、申し訳なく、この場でお詫びする次第であ
ります。

日本全国はいうに及ばず、東京地方、さらに多摩地域だけでも、天気は同じではない。
時間があれば、塔屋の最上部にしばらくいるだけで、いろいろなことが感じられた。まさ
に観天望気である。雲を眺めているだけでもよいし、自分なりの天気予報をするのも面白
い。この頃はなかなかそのような余裕はなくなっているが、たまには、高校時代を思い出
して、高価な機器はなくても、ほんの少し上を見上げればよいのだ（これは天文も同じ）。

気象観測のことなど

高校 31 期 川幡 和利

いささか恥ずかしいことながら、今でも時々、高校時代のアイドルであった太田裕美の古いアルバムを聞くことがある。そんな時、よく思い浮かべるのは、富士山に沈む冬の夕陽が明るく差し込む部室で、トランプに興じているシーンである。ともかく、放課後はよく部室にたむろしていた。

そもそも私は気象の方に興味があり、ドームでの黒点観測は数回しかやった覚えがない、という「天文」気象部の不良部員である。しかし、視力の良いことを買われてか、流星観測の合宿では観測員を任されたり、フィールド好きのせいもあって、山行には比較的まめに出かけたように記憶している。それらの楽しかった思い出は、同期の畏友水嶋君のほか、ご一緒させていただいた皆さんに語っていただくこととして、私の方は気象関係の、それもごく私的な思い出をご紹介させていただくこととしたい。

今でもそうだと思うのだが、当時から1日2回の「観測当番」を決めて、休日も交代で気象観測をしていた。しかし、観測データは「月報」にまとめるだけで、有効に活用されていなかった（話はそれるが、在学中に大胆にも田代先生のお宅を訪問したことがある。その時先生が、「今も月報を出している」という我々の話を聞いて喜ばれ、「今、何号になる？」とお尋ねになられた。それに正確にお答えできず、また先生もそれ以上はお尋ねにならず、なぜか芭蕉と のお話を伺って退出してきたことが夢のように思い出される）。

私は悶々としていたが、たしか2年生の2学期のこと、東京に台風が接近し、予報ではあわや直撃という進路予想であった。部室にあった正野重方博士の「台風論」は難しく理解できない（偏微分の意味はもちろん、「収斂」という漢字も正しく読めなかった！）ものの、データを集めることならできると考えついたのが、「台風通過時の24時間連続観測」である。不謹慎なことながら、気象好きは、どこか天変地異を待ち望むところがあるようで、土砂降りの雨の中の露場での観測や、外を暗い風が吹き荒れる観測室で水銀柱がどんどん下がるのを想像するだけで、ワクワクしてしまった。早速、シュラフを持ち込んだりして準備を開始したが、無断で校内に泊まるわけにもいかず、顧問の大金先生に許可をいただきに行った。今考えると、お許しいただけるはずもないことであるが、大金先生はわざわざ校長先生まで話をあげていただき、校長の「帰宅して、自宅で研究（勉強）するように」との通告（？）で、あえなく計画は挫折してしまった。頭ではわかっているが、この時の残念な気持ちは今でもほんの少しだけ心の片隅に残っている。

気象関係でもう1題。これは継承されていない伝統かもしれないが、在部中に天気図を365枚描き上げる、というのも1つのステータスであった。このくらい描くと、最後には「以上、 時の気象通報でした」と放送されるのと同時に、主な等圧線をあらかじめ引くことができるようになる。数年前に、娘の理科の宿題につきあって徐々に天気図を描いたが、尊敬されること頻りであった。当時の良き仲間、良き思い出だけでなく、立高天気部員であったことの思わぬ余慶が得られた次第である。

天気部と室内楽の思い出

高校 31 期 水嶋 春明

天文気象部の思い出は、立高時代のさまざまな思い出の交差点のようなものだ。上の 2 学年、下の 2 学年、計 5 学年の先輩後輩関係の縦の関係、横の同学年部員との 3 年間以上、かれこれ 30 年にわたる成長軸があり、そして応援団、キャンパス、体育祭、学生委員会、ファイアーストーム実行委員会、合唱祭といったイベントや甘酸っぱい初恋の記憶が交錯する。

天文気象部にはいったのは、高校の運動部がしんどそうだったのと、中学時代(三鷹一中;一番都会よりの三鷹駅を利用していたことがちょっと鼻高々だった)にバスケット部のほかに天文部にはいっていたこと、宇宙物理学に少し興味があったことが影響していた。同じ学年には 6 人の部員がいたが全員男子で、そのうち 5 人は私も含めて男子クラスであった。ひょっとすると女子がいるのでは・・・と勘違いしていた者もいたのではないかと思う。みな、天気部以外にも、別の部活動やキャンパス、応援団、委員会活動、合唱祭などでエネルギーを発散していた。

一学年上の吉田、川越、奥田各先輩には、トランプの手ほどきを受け、天気部室でのほんわかした時間のすごし方を教わった。二学年上の大和、太田、今泉の各先輩は、受験勉強をしに、部室にたまにこられ、ずいぶん大人に見えたものだった。私は、太陽黒点観測を担当して、昼休みにドームにはいって、地味な黒点のスケッチをしていた。地味だなーと思いながらも、ドーム付近にたむろする不良高校生たちの観察もして、なんでまあタバコなんぞ 16 歳からくゆらせるのかあー、とウブな私はびっくりしたりしていた。一学年下の洲沢君が、太陽黒点観測を引き継いでくれたときには、とってもホッとした気持ちがあったのを覚えている。

毎年夏休みには、信州の美ヶ原高原にペルセウス座流星群の観測をしにいっていた。0B、0G も参加して、実におおがかりな合宿だった。スキー教室を主宰しているご主人と素敵な奥様のミエコさんが切り盛りしている王ヶ山荘に宿泊して、午後 10 時くらいから午前 5 時頃まで観測。5 時半に山荘に戻って、昼まで寝ていた。7 人がシュラフに入り込んだまま自分の担当区分の空を眺め続け、「5 番、3 等、痕あり、流星群」と叫んだり、雲がでてくるとフーとみんな息を吹きかけてみると不思議なことに晴れてきたり、眠気ざましにたわいない(たいてい 0 先輩の卑猥話しだった)ことを話したりして、とても素敵な夜だった。1 年生は夜食の用意をしたり、飴を観測当番の口に放り込んでいたり、記録係をしたり、写真をとったりしていた。

普段、天気部の部室に行くには、4 階にある音楽室の前を通過して、5・6 階の櫓塔へのぼっていく。この瞬間がとっても好きだった。音楽室の前の廊下では、室内楽部の同じ学年の N さんがチェロの練習をしていた。背筋を綺麗にのばして腰掛け、両膝ではさむようにしてチェロを左斜めに立てかけ、俯き加減に楽譜に目をやる N さんの清楚な顔立ち……。タラタラタタタターラッ、タタタターラッター、タラタッタ、タタタタターラタンタタータターターターター、……。3 階をあがるあたりからこの曲が聞こえると、と

ても胸が熱くなった。Nさんが練習している……。この練習曲の題名を知らなかったが、卒業してからも、この曲を聴くと、必ず4階の音楽室の前の廊下で練習をしていたNさんの清楚な顔立ちを思い出した。題名を知ったのは、卒後20周年記念の大同窓会を企画して準備委員会メンバーで打ち合わせを頻繁にしていたころ、同じ室内楽部だった人に、教えてもらったときであった。二つのヴァイオリンのための協奏曲 BWV.1043. 作曲：ヨハンセバスチャン・バッハ。甘く切ない思い出の曲である。

かけがえのない仲間

高校 32 期 大蔵 誠

今回、記念誌の編集委員に名を連ねてしまい、原稿を頼まれ引き受けたものの、現役時代は決して優秀な部員とは言えなかった私が、そのようなものを書いてしまっているのかとも思います。ただ、一つ言えることは、天文気象部で出会った仲間である、先輩、同期そして後輩といったつながりが私の中で一生ものとなっていることは確かです。

私の現役当時、天文気象部の部室は校舎北東の隅に立つ塔の5階、一階下の音楽室から上には通常は部員しか入ってこないという別天地でした。授業が終わると三々五々部室に集まり、だべったり、トランプをやったり、それなりに楽しんでいたように記憶しています。もちろん、16:00からNHKの気象情報を聴きながらの天気図作成はほぼ欠かさず(?)行っていました。そんなもったいないような時間の過ごし方をしながらも、本当にこんな活動でいいのか、部の活動のあり方について、部の日誌であるCOSMOS上で議論になったりもしていました。今から思えば相当青臭い議論のような気もしますが、当時はまじめで若かったなあなどと思い返しています。

また、天文気象部の活動として欠かせなかったものに週末の山行がありました。当時も学校に許可なく校外での活動は認められてはいなかったと思いますが、顧問の先生のご理解や先輩たちの築き上げた伝統もあり、週末になると、最寄りの立川駅に、一人は望遠鏡の鏡筒、一人は三脚、一人は赤道儀といった具合に、なぜか観測に必要な器具の部分部分を持って偶然に集まり、御岳山や鳩ノ巣溪谷などへと出かけていました。冬の山行の際、当日の天気あまり良くなく、テントで休むことにしたのですが、全員が入れず、取り残された者が二人(そのうち一人が私でしたが)、水筒が凍り付くような寒さの中で、何とか一晩過ごしたことも今から思えば忘れられない思い出です。私の先輩は2期続けて女性部員がいまませんでしたので、我々の代になって女性部員が入り、これでも週末の山行を続けていいものかなどと真剣に議論していたこともありましたが、私の記憶している限りでは、それほど問題なく(同期の仲間の方、こう言ってよろしいでしょうか)続けられたと理解しています。

そんな緊密な環境の下に置かれたせいか、自然と卒業後も我が同期の前後を中心に年に1~2回の集まりが行われるようになりました。我々の仲間には地方の大学に行かれた方も多く、夏休みや年末など東京にある実家に帰省してきた時がその機会となりました。その後も年末の会合は代々引き継がれ、今でも私の下にも毎年ご案内をいただいています。また、それ以外にも、現役が夏合宿を行っている美ヶ原にOBが現役をしのぐほどの人数で大挙して押しかけたこともありました。

現在、我々の仲間は、それぞれ進む道も違い、職業や生活の場も変わってしまい、会う機会も本当に少なくなりましたが、会うたびに、また皆で星を見に行きたいねと話しております。会えばあの当時の親しい関係にすぐ戻れる、本当に気心の分かったいい仲間だと感じています。今回、この原稿を書かせていただき、改めて今後ともそんな天文気象部の仲間を大切にしていければと思っています。

天気部のこと

高校 33 期 久保 紀重

早いもので、立高を卒業して 25 年が経つ。当時、半ば登校拒否に陥っていた私は、欠課時数も極めて多く、担任からこのままでは留年するぞと申し渡されていた。そんな私ではあったが、授業には出なくとも天気部の部室には足繁く通っていたようで、土曜日の午前中の授業はサボっても午後からは部室で仲間たちとトランプに興じる、そんな生活だったと記憶している。結果として留年もせずに卒業できたのは、私を立高に繋ぎとめてくれた天気部の仲間たちのお陰ではないかと思っている。

夏には美ヶ原「王が山荘」でペルスウス座流星群を眺め、月に 1 回は御岳山や陣馬山へ。高校の教室での生活はあまり明るいものではなかったが、天気部の仲間たちとの活動はとても楽しく心に残っている。同期の皆はいったい如何しているのだろうか。大学に残った人、公益企業で活躍されている人、気象庁の予報官になった人、銀行マンとして海外で活躍している人……。最近では年賀状のやりとりだけのお付き合いになってしまっているが、みんな世の中のあちこちで忙しく活躍されているのだと思う。

私はというと、大学、大学院を経て、国土交通省国土地理院に勤めて 15 年になる。この間、1 年間だけ米国地質調査所に留学させてもらったものの、環境庁や建設本省、国土交通本省への出向といった霞ヶ関勤務が長く、総じて「天文気象」といった清らかな世界とは程遠い「やくざ」な役人生活を送っている。時折、つくば市の国土地理院構内にある VLBI (Very Long Baseline Interferometry: 超長基線電波干渉法) の 32m パラボラアンテナが動くさまを見て、天文観測に興じていた当時を懐かしく思い出すくらいである。

国土地理院の HP によれば、VLBI とは「はるか数十億光年の彼方にある電波星(準星)から放射される電波を、複数のアンテナで同時に受信しその到達時刻の差を精密に計測することにより、数千 km も離れたアンテナの距離を測る測量技術」であり、これにより地球上の 2 点間の距離、例えば、日本とオーストラリアの距離を数 mm オーダーで測ることができる、とのことである。簡単に言えば、電波望遠鏡を使って距離を測るしかけ、ということだろうか。

恥ずかしながら本稿を書くにあたって国土地理院 HP を参照しているというくらいで、私自身、仕事上での VLBI との関りは全くない。もっぱら巨大なアンテナを眺めるのみである。ちなみに、国土地理院の構内には「地図と測量の科学館」という一般公開施設もあるので、もしつくばにおいでの際は是非とも一度お立ち寄りいただければ、と思う。

すっかり「天文気象」の世界とは縁遠くなってしまったが、いつの日か、懐かしい天気部の仲間たちと思い出話ができればと思う今日この頃である。

天文気象部の思いでとその後

高校 34 期 一瀬 倫見(旧姓高橋)

私が高校生だったのは昭和 54-57 年、戦争も立高紛争もとうに終わっていた平和な時代であった。といってもバブルよりは 10 年前で、いわゆるおしゃれな女子高生ともかけ離れた、バンカラな女子高校生時代を過ごした。もともと天文に興味があり、入学と同時に勇んで天文気象部に入部した。当時天気部は場所に恵まれており、“天気部塔”の下の階で毎日部活動に励み、上の階は部活用の倉庫と暗室になっており、写真の現像に使っていた。屋上は息抜きの場になっていた。クラブ活動は月 1 度の山行と夏合宿や文化祭の準備、それに毎日 2 度の気象観測が中心であった。私はほぼ毎日、夏休みも春休みも部室で過ごし、流星観測とデータ整理、2 点観測記録から流星の軌道計算、写真撮影と現像、気象観測、天気図作成の仕方など新しいことをいろいろ教わった。天文雑誌を読んだり、専門書も四苦八苦して読みあさり、とても充実した毎日であった。

部室には常にいろいろな先輩方が訪ねてこられ、先輩たちの大学での活動や、昔の楽しい話を伺うのも、クラブ活動の楽しみであった。先輩たちの大学での専門分野の最先端の話をお伺いするたびに、いつか先輩たちと同じように理工系に進み、研究活動に従事してみたい、なんて夢を抱いていた。立高生は皆優秀で、勉強が大変であったが、物理だけは真剣に勉強していた覚えがある。

立高で過ごしたのはたったの 3 年で、しかもクラブは 1 年半の現役活動であったが、私のその後の人生に大きな影響を与えた。

大学受験時私は天文学者になりたく、天文学科を目指すのが、成績が芳しくなく断念することになった。加えて、女性が天文学者になるのはとても熾烈だと言う話を聞きかじり、1 年の浪人の後に浜松医大に入学し、医者になる勉強を始めた。卒業し麻酔科医となり臨床医としての研修を始めたが、やはり 1 度は研究者になる夢を断ち切れず、卒後 3 年目から東京医科歯科大学大学院に入学、神経科学の研究を始めた。研究活動は思っていた以上に楽しくやりがいがあり、毎日終電まで、ラットの脳の標本に電極を刺す実験を繰り返していた。大学院修了時、臨床医に戻るか、はたまた研究者としての厳しい道に行くか迷ったが、運良く研究者としての道が開け、迷い無く科学者としての道を選んだ。その後現在にいたるまで、贅沢な生活とは縁遠いが、第 1 線の基礎研究者として活動している。博士号を得てから日本医大で助手となり、その間米国セントルイスのワシントン大学に留学、以来ワシントン大学で研究者として雇ってもらっている。ワシントン大学は全米の医学部で常に 5 番以内に入る優秀な大学で、大変恵まれた環境にいられることに感謝している。現在私は、目の網膜の神経がどのように光を感知するかというテーマの実験を続けている。5 年前に 2 度目の結婚をし、高齢出産で生まれた娘が 4 歳となった。

天文学者になることはできなかったが、現在神経科学者として毎日研究活動に従事し、高校時代の夢が 80% くらいはかなったと思っている。卒業後既に二十年が過ぎ、立高時代は夢のように昔の記憶であると同時に、若い頃の科学や研究への憧れや夢は、今もありありと思い浮かべることができる。

惜しむらくは自分が先輩としてクラブを訪ねて行けないことである。大学入学時から多摩を離れ、その後1度も立高近辺に住む機会が無かった。先輩たちから得たありがたい話を後輩にお伝えすることができず、申し訳なく思っています。7年前からは日本も離れてしまったので、同窓会にも出席がかなわなくなってしまった。

このような文集を作る立案をされた同窓会に感謝すると同時に、当時の部員や先輩たちのその後の様子を伺えることを、楽しみにしています。

部室のこと

高校 35 期 只野 雅人

部活を振り返ってみると、一大イベントだった美ヶ原でのペルセウス座流星群の観測、休日も間断なく続けた気象観測、そして陣場山への山行など、いろいろなことを思い出します。これらの活動についてご紹介するのが「天文気象」部の記念誌にふさわしいようにも思うのですが、今回はあえて、部室について書いてみることにします。授業を別にすると、立高の中で一番長い時間を過ごしたのが、部室だったからです。部活というと、真っ先にこの部室のことを思い出します。

音楽室（確か4階だったでしょうか）を抜けた先に、部室に通じる狭くて急な階段がありました。私の場合、ふらりとこの部屋を訪ねたのが、部活動の「はじまり」でした。部室の上には機材室のような部屋があり、さらに階段を上がると、屋上に出られました。屋上のコンクリートに開いた穴は、米軍の機銃掃射の跡であるといわれていました。

特に理由もなく、ほとんど毎日（「時々」は授業中も）この部室で時間を過ごしていたように思います。特にすることも無いのに、何となく集まっていることも多かったのですが、立高のなかで、一番リラックスできる場所だったように思います。部活の時間が終わり下校時刻を過ぎても、電気を消して見回りの先生の目を盗み、居残っていることもありました。

「現役」の部員だけでなく、卒業した先輩方も時々、部室に顔を見せてくださいました。南食のジュースをごちそうになり、いろいろな話を聞かせていただきました。部室には「コスモス」という部誌が置かれていました。放課後部室に来ると、コスモスになじみの先輩の書き込みを見つけけることもありました。私も卒業後、何度か部室を訪れましたが、そのたびに、自分の立高のなかにまだ自分の居場所があるような気持ちになりました。

部室の「改装」をしたことも思い出されます。立高のご多分にもれず、皆が土足で出入りしていた部室は、居心地はよかったものの、決してクリーンな場所ではありません。そこで、部員で話し合い、「大掃除」を敢行しました。床を雑巾掛けをし、たしか靴を脱いであがれるようになったはずですが。

大学を卒業し、夏合宿に参加しないようになってからは、すっかり立高から足が遠のいていました。しばらく地方で過ごした時期がありましたが、数年ぶりに東京にもどることになり、家の下見のついでに、ふらりと立高をのぞいてみました。校舎は建て替えられていましたが、あの部室のことを、鮮明に思い出しました。

今は近くに住んでいることもあり、立川の南口に用事があるときには、時間があれば、ちょっと回り道をして、立高の前まで行ってみることもあります。校舎は新しくなっていますが、狭い階段の先にあった部室をまた訪ねてみたい気持ちに駆られます。

天文気象部に関する回想

高校 36 期 鳥越 祐司

立川高校を卒業して 20 年余り経ちましたが、大々的な一昨年の全期同窓会の開催や、望遠鏡の寄付など、改めて立高天文気象部との接点を持つことができ、またこうして当時を回想する機会を得ましたのは、偏にこのような場を企画していただいた幹事の皆様のお陰かと思えます。私などが同期を代表してしまっても良いのか、という不安はあるものの、ここはご指名に甘えさせていただき、この場を借りて在校当時 (S55.4 ~ S59.3) の天文気象部について回想してみようかと思えます。当然、他の代の方々とも重複してしまう事柄も多々あるかと思えますが、その辺はどうかご容赦ください。

高校 36 期同期の顔ぶれ

磯部君、江口君、古宮君、吉田 (高穂) 君、前田君、小谷君、林君、渡辺君、宮下さん、井上さん、井古田さん、澁谷さん、鳥越の計 13 名でした。

新歓山行

天文気象部としては毎年恒例行事なのですが、新入生でいきなり夜を徹して陣馬山へ星を見に行くという上に、かの「カトマンズの精霊」や、ネームコーリング、キラの洗礼を深夜の陣馬山山頂で受けたという経験はなかなかインパクトがありました。

夏合宿

1 年生の年 (S.55) は、清明寮の事故の余波で、夏合宿が中止となってしまいました。諸先輩方から流星雨の話聞いていたので、楽しみにしていたのですが、翌年以降も霧や雷に祟られた上、結局それ程の流星群の活動は見るができなかったのは残念でした。また、美ヶ原の王ヶ山荘での夏合宿も私たちの居た頃が最後の時代となったようで、以降宿泊場所が転々としたようですが、王ヶ山荘も印象深いものがありました。

兼部、兼委員会

皆さん多才で、音楽部やハーモニカソサエティとの兼部、文化祭実行委員会、総務委員会、ホームルーム長との兼委員会のほか、キャンバスチーフ、応援団、演劇コンクールのキャスト・スタッフなど立高祭と、多方面で活躍していました。

気象観測

冬時間の気象観測は午後 3 時の観測が 6 限と重なるため、届出の上で当番の人は授業を抜けるという特権 (?) がありましたが、6 限目の英語の授業で同期の小谷君がちょうど指されたタイミングで気象観測に行く、という冗談のような本当の話がありました。

八王子霊園

数ある山行の中でも変り種は八王子霊園での山行でしょうか。墓地 (とは言っても霊園ですが) の中ということで、最初は多少びくびくしていましたが、明け方にはすっかり慣れて YMO を BGM に皆で日の出を眺めていました。深夜には暴走族 (?) のお兄さんのナンパやお巡りさんの職務質問もありました。

部室

改築前の旧校舎の塔の5階にあった部室は滅多に部外者も来ないので、半ば校内でも治外法権的な感がありましたが、1年生の年(S.55)の夏に1年上の先輩方の音頭で一気に部室の大掃除をし、土足厳禁にしました。当時の立高の中では、靴が脱げてくつろげる部室というのはかなり画期的だったと思います。

天気部トレーナー

当時、世間ではオリジナルTシャツがはやっていましたが、天文気象部では山行でも着られるようにと、流星に天文気象部の英語のロゴ(Tachikawa High School Astronomical & Meteorological Club)をあしらった天気部オリジナルトレーナーを作成しました。

渡辺淳也君

私たちの代にとっては、やはり渡辺淳也君の死を抜きにはできないと思います。何かを言葉にしようとしてみても、所詮は私の主観を押し付けがましくなってしまうのでうまく言えないのですが、やはり一緒に最後まで卒業できなかったことは、悔やまれてなりません。

つらつらとランダムに思いついたキーワードに沿って、取りとめなく当時の思い出を書き並べてしまったので、全体として脈絡のない文章となってしまう、読者の皆様には見苦しいものとなってしまった気がしますが、おかげさまで私自身も書きながら、当時の思い出を蘇えらせることができました。

高校36期の同期の皆さんにとっても、私の駄文に目を通していただいて、もしかしたら少しでも当時を思い出す一助になれば幸いです。また、卒業以降私たちの代は集まる機会もありませんでしたが、ここらで一度、一同に会して当時の思い出話しに花を咲かせてみませんか？

渡辺 淳也さんを悼む

高校 37 期 坪井 由紀子(旧姓沢瀧)

入学の前年は日本でもカール・セーガンの「コスモス」が放映され、スペースシャトルの打ち上げなどもあり、続く数年のうちにはハレー彗星の回帰と、いわば世をあげての宇宙ブーム、天文ブームといった中で過ごした天文部の3年間であった。この頃、気象の部門はどちらかというと軽視される傾向にあったかもしれない。しかし、天気図の描き方を私達新入生に懇切丁寧に教えてくださった先輩の熱意と立高の気象観測の意義を聞かされ、日々の観測を熱心に取り組んだつもりである。

この年の新入部員は10人であった。連絡を取るのもたまさかな人もいるが、この9人に対しての兄弟にも似た親しみの感情はずっと持ち続けると思う。これは夜空による影響が多分にあるのだ。星空の下の空間は昼間よりずっと小さく感じられ、その中で共に時を過ごすとは親近感が湧くのだとか。遊牧民族の結束の強さは、星空の下で過ごす時間が長いから、との説もあるらしい。この兄弟たちは同じ年で、会えば冗談ばかりという感じだが、1才しか違わぬ先輩方のなんと大人びて見えたことか。まさに紳士・淑女といった風であり、今もって憧れと尊敬の人々なのである。この時代の1才違いはきっと大きいのだ。1才違いのジョン・レノンが他の3人を長らく率いることが出来たのも、彼らが出会ったのが15, 16才だったからだろう。

天文に興味がある程度で、ほとんど知識のない私だったが、山行や合宿を通じて星座も読めるようになり、神話の知識、天体への興味が深まっていったのも、この年の天文チーフ、渡辺淳也先輩の情熱による所が大きい。学内のありとあらゆる活動に首をつっこんでいたような多忙な渡辺先輩であったが、天文への情熱が一番深かったようにおもう。山行毎に望遠鏡を担いで上がり、様々なことを教えてくれた。特に私は、妹のようにかわいがっていただいた。初めての山行で、かみの毛座を見せてもらった感動は、今も鮮やかだ。あまり天気恵まれなかったその年の夏合宿。渡辺先輩と私と同級の部員が雷に追いかけられ、命からがらといった呈で玉ヶ山荘に戻って来た、という事件もあった。渡辺先輩はまた写真をよくし、天体はもちろん部員の方も多く撮ってくれていた。

2年生の半ばで引退する立校のならわしにより、先輩方と過ごした年月は思い返せば、ほんの短い時間だ。しかし、私の人生の中で最も思い出深い時間の一つである。渡辺先輩は翌年の7月6日に自死された。突然関わりを断ち切られたから、余計に鮮明な記憶であり続けるのかもしれない。何故死んだのだろう、と今でも時々思う。私には何も出来なかったのか、とも思う。亡くなって後、渡辺先輩の写真が手元に1枚もない事が分かった。いつも撮る側で、撮られていなかったのだ。数年後に部室で先輩の写真を発見し、先輩のお母さまに届けさせていただいた。あの時以来、身近な人の写真を残すことに、私はこだわりをもつ様になった。

今回寄稿の話をしていただいて、この話を書くのは慶事にふさわしくないか、とも考えた。けれど天気部の中でも、ひととき熱心に天文に関わった部員がいた事を残したいと思い、あえて書かせていただいた。渡辺淳也先輩を悼む。

私たちのころ...

高校 38 期 小澤 進

高校時代を振り返ると思い出すのは大半が天文気象部のことだ。当時の部活動は 8 時と 15 時の気象観測、昼休みの太陽観測、それと山行、夏合宿、文化祭とプラネタリウムの上映会であった。思い出すシーンは、数限りなく取り止めがなくなる。

【夏合宿】

NHK朝の連ドラでおしんが大ブームの年、一年次の合宿は王ヶ山荘・美ヶ原高原であった。この年の活動は、月も無く天候にも比較的恵まれ、極大日には 700 個以上のペルセウス座流星群を観測できたように記憶している。私はその中で写真班係数を任せ存分に流星を目にしたが、記録班の担当は、デジタル時計の数字や記録用紙とのにらめっこ状態で気の毒だった。そして成果のあった？王ヶ山荘合宿は、その年の大雪で宿泊営業ができなくなり、これが最後となった。あの屋根裏部屋で機材と布団に埋もれ頭をぶつけるようにして競ったカードゲームの「UNO」は忘れられない。次いでロサンゼルスオリンピックの開催された二年次は、美ヶ原高原でも反対側の山本小屋に宿泊した。この年は、霧が晴れわたっても「雲量ゼロ星見えず」という満月の年で、写真班はもとより、眼視係数も存分な活動ができなかった。そんな中この年新規結成されたスケッチ班が大活躍で、月面スケッチのいいものを残したと記憶している。また、夏合宿に先立ち、流星に見立てたロケット花火を陣馬山山頂で打ち上げ、流星観測の眼視係数と記録の練習を目的とした山行を行っていた。よくよく考えなくても結構無茶なことをしていたと思う。確か朝には花火を拾い集めたがすべてあったかどうかよく覚えていない。次の年の練習は、銀球鉄砲の玉に夜光塗料ぬって流星としていた。痕は発生しないがそれらしくは見え大量の玉をぶちまけてきた。

【文化祭】

前年は気象がメインの展示だったので、自分たちの年は天文であった。より多くの人に楽しく見てもらうという展示を目指し、模型やコンピュータ占い、巨大星図など盛り沢山で、来る人に解説をしていた。私は影ながらそれらの支援をした。当時文化祭実行委員会（鬼の文実といわれていた）にも所属し、ラブ展（クラブ展示）チーフの権限を乱用して便宜をはかりあるいは見てみぬふりをした。具体的には、部室に近い場所で、毎年やかましい剣道部とは離れた場所を設定したこと、暗幕の使用を優先的にした



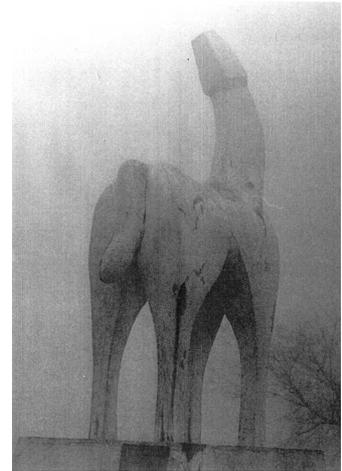
プラネタリウムと解説員

こと、釘（ガチ）の床打ち、校内放送のスピーカコードの切断などである。しかしながら、展示のメインは自作のプラネタリウムであったと思う。あまり深くかかわっていなかったので、ここで書くのは少々気が引けるが記憶していることを書く。駅近くの「名取屋」で

アルミ製料理用ボウルを2個買い、平らな底を打ち出し、星をひとつずつ手でドリルして作成した。また、演出的要素にも力を入れ、朝焼け夕焼け効果、銀河投影機、流星投影機など、細かいところでは夜空を指し示す印も懐中電灯にレンズをつけて作成した。プログラムも1回20分程度の台本をほぼ完璧に記憶して解説し、BGMも内容・場面によって選曲していた。このようなプラネタリアムをみて来年合格したら天文気象部へ入りますと名前を残していった中学三年生は次の年入部した。

【山行】

通常土曜午後から八王子の陣馬山へ出かけていた。和田峠からのラストの階段では30kgの荷物は非常につらかったことを覚えている。山頂には馬の像と4畳半ほどの小屋があった。その小屋は寒さ凌ぎ、ガスバーナーの風除けとして必須であった。そのため、午前中に「blank」のあったものが、「超先発隊」として場所取りに行っていた。新入生歓迎山行では、一年生の荷物に軽い、いや、重いいたずらをするのが慣わしで、使わない赤道儀のバランスウエイト(丸バラ)、赤本、辞書等、山行でおおよそ役に立たないものをこっそり入れていた。確か「V作戦」と名前がついていたと思う。毎回星空とはいかないので、伝統歌を大声で歌ったり、キャンプとして楽しんだときもあった。それでも、晴れば惑星や星雲星団を望遠鏡で観測したり写真撮影も行った。陣馬山以外では、日の出山、真冬の青梅小曾木、また、昭和高校自然科学部天文班との合同山行で奥多摩湖へも行った。



陣馬山山頂の馬の像

【その他】

特別な出来事、活動したことをいくつか思い出したのであげておく。百葉箱のペンキを塗り換えたこと、山積みされていた野帳から気象データを集計(当時は電卓を使用)し直したこと。二学年上の渡辺淳也先輩が亡くなり、五藤光学のMark Xを寄贈していただいたこと。部室の上階の気圧室がガラクタ置き場と化



番号覚えてますか

していたのを清掃し、府立二中と書かれた備品が数多く出てきて驚いたこと。顧問をなさっていた大金先生宅に招かれ高橋製60cm反射望遠鏡を見せていただいたこと。先輩たちには可愛がられ「南食」へよく買い物に行ったこと。「チェリオ」の瓶を集め数千円の瓶代を手にしたことなど、天文気象となんら関係ないことばかりではあるが、引退するまでの1年半で行ってきた忘れられないことである。このころの仲間とは、今でも当時の呼び名で呼び合い、年に1回は思い出話に花を咲かせている。



百葉箱のペンキ塗り替え

文化祭の思い出

高校 39 期 豊田 哲郎

もう 20 年も昔のことなので、記憶もおぼろげになってきてはいるが、同期の木村君と電話で話しながら思い出せる範囲で、当時の様子をよみがえらせたい。

1 年生のときの夏合宿は、長野県的美ヶ原というところであった。ちょうどロサンゼルスオリンピックの開催時期と重なっていたため、合宿所ではオリンピックのテーマ曲が流れていた。我々の代は比較的人数が多かったため、流星観測などをする伝統的な班以外に、スケッチ班というあまり期待されていない部署がつくられ、私はそこに配属された。当時、スケッチ班のリーダーをしていたのが 2 年生の照井先輩であったので、宿舍の私たちの部屋は照井部屋と呼ばれた。照井先輩は後輩の面倒見がよく、特に面白いものを追求していく上では非常にリーダーシップがある人であった。

このような縁で、文化祭でも照井先輩の班につくことになった。その年の文化祭の出し物として照井先輩が選んだテーマは「星占い」であった。いくら星がつくからといっても、星占いなどふざけているのではないかとおっしゃるまじめな先輩方もいたが、コンピュータを使って占い結果をプリンタに出力するという出し物は非常に大きな反響を呼んだ。当初は占い結果がすべてカタカナで出力されていたが、照井先輩はこれをすべて仮名漢字交じり文に変換しろという指示を下した。その結果、占い結果のリアリティーが増して好評につながった。また、さらにもう一つの出し物として、照井先輩は青梅線の時刻表が自動的に表示されるソフトウェアを開発し、会場においたパソコンのモニタに表示させた。これは、今から帰る人が利用できる青梅線の出発時刻を表示させるものであり、立高から立川駅まで徒歩で移動するのにかかる時間を考慮して、時刻表が表示されるものであった。当時は、まだパソコンがちらほら普及しはじめた頃でもあり、めずらしかったということもあるのだが、今も振り返って感じることは、利用者のニーズを的確に予想してソフトを開発・改良し、利用者のハートをつかむということはソフトウェア開発では一番難しいことである。当時、照井先輩がそれを的確にできたという点には驚かされる。それが今でも強く記憶に残っている理由であろう。

また、松村先輩らが製作した「雷の発達」を説明する展示は、非常に完成度が高く、これも注目度が高かった。これはナレーションとともに模型内部の天候が変化し、落雷の光がチカチカとフラッシュするもので、展示を見た一般客からは、この展示物を制御しているコンピュータはすばらしいという絶賛の声が上がった。実は、展示物の裏に人が入って、ナレーションに合わせて照明を操作するという仕組みであったのだが、上記のような理由で天文気象部はコンピュータテクニクがすごいという印象を与えていたために、展示物の裏に人が入っているなど想像する人はいなかったのである。

その後、文化祭が終了して 2 年生の先輩方が引退し、翌年には我々が次の代を率いることになった。我々が 2 年生の時に合宿に行ったところは、長野県にある「高ボッチ山」であった。ここは昼間のうちは晴れていても、夜になると霧に覆われてしまうところで、残念ながら星はほとんど見えなかった。水道もなく、泥水をためた池にバスクリンを入れた

だけの風呂？につかるようなところであった。夜は晴れるのを待って、霧の中をさ迷い歩いた。余りにも寂しいので、ラジオをつけると、「日航機が長野県上空で消息を絶ち、現在捜索中です」というニュースがながれてきて、この近くではないかとますます不安におられた。ちょうど、日航機が墜落した夜であった。

2年目の文化祭では、その翌年にはハレー彗星がやってくるということもあり、展示物としては、ロケットが発射されて上昇し、そこからジオットという衛星が切り離されて彗星に突っ込み、観測をおこなうという流れのモデルを松澤君や花房君らが製作し、リアルに展示された。また、木村君は太陽系の公転モデルの作成に苦労していた。東急ハンズで買った素材を加工して、自走式の惑星が太陽の周りを回るといったものであった。また、私は人工衛星ひまわりから気象写真を受信してコンピュータにとりこむためのハードウェアボードを製作しようとしたがうまくできなかった。永井君は絵が上手であったため、雲の絵をたくさん書いて展示した。大坪君は自ら反射望遠鏡を作成しようとレンズ磨きをしていた。とにかくたくさんの才能に驚かされた当時であった。

天気部の思い出

高校 40 期 高山 晴代(旧姓宮崎)

在学中は、援団・キャンバス e t c...とあまりクラブ活動には身を入れておらず、ただ、天気部の一番の思い出と言えば、自分の部屋から観測ドームが見える程学校と家とが近かったため、何度起こされたか分からない気象観測。

自分が寝坊して起こされたのではなく、誰かが寝坊したがために日・祝日、はたまた春・夏・冬休み...とこちらの都合はお構いなく観測お願いの電話が掛かってきていました。午後ならまだしも、朝寝しているところを電話だと起こされ、受話器を取ると「ゴメ～ン！寝坊しちゃった。観測代わりに行って来て！」と...夏の百葉箱付近は蚊が多く、代理観測に行ったばかりに両手足で 20 箇所以上も蚊に刺されたこともありました。

夏の合宿では、3 年間を通して一晩中晴れていた記憶がなく...今でも忘れられないことは、1 年の合宿で高ボッチ山へ行った時のこと。丁度合宿中、御巢鷹山に日航ジャンボが墜落したのですが、飛行機が行方不明であるとニュースが流れた時には、私たち 1 年生は気象通報を聞きながら天気図を書いていたため、先輩たちは「1 年生は天気図が書き終わってからだよ～。」と言い残してみんな外へ探しに行ってしまう、その時はあのような大惨事になるとは夢にも思わなかったので「ずる～い！」と思いつつ、急いで書き上げて外へ出たことも忘れられません。

去年、全期同窓会の折に、久しぶりにお会いした先輩たちとお話しているうちに、懐かしく、心地よい場所へ帰って来たようなきがしました。先輩たちには可愛がっていただき、上下の仲がよかったことが一番のよい思い出です。

これからも大事にしたいなあと思います。

第4章 “ 教えぞ高き ” <復活に向けて>

星を結ぶ

高校41期 齋藤 千晶

東京都下・午後10時過ぎ。仕事を終え、駅に降り立つ。駅前、陽気に笑う人々の合間をすり抜け、線路沿いの道に行く。夜の店々の看板を、ひとつ、ふたつと後ろに追いやっていくと、ようやく薄闇色の空が現われる。いま、すぐ目につくのは、街灯に負けじと輝く赤星、火星だ。星を見つけ、ほっとして家路をいそぐ。

帰り道、夜空を見上げるのがいまや習い性となっている。夜型の仕事をしていると季節感に乏しくなるが、日中味わえないぶん、夜空で季節の移り変わりを感じている。冬の大円弧、春の大曲線、夏の大三角、そして神話を織りなす秋のアクターたち。

これらはほとんどが、高校時代に覚えた星座だ。

天文気象部らしいことは、あまり(殆ど)していなかった不良部員だったが、プラネタリウムは好きで、よく企画した。

当時、塔の4階にあった部室の窓という窓に段ボールで目貼りをし、傘を広げ、即席プラネタリウムをしつらえる。先輩お手製という投影器は、回転させると途中でひっかかり、急に6時間くらい進んでしまったが、それもまた大好きだった。季節毎の星空解説の台本(1時間分)を書いて覚えるなんて、よくできたといまでは思うが、そのときに諦んじた星座はまだ頭のすみに残っているらしく、夜空を見上げると星と星を結ぶラインが見えてくる。

我々の代は、部員数が上下の代に比べて格段に少なく、しかも女子が多かったという立校らしからぬ代であった。それでも望遠鏡をかかえ山行をこなし、暑い日も寒い日も朝夕の気象観測をこなした。苦心したこともあるが、素直に、楽しい時を過ごしたと言える。現在、同じ時を過ごした同期の仲間は世界に(!)ちらばり、一堂に会する機会はほとんどなくなってしまった。だが、それぞれを結ぶラインは消えてないと感じている。

毎夜、星空を見上げて何となくほっとするのは、そんなラインを心に描いているからかもしれない。

天文気象部のこと

高校 42 期 吉岡 克治

ふと気付けば私も 30 代半ばとなりました。まだまだつい最近のことに思える高校時代も、すでに 10 年以上も昔のこととなります。しかしながら、天文気象部で過ごした日々は、とても楽しく、今でも昨日のことにように思い出されます。

正直を申しますと、私が天文気象部に入部した動機というものは、あまり褒められたものではなく、3 歳上の兄に勧められ、山行などの「荷物持ち」として入部したのが実際のところでした。そのようなことで、実は気象や天文というものに特に明るいわけではありませんで、ここに寄稿なさっている諸先輩方に対しましては、全くお恥ずかしい限りです。

このように、本当に何となく入部したものの、中学校時代からの友人の存在等もあり、次第に部活動にのめり込んでいきました。朝晩の観測や昼の太陽観測、泊り込みで陣馬山への山行、夏の長野への合宿、文化祭でのプラネタリウム・・・どの内容もとても心に残っております。何故これだけ鮮明に心に残っているのか・・・今思い返してみますと、先生の指導の下に行っていた中学校の部活動と異なり、自分達で計画し、実行に移すという部活動に、強く感銘を受けたのではないかと思います。

また、ここまでに記したような「表の」部活動とは別の「裏の」部活動にもずいぶんとのめり込んでおりました。授業後に部室に行き、特に活動がない時には漫画雑誌を読んだり、トランプをしたりして、友人達と過ごし、様々な話をする・・・これが非常に楽しいものでした。(本来はこの記念誌の内容に適さないものかもしれませんが、正直話ということでご容赦いただきますようお願いいたします。)特にトランプについては、高校時代の 3 年間で非常に鍛えられたように思えます。大富豪、ハーツ、ページワンなど・・・今思い返すと、ずいぶんと熱心に取り組んでいたように思います。

ただ、そんな中でもけじめだけはしっかりとつけていたように思います。先にも申し上げましたとおり、やはり自分達でやらなければならないという思いが、どこかにあったからでしょうか、様々な活動の準備等では、部員一同、一丸となって取り組んでおりました。所謂立高生を表す言葉に「自主自律」という言葉がありますが、知らず知らずのうちに、実践に移していたといったところでしょうか。

高校を卒業してからすでに 15 年が過ぎました。それでも、高校の天気部時代を共に過ごした仲間達とは、今でも連絡を取り合い、時期をみて集まったりしております。それぞれに仕事を持ち、家庭を持ったり、子どもがいたり、今ではそれぞれの道を歩いていますが、やはり気のおけない仲間達ということで、顔を合わせればホっとする瞬間があります。天気部時代が、本当に充実したものだったからこそ、今でも付き合いが続くような、仲間達ができただと確信しております。自分にとっては、高校時代を天文気象部で過ごすことで得た、大切な宝物です。

月並みなフレーズではありますが、同じ時というものは人生に 2 度はありません。今天文気象部にいる高校生の皆さん、そしてこれから天文気象部に入部してくるであろう皆さん、一瞬一瞬を大切に、大事に過ごしてください。将来、きっとすばらしい宝物になってくれると思います。

合宿の思い出

高校 43 期 佐藤 浩吉

天気部というと「山行」と「合宿」という体力勝負の行事がよく思い出される。山行では重い荷物を背負って、陣馬山に登ったことで体力がついたこと。夏の合宿は、その期間が長いことや、集中していないと眠ってしまいそうになる観測の大変さが、特に記憶に残っている。その時の事を思い出しながら、簡単に書いてみようと思う。

1989年8月10日～14日の夏合宿。8時30分に高尾駅改札前に集合。9時31分に出発し中央本線から途中、小淵沢駅で小海線に乗り換える。この前の年、冷房のないこの車両で暑さを耐えていた時、若い男の車掌さんが最後尾の扉を開け（連結器が車内から見えそうだった）てくれた。あのときの車掌はいないかな、と私は思い出し、線路に近い木立を眺めていた。宿舎は野辺山駅から歩いて約30分の「愛岳ヒュッテ」。とかく先輩の受けが良くなく、夏場の曇り空が多いのも良い条件ではなかったが、特に、食事に関しては評価が低く、某K先輩はほとんど宿舎の食事に手をつけなかった。16時からラジオを聞きながら天気図を記入する。1年生の野島くんが書く天気図がよく描けていた。

夕食を食べてから、全体でミーティングを行う。雨が降っているわけでもないが初日は雲が多かったように思う。こういう日は待機。トランプをしたりして時間を過ごす。晴れていれば、4時頃まで観測。朝食を食べてから昼間でゆっくりと睡眠。昼は自由時間になるとトランプで遊んだり、カラーボールを持って空き地へ行き、野球をしたりと時間を過ごす。また、清里の駅まで出て、遊びに行く部員などもいた。顧問の茂木先生に「野辺山には電波観測所がある」と教えて頂いたけれど、いくつかの大きなアンテナを遠くに見て、「いつか合宿中に行くぞ」と思いながらも、結局、見学には一度も行かなかったことが残念であった。

流星観測の事を書こう。この年の観測は、3日位でできたと思う。観測班と記録班、そして写真を撮る部員（K先輩や2年生の燧くん、町田くん）。全天をいくつかの部分（パート）に分け部員が仰向けになって流星を待つ。観測者が流星を発見すると声を出す。「3パート！」。時には火球や爆発するものを見ることのできるラッキーな部員もいる。私は記録員なので、赤い懐中電灯の光に照らされた時計と、記録用紙に向かい、観測班の声に注意をしていなければならず、交代の時間にゆっくりと空を眺めることができた。OBの先輩も来ている中、記録と観測のずれが出るようなことはしたくなく、記録の担当時は緊張感を持ち続けなければならず、なおかつ「寝てはいけない」というのが非常につらかった。時には途中で、雲が多くなり観測が一時停止になる時間が出てくる。その時間が長くなると、練習で流星をとばしてみる。晴れになると観測を再開。時には寝袋で寝てしまう部員がいるので、先輩や2年の立山さんや浅井さんら（記録員）がアメなどを配り、眠らないように声をかけていた。夏でも野辺山の気温は少しずつ下がっていく。白明のころは疲れも手伝って体が冷えていたので、少し動きまわって体を温めていた。眼鏡着用者は観

測班に入れず、視力が良くない私は、視力の良い部員たちがうらやましくて仕方なかった。

天文気象部に入るまで、あれほどの流れ星を見ることは無かった。また、高校を卒業してから現在に到るまで、一晩にあれほどの流れ星を見ることをしていない。最近では、東京の空しか見ていないので、東京以外のきれいな所で一晩、流れ星を見続けたい。

校舎改築と部室の引越し

高校44期 野島 和哉

小学生の時「天文気象クラブ」に所属していた僕は、両親と車で祖父母の家に遊びいくと、帰りにいつも見かける、高い塔のガラスに貼られた「天文気象」の文字が気になっていた。

それから5年経った平成元年、立川高校に入学し、天文気象部に入部することになった。

入学時には、すでに校舎改築工事は開始されていた。教務課の前に作られた入り口を通り、2階建てプレハブの仮校舎へ向かう。1、2年生の授業は、仮校舎で行われた。前年の7月からの工事により、校舎の東側が取り壊されており、「太陽観測ドーム」はすでになくなっていった。しかし、敷地の北西隅に立つ塔はまだ残されており、部室もその5、6階にあった。新入生の勧誘が始まり、天文気象部の説明を聞きに行く。新入生は目張りされた部室に案内され、手作りのプラネタリウムを観覧する。そのあと塔のてっぺんに登り、立川の街並みや遠くの山を望み、改めて塔の高さに驚く。

やがて1年が経ち、新校舎（三代目校舎）の校舎棟が出来上がった。

新校舎への引越しは、年度が明けてから行われる。春休みを使って、引越しの準備を急いだ。荷物の移動自体は、学校側が行う引越しと同時に業者が運んでくれるが、部室内の荷物の梱包や、私物の移動は部員らの手で行うことになる。

望遠鏡の鏡筒や三脚、気象測器などには、緩衝材を丁寧に巻きつけ、移動先が新校舎5階を示すオレンジ色のシールを貼っていく。書籍や資料も、ダンボールに入れシールを貼る。これらの作業を、部員の手で行った。

ふと、書棚を開けると、古い観測野帳がでてきた。ほとんど風通しをしていなかったためか、カビが生えてしまっているものや、紙と紙がくっついて、破けてしまいそうなものもあった。それらが破けないように気をつけながらダンボールに入れ、シールを貼っていた。気象観測の歴史を語る大事な書類だ。

やがて新校舎へ立ち入りができるようになり、わくわくしながら天体観測室（部室の場所）にたどりつく。鍵を明けて中に入ると、中は荷物でいっぱいだった。天体観測室の約半分のスペースは、生物科の資料棚で埋められており、その残りのスペースに天気部の品が積み重ねられていた。

新しい部室では、室内の整理をしたり、旧校舎に残された私物などを運んだりした。旧校舎の5、6階から新校舎の5階へ、階段を何段も昇り降りしなければならず大変だった。

1990年度の新学期は、新校舎でのスタートだった。2年生は校舎3階の教室で、旧校舎の取り壊しや、体育館棟、格技棟の建設、校庭の改築工事が続く中での授業だった。

そして、授業が終わると毎日5階の部室に足を運んだ。ダンボール箱だらけの部室だったが、そのうち徐々に落ち着いてきた。新しい環境での生活が始まったと実感した。

気象観測では、上観（校舎での観測）は、1990年4月15日から新校舎での観測を始めた。いままで旧校舎の塔の上にはジョルダン式の日照計があったが、新校舎ではなくなった。観測場所が変わったので、新しい視程表を作った。気圧計を設置している高度も変わった

ため、海面校正用に高度を確認した。当然、観測野帳にも変更を加えた。このように、初めは、手探りで新しい観測を始めた。下観（百葉箱での観測）は、校庭の南東にある百葉箱には校庭工事の影響はなく、そのまま続した。

天体観測では、6階の天体観測ドームを使ったり、部室の窓から屋上に望遠鏡を運び出したりして、太陽黒点観測を行った。しかし、夜間は、定時生コースの生徒との関係などで、ドームで天体観測を行うことはほとんどなかった。

文化祭や新入生勧誘の時には旧校舎では「傘」状のドームを天井から吊るしていたが、新校舎では視聴覚室に設置されたドームを使いプラネタリウム上映を行うことができた。

このように、新校舎での生活は新しいことばかりだった。

最近、高校に行く機会があったが、自分たちが作り上げた環境がほとんど残っており、後輩たちが楽しそうに活動しているのを目にして、懐かしく思えた。これからの活動に期待したい。最後に、当時の顧問 茂木先生には、大変お世話になったことをこの場で申し上げる。

私が在籍した1990～1992年度頃の主な活動

3役： 部長、部代表、会計、書記

都費交渉（予算）、渉外関係、会計事務、部費の徴収・管理など

天文活動：

主に合宿や山行に出かけ、天体観測を行なった。

また、高天連の会議に出席し、他高の天文(地学)関連のクラブと情報交換を行なった。

気象活動：

毎日朝8時と15時に部室・屋上(上観)と校庭の百葉箱(下観)に分かれて観測を実施。観測の成果は月報に掲載、年に1回立川市に観測資料を提出。

合宿：

8月のペルセウス座 流星群の観測を目的に、4泊5日で実施。

21時の時計合わせから始まり、22時から4時にかけて流星観測を実施。

眼視班は全天を7パートに分け観測、記録を実施。

写真班は4パートに分け、撮影、観測、記録を実施。

昼間は天気図記入も行なう。

1月のりゅう座（しぶんぎ）流星群の観測を目的に2泊3日で実施した年もあった。

山行：

主に八王子市の陣場山で行なった。テント・写真をかついで登り、1泊で実施。

観測対象は、季節の星座など。オースチン彗星を狙ったこともあった。

このほか、西武秩父線正丸駅前、青梅市内の開けたところなどで行なったこともあった。

文化祭：

クラブ展示に参加。テーマを決め、研究発表。プラネタリウム、パンフレットも作成。

太陽観測： 昼休みなどに太陽黒点観測を実施。

月報： 月1回発行、「来月の星空」、「気象摘要表」のほか、フリートーク、予定など。

新入生勧誘： 部活動の紹介、部室・観測室の見学や、プラネタリウムを実施。

その他： 勉強会、観測会、天文雑誌への投稿など。

天文気象部の思い出

高校 45 期 館野 こそえ

高校に入学する前からただ漠然と日々の気象や夜の星空に興味があった私は、音系の部活と掛け持ちで天文気象部へ入部しました。今になると何と中途半端な存在だったかと我ながら恥ずかしく思うのですが、そんな私でも受け入れてくださった諸先輩方、同期や後輩の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

現在も部員の方々が毎日朝 8 時と午後 3 時に観測をしていらっしゃると思いますが、当時は先輩にご教授いただいてから、割り振りを皆で決めて観測をしていました。本数の少ない五日市線で朝 8 時前までに学校に着いていないといけないのは、夏はともかく真冬は寒さが体にしみました。でも、朝から冬晴れで屋上から富士山がすっきりと見えた日は、なぜか心も晴れ晴れとして授業に臨めたものです。対して台風や雪の日に百葉箱の観測当番、おまけに記録紙の交換が重なった日は、観測中にずぶ濡れになり手はインクだらけで大変だったと覚えています。

一年次の初めての山行で陣馬山に行きましたが、天候に恵まれ、満天の星空の下で感動した夜を過ごせました。夏の流星観測会ではパートの区切りがなかなか覚えられず、皆様に迷惑をかけ通してでした。一年次の夏休み中にはもう一つ、天気図を 30 枚書くという私には途方も無いような課題が出されました。初心者が生放送を聞きながらさらさらと書ける筈が無いですから、一日 3 回あるラジオ放送を録音し、暑い中カセットテープを再生しながら勉強もせずに必死になって天気図を書きました。自分ではなんとか納得いく等圧線が引けたと思っていたのですが、休み明けに先輩に採点していただくと一枚一枚に訂正箇所があり、なかなか上手く書けないものだ痛感しました。二年次の夏の流星観測会では、火球のような流星を観測できて再び感動しました。昼休みには、屋上に皆で集まって太陽の黒点を観測したりもしました。じりじりと太陽に焼かれながら用紙の上に黒点を書き込みデータを取る作業は、暑かったのですがなんだか楽しかったと覚えています。立高祭のときにはあまり天気部の活動に参加できず、じれったい思いをしながら自分ができる範囲で参加させて頂きました。手作りのプラネタリウムのドームはそのまま保存しておいても良いのではないかと思えるほどの出来映えでしたが、肝心のガイドが思うように上手くできず、泣きたくなるような思いをしました。

卒業後、進学しても気象や天文とは全く縁の無い生活を送ってしまった私ですが、現在の日常から考えると、天文気象部でのこのような経験は立川高校天文気象部であったからこそ得られた大変貴重なものです。幸いにも同期の多くが都内に在住しており、時折顔を合わせることができそうですが、この繋がりも天文気象部にいたからこそあるものです。本当に、お世話になった天文気象部の方々には感謝しております。

最後に、この機会を与えて下さった編集委員の方々にもお礼申し上げます。

気象観測の思い出

高校 46 期

鈴木 裕子 (旧姓堀内)

部室の窓を開けて屋上へ出る。野帳を片手に空を見上げる。「雲量 0、快晴」周囲の景色を見渡して思わず深呼吸。

冬の朝観。それも日曜日。観測のためだけに 1 時間かけて学校に来るのは少々大変ですが、そんなすがすがしい風景に得した気分にもなったものです。

もともと気象は好きでした (天文も同じくらい好きですが)。中学時代、夏休みに毎日天気図を描いていたこともありましたが、でも気象観測は天文気象部でしかできない貴重な経験だったと思います。

高校 1 年 (1991 年) の文化祭のとき、過去 30 年間 (1961 年 ~ 1990 年) の気象観測データをまとめるという試みをしました。表計算ソフトを使って、最高気温・最低気温・8 時気温・15 時気温を集計したものです。

30 年の観測データというのはかなりの量になります。みんなで分担して毎日少しずつ入力していきました。パソコンも現在のような Windows やマウスを使うのではなく、背景が黒くてキーボードのみで操作するもの (MS-DOS) でした。1 ヶ月分のデータを入力してグラフがうまく表示されたときはとても嬉しかったです。

夏休み中に入力作業も終わり、文化祭には年間平均気温や各月ごとの平均気温の 30 年での推移をグラフにすることができました。年間平均気温では最新のデータである 1990 年が最高気温・最低気温・8 時気温・15 時気温すべてにおいて最も高い値になっていたのが印象的でした。ちょうど地球温暖化やオゾンホールなどが話題になり始めた頃でしたので、自分達の観測結果にもその影響が出ていることに驚きました。

この入力作業を通じて私達は 30 年間すべての観測記録に目を通しました。中にはデータが残っていない期間があったり、野帳の傷みがひどくて読めなくなっていたりしたものもありました。腐りかけてくっついてしまっているページをゆっくり開いて 1 つ 1 つデータを追っていくこともありました。

どのページも誰かが自分と同じように空を見上げて記録してきたもので、自分が生まれた日にも、もっと前からずっとずっと続けられてきたものです。たくさんの人の手によって支えられ、受け継がれてきた観測。それに自分が携わっていることがなんだか不思議な感じがしました。いつか自分が残してきた観測データを後輩達が振り返ることもあるかもしれません。

台風の中びしょぬれになって観測したこと。寒くて手がかじかんで上手く字が書けなかったこと。野帳は気象データの記録であるとともに私達の思い出の記録でもあります。

最近、また気象について勉強する機会がありました。観測の方法、観測機器の仕組みなどをみていると高校時代のことが懐かしく思い出されました。あの頃のように空を見上げる楽しさをこれからもずっと持ち続けていきたいと思います。

天文気象部「年末OB会」について

高校 49 期 星野 一人

天文気象部の比較的若い世代の卒業生によって行われている行事に「年末OB会」がある。毎年12月30日前後の日程で立川駅周辺の居酒屋を会場に開かれており、年によってばらつきがあるが概ね30名程度の参加がある。

このOB会の起源は、1980年代半ば頃にさかのぼる。当時の状況を知る高25期の宮崎高一さんによれば、卒業後に全国に散らばった部員が再会して交流するという機会はそれまでほとんどなかった。そこで、美ヶ原で合宿を行っていた世代が中心となって卒業生に呼びかけ、交通の便の良い新宿で集まりの場を設けたのがきっかけのことである。皆が東京の実家に戻るのを見越して、当初から年末に開催されていたようだ。

その後、何度か幹事が交代しながら会は続き、ここ10年ほどは立川で行われるようになった。グループ選抜入試によって入学した世代が多くなり、母校のある立川の方が集まりやすいという事情もあったようだが、最近は立川も多摩モノレールの開通などで交通の便が良くなり、立川開催が定着している感がある。

近年の年末OB会は、若い世代の参加が増えてきたこともあって活況を呈している。若い世代の参加は一時期低迷したが、参加費を軽減するなど幹事の工夫によって、また彼らの祭り好き(?)な気質も幸いしてか、今やこの会には欠かせない存在となっている。

私は2004年に高42期の吉岡克治さんからバトンを受け、現在このOB会の代表幹事を務めさせていただいている。そんな私から見てOB会の一番の醍醐味は、卒業生にはいろいろな人生を歩んでいる人がいて、それぞれの人生からにじみ出てくる苦労や喜びに触れることができる点だろう。これは学生を中心とする若い世代には非常に貴重なことであり、人間関係が専門分野に集中しがちな若者たちが他の世界を垣間見ることができる良い機会になっている。

この年末OB会が続けられてきたことも幸いし、2004年9月には天文気象部の「全期同窓会」が開催されるに至った(高10期・徳田精久さんの稿を参照)。これをきっかけとして、これまでのOB会の世代からさらに上の世代にもつながりが広がってきていることも事実である。卒業生の寄付金による新しい望遠鏡の導入など、関連した取り組みも多々行われるようになった。

このような動きが進む中で、年末OB会にもいくつかの課題が生まれてきている。つながりが上の世代に広がってきたことへの対応もそのひとつだが、会場の制約などから当面は若い世代が中心となるのが年末OB会のスタイルということになるだろう。また、近年は女子の部員が目に見えて増えており、いずれ「OB会」でいいの?という意見が寄せられるのではないかとヒヤヒヤしているところである(笑)。

とはいえ、やはり酒を酌み交わしながら楽しく語り合うのがOB会最大の目的であることは言うまでもない。毎年この会を心待ちにしている卒業生もいる。今のところ年に一度の楽しみではあるが、世代を超えた出会いや再会をプロデュースするこうした会を末永く続けていきたいと思っている。

山行と合宿について

高校 50 期 市村 豊

1995-1998 年まで在籍していました市村です。今回は天文気象部で実施していた「山行」ならびに夏の「合宿」について書かせていただきます。

まず「山行」ですが、これは天文気象部の有志が集まって、北秋川をさかのぼった檜原村倉掛地区のヘリポートまで行き、夜中に星を見るというイベントのことです。

やり方としては、テントや望遠鏡を持って学校を出発します。それから電車で武蔵五日市駅まで行き、そこからバスでしばらく移動して山の中であり、さらにそこから徒歩で山の頂上にあるヘリポートまで移動します。そして夕方までにテントを設営し、夜中に星を観察するということをしていました。

大体参加したのは3人から5人くらいのことが多かったですが、たまにはもっと大人数で実施することもありました。

この「山行」は、なにより望遠鏡をもって徒歩で山に登るとというのがとても大変でした。ご存知でしょうが、望遠鏡は重いです。それらをすべてバックに入れて手で持っていったのです。今から考えるとよくあれだけの荷物を持って徒歩で移動したと思います。今ではできません。また、バスが1時間に一本とか、そのくらいの間隔でしかないのでやけにバス停でまっていたりしました。実はこの山行は大変なイベントでした。当時はとにかくキャンプをするのが楽しかったのでやりましたが、今から考えると本当に大変なイベントでした。

ただ、苦労して出かけただけのことはあって星はきれいに見えました。私はぼけっと眺めていることが多かったですが、熱心な部員は天体写真の撮影を行っていたり、活発に活動をしていたと思います。

今から思えば実施するのがあまりに大変で、ほんとによくやったなという気分ですが、懐かしい思い出です。

次に「合宿」についてですが、これは小松原先生引率の元、山梨県の民宿を借りて8月中旬に毎年行っていました。ペルセウス座流星群の観察が目的です。

民宿の隣のテニスコートを夜中に借りて、観測班と記録班の2班に別れて流星観察を実施していました。流星を観察すると観測班がその明るさや位置を叫び、それを記録班が一つ一つ記録するという方法で実施していました。

この合宿については実は曇りの日が多くて流星が観察できない事のほうが多かったです。ただ、それでも部員みんなが集まって何かをするということは面白かったです。また、私が2年のときですが、あるときものすごく流星が観察できたことがあって、そのときは大変でした。観測班が叫ぶ流星についての情報を、記録班だった私が必死になって書きとめていたことがありました。あの時は本当にたくさんの流星が見えて大成功だったのですが、記録に集中していた私はほとんど記録用紙ばかりを見ていて、肝心の流星を見ることができなかつたのがちょっと残念です。

また、天文気象部の部員は活動的な方が多く、夜に星を見るのに昼間に遊んでいて、肝心の夜には寝てしまうという人が多くいて困った事も今は懐かしいです。

星々の縮図 天文気象部プラネタリウムの思い出

高校 51 期 気象チーフ 佐々木 博

自分が天文気象部を訪れたのは、立高入学直後の 1996 年春だった。同じ組だった小島英介君と共に、天文気象部の説明会を覗いたのだ。その時初めて、天文気象部のプラネタリウムを観る機会を得たのだった。

季節に合わせて、春と夏の夜空を、井上喜文先輩のアナウンスで 30 分ほど説明していただきたらどうか。小学生の頃から星座の本を読み、夜空を見上げていた自分にとって、それは既知のエピソードばかりだったし、プラネタリウムというものを観たのも初めてではなかった。にもかかわらず、この小さな天象儀に、自分は言いようのない印象を持った。

まるで西洋の魔法使いが住むテントのような、ビロード質の暗幕によって形作られた空間。そこに、ごく少ない人数が招待され、太古の神話が静かに披露される。本物の星空にも、大きなプラネタリウムにも無い、そんな現実離れした雰囲気、このプラネタリウムは持っていた。恐らくその時、自分は既に入部の決意を固めていたのだろうと思う。間もなく、小島君と自分は揃って天文気象部の部員となった。

自分たちの頃は部員も比較的多く、合宿での流星観測や山行のリハーサルに、文化祭や学校見学の出し物にと、大いにプラネタリウムを活用した。

中でも、出し物としてのプラネタリウムに自分は惹きつけられた。初めて観た時の、あの不思議な、しかし魅力的な雰囲気を、多くの人に味わって貰いたいと思ったのである。正式な役職は気象チーフだったけれど、非公式でプラネタリウムチーフを名乗り、1年から3年まで、毎年アナウンス役として参加した。

このプラネタリウムのアナウンスだが、担当する部員ごとに個性が出ていて、聞いていてもなかなか面白い。へそ曲がりの部員はわざわざマイナーな星座にスポットを当て、その成立の歴史を面白おかしく説明するし、理系の部員は神話の紹介もそこそこに、恒星の表面温度と色の関係や南中高度を話題にする。部員の個性により、お客さんの感想はさぞ大きく変動しただろうとも思われるが、上演後のアンケートはいつも上々だった。

大人気のプラネタリウムだったが、酷使すれば故障することも多かった。そんな時、整備士を買って出るのは、我々の代では堀越建吾君だった。彼の手で2つに分解された天象儀の内部は、名も知れぬ先輩の手作業で穿たれた、星々の縮図だった。それは熱意の唸りだった。今思えば、それがこの天象儀の、ある種神秘的な魅力の由来だったのかとも思う。

我々が卒業するまで、プラネタリウムは壊れたり直ったりを繰り返した。現在はどうなっているか、寡聞にして知らない。もしも叶うならば、もう一度、あの星々の縮図を目の当たりにし、アナウンス役として上演に参加してみたい。

2001年～2003年の天文気象部

高校 56 期 横手 紗織

2001年、私が入学した年の天文気象部は、2年生が2人いたもののどちらも休部中、3年生は受験をむかえて普段の活動に参加することは難しく、1年生女子4人が主となり活動していた。しかし、幸いにも多くのOBG（高49～53期）の方々が、気象観測や器材の扱い方の指導、文化祭、山行、観望会、合宿への参加などを通して支えてくださり、すこしずつではあるが、部としての活動を覚えていくことができた。

2002年、2年生になって顧問を渡辺先生と野原先生にお願いした。観測などにも慣れてきたが、人数が少なかったのとPR不足のため、この年新入生を迎えることができず、引き続き4人での活動が続く。しかし部員以外の生徒を交えた観望会とプラネタルム上映会を月に1回をめぐりに開くといった天気部アピール活動を始めたり、文化祭に向けてパソコンに過去の気象観測記録をまとめ、近年温暖化の兆候はみられるのかを調査するなど活動は活発化していった。

2003年、部員が皆3年生になり、1人が退部したこともあり、このままでは廃部になってしまうのではないかと、という危機感を持った。しかし部員一丸となって新勧活動をした結果、12名の新入生をむかえることができ、文科系では音楽団体を除いて一番人数の多い部活となった。部員数の増加によって気象観測をはじめとする様々な活動が円滑に進むようになり、山行や観望会の回数も増えた。活動の活発化にともない部の予算も、大幅に上がったが、大型の望遠鏡やカメラを買うには及ばず、器材は部員数に対して乏しかった。

しかし、この年の夏に、高12期以前の同窓生の集まりがあって、その同窓会に現役生も参加した。このときドームを見学された方々が、翌年の全期同窓会の際に、ドーム備え付けの望遠鏡を寄付しようと呼び掛けてくださることとなった。私達56期の卒業後、望遠鏡とフィルム式カメラ等を寄贈していただき、天文気象部の活動の幅は一気に広がった。カメラで月や星雲の写真を撮ったとか、その活動が新聞に取り上げられた、などを聞くにつけて、嬉しくもまた少し羨ましく感じると共に、今後の活動に期待する日々である。

<おわりに>

記念誌編集後記

記念誌編集委員（高6） 小川 修夫

天体望遠鏡寄贈式（平成17年1月15日）を契機に、かねてから企画されていた天文気象部の記念誌発行のための準備が開始され、私自身も高校2期の大野先輩より、幹事役を仰せつかりました。それ以来、大野編集委員長始めとし関係編集委員各位のご努力、ご尽力により、幅広い卒年次に亘って非常に沢山の貴重な体験談等の原稿が寄せられ、このたび天文気象部発足以来60有余年ぶりに、天文気象部記念誌を完成することができました。ひとえに、関係各位のご尽力、また寄稿された顧問の先生を始めとし、多くの天文気象部同窓会OB、OGの方々の寄稿によるものであり、編集委員の一人として、お礼申し上げます

私自身立川高校に入学したのは昭和26年4月で、10日の入学式の2日後には、天文気象部に入部していることが、当時の日記に記載されていました。それ以来、顧問の田代先生と天文気象部の4期、5期の諸先輩のご指導を得て、主に気象班で活動したと記憶しています。

実は田代実先生との出会いは、小学校6年生の夏休み（昭和22年7月）に開催された科学教室に出席した時に遡ります。この科学教室は、終戦直後の小中学生の科学教育振興の一環として実施されたもののようでして、市内各小学校と発足当初の新制中学校から数人ずつ選抜されて、当時の旧制第弐中学校の物理教室（階段教室は珍しく目を見張ったものでした）に集められ、偉い先生方から科学技術に関する講義と実験を体得したものでした。その先生の中に田代先生がおられ、天文学の初歩と天文観測の心構え等を学んだと思われます。当時の講義の様子を記録したノートが出てきて、講義の内容と共に田代先生の住所、ご自宅の地図までが記載されていました。（先生宅や三鷹天文台を訪問したかは定かではありません。）

また中学校は地元の新制中学に通いましたが、昭和23、24年頃は校舎不足で当時の立川高校の講堂に間借りしていました。そのためか、中学時代の日記帳をめくると立川高校の天体観測に招待され、観測をしたという記述がありました。当時から、地元中学校への公開観測をしていたことが判りました。

昭和26年の天文気象部には、理科が地学選択であった1年A組から10人以上の生徒が入部しました。当時は、3年生として旧制中学から通算6年在学された古参の部員の他、その先輩からみっちり仕込まれた専門家の2年生の面々がおられ、観測指導の他、公私に亘って色々とお面倒を見ていただきました。私自身は、2年生の時には物理部の部長を仰せつかり、また3年生では受験準備等で天文気象部での活動は、主に1年生の時だったと記憶しています。入部当初から定時観測や連続観測を割り当てられ、また山岳観測、海洋観測、湖沼観測等にも参加しましたが、中心的独創的役割を果たしたことはなかったと

思います。

卒業後は、天文も気象もあまり関係のない原子力工学分野での仕事に従事しまして、高校時代の知識や経験が生かされる機会はあまりありませんでしたが、先輩後輩の緊密な関係とか、協力協調して事に当たる心構えなど、多くの体験、教訓をその後の人生に生かすことができたと感謝しております。

ところで、今回の記念誌の編集を直接的に担当させて頂きましたが、最近ではIT技術の進歩により、多くの方々から電子原稿の形で寄稿頂き、また写真等も電子画像として処理することができ、効率良く短時間に編集することが可能となったことには、正直言って驚かされました。

また、それにもまして、寄稿された方々が数十年前の出来事を、あたかも昨日のごとく鮮明に記憶されていることには、本当に感銘いたしました。

ここで、記念誌編集に関わった経緯、経過について、ご報告致します。

- 平成 17 年 1 月 15 日 天体望遠鏡寄贈式の当日、これまで話題となっていた「天文気象部 60 周年記念誌」発行の提案がなされ、早速準備に取り掛かった。
- 平成 17 年 3 月 13 日 編集幹事会初会合を開催。記念誌発行趣意書、寄稿要領等を議論。大野（高 2）、西部（高 3）、辻井（高 4）等 10 名が出席。
- 平成 17 年 4 月 24 日 第 1 回編集会議を開催。同窓会員への寄稿依頼の発行趣意書等を確認、編集方針等を議論。大野編集委員長他、15 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 5 月 21 日 記念誌発行の趣意書、寄稿要領等を天文気象部同窓会員に発送。寄稿締め切り 8 月末、発行予定 10 月と設定。15 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 9 月 10 日 第 2 回編集会議を開催。寄稿済み原稿の確認、編集方針の議論等。原稿締切 10 月末、発行予定 12 月に変更。15 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 11 月 5 日 第 3 回編集会議を開催。寄稿原稿の確認、今後の予定等を議論。13 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 11 月 23 日 第 4 回編集会議を開催。寄稿原稿、画像等の確認、今後の予定等を議論。8 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 12 月 11 日 第 5 回編集会議を開催。記念誌原稿、画像等の最終確認、印刷の予定等を議論。10 名の編集委員が出席。
- 平成 17 年 12 月末 天文気象部記念誌「天文気象部の歩み ロマンと青雲を見つめて 60 有余年」印刷完了、発行。

この様な経緯、経過を通じ、この天文気象部記念誌には、3 名の顧問先生方を始めとし、60 名を越える同窓生の方々、現役の天文気象部員より、70 件以上の寄稿を集大成することができました。ここに改めて、原稿を寄せられた天文気象部顧問の先生方、多くの天文気象部OB、OGの方々及び現役の天文気象部員に、お礼申し上げたいと思います。

以下 記念誌発行趣意書、記念誌編集委員名簿、天体望遠鏡寄贈趣意書、望遠鏡寄贈基金寄付者芳名録等を添付しました。

記念誌発行趣意書

記念誌「天文気象部60年の歩み」(仮称)の発行について

都立第弐中学校・立川高校
天文気象部同窓会各位 殿

同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

先般は、天文気象部同窓会の多くの方々のご支援、ご協力を得まして、最新の天体望遠鏡を母校の立川高校に贈ることができましたことは、誠に嬉しいかぎりです。

校長先生も驚くような快挙だったと思います。これもひとえに皆様の強い母校を思う気持と天文気象部で受けた今でも鮮明に記憶に残る体験、そして先輩から後輩へと培われ受け継がれてきたよき伝統の賜物と考えます。

天文気象部の歴史をたどると我々の記憶にあるのは、最初は理数班、次いで昭和23年新制高校発足と同時に物象部、理化学部、更に昭和26年に物理部・化学部が分離して天文気象部となり、以来今日に至っています。

この間の歩みについては、田代實先生の著書「天体望遠鏡物語」にその詳細が紹介されています。そのテーマから、どうしても天文主体で、気象についての記述が残念ながら限られています。然し、在学中に気象を中心に活躍した同窓生も多く、また田代先生が退職された昭和44年以降の卒業生も多くなってきたなかで、皆で在学中の体験または卒業後の体験を通し、天文気象部を振り返ってみた記念誌を作り、天文気象部の歩みを記録に残しておくことは、大変意義あることと考えます。

天文気象部全期同窓会の発足、天体望遠鏡の母校への贈呈の機会をとらえて、同窓会皆様の投稿を仰いで、記念誌「天文気象部60年の歩み(仮称)」を発行致したく、ご提案申し上げます。本趣旨に是非ご賛同いただき、ふるって投稿をお願い致します。

なお、望遠鏡贈呈の寄金に残金がありますが、今後後輩の活動支援資金等を考えて、今回は投稿された方々に発行に要する費用を多少ご負担頂きたく、ご理解賜りますようお願い申し上げます。

平成17年5月
天文気象部同窓会
記念誌編集委員代表
大野 伊左男

天文気象部 60 周年記念誌 編集委員名簿

編集委員長 ; 大野 伊左男 高2

編集委員 ; 西部 訓弘(高3) 保坂 一夫(高4) 辻井 壮一(高4) 田中 孝彦(高5)
星野 清光(高5) 能登 正之(高6) 中村 馨(高6) 小川 修夫 高6 府川 宗雄(高7)
松繁 克道(高8) 府川 朝次(高9) 谷津 潔(高10) 徳田 精久(高10) 佐藤 健(高11)
益田 博勝(高11) 内田 誠(高12) 小島 雅子(高12) 吉川 謙造(高12) 石館 弘国(高14)
田中 勝利(高15) 笹原眞文(高16) 西原 和彦(高16) 志茂 和男(高17) 片岡 弘(高18)
立川 守(高19) 原岡 望(高20) 立花 知彦(高21) 浜部 勝(高22) 榊原 幸雄(高23)
鈴木 正平(高24) 新堂泰伸(高25) 荒井 良吉(高26) 井上 智江(高27) 中込 貴芳(高28)
大和 壮一(高29) 平 政之(高30) 平田 知之(高31) 大蔵 誠(高32) 吉田 勝彦(高33)
石川 利広 高34 只野雅人(高35) 古宮 一憲(高36) 坪井由紀子(高37) 小澤 進(高38)
木村 篤彦(高39) 指田昭樹(高40) 斉藤 千晶(高41) 吉岡 克治(高42) 佐藤 浩吉(高43)
野島 和哉(高44) 館野こずえ(高45) 川島 亜紀(高46) 星野 一人(高49) 市村 豊(高50)
柳生 清佳(高51) 引屋敷祐太(高52) 橋本 聰(高52) 久礼 庄太(高53) 佐藤 貴哉(高54)
横手 紗織(高56)

注; 高47は部員不明 高48、高55、高57は部員なし

都立立川高校 校歌

記念誌各章の題目への引用

1. 玲瓏の水 百万の
民の命を“つなぐ源” 第1章 “つなぐ源”
流れて息まぬ多摩川の
清きあしたの面に見よ
掬ぶに尽きざる無言の輪

2. 芙蓉の姿 東海の
邦のしずめと立てる山
雲にそびえる富士の嶺の
夕べに嗜く影に見よ
蔑めて尽きざる “有形の教え” 第2章 “有形の教え”

3. 紫匂う 武蔵野の
あとに基おく教えの舎
速き歴史のかけ負いて
踏むべき道を忘れめや
見よかの流水 “さとしぞ永き” 第3章 “さとしぞ永き”

4. 廻る三度の 春秋を
共に睦むわがつどい
歩みはとわに新しき
学びの窓に誉れあれ
見よかの高山 “教ぞ高き” 第4章 “教ぞ高き”

天体望遠鏡寄贈趣意書

“「新しい望遠鏡」を母校に贈ろう”の提案

立高・天文気象部のド・ムに、旧 10 センチ赤道儀が設置されたのが昭和 14 年頃で、第一回目の本格的な夜間天体観測が、戦時中の昭和 18 年 7 月 21 日に行なわれました。その後幸いにも空襲にも逢わず望遠鏡本体は無事に維持され、昭和 22 年の予備観測を経て、昭和 23 年 1 月 1 日より正式な黒点観測が開始されました。それから 11 年間の部員の涙ぐましい努力が認められ、昭和 33 年に、第 2 回日本学生科学賞で学校賞第一位に選ばれました。

その後望遠鏡は昭和 63 年のド・ム解体と、新校舎建設に伴い、老朽化の原因もあって第一線から身を引きました。新校舎が平成 2 年に竣工し、新しい立派なド・ムも設置され近くを歩いて外から見ると、さぞかし立派な望遠鏡（又は旧望遠鏡）があるのではないかとおられておりました。

昨年（平成 15 年）8 月 16 日に、第一回全期同窓会の準備会も兼ねて同窓会が開催されました。この時ド・ムに案内された参加者は皆、啞然と致しました。

旧望遠鏡はどこにも見当らず、ド・ムの中央には僅か 6 センチ位の小さな赤道儀がちょこんと置かれていました。これでは現役の部員の生徒さんも可哀相と参加者全員が思ったようでした。それで、今一番欲しいのは何ですかと聞きましたら、一様に「大きい望遠鏡が欲しい」という声が強烈に返って来ました。参加者全員何とかならないかとの思いを胸にド・ムを後にし、現役生との交流会、更に同窓会の二部を終え散会致しました。

その後再会した現役生の方から、「部員の数は他の部と比べても、決してひけを取らないのに、余りにも貧弱な器材（望遠鏡等）しか与えられておらず、天文ド・ムがあるにも関わらず、それを使うこともなしに、もっぱら山行きや合宿でお茶を濁しているんです」との悲痛とも思える訴えを耳にしました。自分達の頃は、立派な 10 センチ赤道儀を使って思う存分観測ができていた幸せを思うと、哀れで痛ましい思いがしました。皆、なにか心にひっかかるものが残り、その後の全期同窓会の打ち合せの際、「新しい望遠鏡」が何とかならないかという話になりました。その後有志の方も加わり、後輩のために「新しい望遠鏡」を寄贈しようではないかとの気運が高まりました。

問題は二つありました。一つは費用の問題で、もう一つは受け入れの問題でした。幸いなことに、有志の方の中に、私立の天体観測所を作られた方がいらっしゃいました。早速現場（ド・ム）を見て頂いたところ、コンクリートの土台もしっかりしており、これなら 15 センチの屈折赤道儀は十分に設置が可能という事が分かりました。以前に比べ重量も軽くなり、非常にコンパクト化されたというのが理由とのことでした。色々天文器材の資料を調べましたら、あるメ・カ・の 13 センチ屈折赤道儀と 15 センチ屈折赤道儀が目にとまりました。鏡筒、赤道儀、支柱（ピラ・式）のセット価格で、13 センチ屈折赤道儀で約 120 万円、15 センチ屈折赤道儀で約 150 万円という事が分かりました。これに付属品として 30 万円位を用意すればいいのではないかという事になりました。

次に 15 センチ屈折赤道儀を希望する、その理由は集光力と分解能です。15 センチあれば周囲の市街地の光にも余り影響を受けず、月や惑星の観測や写真撮影に威力を発揮します。主に太陽・月・惑星の観測が中心になると思いますが、水星や金星の太陽面通過の観測、火星や土星等の掩蔽観測、太陽黒点や粒状班の観測、日食・月食の観測等とそれぞれの写真撮影が可能となります。ご存じのように、反射望遠鏡は安価ですが手入れが大変で黒点観測には不向きです。観測の夢は集光力が大きく、分解能が高ければ高いほど益々広がります。立高ド・ムでの 15 センチ屈折赤道儀使用の意味は十分にあります。

もう一つの問題は、学校が寄贈を受け入れられるかという点でした。そこで顧問の先生方のご協力により、7月21日に学校長に直接お会いする機会が得られましたので、望遠鏡寄贈について学校側の理解と都の承認が得られるものかどうか調査していただく事をお願い致しました。学校長より望遠鏡の資料を求められましたので、13センチ及び15センチ屈折赤道儀の資料(金額記載)をお渡ししたところ、学校側より天気部同窓生の意向を学校側としても検討し、都に問い合わせ、その結果を同窓会開催前にお知らせするとのご返事をいただきました。

間もなく望遠鏡寄贈の件、都が認可するとのご連絡が学校側からありました。ご連絡によりますと15センチ屈折赤道儀が都の認可の上限のようであります。

以上の経過をふまえ、皆様にも、いろいろお考えがあると思いますが、母校及び天気部の一層の発展を願い、天気部同窓生を対象に次の募金活動を行い、母校に天体望遠鏡を贈ることを全期同窓会発足の意義ある本日提案致します。皆様の暖かいご理解とご支援をお願い致します。

.....

寄贈品目：15センチ屈折赤道儀及び付属品一式

予算内訳：15センチ屈折赤道儀	約 150 万円
同上	付属品一式 約 30 万円
同上	設置費用等 約 7 万円
	「天体望遠鏡物語」印刷代 約 13 万円

.....

合計 200 万円 (募金目標)

募集方法：一口 5,000 円

募集期間：平成 16 年 9 月～12 月末迄

.....

かつて、あの 10 センチ赤道儀式望遠鏡を目差して、立高に入学された方も沢山いらしたと伺っております。そして、顧問の先生方の厳しいご指導のもとで、何か宇宙への夢を描いて喜び勇んで観測をしていた事を思い出します。

どうか同窓生の皆さん、後輩の皆さんが、“母校の誇りとして、限りない宇宙への夢を描ける場所”を一日も早く用意してあげようではありませんか。“「新しい望遠鏡」を母校に贈ろう”というこの提案に、ご賛同とご協力を切にお願い致します。

平成 16 年 9 月 11 日

“「新しい望遠鏡」を母校に贈ろう”の幹事並びに発起人一同

大野伊左男(高2) 西部 訓弘(高3) 保坂 一夫(高4)
辻井 壮一(高4) 小森 長生(高5) 田中 孝彦(高5)
中村 馨(高6) 府川 宗雄(高7) 松繁 克道(高8)
府川 朝次(高9) 谷津 潔(高10) 徳田 精久(高10)
佐藤 健(高11) 益田 博勝(高11) 小島 新一(高11)
小島 雅子(高12) 内田 誠(高12) 石館 弘國(高14)
笹原 眞文(高16) 西原 和彦(高16) 志茂 和男(高17)
片岡 弘(高18) 榊原 幸雄(高23) 鈴木 正平(高24)
新堂 泰伸(高25) 平田 知之(高31) 吉岡 克治(高42)
星野 一人(高49) 引屋敷祐太(高52) 横手 紗織(高56)
他

寄贈天体望遠鏡について

新15センチ屈折赤道儀式望遠鏡

■ 望遠鏡及び付属品の内容

高橋製FS - 152鏡筒、同鏡筒バンド、T型マッチプレート、NJP - Temma2赤道儀、J - Lピラ - 脚、LE - 18mm接眼レンズ、天頂プリズム(中)……以上セット品。

その他、THC(自動導入用コントローラ)、アクセサリ - バンド(FS - 152用)、20cm太陽投影板、89アダプタ - 、89テ - パ - リング、直焦点補助リング、CA - 35(FS - 152用)、ワイドマウント(キャノンEOS用)、24V・ACアダプタ - 、TCA - 4、カメラマウント(キャノンEOS用)、31.7 - 24.5交換AD、LE - 5mm接眼レンズ、LE - 7.5mm接眼レンズ、アクセサリ - バンド(FS - 152用・重)、国際光器アストロソ - ラ - フィルタ - (A4)、トミ - テックD4フィルタ - 52S 等の付属品

.....

■ 望遠鏡寄付金 合計……132名分……2,355,000円

■ 望遠鏡支払い

スタ - ベ - ス東京支払い額……1,979,900円(望遠鏡据付工事含む)

31,500円(キャノンEOSBD)

望遠鏡関係支払い総額……2,011,400円

望遠鏡寄贈基金寄付者ご芳名(敬称略)

132名 (2005/8 未現在)

三宅 浩之(中44)	大串 暉子(高8)	野間 正名(高12)	大谷 文彦(高31)
大野伊左男(高2)	大野 岑夫(高8)	伊藤 武久(高12)	平田 知之(高31)
木野 主計(高2)	南雲 義弘(高8)	長島 泰雄(高12)	川橋 和利(高31)
西部 訓弘(高3)	高村 扶桑(高8)	野崎 恒夫(高12)	大蔵 誠(高32)
木下 和久(高3)	新井真知子(高8)	吉川 謙造(高13)	菊地 孝(高32)
保坂 一夫(高4)	木村真理子(高8)	能村 文雄(高13)	見付季代子(高32)
辻井 壮一(高4)	菱山 和子(高8)	福島 幹夫(高13)	長野千富美(高32)
辻 立郎(高4)	増田 伸爾(高9)	宮武隆二郎(高13)	久保 紀重(高33)
戸張 襄志(高4)	河辺 征次(高9)	石館 弘國(高14)	吉田 克彦(高33)
塩野 栄治(高4)	柿沢 光郎(高9)	大木 史朗(高14)	石川 利広(高34)
田中 孝彦(高5)	松村 美子(高9)	田中 勝利(高15)	一瀬 倫見(高34)
匿名希望(高5)	平原マスイ(高9)	笹原 眞文(高16)	熊坂 明子(高35)
小森 長生(高5)	中村 清昭(高9)	西原 和彦(高16)	只野 雅人(高35)
戸田 好昭(高5)	小高みどり(高9)	柿原満津子(高16)	渋谷 政子(高36)
池田 隆彦(高5)	府川 朝次(高9)	志茂 和男(高17)	城戸 陽子(高36)
薄井 義正(高5)	樋口 安代(高9)	片岡 弘(高18)	鳥越 裕司(高36)
鈴木 正昭(高5)	谷津 潔(高10)	立川 守(高19)	長田 健治(高37)
市川 康夫(高6)	森山 明之(高10)	山田 哲也(高21)	坪井由紀子(高37)
中村 馨(高6)	森田 俊人(高10)	立花 知彦(高21)	佐伯 信洋(高37)
能登 正之(高6)	徳田 精久(高10)	浜部 勝(高22)	小澤 進(高38)
池田 収(高6)	松繁 克道(高10)	武藤 繁(高22)	須崎 明(高39)
山縣 知道(高6)	佐藤 健(高11)	榊原 幸雄(高23)	石塚 尚(高39)
片岡 恒男(高6)	益田 博勝(高11)	近藤 道夫(高23)	指田 昭樹(高40)
小川 修夫(高6)	小島 新一(高11)	鈴木 正平(高24)	曾田 圭介(高40)
大塚昶之助(高6)	黒川 武(高11)	日高 康博(高25)	斉藤 千晶(高41)
鹿島田由行(高6)	加藤 侃(高11)	新堂 泰伸(高25)	三橋 智(高42)
鈴木 恒彦(高6)	藤崎 巖(高11)	吉中 裕子(高25)	吉岡 克治(高42)
竹田 哲(高6)	小泉 英夫(高11)	宮崎 高一(高25)	佐藤 浩吉(高43)
武田 信夫(高7)	高岸 務(高11)	荒井 良吉(高26)	野島 和哉(高44)
宿谷 繁三(高7)	菅麻 幸子(高11)	矢野 悦子(高26)	千葉美穂子(高45)
府川 宗雄(高7)	加藤 重雄(高11)	赤塚祐一郎(高27)	星野 一人(高49)
安田 嘉子(高7)	小島 雅子(高12)	鈴木 直美(高27)	橋本 聰(高52)
安藤 恵尉(高8)	内田 誠(高12)	平 政之(高30)	横手 紗織(高56)

附録 1 学校の変革と天文気象部の歴史

昭和	西暦	社会・学校の変革	天文気象部の歴史	天文と気象の記録
13年	1938	新校舎屋上東側に 天体観測ドーム建造		5/29 南太平洋皆既日食 6/28 集中豪雨 死者708名
14	39	天体望遠鏡 設置		10/12 南極皆既日食
15	40			10/1 南アメリカ皆既日食
16	41	12月 太平洋戦争勃発		8/27 九州・近畿台風死者891名 9/21 アジア・中国皆既日食
17	42			太陽電波発見(イ・ア)
18	43	田代實先生物理担当教諭 として着任	理学部(数学・物理・化学・生物・ 天文・気象班)として活動する 7/21 から1週間夜間天体観測実施	2/4 北太平洋皆既日食 9/18 九州・中国台風死者768名
19	44	戦争激化、5年生より 順次 工場動員	7/15、9/2 月面観測	1/25 南アメリカ皆既日食
20	45	8月 終戦	11/17, 19 天体観測 12/20 徹夜観測	8/9 北アメリカ皆既日食 9/17 枕崎台風死者2,473名
21	46		5/11、7/5, 6, 31、10/5、 12/8, 24 徹夜観測会	恒星磁場発見(ア) 人工降雨の初の実験(ア)
22	47		従来の夜間観測に加え、1/3より 太陽黒点観測を開始	5/20 南アメリカ皆既日食 9/14 カスリーン台風死者1,077名
23	48	都立第式中学校が 都立第二高等学校となる	理学部より数学部・生物部が分離 独立、物象部(物理・化学・天文・ 気象班)となる。 1月 太陽黒点観測正式スタート	乗鞍にてコロナ輝線確認 9/15 アイオン台風死者512名 11/1 アフリカ皆既日食
24	49		物象部が理化学部に名称変更	8/31 キティ台風死者135名
25	50	校名が正式に 都立立川高等学校に		乗鞍コロナ観測所開所 9/2 ジェーン台風死者336名 9/12 北極皆既日食
26	51		理化学部が物理部 化学部 天文気象部に分離	10/13 ルース台風死者572名
27	52		7月 河口湖湖沼観測開始	2/25 アメリカ・中央アジア皆既日食
28	53		2月 天文気象月報 創刊 ペルセウス流星群観測(学校)	9月 セントエルモの火観測(立高)
29	54		ペルセウス流星群観測(学校)	6/30 北アメリカ皆既日食 9/25 洞爺丸遭難死者1,361名

30	55		ペルセウス流星群観測(川崎)	6/20 インドネシア皆既日食 7/29 本田彗星発見
31	56		ペルセウス流星群観測(川崎)	5/2 金星電波の発見 6/8 南太平洋皆既日食
32	57		第1回 日本学生科学賞に応募 東京都優秀賞を受賞 ペルセウス流星群観測(川崎)	4/1 五藤プラネタリウム開設
33	58	4月 浅野鴻志(地学) 先生着任	4/19 日食写真観測 ペルセウス流星群観測(川崎) 10月 第2回全日本科学振興 委員会主催、讀賣新聞社後援 日本学生科学賞に 東京都最優秀賞、 全国学校賞1位に入賞、テーマ 「11ヵ年太陽黒点観測の報告」	4/19 沖縄・八丈島金環食 9/26 狩野川台風 10/12 太平洋皆既日食
34	59		ペルセウス流星群観測(川崎)	9/26 伊勢湾台風 10/7 月の裏側の写真撮影
35	60		ペルセウス流星群観測(川崎)	10/19 岡山天体物理観測所開所
36	61	1月 日米安保条約調印	ペルセウス流星群観測(川崎) 天文気象月報100号達成	4/12 人類初の宇宙旅行 9/15 第二室戸台風
37	62		ペルセウス流星群観測(日の出 山) 6時間にて524個	11/1 堂平観測所開所
38	63		部員7名皆既日食観測(網走) ペルセウス流星群観測(日の出 山) 天候悪し	7/21 網走・知床で皆既日食
39	64	10月東京オリンピック大会 開催	ペルセウス流星群観測(日の出 山) 6時間にて650個	7/31 レインジャー7号月面撮影 10月 富士山気象レーダー完成
40	65		ペルセウス流星群観測(日の出 山) 5時間40分にて169個	7/14 マリナー4号火星接近 9月19日 池谷・関彗星発見 10/21 乗鞍コロナグラフで池谷・関 彗星撮影に成功
41	66		ペルセウス流星群観測(日の出 山) 6時間(1時間曇)にて455個	1/3 ルナ9号月面着陸 4、10、12月 土星環消失
42	67		ペルセウス流星群観測(学校)	1/4 火星食 12/10 土星食
43	68	1月 東大医学部を発端と して学園紛争はじまる	ペルセウス流星群観測(学校) 10月 文化祭に23～43年20 年間にわたる緯度分布図発表	8/17 近畿東海大雨 11/27 飛騨天文台完成

44年	69	3月 田代實先生 定年 退職 10月22～26日一部の生徒により教室・職員室封鎖	8月ペルセウス流星群観測 (日の出山)	7/21 アポロ11号月面着陸 10/9 野辺山太陽電波観測所開所
45	70		8月 流星観測会(清里)	3月 ベネット彗星が1等級 4月 天文気象部撮影「富士山に沈む太陽」 「天文と気象」表紙を飾る
46	71		8月 流星観測会(清里)600個	11/3 マリナー9号火星着陸
47	72	2月 札幌冬期オリンピック 開催	8月流星観測会(正丸峠)1,000個 10/8 ジャコビニ流星雨観測 (丹沢・高松山頂)悪天候	7月 豪雨 10/9 ジャコビニ流星群小出現
48	73		8月 流星観測会(八ヶ岳)	6/30 アフリカで皆既日食 12月 コホーテク彗星が0等級
49	74		8月流星観測会(奥多摩・大嶽山)	6/20 オーストラリア皆既日食 9/1 台風16号狛江市堤防決壊
50	75	3月 浅野鴻志(地学)先生 転出 4月 大金要次郎(地学) 先生着任	8月 流星観測会(美ヶ原)	8/29 はくちょう座に超新星
51	76		8月 流星観測会(美ヶ原選定) 旧10センチ赤道儀オーバーホール	2/27 ウエスト彗星分裂 7/20 バイキング1号火星着陸 10/31 オーストラリア皆既日食
52	77		8月 流星観測会(美ヶ原)	3/10 天王星の環を発見
53	78		8月 流星観測会(美ヶ原)	11/1 東京天文台100周年
54	79		8月 流星観測会(美ヶ原)	2/27 カナダで皆既日食 3,7月ボイジャー1,2号木星接近
55	80	11月 創立80周年記念 式典開催	8月 流星観測会(美ヶ原)	2/16 アフリカインド皆既日食 11/13 ボイジャー1号土星接近
56	81		8月 流星観測会(美ヶ原) 12月 冬合宿(本栖湖)	7/31 シベリヤで皆既日食
57	82		新10センチ赤道儀据付 8月 夏合宿(美ヶ原) 12月 冬合宿(本栖湖)	3月 金星13,14号着陸
58	83		8月 夏合宿(美ヶ原)	6/11 インドネシアで皆既日食
59	84	3月 大金要次郎(地学) 先生転任 4月 茂木秀二(地学)先生 着任	8月 夏合宿(美ヶ原)	4/25 太陽面で大爆発 11/23 ニューギニアで皆既日食

60	85		8月 夏合宿(高ボッチ)	5/20 日出帯食
61	86		8月 夏合宿(野辺山)	2/9 ハレー彗星近日点通過
62	87		8月 夏合宿(野辺山)	2/24 大マゼラン雲に超新星出現 9/23 沖縄で金環食
63	88	5月 紫芳会校舎惜別の会 7月 旧校舎解体作業開始	8月 夏合宿(野辺山)	3/18 小笠原沖で皆既日食
平1	89		8月 夏合宿(野辺山)	8/25 ボイジャー2号海王星接近
2	90	6月 校舎改築第1期完成 祝賀会	8月 夏合宿(群馬県高山村) 1月 冬合宿(千葉県野栄町)	4/24 ハッブル宇宙望遠鏡打上
3	91		8月 夏合宿(長野県南牧村) 1月 冬合宿(千葉県野栄町) 1961~90年までの気象観測データをパソコンに入力・文化祭に発表	7/11 ハワイ・メキシコ皆既日食
4	92	3月 茂木秀二(地学) 先生転任 4月 小松原茂美(地学) 先生着任 11月 創立90周年 新校舎落成式	8月 夏合宿(野辺山)	9/12 毛利衛エンデバー搭乗
5	93		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	3/24 分裂彗星SL9発見 6~8月 日本列島記録的冷夏
6	94		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	7月 木星にSL9彗星衝突
7	95		8月 夏合宿(山梨県長坂町) 9月 野外観測会(松原村)開始	1/17 阪神・淡路大地震 10/24 南アジア皆既日食
8	96		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	3/25 百武彗星が地球に最接近
9	97		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	4/1 ヘールボップ彗星近日点通過
10	98	2月 長野冬期オリンピック 開催	8月 夏合宿(山梨県長坂町)	11/17 しし座流星群活発活動
11	99		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	1/4 すばる望遠鏡稼働開始 8/11 ヨーロッパで皆既日食 8/13 関東地方大雨・玄倉川水難
12	00		8月 夏合宿(山梨県長坂町)	4/7 北海道 低緯度オーロラ 9/8 東海地方大雨・7万棟被害
13	01	12月 創立100周年記念式	1月30日 田代實先生逝去 8月 夏合宿(山梨県長坂町)	4/1 本州 低緯度オーロラ 11/19 しし座流星雨見られる
14	02	3月 小松原茂美(地学)	8月 夏合宿(山梨県長坂町)	6/11 テニアン島で金環食

		先生転出 4月 渡邊拓美(地学) 先生着任 4月 野原良夫先生着任 10月 進学指導重点校に 指定される		
15	03		8/16 天文気象部同窓会 8月 夏合宿(山梨)	8/27 火星超大接近 11/23 南極で皆既日食
16	04		8月 夏合宿(山梨) 9/11 天文気象部全期同窓会 「立川高校の天体望遠鏡物語」 記念出版	6月8日 金星太陽面通過
17	05	1/15 天体望遠鏡贈呈式	2月より黒点観測開始 8/11、12 中学生対象観望会 8月 夏合宿(山梨) 12月 天文気象部記念誌出版	1/24 マック・ホルツ彗星近日点通過

(作製責任: 大野伊左男、内田誠、榊原幸雄)

附録 2 天文気象部在籍者 名簿

卒業期	氏名 (旧姓)
中44 (S22卒)	三宅 浩之
中45 (S23卒)	里野 泰昭 鈴木 栄祐
高02 (S25卒)	大野伊左男 木野 主計 船引 龍平
高03 (S26卒)	木下 和久 西部 訓弘 <u>小西 孝道</u> <u>林 泰城</u>
高04 (S27卒)	久保喜久雄 坂本正太郎 塩野 栄治 田村 正晨 辻 立郎 辻井 壮一 戸張 襄志 中川 幸成 中村 智美 野呂瀬貞雄 保坂 一夫 松浦 辰寿 前田 稔 三田 重男 <u>大内 徳二</u> <u>小塩 丘平</u> <u>小林福太郎</u> <u>蓼沼 輝夫</u>
高05 (S28卒)	五十嵐教夫 池田 隆彦 薄井 義正 小川 明雄 久保寺泰彦 小森 長生 関本昭太郎 田中 孝彦 辻野 領一 戸田 好昭 中原 卓士 馬場 恒夫 星野 清光 <u>鈴木 正昭</u> <u>寺沼 成</u>
高06 (S29卒)	池田 収 市川 康夫 大塚昶之助 小川 修夫 河西 祐亮 鹿島田由行 片岡 恒男 清水 泰郎 鈴木 恒彦 竹田 哲 田中 一行 中村 馨 野口 哲男 能登 正之 野村 善作 山縣 知道 横山 健治 <u>岡 吉信</u> <u>小林 敬一</u> <u>陣内 信</u> <u>仙波 義信</u>
高07 (S30卒)	小川 忠彦 小林 光枝 宿谷 繁三 武田 信夫 中村 充彦 府川 宗雄 安田 嘉子(善財)
高08 (S31卒)	阿部 忠巳 新井 真知子(金子) 安藤 恵尉 大串 暁子(小林) (S31卒) 大澤 玲子(祖母井) 大野 岑夫 木村 真理子(小林) 高村 扶桑 南雲 義広 菱山 和子(野村) 福永 義明 松繁 克道 宮内 埒子 松本 迪男(太田) <u>阿曾 福雄</u>
高09 (S32卒)	安藤 茂 柿沢 光郎 河辺 征次 小高 みどり 中村 清昭 府川 朝次 (S32卒) 平原 マスイ(山岡) 増田 伸爾 松村 美子(柳内) 八木 康雄
高10 (S33卒)	塩田 常夫 徳田 精久 松沢 節夫 森田 俊人 森山 明之 八子 和男 (S33卒) 谷津 潔 芳川 孝子(宮武)
高11 (S34卒)	加藤 侃 加藤 重雄 黒川 武 小泉 英夫 小島 新一 佐藤 健 (S34卒) 篠崎 耕 高岸 務 藤崎 巖 益田 博勝 大山 宏 長谷川 巖
高12 (S35卒)	一石 俱巳 伊藤 武久 内田 誠 笠原三紀夫 小島 雅子(石川) (S35卒) 長島 泰雄 野間 正名 <u>野崎 恒夫</u>
高13 (S36卒)	岩浪 孝一 能村 文雄 福島 幹夫 宮武隆二郎 吉川 謙造 (S36卒)

高14 (S37卒)	石館 弘国	大木 史郎	大貫 浩	菅沼 信夫		
高15 (S38卒)	伊藤 寛之	大貫 彰	田中 勝利			
高16 (S39卒)	相原 昭司	安立 統一	柿原 満津子(名阪)	笹原 真文	高橋 万年	
	田中 直嗣	西原 和彦	西山 芳治	武蔵野 実	市川トウル	
高17 (S40卒)	笠井 潔	佐藤 昌弘	志茂 和男	塚田 芳樹		
高18 (S41卒)	大島 寿之	片岡 弘	佐川 永一	藤田 国彦	町田 克己	若月 哲夫
高19 (S42卒)	高橋 清史	立川 守	田中晴比古	森下 純一	横倉 隆伸	
高20 (S43卒)	小坂 幸夫	原岡 望	山岡 一仁	吉田 務		
高21 (S44卒)	高橋 哲郎	立花 知彦	水野 達夫	山田 哲也		
高22 (S45卒)	伊藤来太郎	入沢 浩志	小林 行泰	浜部 勝	武藤 繁	
高23 (S46卒)	浅見 康弘	近藤 道夫	榊原 幸雄	清水 光義	鈴木 孝夫	蓮見 一郎
	小林 茂樹					
高24 (S47卒)	相坂 孝一	市川 広保	稲葉 正樹	鈴木 正平	田中 明彦	谷合 正史
	仲山 義秀					
高25 (S48卒)	木地谷博人	新堂 泰伸	鈴木 清	日高 康博	宮崎 高一	最上 聡
	吉中 裕子(杉山)					
高26 (S49卒)	浅野 聡	荒井 良吉	金井 真人	小柳 千昌	田中 伸亨	名越 利孝
	西村 朗夫	矢野 悦子(八木)		横田 郁子		
高27 (S50卒)	赤塚祐一郎	井上 智江	川窪 洋	菊田 洋一	佐藤 宏	白水進一郎
	鈴木 直美(吉田)		西田 峰子(鈴木)		肥後 司	
高28 (S51卒)	坂本 弘一	高崎 郷二	中込 貴芳			
高29 (S52卒)	今峰 博司	太田 文人	小方 智子(瀬谷)	大和 壮一	佐藤 真澄	
	林 弘和					
高30 (S53卒)	井出 孝	奥田 義雄	川越 順	黒瀧 かおる(細谷)	平 政之	
	棚沢 正義	内藤 英介	吉田 和生			
高31 (S54卒)	大谷 文彦	川幡 和利	末松 剛	富沢 重之	平田 知之	水島 春朔
高32 (S55卒)	大蔵 誠	奥山 雅裕	小野里 修	神谷 絹子(宮田)	菊池 孝	
	洲沢 一也	高瀬 淳子(中村)		長野 千富美(大和)	丸山 雅彦	

	見付 季代子(郷)							
高33 (S56卒)	久保 紀重	児島 直樹	桜井 美菜子(加藤)	清水 賢二	坪井健太郎	三須 健司	吉田 勝彦	渡辺 健二
高34 (S57卒)	荒川 昌彦	石川 利広	一瀬 倫見(高橋)	久米 岳晴	関口 浩行	田島 嘉幹	高橋 宏和	
高35 (S58卒)	飯野 紅美	熊坂 明子(小田)	駒木 文保	島村 尚男	鈴木 隆	只野 雅人	長森 宏行	初谷 哲
高36 (S59卒)	井古田 まさみ	城戸 陽子(井上)	小谷 和広	渋谷 政子	佐藤 稚子(宮下)	鳥越 祐司	林 順治	古宮 一憲
	吉田 高穂	渡辺 淳也		前田 高尚				
高37 (S60卒)	池田 貴博	倉地 修	佐伯 信洋	手島 剛	竹田 令子(天野)	坪井 由紀子(沢潟)	長田 健治	守屋 直子(神子)
	矢下 信昭							守屋 雅隆
高38 (S61卒)	小川 将史	小澤 進	齋藤 登志子(山内)	櫻井 義和	新保 聡	須磨 明	鈴木 康雄	須磨 尚生
	村上 幸康	吉野 卓		照井 宏和	花房 賢	松村 和之		
高39 (S62卒)	池田 英樹	石塚 尚(辻橋)	大坪 政司	小川 始	加園 誠	北村 卓	木村 篤彦	九鬼 ともみ(樽井)
	徳永 創	豊田 哲郎	内藤 修	永井 通夫	竹内 理樹	樽 永		
	原 隆行	原茂 哲朗	藤野美由紀	星野 昌裕	中島 領	二宮啓一郎		
	松下 由美(澤田)			松澤 肇	間中 正幸			
高40 (S63卒)	石部 政洋	大井 謙一	岸 信利	指田 昭樹	清水 彰	首藤 典史		
	曾田 圭介	高橋 英一	高山 晴代(宮崎)		土田 一輝	豊平 信幸		
	星野 哲朗	矢吹 英司	矢舟 章浩	米屋 哉				
高41 (H1卒)	市川 喜巳	宇都 祐子	梶浦 利恵	斎藤 千晶	鈴木 貴之	中澤 千優		
	宮下さおり							
高42 (H2卒)	飯島 香	乙幡 幸雄	笠原 裕治	渋谷 香	清水 辰也	杉山 貴弘		
	須藤 慶博	並木 明夫	西川 貴宏	橋本 健二	橋本 信子	藤野 直里		
	丸山 和子(八木)		三橋 智	村田 健一	八木 幸子	山西 孝志		
	吉岡 克治							
高43 (H3卒)	浅井 望	海野 正貴	佐藤 浩吉	立山 道子	田畑 茂樹	燧 正典		
	松金 淳子(辻橋)		町田 耕一					
高44 (H4卒)	内野 耕一	乙訓 将司	河合 佳代子(森田)	富田 江身子(森田)				
	諏訪 将範	中村 美穂(大橋)	西澤 佳子	野島 和哉	前田 佳治			
	山野 秀尚							
高45 (H5卒)	上坂 未来	大和田有軌	小川 浩二	舘野 こずえ(林)	田中恵美子			
	千葉美穂子	林 真由美(草原)		平川 達也	遊佐 春佳	渡部恵美子		
高46	石川 大輔	小倉誠一郎	川島 亜紀	鈴木 裕子(堀内)	高野橋由紀			

(H6卒)	谷 由紀							
高49 (H9卒)	内田恵理子	小澤 寿子	加藤 剛男	田尻 美保	星野 一人	渡邊あゆみ		
高50 (H10卒)	市村 豊	井上 喜文	太田 裕志	白崎 元彦	中村 裕貴	深水美賀子	松田 暢弘	
高51 (H11卒)	小島 英介	酒井 流美	佐々木 博	高野 裕子	堀越 健吾	柳生 清佳		
高52 (H12卒)	大橋 洋輝	川崎 里乃(池田)	小林 直岐	津田 陽子	中原 加絵	名取 恒平	橋本 聡	引屋敷祐太
			武藤 秀則	村上 翔太	矢島 将太			
高53 (H13卒)	浅賀 由紀	内野 彩	神田 和正	久礼 庄太	諏訪 和也	鳥居 淳	松下俊一郎	
高54 (H14卒)	川島 英一	佐藤 貴哉	曾田 篤弘	高山 淳	田中 真夫	橋爪 裕人		
高56 (H16卒)	神原あゆみ	土屋さやか	横手 紗織					
卒年不明	小亦 伸隆							
現役部員								
3年生	菊地 直哉	太田 洋佑	酒井 優子	高橋 摩利	大森基予子	権田 玲菜	松井 梓	
		田中 泰夫	遠藤 愛	松下のか				
2年生	寺崎 周子	服部 仁貴	根本進太郎	岩下 直弘	大政 亜貴	村上 琴美	西野 優子	
		池尻 和樹						
1年生	小野 遥	栗原 廉	青柳 雄也	遠藤 悠	森 健輔			
顧問先生								
現顧問	渡辺 拓美(H14/4-)		野原 良夫(H14/4-)					
元顧問	田代 實(S18/4-44/3)		浅野 鴻志(S33/4-50/3)		大金 要次郎(S50/4-60/3)			
	茂木 秀二(S60/4-H4/3)		小松原 茂美(H4/4-14/3)					

注： 下線は、物故者

附録 3 天体望遠鏡寄贈関連の新聞記事等

附録 4 天文気象部からの立高同窓会報紫芳への寄稿

附録 5 天文気象部の歩み カラー写真集